宮城県文化財調査報告書第114集

今 熊 野 遺 跡 II

縄文・弥生時代編

昭和61年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

仙台平野の南部に位置する名取市は、国史跡雷神山古墳・飯野坂古墳群をはじめ埋蔵文化財が豊富に分布するところである。今熊野遺跡もその一つで、縄文時代から奈良・平安時代にかけての大規模な遺跡で、周囲にはいくつかの古墳群もみられる。

昭和46・47年に宮城県農業センターの建設に先立ち、遺跡の範囲確認調査を行ったところ、縄文時代前期の竪穴住居が約60軒、古墳時代の方形周溝墓が10基、古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居が100軒以上発見され、遺跡の重要性が明らかになった。このため、宮城県農政部など関係者の間で協議が重ねられ、設計変更によって遺跡の全域をほぼ完全に保存することが決定されたことは感謝にたえない。昭和48年に誕生した文化財保護課にとって今熊野遺跡の保存決定は大きな励みとなり、その後の文化財保護行政に多大を影響を与えた。今後、この遺跡をいかに後世に伝え、いかに活用してゆくかが私達に与えられた大きな課題といえよう。

前回の報告書は、東北地方の初期古墳時代の社会様相を解明する重要な資料として高い評価を受けた。今回は縄文時代（前期）の生活復原のうえで指標となる資料を多くふくんでいる。この報告書が学術研究のみならず、学校教育・社会教育の場などでも大いに活用されることを期待したい。

なお、今熊野遺跡について深いご理解を寄せられ、現状保存のためにご協力をいただいた宮城県農政部をはじめとする関係者に心から感謝申し上げる。

昭和61年3月

宮城県教育委員会

教育長　郷古康郎

目　　次

Ⅰ　位置と環境 1
Ⅱ　発見された遺構と遺物 7
　1. 竪穴住居跡
　2. ピット
Ⅲ　遺構外出土の遺物 100
　1. 遺物包含層
　2. 遺構・遺物包含層以外から出土した遺物
Ⅳ　考　　察 121
　1. 縄文土器・土偶
　2. 石器について
　3. 遺構と集落
引用･参考文献・・145
写真図版・・147

例　　言

1 本書は宮城県農薬開発センター建設にともなう今熊野遺跡の発掘調査報告書であり、縄文時代・弥生時代に関する資料を収録している。
2. 調査期間、発掘面積、調査担当者、調査参加者については「今熊野遺跡Ⅰ古代編」に収録した。
3. 本書の執筆は宮城県教育庁文化財保護課職員の協議をへた後、Ⅳ−1 を村田晃一が、その他を小川出が担当した。
4. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の一地形図「仙台南西部」「仙台東南部」「岩沼」「仙台空港」を複製したものである。
5. 遺構内に存在する土は、人為堆積、自然堆積にかかわらず「堆積土」と呼ぶ。
6. 石器の石材鑑定を東北大学教養部蟹沢總史氏にお願いした。
7. 発掘調査から整理そして報告書作成にいたる間に以下の方々、機関から御指導、御協力をいただいた。
伊東信雄、岡田茂弘、小野　力、加藤　孝、川村　正、興野義一、小林達雄、後藤勝彦、坂田　泉、佐藤　巧、庄司貞雄、芹沢長介、林　謙作、多賀城跡調査研究所、東北大学工学部、東北大学農学部農学立地学研究室、東北大学考古学研究室、東北歴史資料館、宮城町教育委員会
8. 本遺跡の調査に関する資料は宮城県教育委員会において保管している。ただし発掘調査後、報告書作成まで長い期間があったため、一部散逸してしまった資料があり、報告書としては不備な点がある。

Ⅰ　位置と環境

位置と地形環境

今熊野遺跡は宮城県名取市高舘川上字南台、北台に所在する。

遺跡の西側は高舘丘陵であり東側には名取川の沖積平野が広がっている。遺跡の北側には増田川が東流し、北3㎞には名取川が流れる。高舘丘陵は標高100～300㎡の開析が進んだ起伏の大きい山地性丘陵であるが、遺跡はこの丘陵の東端の段丘地形上に位置しており、遺跡周辺は緩やかな台地状を呈する（第1図）。本報告で扱う縄文前期の集落は北台地区の150×300㎡の南北に細長い台地上にある。台地頂部は標高約50㎡の平坦面であり、西側は急傾斜で谷に移行する。台地の東側は緩い斜面をへて、古墳時代集落のある鴻ノ巣地区へと連続している（第2図）。

歴史的環境

今熊野遺跡周辺の人間の足跡は旧石器時代に遡る（宮城県教委1974）。縄文時代早期末には丘陵縁辺に大木戸、宇賀崎といった貝塚が形成される。宇賀崎貝類の貝層をみると縄文時代前期初頭にはアサリ・ハマグリ・ダンベイキサゴが主体であったものが前期中葉にはヤマトシジミ主体にかわっており、貝塚周辺の海域は阿武隈川の供給する土砂礫と沿岸流が形成する浜堤によって潟湖化が進んでいたらしい。今熊野遺跡の東3㎞には旧浜堤列が分布しているが、これは約5000年前の海面高度の極大期に形成されたものと考えられており（松本1984）、縄文時代前期には遺跡の東数㎞にまで海岸線が接近していたことがわかる。

縄文時代前期の遺跡には本書で報告する今熊野遺跡と谷をはさんで西側に金剛寺遺跡があり北1㎞に来光囲遺跡がある。また、第1図の範囲外だが、名取川を挟んで今熊野遺跡の北5㎞には前期前半の集落跡である仙台市三神峯遺跡があり、南約10㎞の阿武隈川下流域には縄文時代早期末から中期にかけて槻木貝塚群が形成される。

縄文時代中期以降も丘陵末端や段丘面上に遺跡が形成されている。金剛寺貝塚は縄文後期から晩期初頭の貝塚で、後期後半「金剛寺式」の標式遺跡となっている。弥生時代には稲作の開始とともに遺跡も増加するようであり、丘陵や浜堤・自然堤防上に清水、十三塚、西野田といった遺跡が形成される。とりわけ十三塚遺跡は弥生時代の集落跡で墓域も発見されている（名取市教委1979、1980）。

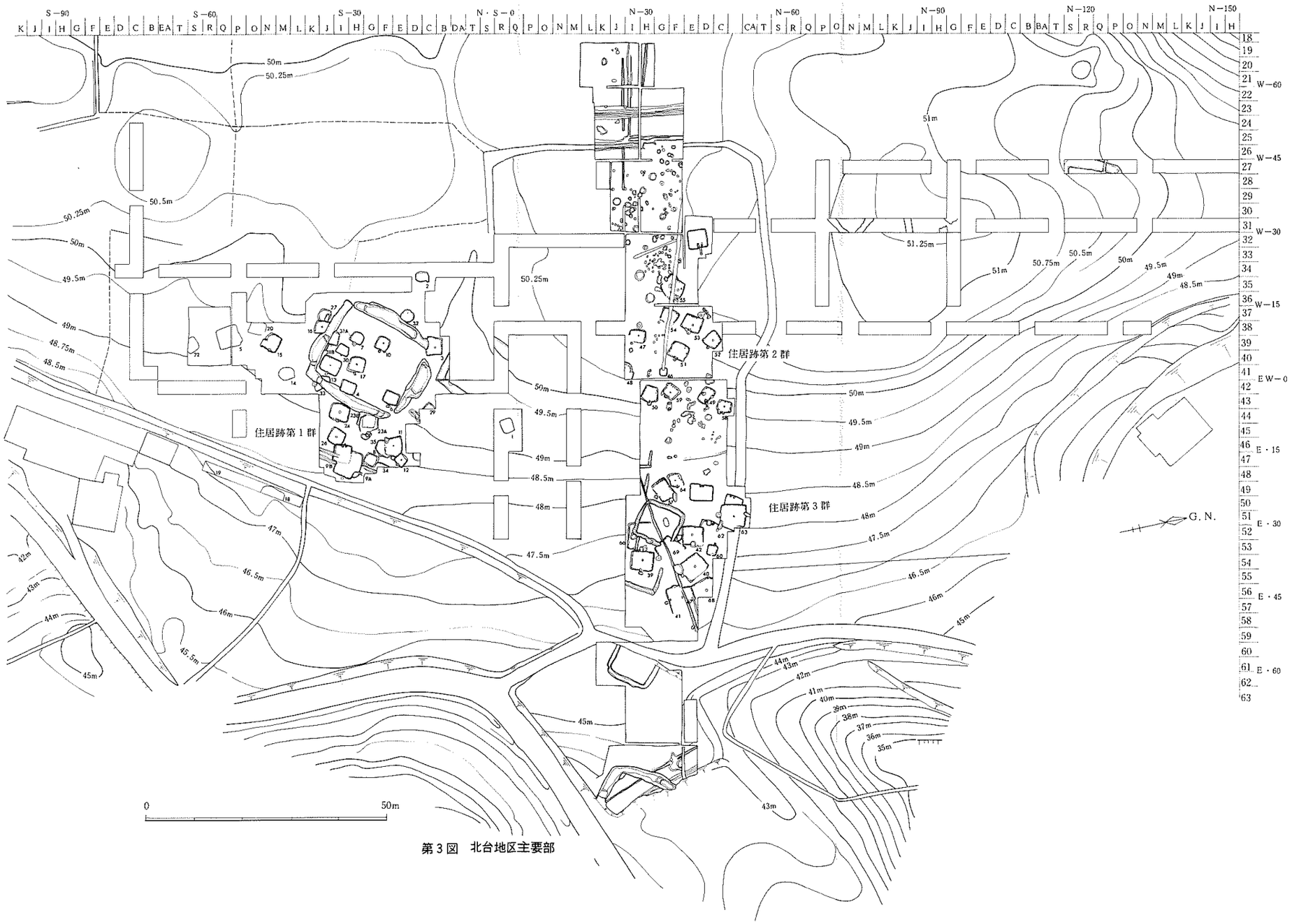
基本層位

今熊野遺跡の層位は表土と火山灰層とその間の漸移層からなる。漸移層は地点によって複数層に細分される。遺物は表土、漸移層中から出土しており、遺構は漸移層中あるいは火山灰層上面で確認されている。

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
4	今熊野遺跡	縄文(早・前)、弥生	43	西野田遺跡	田石器、縄文、弥生	65	松崎遺跡	弥生、古墳、奈良	95	鹿野東遺跡	縄文、弥生、古墳
1	金剛寺貝塚	縄文(前・後・晩)	44	前野田西遺跡	弥生(後)	68	飯野坂西遺跡	弥生、古墳、奈良	107	宿前遺跡	弥生、古墳、奈良
7	大木戸貝塚	縄文(早)	45	前野田東遺跡	弥生(後)、奈良、平安	79	館腰遺跡	弥生、古墳	109	表前遺跡	縄文(中)、弥生(後)
9	宇賀崎貝塚	縄文(早・前)	46	北台遺跡	縄文、奈良、平安	81	飯野坂東遺跡	縄文、弥生	110	柳沢遺跡	縄文、古墳、奈良
13	十三塚遺跡	縄文・弥生・古墳	47	泉遺跡	縄文、弥生、古墳	86	高畑遺跡	弥生、古墳、奈良	111	米光閘遺跡	縄文(前)
19	野田山遺跡	弥生・古墳(後)	48	東南沢遺跡	縄文、奈良、平安	88	原遺跡	縄文、弥生、古墳	139	鹿野遺跡	縄文
20	野田山貝塚	縄文	51	北東宮下遺跡	縄文、奈良、平安	90	川上遺跡	縄文(後)、弥生(中)	140	野米遺跡	弥生、奈良、平安
30	飯野坂遺跡	弥生・中、古墳・中・後	52	宮下遺跡	縄文、弥生、奈良	91	上町遺跡	縄文(中)、奈良			
39	八反田遺跡	弥生	54	南小袋石遺跡	縄文、古墳、奈良	92	田高遺跡	弥生、古墳、奈良			
42	西滝沢遺跡	縄文	57	清水遺跡	弥生、古墳、奈良	94	真坂遺跡	縄文・中・後、弥生・中			

第1図　地形と周辺の遺跡

第２図　遺跡全体図（貝層の正確な分布範囲は不明）



第3図　北台地区主要部

Ⅱ　発見された遺構と遺物

今熊野遺跡北台地区では、縄文時代の竪穴住居跡、ピット、時期不明の溝が発見された。また、鴻ノ巣地区では古墳時代の住居跡が検地されているが、そのうち東端で確認された遺構は、周辺に分布する遺物から弥生時代の竪穴住居跡の可能性がある。

溝は16条ある。縄文時代前期の住居跡と重複するものはすべてこれを切っているので、溝は新しい時期のものと思われる。

1　竪穴住居跡

竪穴住居跡は 2m 以上の規模をもち内部に横穴と考えられるようなピットを有するものをさす。今熊野遺跡では1、2次調査を通じて竪穴住居跡52軒が発掘調査されている。この他にプランの確認のみで発掘調査がなされていないものが6軒あり（第1、14、18、19、20、22号住居）、また、番号は付けられていないが、同一地点での建て替え、他の住居との重複、あるいは後時の削平によってプランが不明確な住居跡が少なくとも 13 軒あるので、これを加えると発見された住居跡？は71軒を上回る。

竪穴住居跡は北台台地の東側緩斜面上にあり分布は大きく3群に分れる（第3図）。第1群は第1次調査時に検出された南側の38軒であり、第2群は台地平坦部に近い北側の標高49～51m の範囲に分布する14軒、第3群は第2群の東側の標高46～49m の範囲に分布する 19 軒である。第 2 群と第 3 群の間には住居跡の存在しない空間がある。第 1 群と第2群の間にもトレンチが設定されているが第1号住居を除いて住居跡は発見されていない。

以下では、まず各住居跡の概要と出土遺物を紹介する。住居跡番号は一部、概報（宮城県教委1973）と異なるものがある。出土遺物の内容は各図下の観察表に示した。また出土石器の組成については第1表にまとめてある。

第2号住居跡（第5図）　住居跡第1群の西端にあたるＤＣ、ＤＤの33、34区にある。

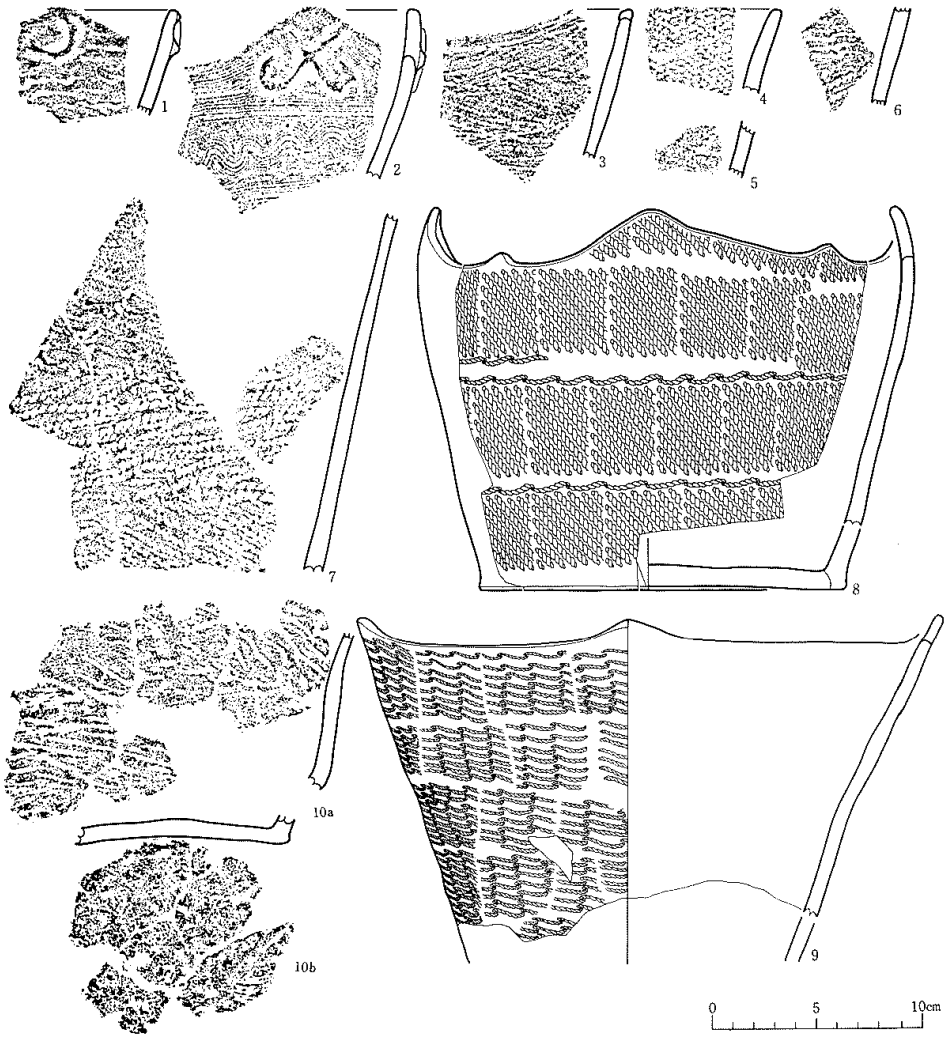
〈平面形・規模〉　長軸2.8m、短軸2.3m の不整円形で、北東に張り出し部がある。

〈堆積土〉　3 層からなる。2 には焼土・木炭等がめだち、3 にはロームが含まれる。4 は壁ぎわにのみみとめられる層で壁の崩落土を含む。

〈壁〉　検出された壁は地山で、残存する壁高は9～13 cmである。

〈床面〉　中央が周辺部より 6～8 cm低い。床面中央に長さ 60 cm、幅 30 cm、厚さ 2～4 cm程の焼土があり地床炉と考えられる。

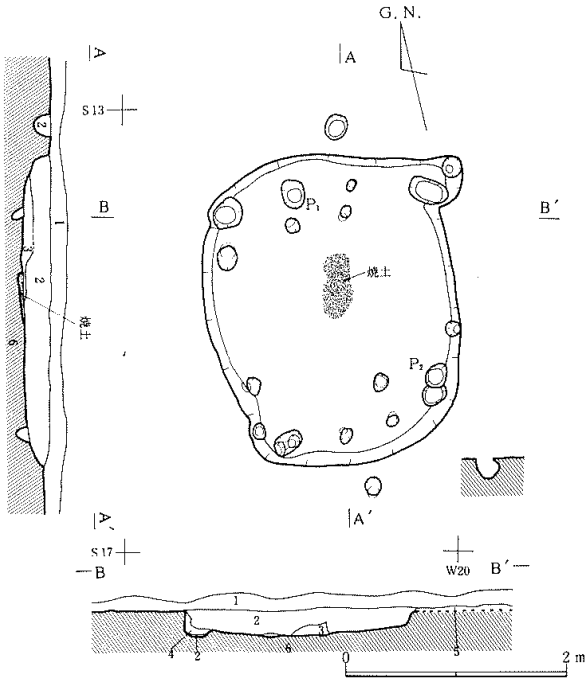
〈柱穴・ピット〉　2 号住居内の南北で計 17 基、また、住居外だが住居のほぼ長軸延長線上に2基のピットがある。ピットは径10～20 cmでピット 1、2 が床面から 35 cmと深いが他は10～20 cmである。ピットの分布は住居の南北に偏り、壁沿いに並ぶものと住居のやや内側に位置するものがある。



No	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内面	備　　考	図版
1	1住－堆積土	深鉢 B Ⅰh	口縁部	含む	粘土紐貼付文、葵瓦状撚糸文(L)	ナ　デ	波状縁	
2	1住－堆積土	〃　B Ⅰa	〃	〃	粘土紐貼付文、櫛歯状工具による口縁に沿う沈線文、横位沈線文、コンパス文	ミガキ	波状縁 胎土に斜長石を含む	9－2
3	1住－1層	〃　B Ⅱ6	〃	〃	木目状撚糸文(L)	不　明	波状縁 口縁上部に細い段をもつ	
4	1住－堆積土	〃　B Ⅱ7	〃	〃	組紐回転文(LLLL)	〃		
5	1住－南西ピット	〃	胴　部	〃	縄文(RL)	ナ　デ		
6	1住－1層	〃	〃	〃	葵瓦状撚糸文(L)、縄文(LRL)	不　明		
7	1住－堆積土	〃	〃	〃	葵瓦状撚糸文(L)、撚糸文(R、L)	〃		
8	1住－堆積土	鉢　B	口縁部～底部	〃	斜行縄文(RL)・結節文(片結び一順)	ナ　デ	波状縁	5－1
9	1住－堆積土	深鉢 B Ⅱ6	口縁部～胴部	〃	葵瓦状撚糸文(L)	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	6－10
10a.b	1住－堆積土	〃	胴部、底部	〃	撚糸文(R)〔胴部及び底面〕	〃	胎土に斜長石を含む	

第4図　第1号住居跡出土土器

このことから住居の構造としては４本柱もしくはそれより柱穴の数が多い住居があり、これが建てかえられている可能性がある。住居外のピットが上屋構造と関係するかどうかどうかは不明である。



○第２号住居跡　堆積土

No	層	特　　徴
1	表　土	
2	堆積土１層	茶褐色粘質土。焼土・木炭・遺物を多く含む。
3	堆積土２層	暗褐色粘質土。霜降り状にロームを含む。
4	堆積土３層	暗褐色土。ブロック状にロームを含む。
5	堆積土４層	茶褐色粘質土。
6		ローム（褐色火山灰層）

第５図　第２号住居跡

第３号住居跡（第７図）

住居跡第１群の中でも北側の台地頂部よりにあたるＤＢ、ＤＣの39、40区に位置する。

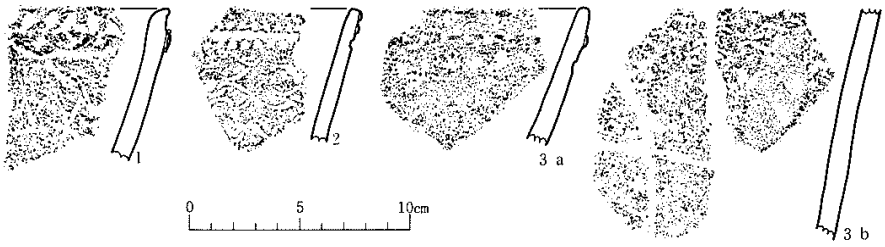
〈重複〉　南側を一部、第１号方形周溝墓の周溝に切られる。

〈平面形・規模〉　やや南に開く不整台形状で、大きさは東西軸が最大部で 3.9m、南北軸が3.2m である。

〈堆積土〉　堆積土はロームを含み、自然流入のような堆積状況を示す。壁ぎわに焼土・木炭が集中する層が認められる。

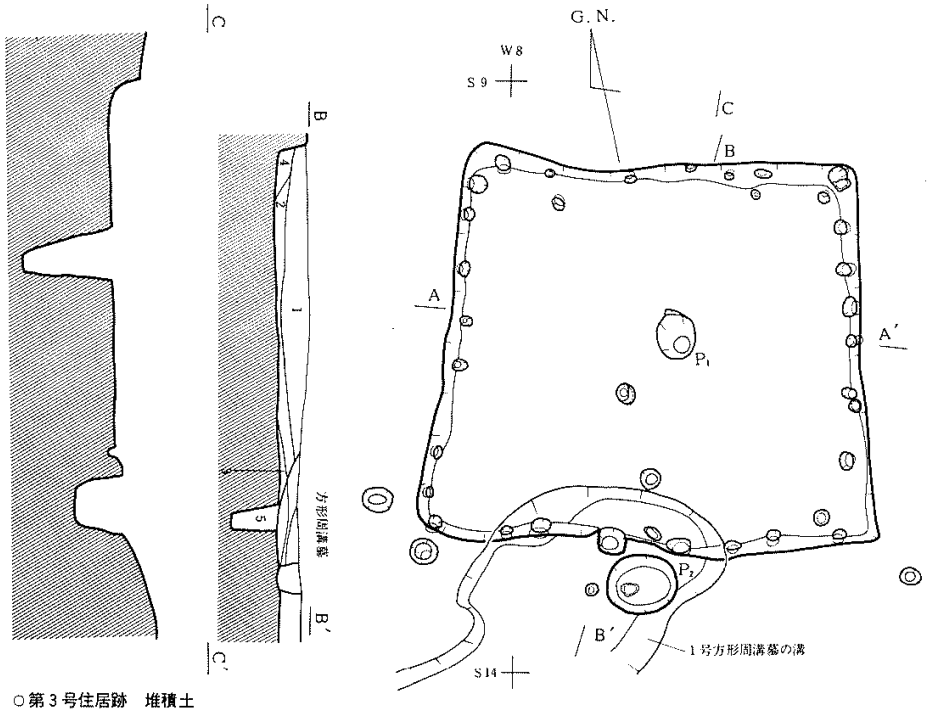
〈壁〉　検出された壁は地山で床面からほぼ垂直に立ちあがる。残存高は北側で30～40 cm、南側で10～20 cmである。

〈床面〉　ほぼ平坦である。



No	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内 面	備　　考	図版
1	２住－床面	深 鉢	口縁部	含む	刺突文、口縁に沿う隆線文、刺突文[隆線上]、山形沈線文、S字状沈文	不 明	胎土に斜長石を含む	
2	２住－床面	〃	〃	〃	口縁に沿う刺突文、S字状沈文	ナ デ	口縁上部が肥厚	
3a,b	２住－１層	〃	口縁部、胴部	〃	口縁に沿う隆線文、刺突文[隆線上]、隆線に沿う刺突文、S字状沈文	不 明	胎土に斜長石を含む	

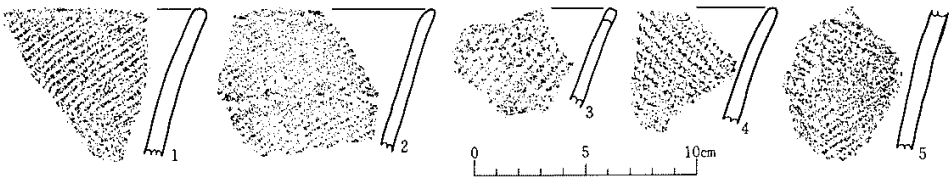
第６図　第２号住居跡出土土器



○第３号住居跡　堆積土

No	層の特徴
1	黒褐色土。細かいロームを含む。
2	暗茶褐色土。ローム・木炭・焼土を斑状に含む。
3	黒褐色土。僅かにロームを含む。
4	赤褐色土。多量の焼土・木炭とロームを含む。
5	黒褐色土。３よりロームを多く含む。
6	明茶褐色土。ロームを多量に含む。
7	暗茶褐色土。ロームを僅かに含む。
8	焼土層。
9	黒褐色土。ローム・焼土を含まない。
10	暗褐色土。ロームを含む。
11	ローム（火山灰層）

第７図　第３号住居跡



No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	３住－床面直上	深鉢　BⅡ2	口縁部	含む	羽状縄文（RL・LR）	ナデ		
2	３住－床面直上	〃　BⅡ1	〃	〃	斜行縄文（LR）・結節文(片結び一順)	不明		
3	３住－堆積土	〃　BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文（LR）	〃	突起をもつ平縁	
4	３住－堆積土	〃　BⅡ1	〃	〃	斜行縄文（RL）	ナデ		
5	３住	〃	胴部	〃	羽状縄文（RL・LR）	〃		

第８図　第３号住居跡出土土器

〈柱穴・ピット〉　住居中央には深さ 81 ㎝のピット 1 がある。また壁に沿って小ピットがめぐる。深さは数㎝～10 ㎝程度のものが多いが、東辺のピットはやや内傾し 10～20 ㎝と深い。この他に住居内外に 8 個のピットがあるが性格は不明である。住居南辺に近接するピット 2 は深さ 45 ㎝で底面は平らである。

第 4 号住居跡（第 9 図）　住居跡第 1 群の中央、DH、ＤＩの 42 区にある。

〈重複〉第 1 号方形周溝墓の周溝に切られる。

〈平面形・規模〉　方形周溝墓により東辺が一部破壊されているが、長軸 3.4㎜、短軸 2.5㎜のほぼ長方形を呈する。

〈堆積土〉　3 層に大別できる。2、3 は焼土・木炭を含む黒褐色土であり、4～12 はロームを含む暗褐色土となる。また、13、14 は竪穴の底面に貼りつくように存在する層であり、生活時の堆積層と思われる。

〈壁〉　西側で約 50 ㎝、北・南側で約 30 ㎝が残存する。壁面は急角度で立ちあがる。

〈床面〉　ほぼ平坦である。

〈柱穴・ピット　〉竪穴中央のピット 1 は最も深く、主柱穴と考えられる。東辺は不明だが、壁面に沿って壁柱穴と思われる浅いピットが並ぶ。東辺中央には径 40 ㎝、深さ 34 ㎝の不整円形のピット 2 がある。住居内北東部にもピット群があるが性格は不明である。

第 6 号住居跡（第 11 図）住居跡第 1 群中央よりのＤＥ、ＤＦの 42 区にある。重複はない。

〈平面形・規模〉　長軸 3.3㎜、短軸 2.8㎜でやや東側が開く不整四角形である。

〈堆積土〉　8 層からなる。上部は焼土・木炭を多く含み、下部はロームを含むことを特徴とする。床面上には薄い炭の層がある。

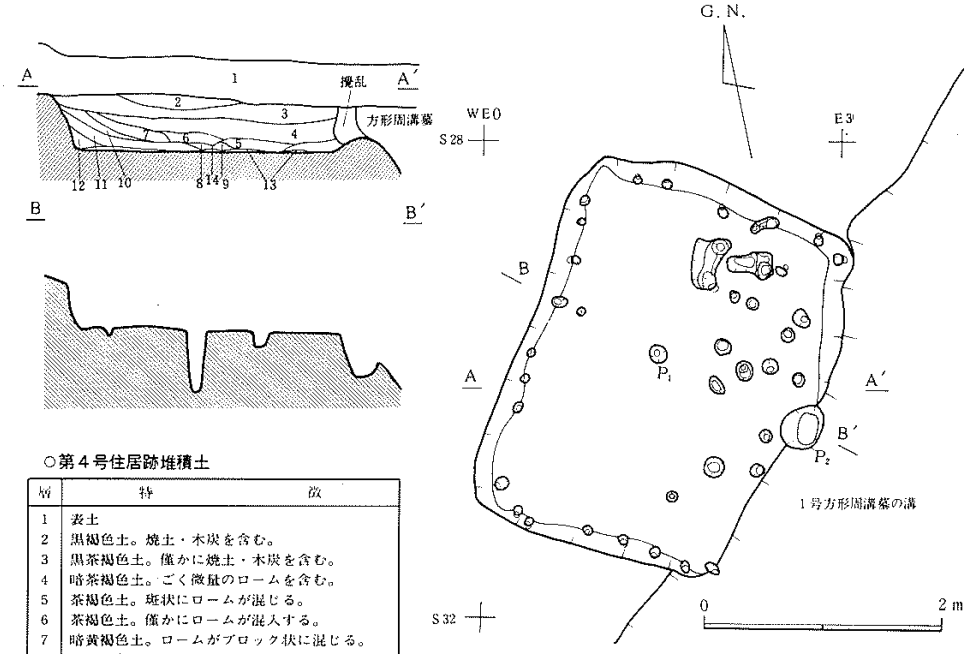
〈壁〉　検出された壁は地山（ローム）で床面から急角度で立ちあがる。残存高は 20～40 ㎝ある。

〈床面〉　若干の凹凸はあるがほぼ水平である。

〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に深さ 80 ㎝のピット 1 があり、柱痕跡はみとめられないものの主柱穴と考えられる。また壁に沿って深さ 10～20 ㎝の小ピットがすきまなく巡る。東辺中央には大形の円形ピット 2、3 がある。深さは床面から 10 ㎝はなく底面は平坦である。ピット 3 の両側のピット 4、5 は他の壁柱穴よりやや深く径も大きい。住居の南西部を中心に十数基のピットがあり 6 号住居と関連するものかもしれない。

第 7 号住居跡（第 13 図）住居跡第 1 群内のＤＨの 38、39 区にあり、第 31、30、10 号住居跡と隣接するが、重複はみとめられない。

〈平面形・規模〉　2.4×2.5㎜ のほぼ四角形を呈するが、北西辺はやや丸みをおびる。また南東隅のあたりに幅 70㎝、長さ 30㎝ 程の張りだし部があり、ピット 2 の北側の壁にもカマドの袖



○第４号住居跡堆積土

層	特　　徴
1	表土
2	黒褐色土。焼土・木炭を含む。
3	黒茶褐色土。僅かに焼土・木炭を含む。
4	暗茶褐色土。ごく微量のロームを含む。
5	茶褐色土。斑状にロームが混じる。
6	茶褐色土。僅かにロームが混入する。
7	暗黄褐色土。ロームがブロック状に混じる。
8	暗黄褐色土。サラサラしたロームが混じる。
9	暗褐色土。ローム・木炭を含む。
10	暗黄褐色土。僅かにロームを含む。
11	暗褐色土。僅かにロームを含む。
12	暗黄褐色土。粒子の粗いロームを含む。
13	暗黒褐色土。粘性あり。
14	木炭の層
15	ローム（火山灰層）

第９図　第４号住居跡

No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外　　面	内面	備　　考	図版
1	４住－２層	深鉢　Ｂ１ｇ	口縁部	含む	刺突文	不明	胎土に針状石を含む	
2	４住－２層	〃	胴　部	〃	縄目状撚糸文	〃		
3	４住－１層	〃	〃	〃	羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）	ナデ		
4	４住	〃	〃	〃	羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）	不明		

第10図　第４号住居跡出土土器

のような張り出しがある。

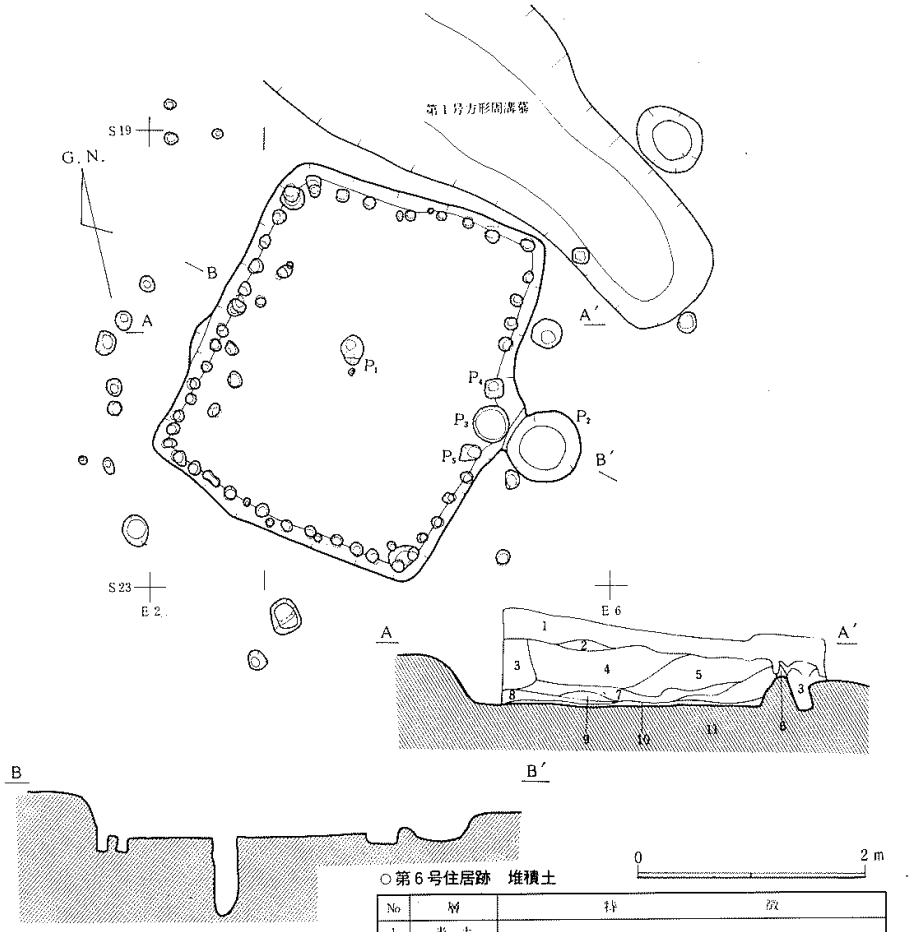
〈堆積土〉　４層からなる。上部には焼土・木炭・遺物を多く含む赤褐色土があり、下部はロームを多く含む層とをる。また床面上には生活時の堆積らしい黒色土が分布する。

各層より土器・石器が出土しているが、とりわけ１層に多い。４層からは骨片が出土している（第13図に出土状態を示した）。

〈壁〉　検出された壁は地山（火山灰層）で、残存高は遺存のよい北東部で30数cmである。

〈床面〉　壁沿いが数cm高くなるが、床面自体はおおむね平坦である。

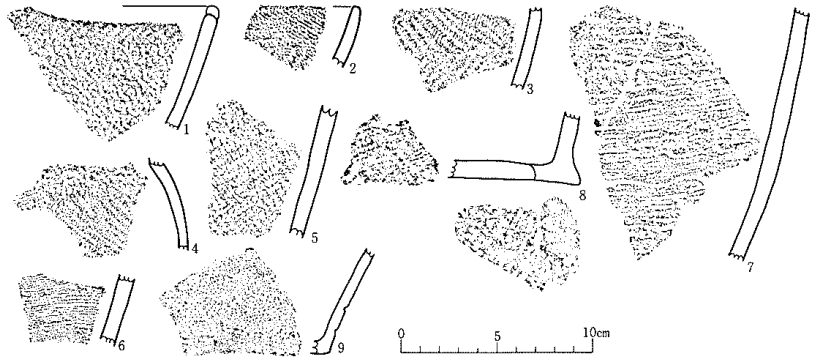
〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に径15㎝、深さ48㎝のピット1がある。堆積土はロームブロック・木炭を含む軟らかい暗褐色土で住居内堆積土3層に類似する。ピット1は主柱穴と考えられるが斜めである。壁沿いには径、深さとも10㎝内外の小ピットがならぶ。北東隅の張りだし部



○第6号住居跡　堆積土

No	層	特　徴
1	表　土	
2	堆積土1層	茶褐色土。焼土・木炭を僅かに含む。
3	攪　乱	
4	堆積土2層	茶褐色粘質土。ロームと多量の焼土・木炭を含む。
5	堆積土3層	茶褐色粘質土。ロームと少量の焼土・木炭を含む。
6	堆積土4層	茶褐色粘質土。ロームを少し含む。
7	堆積土5層	黒茶褐色粘質土。軟らかい。ローム・焼土・木炭を僅かに含む。
8	堆積土7層	黒茶褐色粘質土。軟らかい。ロームをブロック状に含む。
9	堆積土6層	黒茶褐色粘質土。軟らかい。ロームを少し含む。
10	堆積土8層	黒色炭層
11		ローム（火山灰層）

第11図　第6号住居跡



No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	6住－2層	深鉢 BⅡ3	口縁部	含む	重層末端ループ文(RL)、羽状縄文(RL・LR)	ミガキ	突起をもつ平縁	
2	6住－堆積土	〃 BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(R)	ナデ		
3	6住－2層	〃	胴部	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
4	6住－堆積土	〃	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(RL)	ナデ		
5	6住－堆積土	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
6	6住－1層	〃	〃	〃	櫛歯状工具による波状沈線文	ナデ	胎土に斜長石を含む	
7	6住－堆積土上部	〃	〃	〃	葦状燃糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
8	6住－堆積土	〃	脚部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)、「X」字状刺突文(底面)	不明		
9	6住	〃	胴部	〃	櫛歯状工具による波状沈線文、刺突文	ナデ	胎土に斜長石を含む	

第12図　第６号住居跡出土土器

にもピットがめぐるのでここが出口であったとは考えにくい。ピット２は深さ24㎝で堆積土は住居内堆積土の２、３層に類似することから住居に伴うものと考えられる。７号住居では他の住居でみとめられるような、ピット２に対応する一対の柱穴はなく、ピット３のみが確認されている。住居外のピット４の堆積土は住居のそれと異なる。

第８号住居跡（第16図）住居跡第１群内でも東側のＤＧの47区にある。

〈重複〉　第34号住居跡と重複しており、断面図をみる限りでは８住が古い。

〈平面形・規模〉　2.4×2.8㎡の不整四角形である。

〈堆積土〉　堆積土の上部は不明だが、下部はロームを含むしまりのよい土である。床面上には黒褐色粘質土の薄い層がある。

〈壁〉　検出された壁は地山で、上部は保存が悪いが、下部は床面からほぼ垂直にたちあがる。残存高は斜面上の北側で50～60㎝、南側で20～40㎝あり、住居の規模に比べて深い。

〈床面〉床面中央に比べて壁ぎわが高くなる。住居西側の床面には貼り床がみとめられる。

〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に深さ37㎝のピット１があり、その周囲に深さ10㎝程の小ピットが巡る。ピット１は柱穴と考えられるが周囲のピットは性格不明である。壁ぎわには深さ数㎝から20㎝程度の小ピットが連続する。また西隅付近にはこの壁柱穴から派生するピット列がある。南東辺の外には深さ26㎝のピット２があり、位置関係から住居に伴うものと考えられる。

ピット3と住居との関係は不明である。

第34号住居跡（第16図）

住居跡第1群内でも東側のＤＦ、ＤＧの47、48区にある。

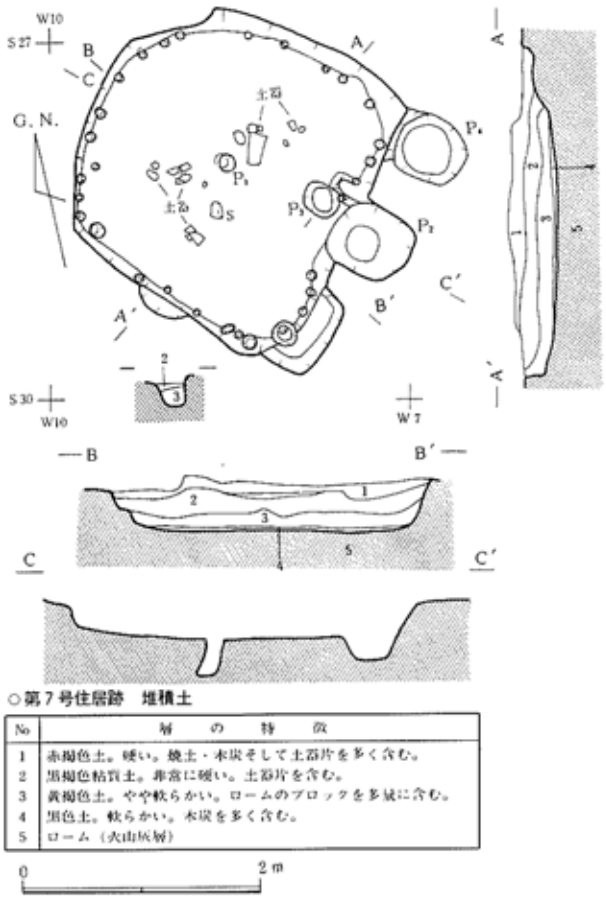
〈重複〉第8号住居跡・溝と重複し、溝に切られる。8号住居との関係は微妙だが、断面図の示すところでは34号住居だけが新しい。

〈平面形・規模〉　西壁の一部が確認されているだけなので詳細は不明だが、形は方形で8号住居より大きくなるものと思われる。

〈堆積土〉ロームと炭を含む暗褐色土である。

〈壁〉　壁は地山（火山灰層）と8号住居の堆積土を切りこんで作られている。残存高は10㎝内外である。

〈床面〉　西側にむかってやや下る傾向にある。



○第7号住居跡　堆積土

No	層の特徴
1	赤褐色土。硬い。焼土・木炭そして土器片を多く含む。
2	黒褐色粘質土。非常に硬い。土器片を含む。
3	黄褐色土。やや軟らかい。ロームのブロックを多量に含む。
4	黒色土。軟らかい。木炭を多く含む。
5	ローム（火山灰層）

0　2m

第13図　第7号住居跡

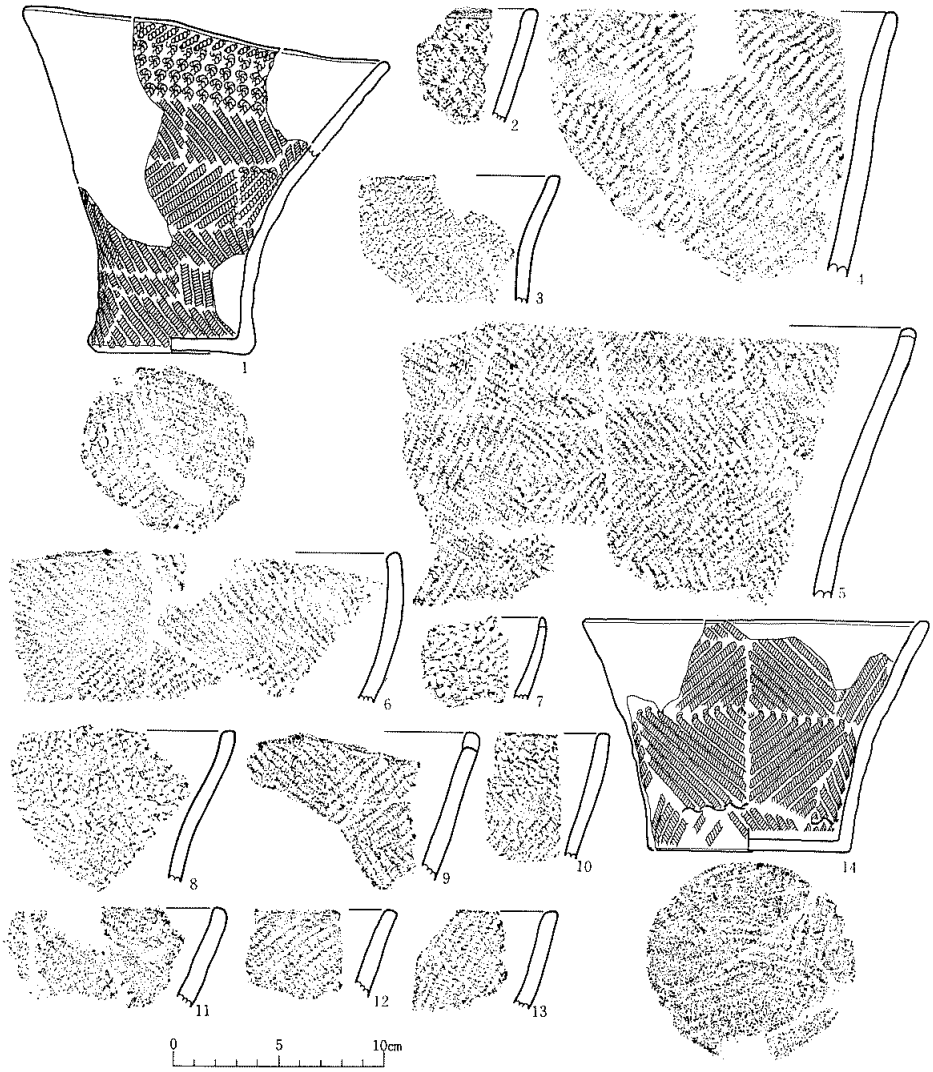
〈柱穴・ピット〉　西壁に沿って深さ10〜20㎝のピットが並ぶ。その他のピットの有無は不明である。

第9A号住居跡（第17図）住居跡第1群内でも東側のＤＨの47、48区にある。

〈重複〉　第9B号住居跡・第25号住居跡と重複する。9A住は25住に切られる。また平面では確認できなかったが、断面観察では9A住は9B住より新しい。住居内にはこれらの3軒に属さないピット群があり、さらに1軒以上の重複が考えられる。

〈平面形・規模〉　南および東側の壁は不明確だがピットの配列からおおむね南北4.8㎡、東西4.5㎡の変形四角形になるものと思われる。北東・北西隅はやや丸い。

〈堆積土〉　2は黒褐色土で遺物を多く含む。また5〜9にはロームの混入がめだつ。



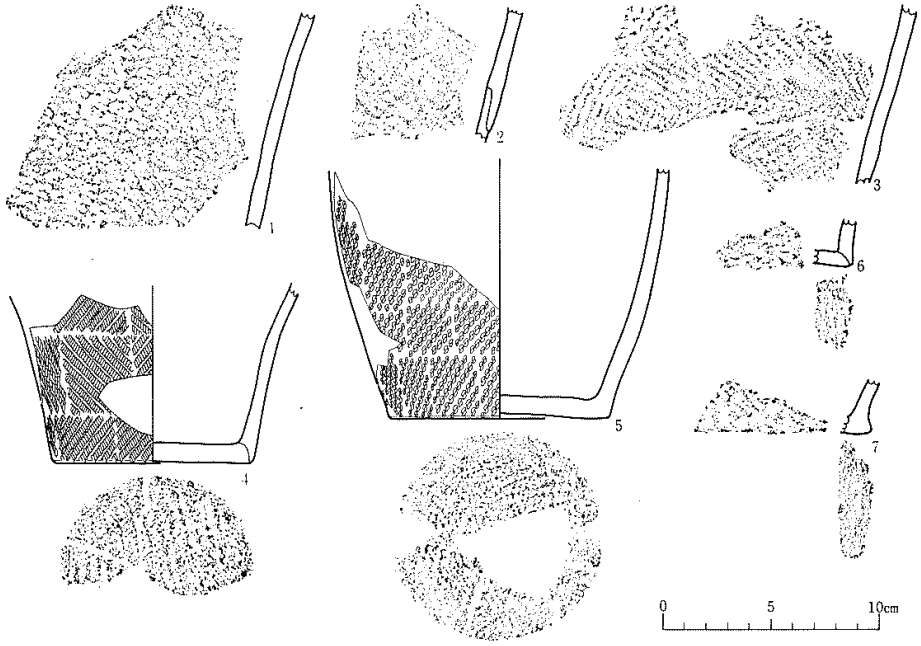
No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	7住－2層	深鉢 B Ⅱ3	口縁部～底部	含む	重層末端ループ文(LR)、羽状縄文(RL・LR)〔胴部及び底面〕	ナデ	補修孔あり	6－3
2	7住－2層	〃 B Ⅱ2	口縁部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
3	7住－1層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(LR)、縄文(LR)	ミガキ		
4	7住－1層	〃 B Ⅱ1	口縁部～胴部	〃	斜行縄文(LR)	ナデ		
5	7住	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃	突起をもつ平縁	
6	7住－1層	〃 B Ⅱ2	口縁部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
7	7住－堆積土	〃 B Ⅱ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(LR)	不明	突起をもつ平縁	
8	7住－1層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(LR)、羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
9	7住－1層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃	波状縁	
10	7住－1層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(LR)	ミガキ		
11	7住－1層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
12	7住－1層	〃 B Ⅱ1or2	〃	〃	縄文(LR)	〃		
13	7住－1層	〃 B Ⅱ1or2	〃	〃	縄文(LR)	ミガキ		
14	7住	鉢 B	口縁部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		6－6

第14図　第７号住居跡出土土器　（1）

〈壁〉　南辺と東辺の2／3は確認できなかった。検出できた壁はロームで床面からほぼ垂直に立ちあがる。残存する壁高は西側30～40㎝、東側10～20㎝である。

〈床面〉　竪穴底面には粘性の強い茶褐色土（7 層）を挟んでロームの貼り床がみられる。床面は中央が周辺より幾分低い。西辺中央には段状に床面よりも10㎝高くなっている部分がある。出入口とも考えられるがこの部分にも壁柱穴がめぐる。

〈柱穴・ピット〉　竪穴内には9A住を含め3軒以上の重複がある。ピットの堆積土はいずれも暗褐色土であり多くのピットのなかから 9A住に伴うピットを識別するのは難しい。仮に 9A住が他の住居跡と同様の構造であるとすれば東辺から破線で延長したところのピット列は9A住の壁柱穴となる可能性が高い。壁柱穴は径10～15㎝で深さ10㎝内外のものが多いが、四隅のピット2～ピット5は34～60㎝と深くやや内傾する。ピット1は深さ61㎝でその配置から主柱穴と考えられる。ピット6およびピット7、ピット8は東辺に付随する円形ピットとそれに伴うやや深めの支柱穴になるものと思われる。



No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	7住	深鉢	胴部	含む	垂層末端ループ文(RL)	不明		
2	7住－1層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
3	7住－1層	〃	〃	〃	垂層末端ループ文(LR)、羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
4	7住	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)〔胴部及び底面〕	ナデ		
5	7住－堆積土	〃	〃	〃	縄文(LRL)〔胴部及び底部〕	不明		
6	7住－1層	〃	〃	〃	縄文(RL)、羽状縄文(RL・LR)〔底面〕	ナデ		
7	7住－1層	〃	〃	〃	縄文(RL)〔胴部及び底面〕	不明	胴部下端が外側にややはり出す	

第15図　第7号住居跡出土土器　(2)

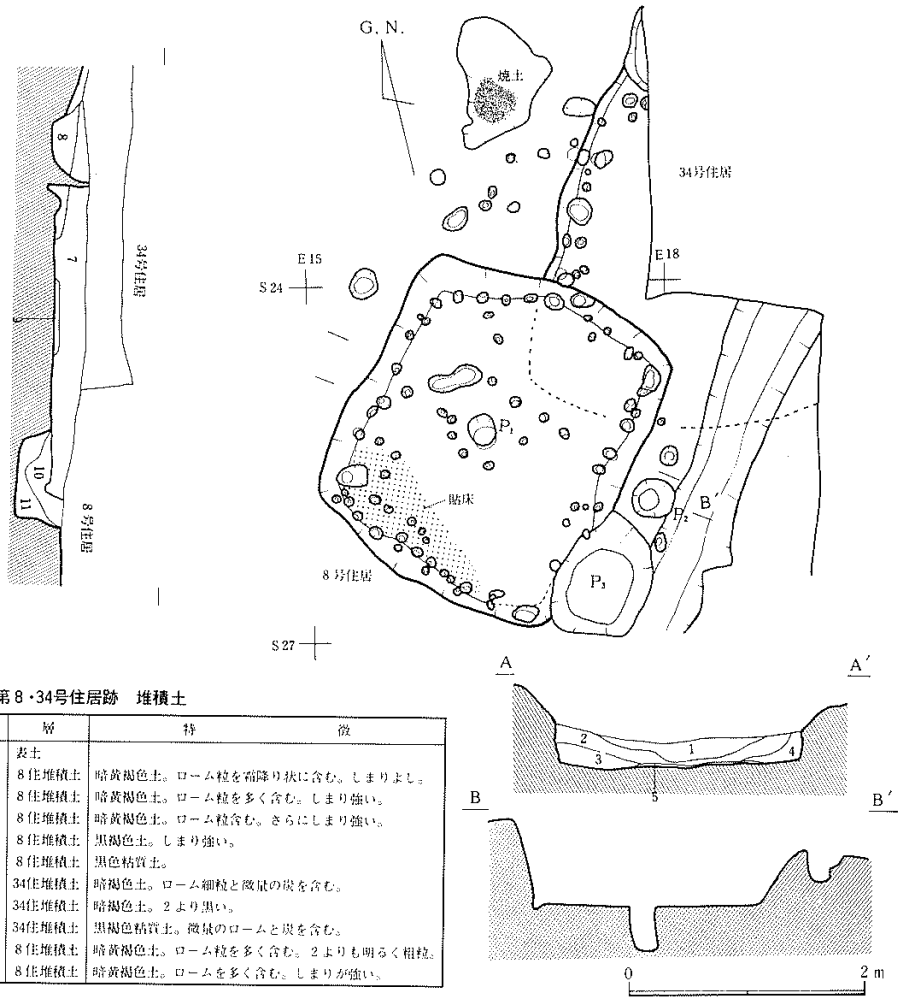
第9B号住居跡（第17図）　住居跡第1群内でも東側のDH、DIの47、48区にある。

〈重複〉　第25号住居跡1第9A号住居跡に切られる。

〈平面形・規模〉　他住居との重複により西辺と北辺の一部が失われていて正確なプランは不明である。北辺から破線で延長したような推定が正しければ東西5m、南北4m程の不整な長方形になる。

〈壁〉　壁は床面から垂直に立ちあがる部分もあるが、南辺や東辺中央では緩やかである。確認面からの壁高は20～30cmである。

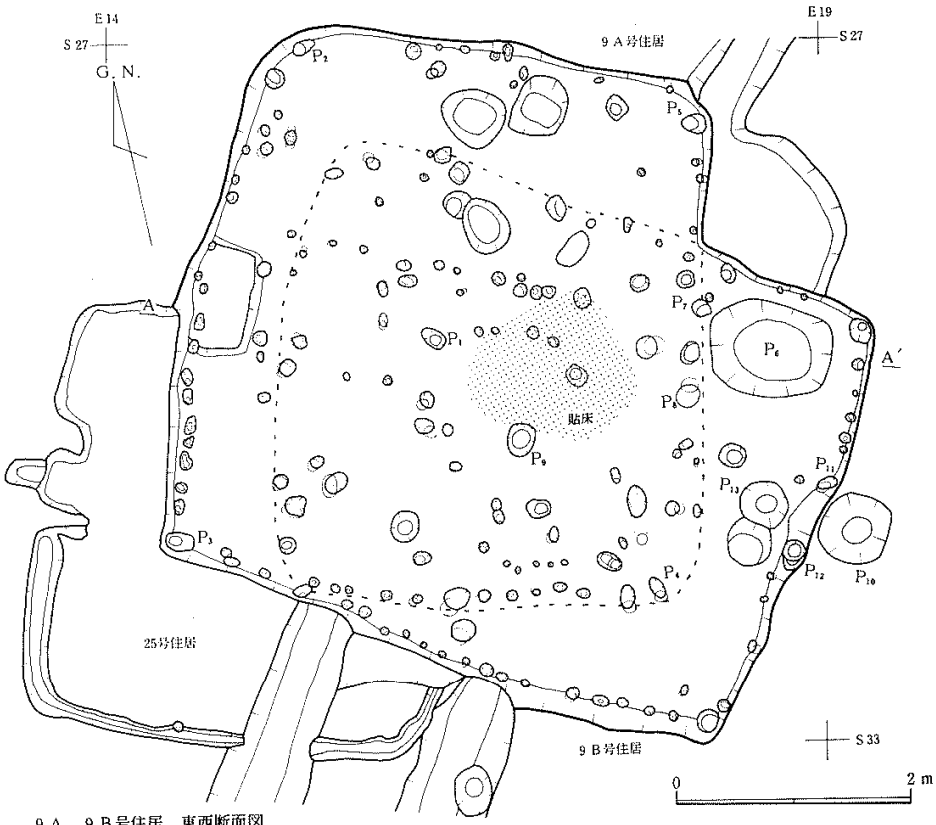
〈床面〉　9A住の床面とほぼ同じレベルで、平坦である。



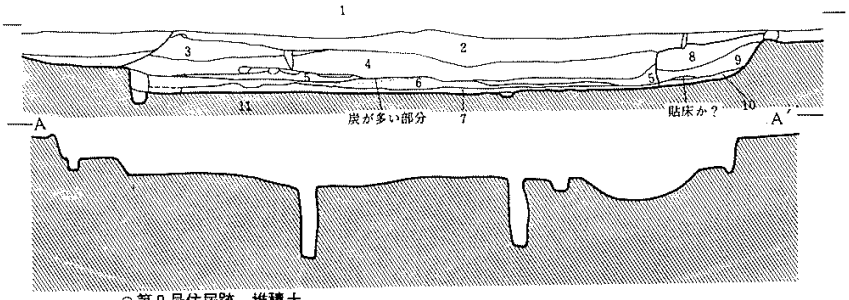
○第8・34号住居跡　堆積土

No	層	特	徴
1	表土		
2	8住堆積土	暗黄褐色土。ローム粒を霜降り状に含む。しまりよし。
3	8住堆積土	暗黄褐色土。ローム粒を多く含む。しまり強い。
4	8住堆積土	暗黄褐色土。ローム粒含む。さらにしまり強い。
5	8住堆積土	黒褐色土。しまり強い。
6	8住堆積土	黒色粘質土。
7	34住堆積土	暗褐色土。ローム細粒と微量の炭を含む。
8	34住堆積土	暗褐色土。2より黒い。
9	34住堆積土	黒褐色粘質土。微量のロームと炭を含む。
10	8住堆積土	暗黄褐色土。ローム粒を多く含む。2よりも明るく粗粒。
11	8住堆積土	暗黄褐色土。ロームを多く含む。しまりが強い。

第16図　第8、34号住居跡



9 A、9 B号住居　東西断面図



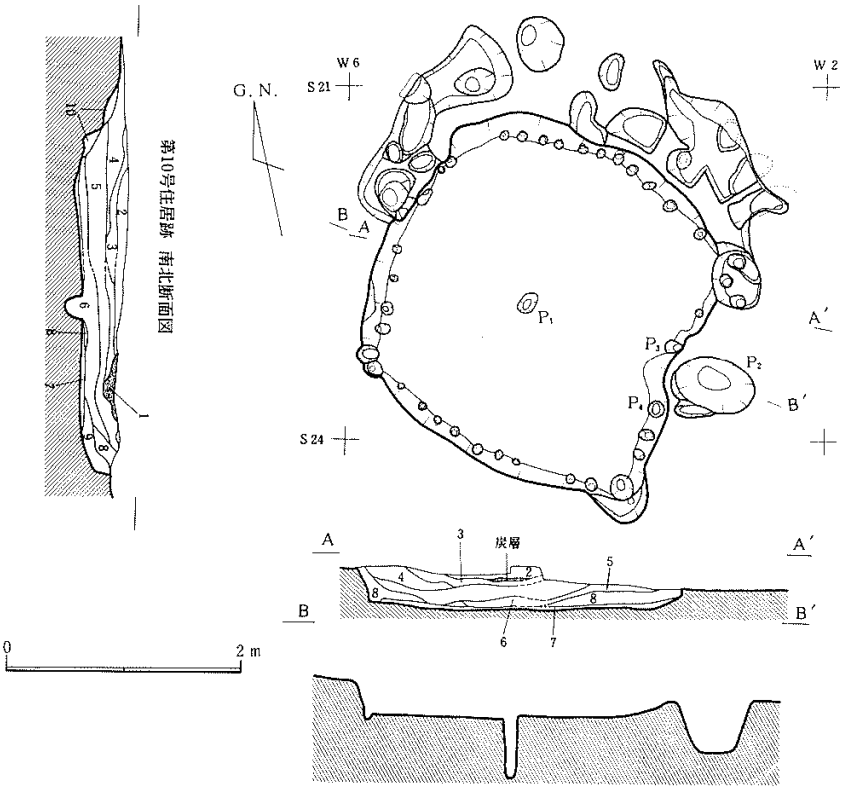
○第９号住居跡　堆積土

No	層	特　　徴
1	表土	
2	9A住堆積土	黒褐色土。下部ほど硬く、粘性あり。遺物を多く含む。
3	9A住堆積土	明茶褐色土。遺物を含む。
4	9A住堆積土	明褐色土。非常に硬い。ローム粒を含む。
5	9A住堆積土	黒っぽい灰褐色土。硬い。
6	9A住堆積土	明黒褐色土。貼り床直上にあり炭を含む。
7	9A住堆積土	茶褐色土。粘性が強い。ローム・酸化鉄を多く含む。７の上には部分的に貼り床が残る。
8	9B住堆積土	暗褐色土。硬い。
9	9B住堆積土	明褐色土。ローム粒を含む。８より軟らかい。
10	9B住堆積土	暗褐色土。粘性が強い。床面直上に分布する。
11		ローム（大山灰層）

第17図　第９Ａ、９Ｂ号住居跡

〈柱穴・ピット〉　ピットの堆積土は一様に暗褐色土であり、9B住に伴うピットを抽出するのは難しい。破線は残存する壁とピット列から復元したプランだが、北辺・西辺は必ずしも連続して小ピットがみとめられるわけではない。ピット9は79㎝と深いピットでその位置から主柱穴である可能性がある。東辺に接して径60㎝、深さ26㎝の円形ピット（ピット10）があり、これに対応して壁面にピット11、ピット12がある。ピット13は深さ39㎝の円形ピットでありピット10～ピット12と関係するものかもしれない。

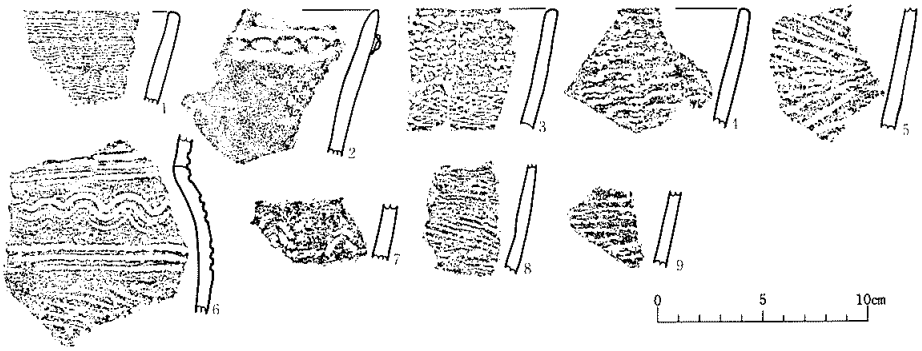
第10号住居跡（第18図）　住居跡1群内でも西よりのDF39区にあり、7・10号住と隣接する。



○第10号住居跡　堆積土

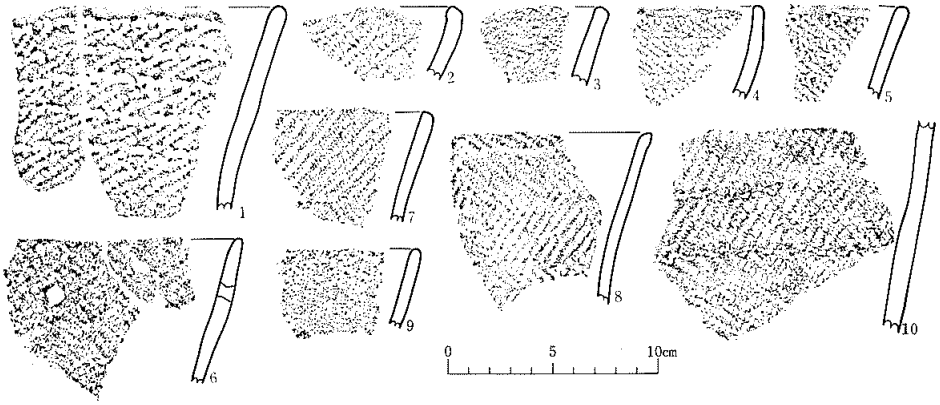
No	層の特徴
1	赤橙色焼土層
2	暗褐色土。やや粗粒。しまりよし。焼土・炭・細礫・土器の他に遺物を多く含む。
3	暗褐色土。1に類似するが細粒で焼土・細礫は少ない。
4	暗褐色土。1、2より細粒。粘性、しまりあり。遺物を多く含む。
5	暗黄褐色土。粘性あり。ローム粒を霜降り状に含む。
6	暗黄褐色土。粘性あり。ローム粒を多く含む。
7	黒褐色土。極めて粘性が強い。炭を含む。
8	暗褐色土。細粒。粘性あり。ローム粒を若干含む。
9	暗褐色土。粘性あり。比較的大粒のローム粒を含む。
10	暗黄褐色土。ローム粒を濃密に含む。
11	ローム（火山灰層）

第18図　第10号住居跡



No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	9住	深鉢 B Ⅰa	口縁部	含む	櫛歯状工具による横位沈線文、波状沈線文	ナデ	胎土に斜長石を含む	
2	9住－1層	〃 B Ⅱi	〃	〃	口縁に沿う隆線文、刺突文(隆線上)、縄文(RL)	不明		
3	9住－1層	〃 B Ⅱ4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、網目状撚糸文(L)	〃		
4	9住－2層	〃 B Ⅱ6	〃	〃	葺瓦状撚糸文(L)	ナデ	胎土に斜長石を含む	
5	9住	〃	胴部	〃	木目状撚糸文(R、L)	不明		
6	9住－堆積土下部	〃	〃	〃	3本一組の櫛歯状工具による横位沈線文・波状沈線文、撚糸文(L)	ナデ		9－12
7	9住	〃	〃	〃	片面ループ文(RL)	〃		
8	9住－2層	〃	〃	〃	撚糸文(L)	〃		
9	9住	〃	〃	〃	撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	

第19図　第９号住居跡出土土器



No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	10住－堆積土下部	深鉢 B Ⅱ3or4	口縁部	含む	重層末端ループ文(LR)	不明		
2	10住－堆積土	〃 B Ⅱ1or2	〃	〃	縄文(LR)	ナデ	波状縁	
3	10住－堆積土	〃 B Ⅱ2	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	
4	10住－堆積土	〃 B Ⅱ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	ミガキ		
5	10住	〃 B Ⅱ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	不明		
6	10住－堆積土上部	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ	補修孔あり	
7	10住	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
8	10住	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明	口縁上部が外側にやや広がる	
9	10住－堆積土上部	〃 B Ⅱ7	〃	〃	組紐回転文	〃		
10	10住	〃	胴部	〃	羽状縄文(RL・LR)・結節文(片結び一順)	〃		

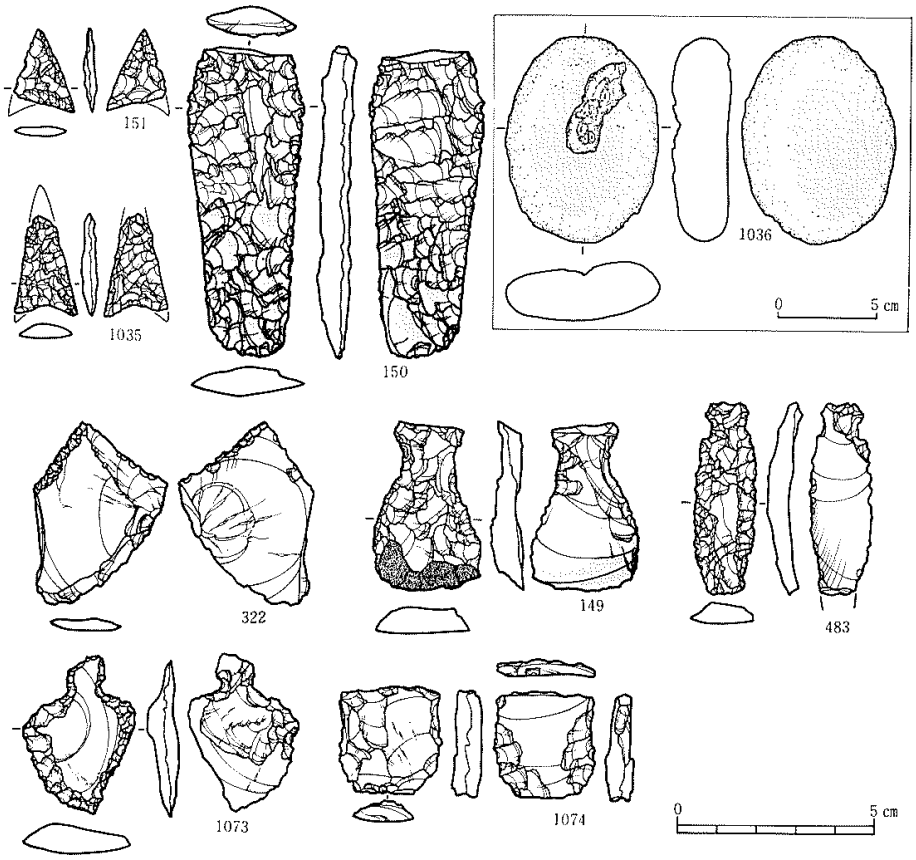
第20図　第10号住居跡出土土器

〈重複〉　住居北側に不定形のピットがあるが住居との関係は不明である。

〈平面形・規模〉　南北軸 2.8m、東西軸 2.6m で、南北が僅かに長い胴張りのする方形であり、住居南側のコーナーがやや張りだすようである。

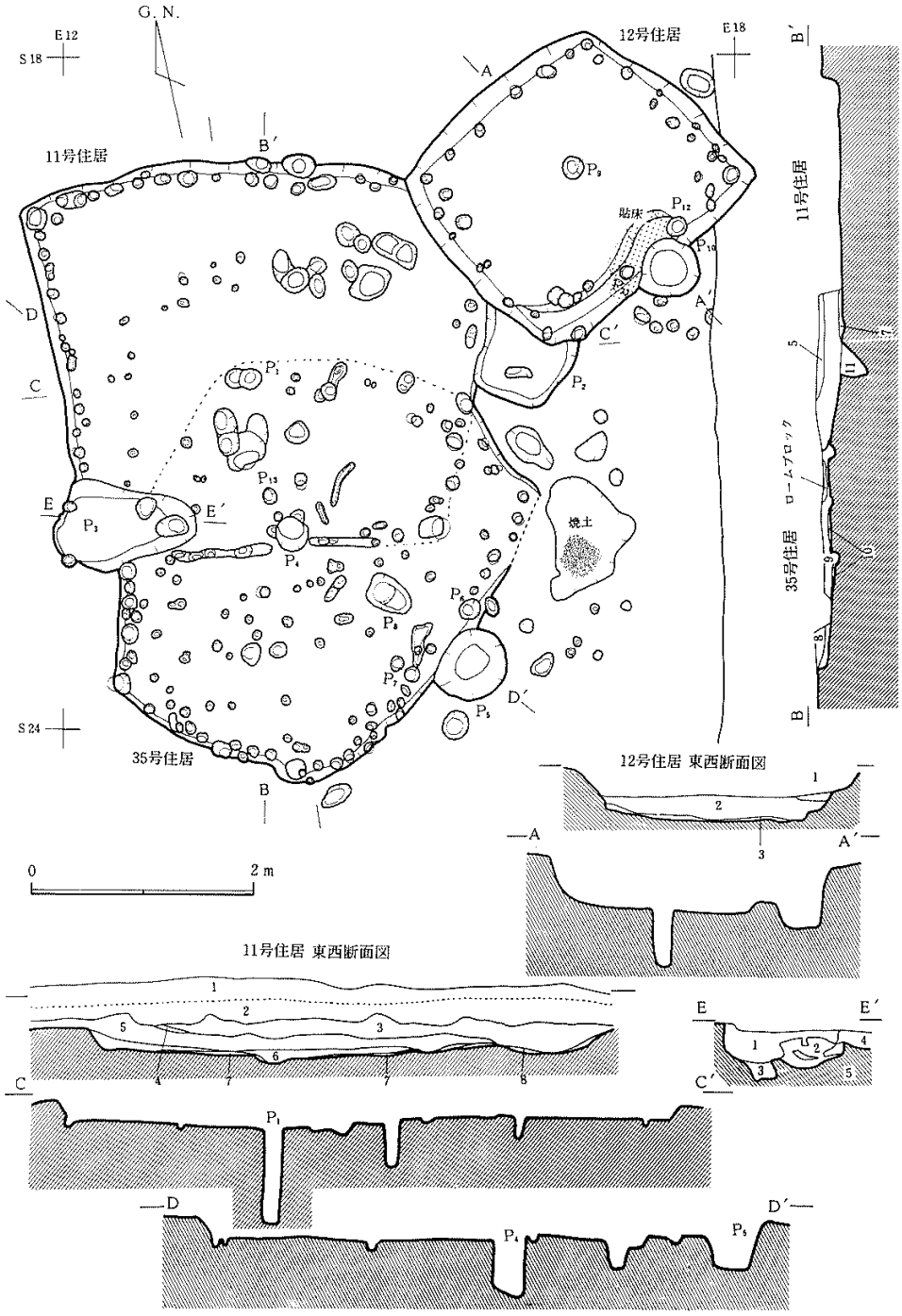
〈堆積土〉　4 層に大別される。堆積土の上部 1、2 層は焼土・炭を多く含むが、混入物の少ない 3、4 層を経て下部はロームを多く含む 5、6、8、9、10 層になる。床面上には炭を含む薄い黒褐色粘質土層（7）がある。遺物は 2～4 層に多い。

〈壁〉　検出された壁は地山（ローム）で残高は 20cm 内外である。



No	住居跡	層	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石　材	備　考
151	2住	1層	石鏃	22	(17)	4	珪質頁岩	基部破損。
150	2住	1層	両面加工尖頭器？		30	10	珪質頁岩	基部が黒色化（スクリーン・トーン）
1036	7住	2層	磨凹石	104	76	29	安山岩	2磨面（スクリーン・トーンで示した部分）
1035	9住(東)	2層	石鏃	31(推)	16(推)	4	珪質頁岩	先端破損後に再加工。磨滅あり（S.T.）
322	9住	床面	スクレイパー	41	34	6	珪質頁岩	
149	10住	埋土中	石匙			8	珪質頁岩	表面焼けはじけ（S.T.）裏面黒色化（S.T.）
483	11住	(東ピット？)	石匙		16	6	珪質頁岩	
1073	11住	ピット2	石匙	38	26	7	珪質頁岩	
1074	11住	西南ピット3	不定形石器				珪質頁岩	折面を切る二次加工あり。

第21図　第2、7、9、10、11号住居跡　出土石器



第22図　第11、12、35号住居跡　（1）

○第12号住居跡　堆積土

No	層の特徴
1	黒褐色土。軟らかい。炭を含む。
2	暗黄褐色土。ローム粒を含む。しまりよし。
3	黒色粘質土。部分的に炭を多く含む。しまりよし。
4	ローム（火山灰層）

○ピット3　堆積土

No	層の特徴
1	暗褐色土。粗粒で比較的軟らかい。焼土・炭・土器片を多く含む
2	暗黄褐色土。ロームと少量の焼土・炭・土器片を含む。しまりよし。
3	暗黄褐色土。ローム粒を多く含む。やや粗粒。
4	暗黄褐色土。細粒でしまりがよい。ローム粒と微量の焼土・炭を含む。
5	ローム（火山灰層）

○第11、35号住居跡　堆積土

No	層	特徴
1	表土	
2	11住堆積土	黄褐色土。1より明るい。粘性なし。
3	11住堆積土	褐色土。2よりやや黒い。粘性ややあり。焼土粒・土器片を含む。
4	11住堆積土	焼土（レンズ状の塊）
5	11住堆積土	褐色土。3にローム粒が混じるもの。
6	11住堆積土	褐色土。5よりローム粒が多く黄味が強い。
7	11住堆積土	黒色木炭層。2、3㎝の厚さでローム上に堆積する。粘性あり。
8	11住堆積土	暗褐色土。粗粒で軟らかい。焼土・炭を含む。
9	35住堆積土	暗黄褐色土。しまりより。
10	35住堆積土	暗黄褐色土。ややローム粒を含む。
11	35住堆積土	黒褐色粘質土。炭を含む。
12	地山	ローム（火山灰層）

第23図　第11、12、35号住居跡　（2）

〈床面〉　堅いローム面の上に厚さ2、3㎝の黒褐色粘質土が貼りつくように存在する。その上の各層は斜めの流れこみによる堆積なのでこれは生活時の堆積と考えられる。

〈柱穴・ピット〉住居中央には深さ51㎝のピット1がある。また壁沿いには深さ数㎝でやや内傾する小ピットが巡る。これらは主柱穴と壁柱穴と考えられる。住居の東辺に接してピット2、3、4がある。ピット2は深さ49㎝で底面は平坦である。ピット2の前面にあるピット3、4は他の壁柱穴より深い。

第11号住居跡（第22図）　住居跡1群内でも東端のＤＥ、ＤＦの46区にある。

〈重複〉　第35、12号住居跡と重複する。また住居内から南側にかけて11号住居に関係しないと考えられるピット群があり、正確なプランは不明だがピット13を主柱穴とするような1軒あるいはそれ以上の住居の存在が推測される。12号住居との新旧は不明だが、断面図をみた限りでは11号住居は35号住居・ピット群からその存在が推定される住居より新しい。

〈平面形・規模〉　南辺および北・東辺の一部が不明だが、北側にむかって開く不整台形状で大きさは東西が最大部で4.3m、南北が3.5m程になるものと思われる。

〈堆積土〉　4層からなり下部ほどロームの混入がめだつ。床面上には薄い木炭層がある。

〈壁〉　地山と35号住居の堆積土を切りこんでつくられており、残存高は10～20㎝である。

〈床面〉　東側にやや傾く傾向があるようである。

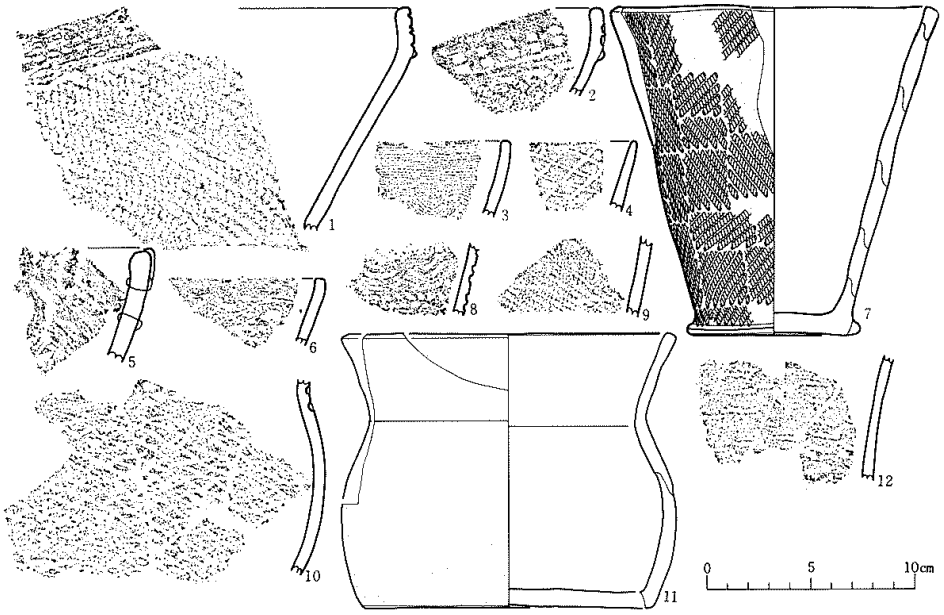
〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に深さ83㎝のピット1があり、壁沿いには深さ10～20㎝の小ピットが巡る。両辺と推定される部分には周溝状の浅い溝がある。また東壁に接してピット2がある。ピット2は床面からの深さ8㎝で底面はやや西に傾く平坦面である。住居南西隅のピット3と住居との関係は不明である。

第12号住居跡（第22図）　住居跡1群内でも東端のＤＥ47区にある。

〈重複〉　第11号竪穴住居と重複するが、新旧は不明である。

〈平面形・規模〉　斜面下、南東方向にむかってやや開く不整四角形で規模は2.3×2.5m と非常に小さい。

〈堆積土〉　上部は不明だが下部にはロームを含むしまった暗黄褐色土がある。床面上には炭



No	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	機維	外　面	内面	備　考	図版
1	11住－堆積土下部	深鉢 Ａⅰc	口 縁 部	含む	口縁に沿う刺突文、口縁に沿う隆線文、縄文(ＲＬＲ)	ナ　デ	波状縁 胎土に斜長石を含む	9－11
2	11住	〃　Ａⅰc	〃	〃	口縁に沿う刺突文、口縁に沿う隆線文、縄文(ＲＬ)	不　明	波状縁 胎土に斜長石を含む	
3	11住－西南ピット	〃　ＢⅠa	〃	〃	櫛歯状工具による横位沈線文・波状沈線文	ナ　デ	胎土に斜長石を含む	
4	11住－１層	〃　ＢⅡ6	〃	〃	網目状撚糸文(Ｌ)	不　明	胎土に斜長石を含む	
5	11住－堆積土下部	〃　ＢⅠb	〃	〃	縦位貼付文、貫通孔に沿う粘土紐貼付文、口縁に沿う刺突文、撚糸文(Ｌ)	ナ　デ	波状縁、口縁内面に[illegible]	
6	11住	〃　ＢⅡ6	〃	〃	網目状撚糸文(Ｌ)	不　明		
7	11住	〃　ＢⅡ2	口縁部～底部	〃	羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)	〃	胴部下端が外側にはり出す	6－2
8	11住	〃	胴　部	〃	櫛歯状工具による波状沈線文・刺突文	ナ　デ		
9	11住－１層	〃	〃	〃	縄文(ＲＬ)	〃		
10	11住－堆積土下部	〃	〃	〃	刺突文、網目状撚糸文(Ｌ)	ミガキ	胎土に斜長石を含む	
11	11住	鉢　Ａ	口縁部～底部	〃	無文（ナデ）	ナ　デ	胎土に斜長石を含む	7－2
12	11住－堆積土下部		胴　部	〃	葺瓦状撚糸文(Ｌ)	〃	胎土に斜長石を含む	

第24図　第11号住居跡出土土器

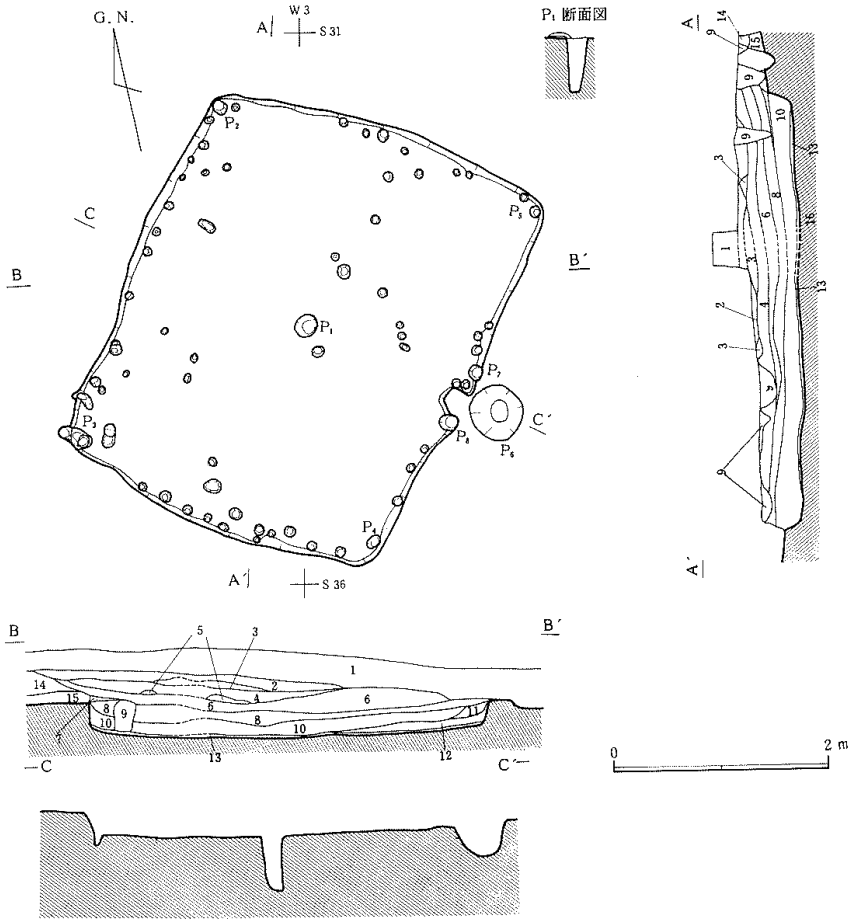
を含む薄い黒色土層があり生活時の堆積層と考えられる。
〈壁〉　検出された壁は地山であり、他の遺構との重複のない部分の壁の残存高は30～50㎝である。
〈床面〉　床面中央は周辺部に比べて10㎝近く低い。南側には床面から13㎝高い段状の部分があり、ピット2の前面には黒色土の上にロームを叩きしめたような貼り床が部分的に存在する。
〈柱穴・ピット〉　竪穴中央には深さ51㎝のピット9がある。また壁に沿って深さ10㎝内外の小ピットが巡る。これらは主柱穴と壁主穴と考えられる。南側の段の付近は壁柱穴の配列が不規則になっている。南東辺の中央にはピット10、ピット11、ピット12の一組のピット群がある。ピット10は床面からの深さ22㎝で底面は平らである。ピット11は深さ35㎝、ピット12は47㎝と他の壁ピットよりも深く径も大きい。
第35号住居跡（第22図）　住居跡1群内でも東端のＤＦの46、47区にある。
〈重複〉　第11号住居跡と重複し、断面図によれば35号住居は11号住居より古い。また住居内から北側にかけてピット群があり少なくとも1軒の住居の存在が予想されるが、35号住居とこれらの住居と関係は不明である。
〈平面形・規模〉　北・東辺が不明確だが、四辺が張りだす不整長方形で規模は長さ3.7㎜、幅3.1㎜程になると考えられる。
〈堆積土〉　ロームを含む暗黄褐色土で、床面上には炭を含む薄い黒褐色土層がある。
〈壁〉　検出された壁は地山で残存高は10㎝内外である。
〈床面〉　東側がやや下がるがほぼ平坦である。
〈柱穴・ピット〉　住居中央には深さ51㎝のピット4がある。11号住居跡と重複する部分については不明確だが、壁ぎわには深さ10㎝内外の小ピットがびっしりと並ぶ。これらは主柱穴と壁柱穴になるものと考えられる。南東壁に接してピット5、6、7がある。ピット5は床面からの深さ29㎝で底面は平坦である。ピット6、7も深さ約30㎝で他の壁柱穴よりやや径が大きい。ピット3、8と住居との関係は不明である。
第13号住居跡（第25図）　住居跡第1群中央のＤＩ、ＤＪの40、41区にある。第30、31、4、17号住居と隣接するが重複はみとめられない。
〈平面形・規模〉　長軸4㎜、短軸3.4㎜程のやや歪んだ長方形である。
〈堆積土〉　Ⅰ、Ⅱａ、Ⅱｂ、Ⅱｃ、Ⅱｄの4層に大別される。Ⅰ・Ⅱａ層は焼土・木炭を多量に含む暗褐色土層である。3、5は硬い焼土層であり、混入物がないことからこの場で火が焚かれたことが考えられる。Ⅱｂ層は微量の焼土・木炭を含む黒褐色土であり、Ⅱｃ層はロームを含むのを特徴とする。Ⅱｄ層は炭化物を含む黒褐色土層で、竪穴底面に薄く貼りつくように存在する。住居が機能していた期間に形成されたものと思われる。遺物は2、4層から多く出土しており

6 層以下では少ない。

〈壁〉　西側で 20 ㎝、南側で 10 ㎝が残存する。壁面はほぼ垂直に立ちあがる。

〈床面〉　若干の凹凸はあるがほぼ水平である。

〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に深いピットがあり主柱穴と考えられる（ピット 1）。また壁面に沿って壁柱穴と思われる小形のピットが並ぶ。竪穴の一辺に十数個が配置されるが、南東辺・



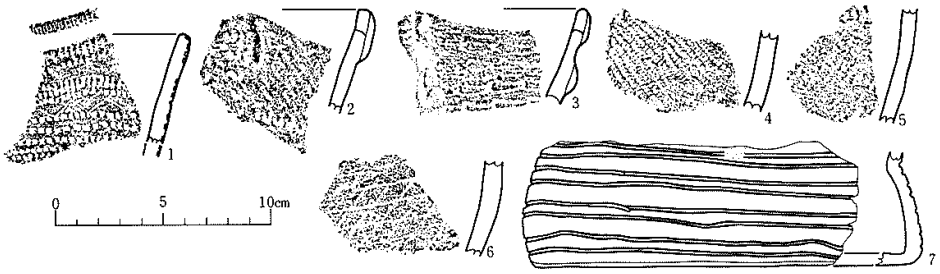
No	層	特　　徴	No	層	特　　徴
1	表土		9	攪乱	
2	堆積土Ⅰ層	黒褐色土。焼土・木炭を含む	10	堆積土Ⅱc層	暗黄褐色土。ロームを斑状に含む。
3	堆積土Ⅱa層	焼土（粘土が焼けたもの？）。硬い。	11	堆積土Ⅱc層	黒茶褐色土。僅かにロームを含む。
4	堆積土Ⅱa層	暗黒褐色土。焼土と多量の木炭を含む。	12	堆積土Ⅱc層	暗黄褐色土。ブロック状にロームが入る。
5	堆積土Ⅱa層	焼土（粘土が焼けたもの？）。硬い。	13	堆積土Ⅱd層	黒茶褐色土。炭化した植物が多量に含まれる。
6	堆積土Ⅱb層	黒茶褐色土。僅かに焼土・木炭を含む。	14		黒褐色土。
7	堆積土Ⅱb層	黒褐色土。僅かに焼土を含む。	15		赤みがかった暗褐色土。粉状にとむ。
8	堆積土Ⅱb層	暗茶褐色土。僅かにローム細粒を含む。	16		ローム（火山灰層）

第25図　第13号住居跡

北東辺・北東辺には壁柱穴のない部分がある。壁柱穴の深さは床面から数cmから10㎝程度で内側にやや傾く傾向がある。その中でも四隅にあるピット2～ピット5はやや深い。南東辺の外には円形のピットがある（ピット6）。深さ30㎝程で底面は平坦である。ピット6に接する住居の壁は内側に張りだし、その両側には他の壁柱穴よりも深く径の大きいピット7、ピット8がある。

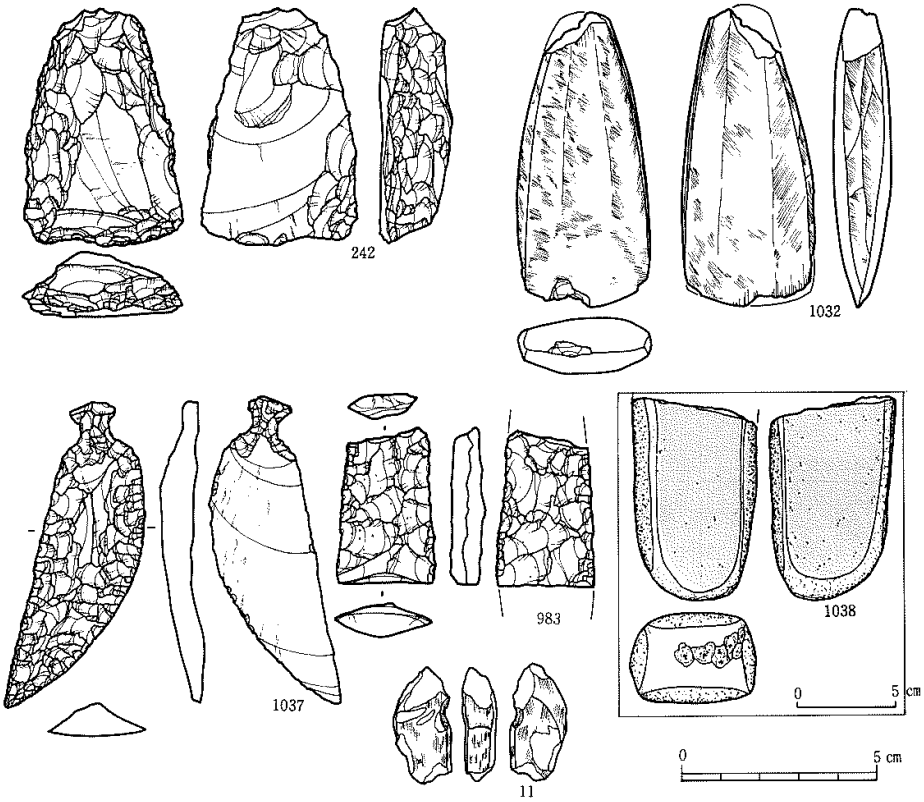
No	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	面	内面	備　考	図版
1	13住－2層	深鉢 AⅠb	口縁部～胴部	含む	「U」字状貼付文、4本一組の櫛歯状工具による波状沈線文連続刺突文	ナ　デ	間隔をもつ平縁 胎土に斜長石を含む	9－5
2	13住	〃 AⅠb	〃	〃	3本一組の櫛歯状工具による波状沈線文・連続刺突文、横位平行沈線文	〃		
3	13住－2層	〃 BⅠb	口 縁 部	〃	横位平行沈線文、櫛歯状工具による連続刺突文	〃	胎土に斜長石を含む	9－7
4	13住－2層	〃 BⅠd	〃	〃	櫛歯状工具による口縁に沿う沈線文及び横位沈線文、口縁に沿う沈線文（内面）	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	
5	13住－2層	〃 BⅠh	〃	〃	粘土紐貼付文、縦位貼付文、口縁に沿う押圧縄文(LR)、縄文(LR)	〃	突起をもつ平縁	
6	13住－2層	〃 BⅡ1	〃	〃	斜行縄文（RL）・結節文（片結び一順）	ミガキ	突起をもつ平縁 胎土に斜長石を含む	
7	13住	〃 BⅡ6	〃	〃	茸瓦状撚糸文（L）	ナ　デ	胎土に斜長石を含む	
8	13住－2層	〃 BⅡ3	〃	〃	重層末端ループ文（RL）、縄文（LR）	不　明		
9	13住－2層	〃 BⅡ1	〃	〃	斜行縄文（LR）	〃		
10	13住－2層	〃 BⅡ6	〃	〃	茸瓦状撚糸文（L）、縄文（LR）	〃		
11	13住－Pit	〃 BⅡ6	〃	〃	網目状撚糸文（L）	〃	突起をもつ平縁 補修孔あり	
12	13住－2層	〃 BⅡ1	〃	〃	斜行縄文（RL）	ミガキ		
13	13住－2層	〃	胴　部	〃	櫛歯状工具による波状沈線文及び連続刺突文	不　明	胎土に斜長石を含む	
14	13住－2層	〃	胴部～底部	〃	縄文（RL）〔胴部及び底面〕	〃		
15	13住－2層	〃	〃	〃	茸瓦状撚糸文（L）、斜行縄文（LR）〔胴部及び底面〕	ナ　デ		

第26図　第13号住居跡出土土器



No	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内面	備　　考	図版
1	14住一堆積土	深鉢 B Ⅰb	口縁部	含む	3本一組の櫛歯状工具による連続刺突文、山形沈線文、刻目文(口縁上端)	ナデ	波状縁	9－6
2	14住一堆積土	〃 B Ⅰh	〃	〃	縦位貼付文、重層末端ループ文(RL)	〃	波状縁	
3	14住一堆積土	〃 B Ⅰh	〃	〃	縦位貼付文、葛瓦状撚糸文(L)	不明	波状縁	
4	14住一堆積土	〃	胴　部	〃	縄文(RL)	ナデ		
5	14住	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
6	14住	〃	〃	〃	網目状撚糸文(L)	ナデ		
7	14住一堆積土	鉢 A	胴部～底部	〃	横位平行沈線文	〃		7－3

第27図　第14号住居跡出土土器



番号	住居跡	層	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石　材	備　　考
242	13住	2a－2層	篦状石器	61	41	17	珪質頁岩	ステップフラクチュアがめだつ。
1032	13住	2a－2層	磨製石斧	(77)	34	16	凝灰質頁岩	刃部先端に短い線状痕。
1037	13住	2b層	石匙	81	26	9	珪質頁岩	縁辺の剥離に連続性がある。
983	13住	2層	両面加工石器			9	珪質頁岩	斑点状に黒色物質が付着。
1038	13住	2a－2層	磨石		63	46	石英安山岩	4磨面。3面は平坦になるまで磨滅（S.T.）
11	14住	埋土上部	块状耳飾			9	滑石	白ぬきは破損部。線は加工痕を示す。

第28図　第13、14号住居跡出土石器

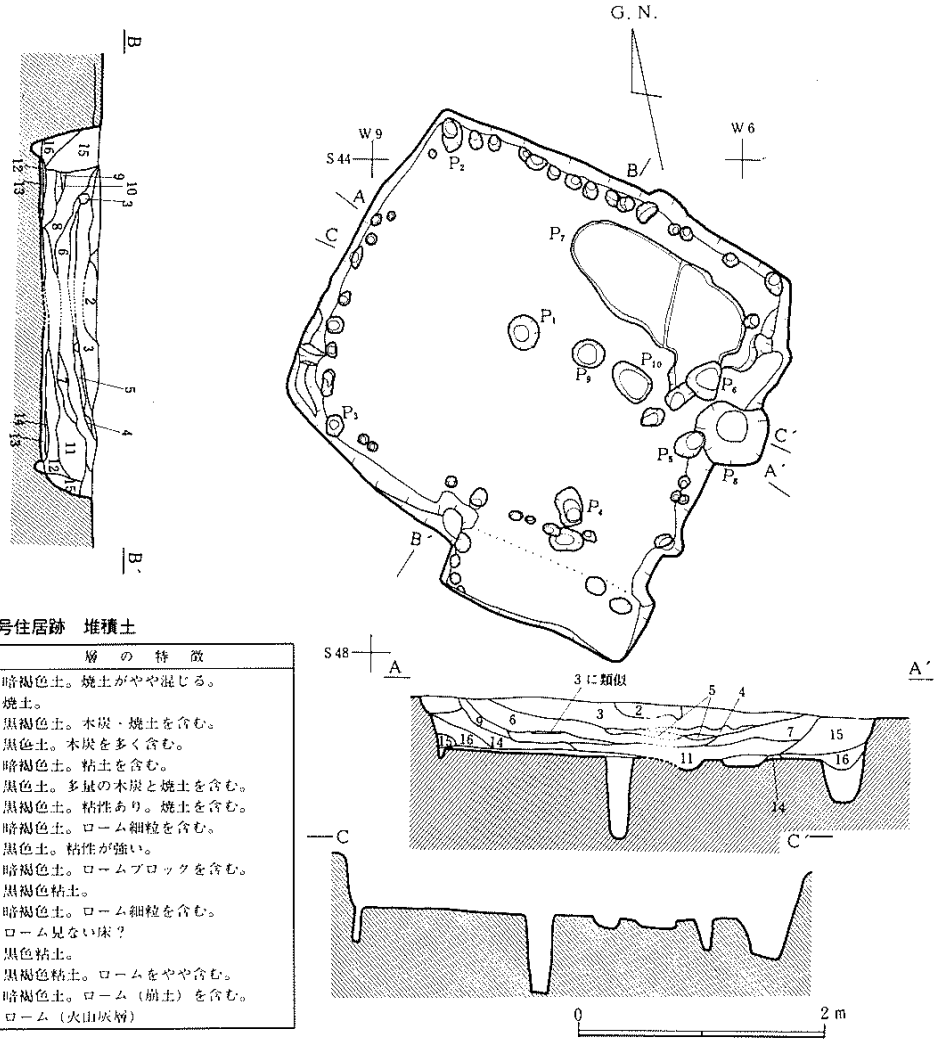
第15号住居跡（第29図）　住居跡第1群の中でも南よりのDM、DNの39区にある。

〈重複〉　住居の南側の張りだし部は隣接する他の遺構の一部である可能性がある。

〈平面形・規模〉　3.4m×3.2mのほぼ長方形を呈する。

〈堆積土〉　自然流入のような堆積状況を示す。上部の1～7は焼土・木炭を含む黒褐色土であり、8層以下にはロームの混入がめだつ。また床面上には薄い黒色粘土層がある。3、6層を中心に多くの土器・石器が出土している。

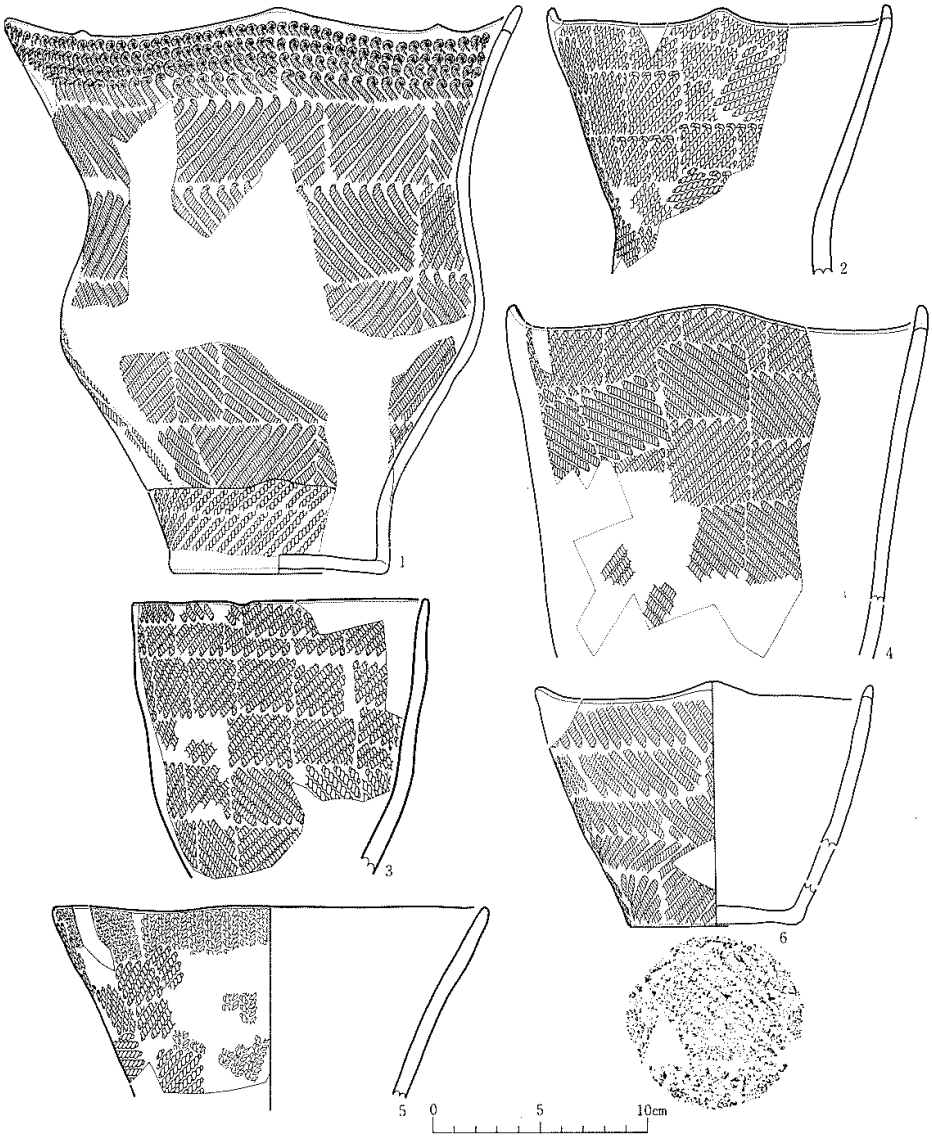
〈壁〉　検出された壁は地山で床面からほぼ垂直に立ちあがる。残存高は北側で40～50cm、南側で30～40cmである。



○15号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	暗褐色土。焼土がやや混じる。
2	焼土。
3	黒褐色土。木炭・焼土を含む。
4	黒色土。木炭を多く含む。
5	暗褐色土。粘土を含む。
6	黒色土。多量の木炭と焼土を含む。
7	黒褐色土。粘性あり。焼土を含む。
8	暗褐色土。ローム細粒を含む。
9	黒色土。粘性が強い。
10	暗褐色土。ロームブロックを含む。
11	黒褐色粘土。
12	暗褐色土。ローム細粒を含む。
13	ローム見ない床？
14	黒色粘土。
15	黒褐色粘土。ロームをやや含む。
16	暗褐色土。ローム（崩土）を含む。
17	ローム（火山灰層）

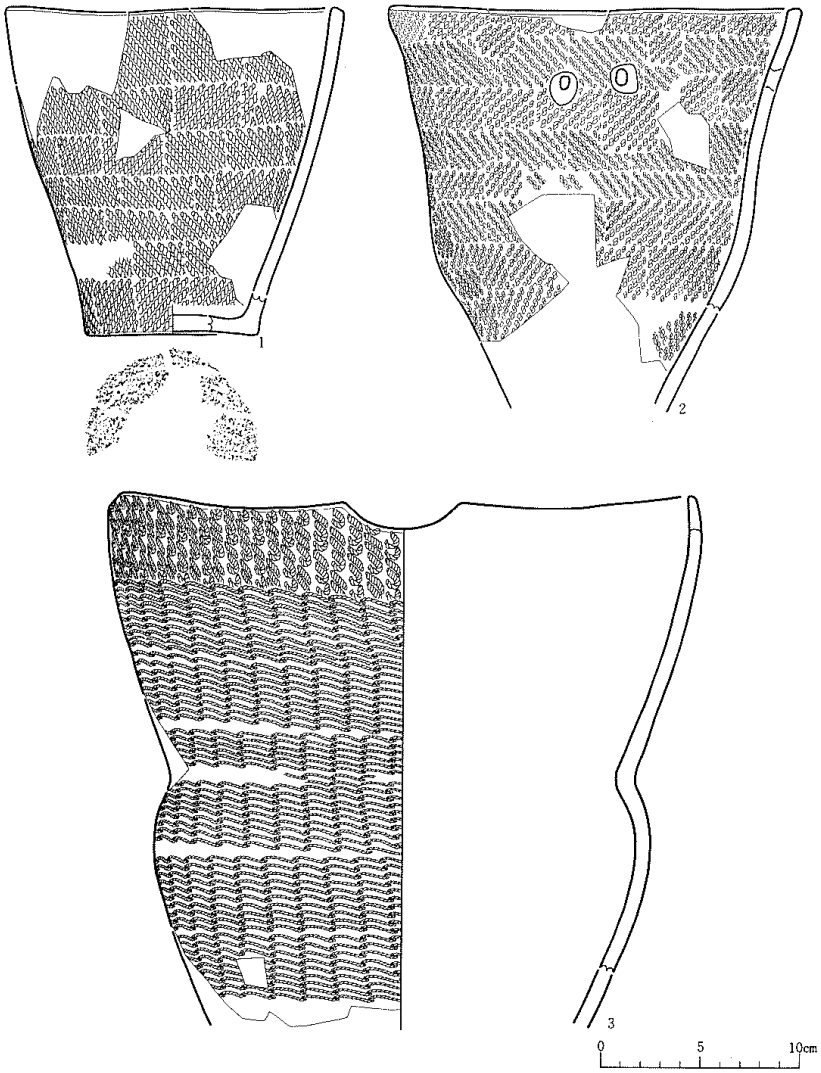
第29図　第15号住居跡



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図版
1	15住－堆積土	深鉢 A Ⅱ3	口縁部～底部	含む	重層末端ループ文(RL)、羽状縄文(RL・LR)(胴部及び底面)	ミガキ	波状縁、結束部のつなぎ目にも縄文(LR)施文	
2	15住－堆積土	〃 B Ⅱ1	口縁部～胴部	〃	斜行縄文(LR)	〃	突起をもつ口縁	6－1
3	15住－6層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
4	15住－3層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明	波状縁	8－5
5	15住－堆積土	〃 B Ⅰ8	〃	〃	組紐回転文(LLLL)、斜行縄文(RL)	ミガキ		5－2
6	15住－2層	鉢 B	口縁部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃	突起をもつ平縁	6－5

第30図　第15号住居跡出土土器　(1)

〈床面〉　やや南東方向に傾く。床面上には生活時の堆積層がみとめられる。
〈柱穴・ピット〉　住居中央には深さ44cmのピット１があり、壁沿いには小ピットが巡る。小



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊　維	外　　面	内　面	備　　考	図　版
1	15住一堆積土	深鉢 BⅡ2	口縁部～底部	含む	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
2	15住一堆積土	〃 BⅡ2	口縁部～胴部	〃	羽状縄文(RLR・LRL)	〃	補修孔あり	5－5
3	15住一堆積土	〃 AⅡ5	〃	〃	片面ループ文(RL)、蕨状燃糸文(R)	ミガキ	波状縁(単頂－2、双頂…2) 胎土に斜長石を含む	7－5

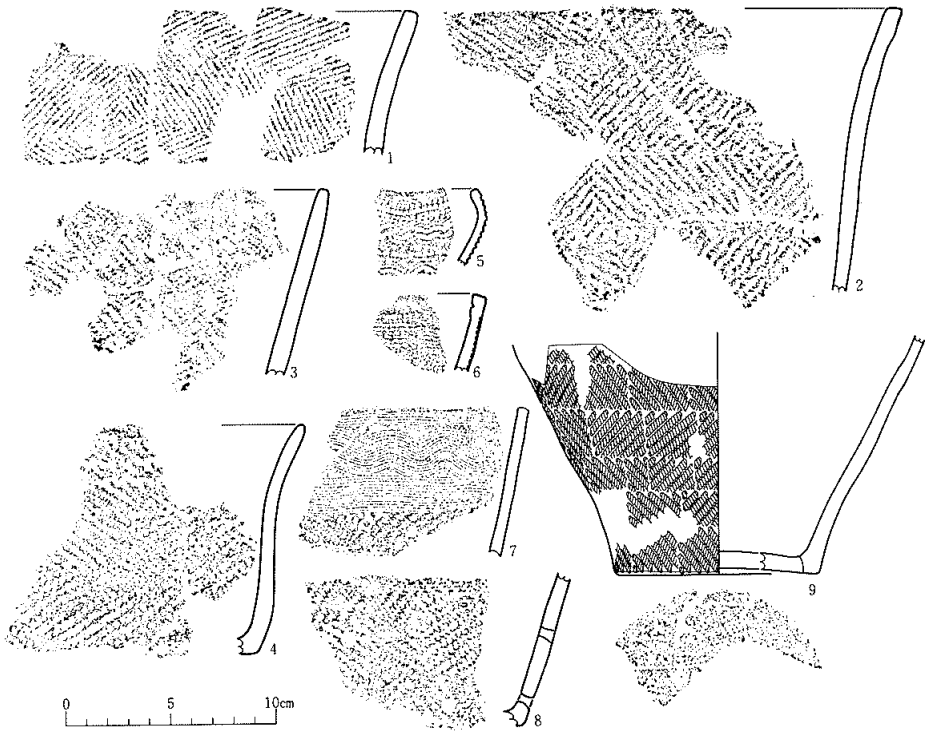
第31図　第15号住居跡出土土器　(2)

ピットの多くは深さが10㎝前後だがピット2、3、4、5、6は30㎝をこえる。住居内東側には深さ10㎝程の浅い落ちこみがある（ピット7）。底面には薄い黒色土があり、その上にロームが貼られているようである。南東辺に接して円形のピット8がある。床面からの深さは33㎝で底面は平坦である。ピット7、9、10は堆積土13層の下にあり、住居より古いものである。

第16号住居跡（第34・35図）住居跡第1群の中でも西よりのＤＪ、ＤＫの38区にある。

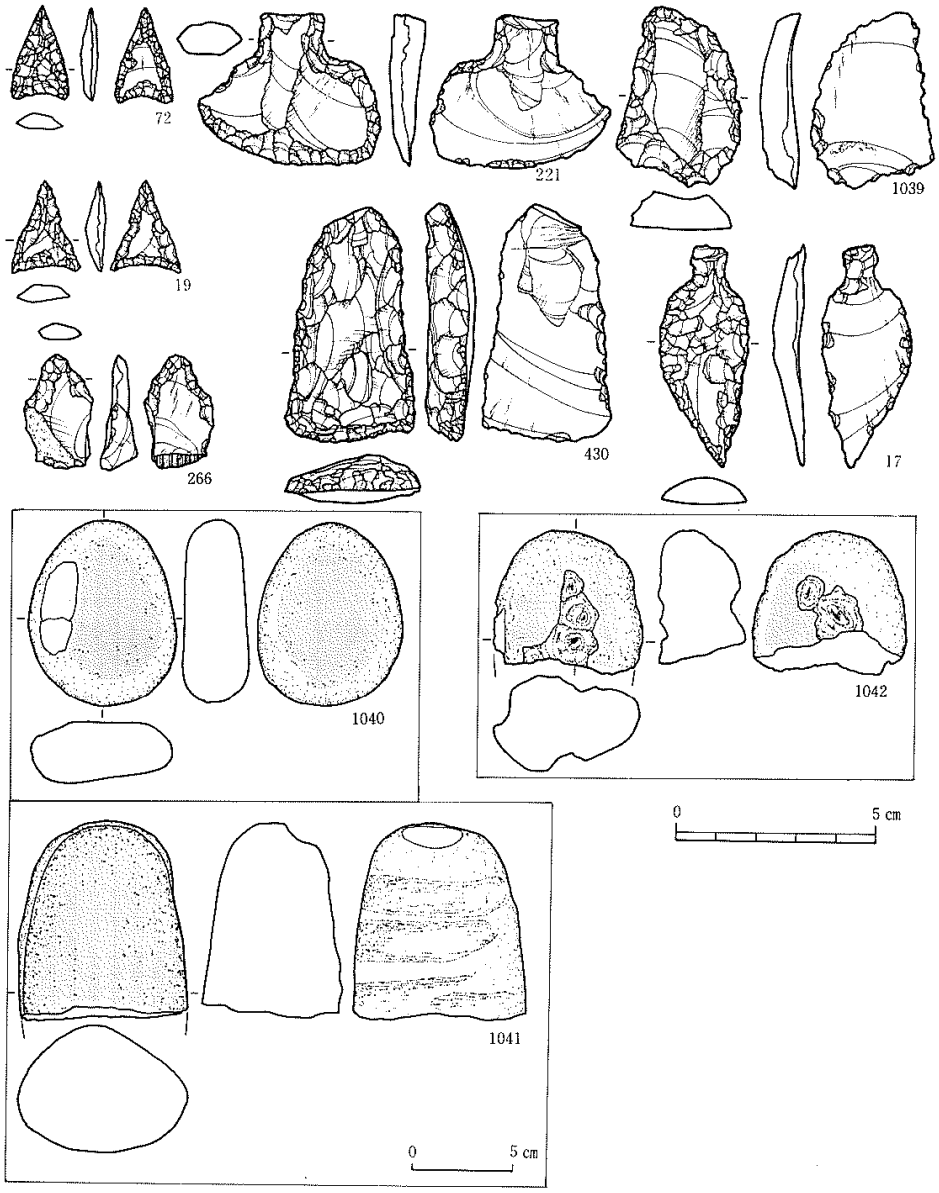
〈重複〉　第1号方形周溝墓・第27号住居跡と重複する。第27号住居跡との新旧は不明だが、方形周溝墓に切られる。

〈平面形・規模〉方形周溝墓の周溝に北辺を破壊されているが、東西軸2.5ｍのやや歪んだ



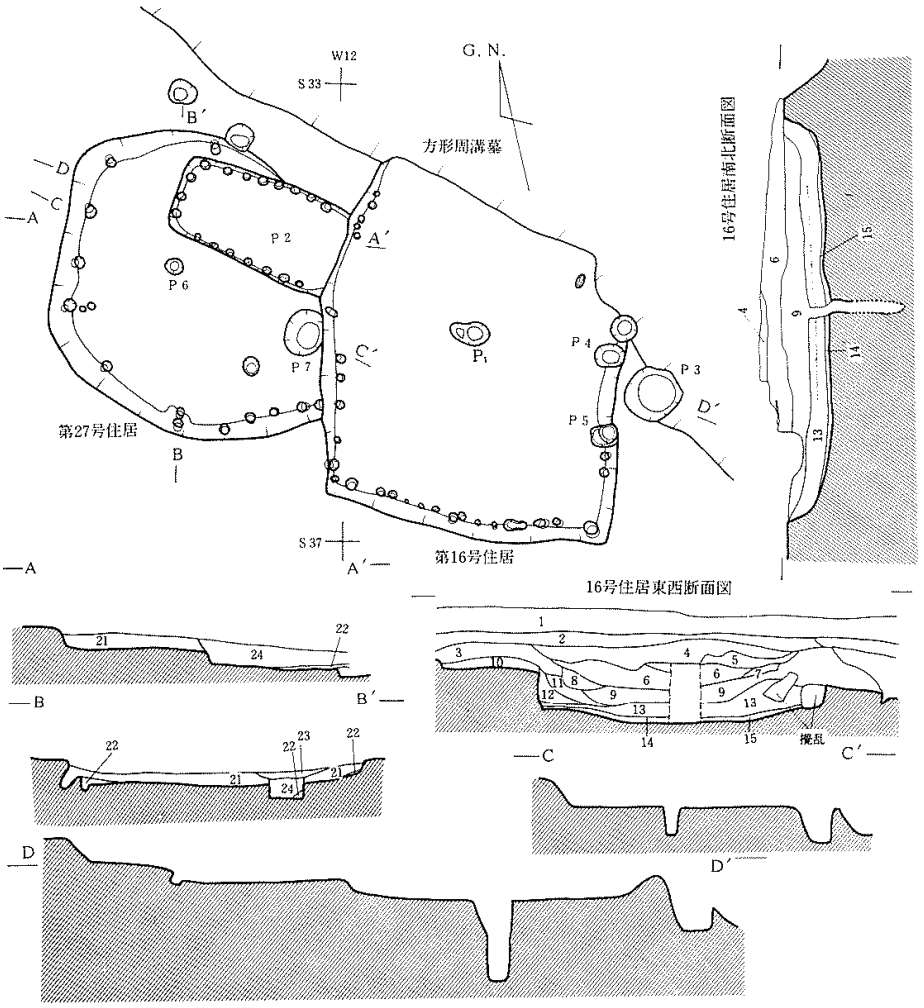
No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊　維	外　　面	内　面	備　　考	図　版
1	15住－堆積土	深鉢 ＢⅡ2	口 縁 部	含む	羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)	ナデ		
2	15住－堆積土	〃 ＢⅡ2	口縁部～胴部	〃	羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)	〃		
3	15住－5層	〃 ＢⅡ2	口 縁 部	〃	羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)	不明		
4	15住－堆積土	鉢 Ｂ	口縁部～胴部	〃	重層末端ループ文(ＲＬ)，縄文(ＬＲＬ)	ナデ		
5	15住－2層	深鉢 Ｂⅰb	口 縁 部	〃	櫛歯状工具による波状沈線文・連続刺突文	ミガキ	波状縁 胎土に斜長石を含む	
6	15住－堆積土	〃 Ｂⅰf	〃	〃	櫛歯状工具による連続刺突文、短沈線文〔突起内面〕	〃	突起をもつ平縁 胎土に斜長石を含む	
7	15住－堆積土	〃	胴　部	〃	櫛歯状工具による横位沈線文・波状沈線文，羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)	ナデ		
8	15住－堆積土	〃	〃	〃	羽状縄文(ＲＬＲ・ＬＲＬ)	ミガキ	2対の補修孔あり	
9	15住	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)〔胴部及び底面〕	〃		

第32図　第15号住居跡出土土器　（3）



番号	住居跡	層	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	備考
72	15住	2a層	石鏃	23.20	14.00	4.2	珪質頁岩	
221	15住	埋土	石匙	45	39	9	珪化凝灰岩	連続する平坦剥離。
1039	15住	2a層	不定形石器	45	30	10	珪質頁岩	黒色物質の付着
19	15住	2a層	石鏃	23	18	5	珪質頁岩	
430	15住	2層	剥片石器	59	32	11	珪質頁岩	
17	15住	2a層	石匙	56	22	8	珪質頁岩	先端磨滅(S.T.)、二重パティナあり(S.T.)
266	15住	2a層	不定形石器、石錐?	29	17	9	珪化凝灰岩	基部に節理面(スクリーン・トーン)
1040	15住		磨石	92	74	34	石英安山岩	2磨面(スクリーン・トーン)、白ぬきは剥落。
1042	15住	埋土	磨凹石		74	48	石英安山岩	2磨面(スクリーン・トーンで示す部分)
1041	15住		磨石	10	84	64	石英安山岩	1磨面(S.T.)だが表面もゆるい凹凸あり。

第33図　第15号住居跡　出土石器



○第16号住居跡　堆積土

No.	層	特徴
1	表土	暗褐色土。
2		暗褐色土。粘性あり。焼土・縄文土器を含む。
3		暗褐色土。焼土をほとんど含まない。
4	堆積土1層	暗褐色土。比較的軟らかい。焼土・炭・骨片・遺物を含む。
5	堆積土2層	暗褐色土。軟らかい。多量の焼土と遺物を含む。
6	堆積土3層	暗褐色土。4に類似するが焼土多く軟らかい。
7	堆積土4層	暗褐色土。4に類似するが焼土は少ない。
8	堆積土5層	暗褐色土。粘性あり。ローム細粒・炭を含む。
9	堆積土6層	暗褐色土。軟らかく粘性あり。ローム粒・焼土・炭を含む。
10	堆積土7層	暗黄褐色土。粘性が強い。
11	堆積土8層	灰黄褐色土。粘性あり。多量のローム粒と焼土・炭若干を含む。
12	堆積土9層	暗黄褐色土。硬い。ローム粒を含む。
13	堆積土10層	暗褐色土。しまりよし。多量のローム粒そして炭を含む。上部に土器片を含む。
14	堆積土11層	黒褐色土。粘性強い。炭・ローム粒若干含む。
15		ローム(火山灰層)

0　2 m

第34図　第16、27号住居跡　(1)

○27号住居跡　堆積土

№	層	特　　徴
21	27住堆積土	茶褐色粘質土。硬い。木炭・焼土・遺物を含む。
22	27住堆積土	褐色粘質土。やや硬い。ロームをブロック状に含む。
23	27住堆積土	暗褐色粘質土。やや硬い。ロームおよび焼土を含む。
24	P 2 堆積土	暗褐色粘質土。軟らかい。ローム・焼土を多く含む。

第35図　第16.27号住居跡（2）

だ長方形を呈するものと思われる。住居跡に伴うものかは不明だが西壁に接して長方形のピットがある。

〈堆積上〉　大きく2層に分けられる。上部は焼土・炭を多く含む暗褐色土で多量の土器片・石器と骨片を出土している。竪穴の下部あるいは壁ぎわにはロームを多く含む暗黄褐色土が分布する。

〈壁〉　地山（火山灰層）を壁面とする。北辺は不明だが、残存する壁高は東側で約20㎝、南側約30㎝、西側約40㎝である。

〈床面〉　床面は地山である。中央は周辺部より2、3㎝低いがほぼ平坦である。

〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に深さ72㎝のピットがある（ピット1）。柱痕跡はみとめられないが主柱穴と考えられる。南北の断面図をみるとピット1は13層上から掘りこまれているようにみえるが、新しいピットがピット1と重複していることによる。北辺は不明だが住居跡の壁面に沿って径5〜10㎝のピットが巡っており壁柱穴と考えられる。西辺の住居外には長さ1.5m、幅0.8m、深さ20㎝程の長方形のピットがある（ピット2）。ピット2の壁沿いにも深さ10㎝以下の小ピットが並ぶ。ピット2は平面観察から16号住居より新しい可能性が指摘されているが、双方の接する部分に先の小ピットがないことを考えればピット2は住居に伴うものかもしれない。東辺の外にも径約50㎝、深さ50㎝の円形ピットがある（ピット3）。ピット3に対応して東辺には一対のやや深いピットがあり（ピット4、ピット5）、その間には壁柱穴が配されない。東辺の南側にも壁柱穴の欠ける部分がある。

第27号住居跡（第34・35図）　住居跡第1群の中でも面よりのＤＪの37区にある。

〈重複〉　第16号住居跡・長方形ピット（ピット2）と重複し、ピット2に切られる。16住との新旧は不明だがピット2が16住に伴う施設である可能性があり、これが正しければ第27号住居は第16号住居より古いこととなる。

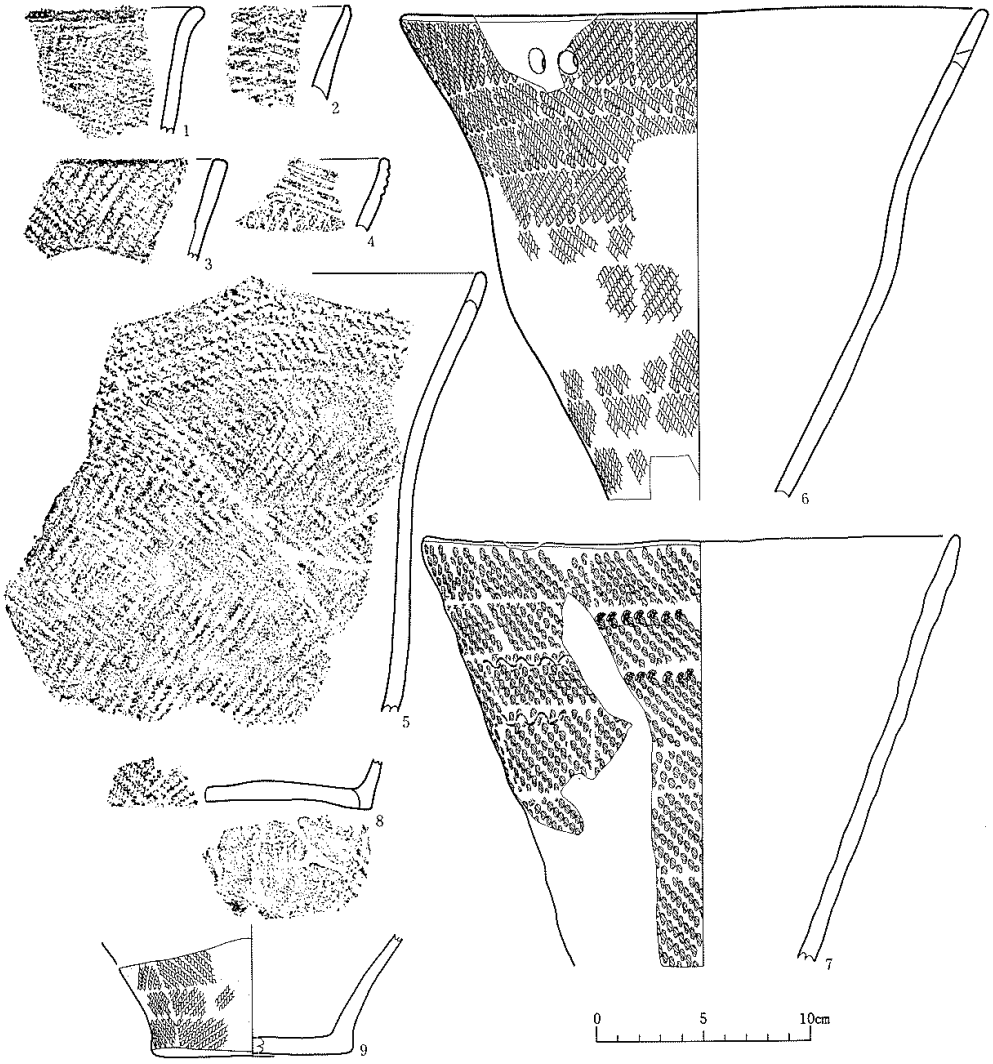
〈平面形・規模〉　第16号住居跡・ピット2との重複によって東側が不明だが、径2.5m程の不整円形となるようである。

〈堆積土〉　3層からなる。遺物はほとんど1層から出土している。

〈壁〉　地山を削って壁とする。残存する壁高は約20㎝である。

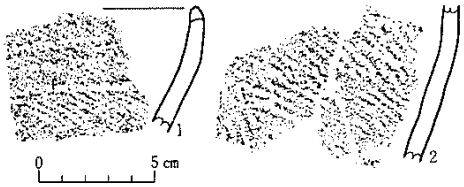
〈床面〉　北側がやや高くなるが、ほぼ平坦である。

〈柱穴・ピット〉　竪穴中央やや西に深さ24㎝のピットがあり（ピット6）主柱穴の可能性がある。壁沿いに14個の浅い小ピットがならび、壁柱穴と思われる。これらのピットはやや内側に傾く傾向がある。竪穴内東側には径40㎝、深さ33㎝の楕円形ピットがある（ピット7）。



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊　維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	16住－2層	深鉢 B Ⅱ2	口 縁 部	含む	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
2	16住－2層	〃 B Ⅱ6	〃	〃	瓦状撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
3	16住－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
4	16住	〃 B Ⅰd	〃	〃	半截竹管による口縁に沿う沈線文、網目状撚糸文(L)	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	
5	16住－2層	〃 B Ⅱ3	口縁部～胴部	〃	重層末端ループ文(RL)、羽状縄文(RL・LR)	不明	波状縁 補修孔あり	8－4
6	16住－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ	補修孔あり	5－6
7	16住－2層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(RLR)	不明		5－3
8	16住－2層	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)	ミガキ		
9	16住－2層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		

第36図　第16号住居跡出土土器



No	出土層位	器形・分類	部位	繊維	外　面	内面	備　考
1	埋 土	深鉢 B Ⅱ 3or 4	口縁部	含む	重層末端ループ文(RL)	ナデ	突起をもつ平縁
2	埋 土	〃	胴部	〃	重層末端ループ文(RL)	〃	

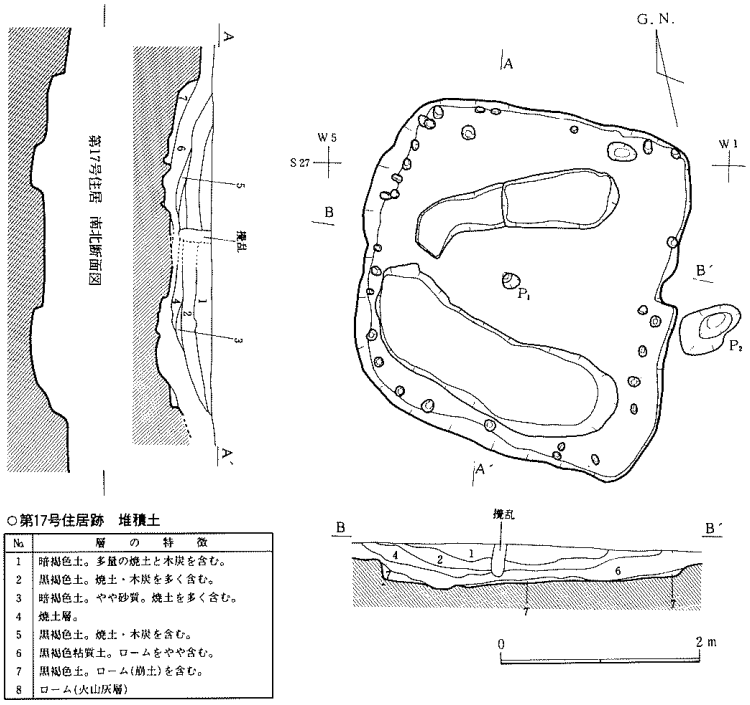
第37図　第27号住居跡出土土器

第 17 号住居跡（第 38 図）　住居跡第 1 群中央のＤＨの 40、41 区にある。30、13、4、7、10 号住居と隣接するが重複はみとめられない。

〈平面形・規模〉　東側にやや開く不整台形状で、大きさは南北軸が 3.4m、東西軸が 3.1m である。東辺南の張りだしは掘りすぎの可能性がある。

〈堆積土〉　上部の 1～5 層は焼土・炭を含み、下部の 6、7 層はロームを含むのを特徴とする。堆積状態は自然流入のようだが、遺物は主に 1、2、3 層から出土している。

〈壁〉　検出された壁は地山であり、残存高は西側で約 20 cm、東側で約 10 cmである。



○第17号住居跡　堆積土

No	層　の　特　徴
1	暗褐色土。多量の焼土と木炭を含む。
2	黒褐色土。焼土・木炭を多く含む。
3	暗褐色土。やや砂質。焼土を多く含む。
4	焼土層。
5	黒褐色土。焼土・木炭を含む。
6	黒褐色粘質土。ロームをやや含む。
7	黒褐色土。ローム(崩土)を含む。
8	ローム(火山灰層)

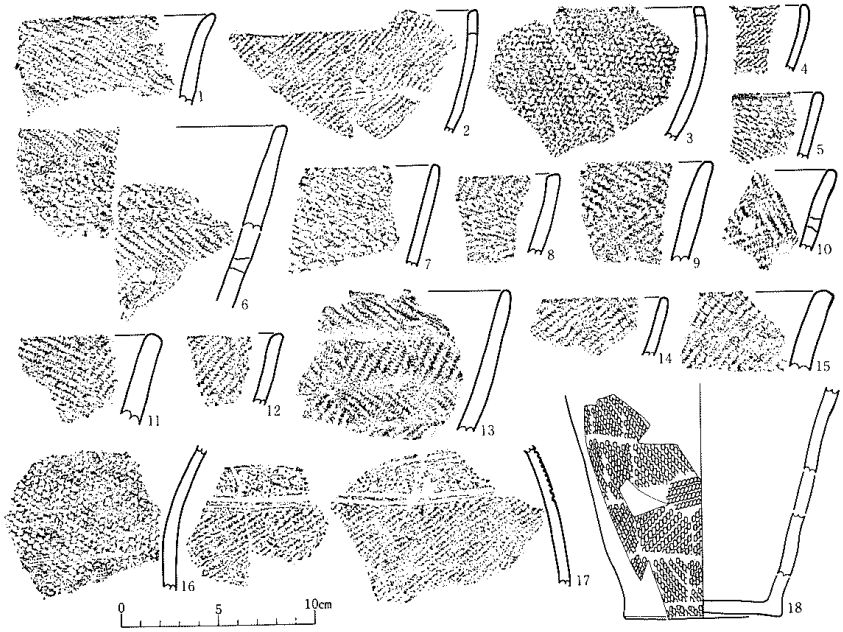
第38図　第17号住居跡

〈床面〉　床面には部分的に生活時の堆積層がある。また床面上には「八」の字形に細長い落ちこみがある。深さは数cmから10㎝であり堆積土は住居の堆積土と類似する。この部分に生活層がないことから住居に伴う可能性も考えられる。

〈柱穴・ピット〉　住居中央に深さ11㎝のピット1がある。また壁沿いに深さ数cmから18㎝の小ピットが並ぶ。東辺外のピット2は深さ31㎝で堆積土は住居堆積土7層に類似する。

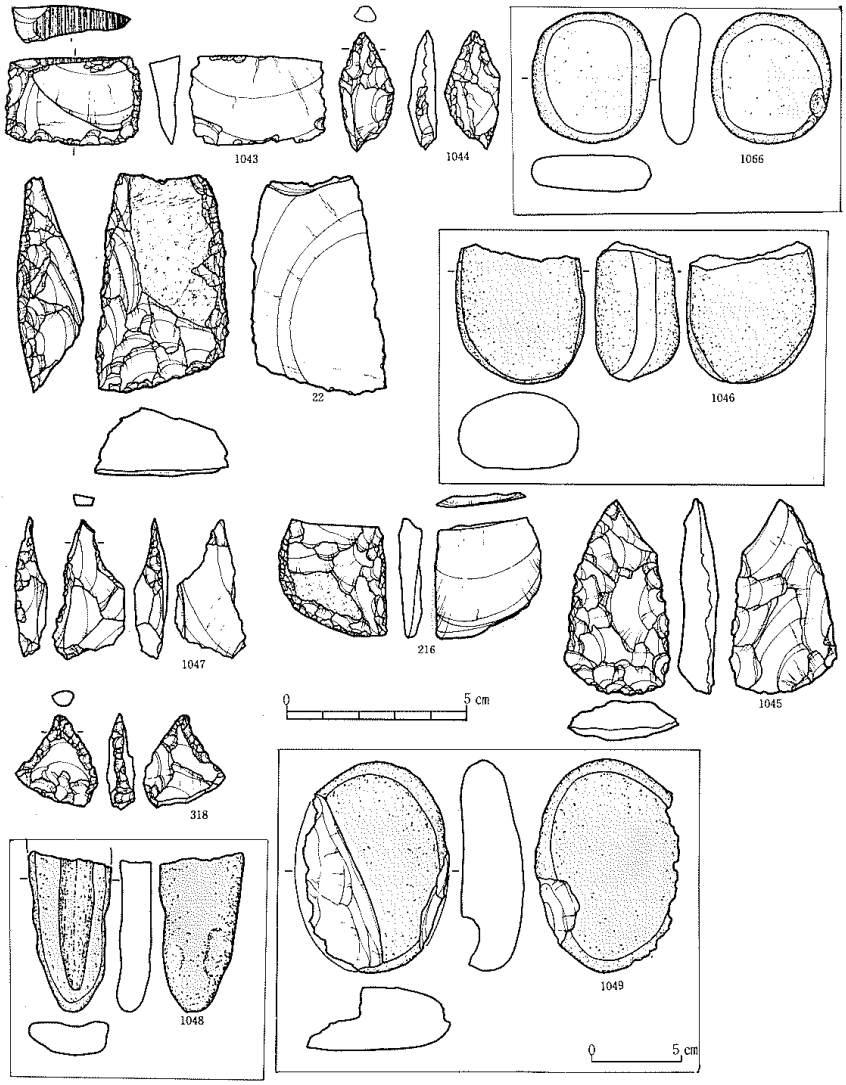
第23A号住居跡（第41図）　住居跡第1群中のＤＧの44・45区に位置する。

〈重複〉　第1号方形周溝墓の周溝に切られる。また第23Ｂ号住居跡と重複関係にあり断面観



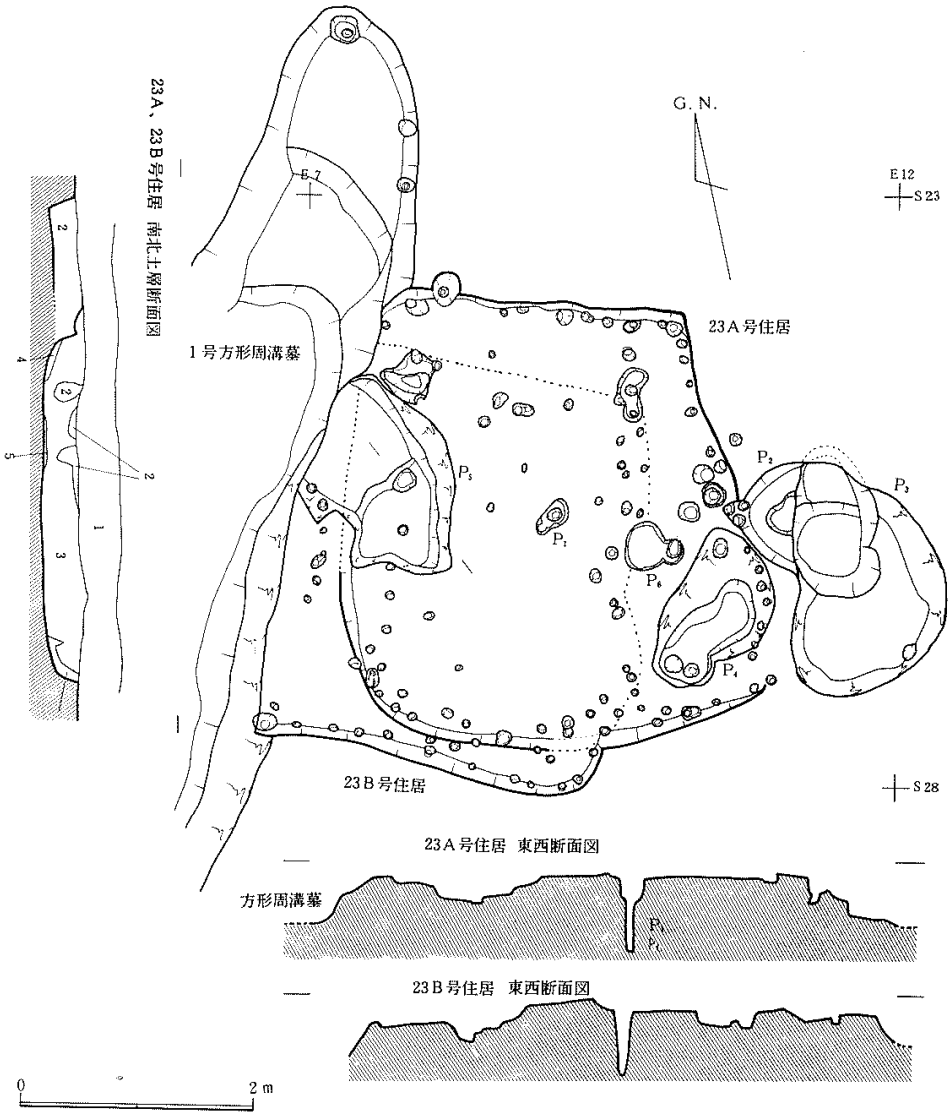
No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	17住－堆積土	深鉢 B Ⅱ1or2	口縁部	含む	縄文(RL)	ナデ		
2	17住－2a層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(LR)	〃	突起をもつ平縁	
3	17住－2b層	〃 B Ⅱ7	〃	〃	組紐回転文(LLLL)	〃	突起をもつ平縁	
4	17住	〃 B Ⅱ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(LR)	ミガキ		
5	17住－2a層	〃 B Ⅱ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	ナデ		
6	17住－2層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、羽状縄文(RL・LR)	ミガキ	補修孔あり	
7	17住－2a層	〃 B Ⅱ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	ナデ		
8	17住－2a層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(LR)	〃		
9	17住－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	不明		
10	17住	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ミガキ	補修孔あり	
11	17住－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
12	17住－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
13	17住－2a層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
14	17住－2a層	〃 B Ⅱ1or2	〃	〃	縄文(LR)	ナデ		
15	17住－堆積土	〃 B Ⅱ1or2	〃	〃	縄文(LR)	ミガキ		
16	17住－堆積土	〃	胴部	〃	縄文(RL)	不明		
17	17住－堆積土	〃	〃	〃	半截竹管による横位沈線文、竹管による円形刺突文、縄文(LR)	ナデ		9－14
18	17住－2b層	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		

第39図　第17号住居跡出土土器



番号	住居跡	層	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石　材	備　考
1043	16住	2 a 層	不定形石器				珪質頁岩	節理を含む折面(スクリーン・トーン)
1044	16住	2 a 層	石　錐	33	15	7	珪化凝灰岩	先端に光沢と磨滅(スクリーン・トーン)
1066	16住	2 層	磨　石	71	65	19		2磨面(S.T.)、縁辺に敲打痕
22	16住	2 a 層	剥片状石器	61	37	19	珪質頁岩	ステップ・フラクチュアがめだつ。
1046	16住	2 a 層	磨　石		67	47		2磨面(スクリーン・トーンで示した部分)
1047	17住	1 層	石　錐	39	21	9	珪質頁岩	
216	17住	2 a 層	不定形石器				珪化凝灰岩	縁辺に弱い光沢と磨滅(スクリーン・トーン)
1045	16住		剥片状石器	55	29	10	珪化凝灰岩	
318	17住	2 a 層	不定形石器				珪化凝灰岩	先端が若干磨滅(スクリーン・トーン)
1048	17住	2 a 層			45	39	石英安山岩	2磨面(S.T.)、表面、溝部に線状痕あり。
1049	17住	2 a 層		117		34	石英安山岩	2磨面(スクリーン・トーン)、焼けている。

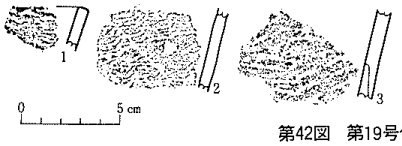
第40図　第16、17号住居跡出土石器



○第23号住居跡　堆積土

No.	層	特　　徴
1	表　土	暗茶褐色土。
2	堆積土1層	茶褐色粘質土。比較的軟らかい。木炭・焼土・遺物を多く含む。
3	堆積土2層	暗褐色粘質土。やや硬い。木炭・焼土・遺物を含む。
4	堆積土3層	暗黄褐色粘質土。3にブロック状のロームが混じるもの。
5	堆積土4層	黒色粘質土。木炭を多く含む。
6		ローム(火山灰層)

第41図　第23A、23B号住居跡

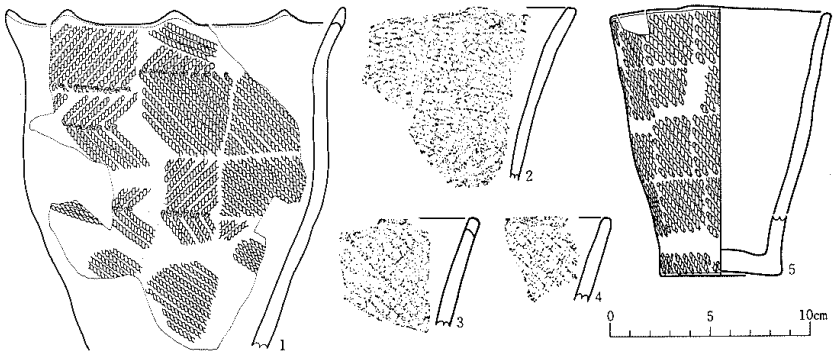


No.	出土層位	器形・分類	部 位	繊維	外 面	内面	備 考
1	2層	深鉢 B Ⅱ6	口縁部	含む	葉瓦状撚糸文(L)	ナデ	
2	2層	〃	胴部	〃	葉瓦状撚糸文(L)	ナデ	
3	1層	〃	〃	〃	木目状撚糸文(R, L)	ナデ	胎土に斜長石を含む

第42図　第19号住居跡出土土器

No.	出土遺構・層位	器形・分類	部 位	繊維	外 面	内面	備 考	図 版
1	23住－堆積土	深鉢 B Ⅰc	口縁部～胴部	含む	半截竹管による口縁に沿う沈線文・刺突文、撚糸文(L)	不明	口縁上端に刻目文 胎土に斜長石を含む	7－1
2	23住－堆積土上部	〃 B Ⅱ6	〃	〃	撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
3	23住－堆積土	〃 B Ⅱ6	〃	〃	木目状撚糸文(R)	ナデ	突起をもつ平縁 胎土に斜長石を含む	
4	23住－堆積土上部	〃 B Ⅱ6	口 縁 部	〃	葉瓦状撚糸文(L)	ナデ	波状縁 胎土に斜長石を含む	
5	23住－堆積土上部	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(R L)・結節文(片結び一順)	不明		
6	23住－２ａ層	〃	胴 部	〃	葉瓦状撚糸文(L)	ナデ	胎土に斜長石を含む	
7	23住－堆積土上部	〃	〃	〃	３本一組の櫛歯状工具による波状線文	〃	胎土に斜長石を含む	
8	23住－堆積土上部	〃	〃	〃	５本一組の櫛歯状工具による横位沈線文・波状沈線文	不明	胎土に斜長石を含む	
9	23住	〃	〃	〃	撚糸文(L)	ナデ		

第43図　第23号住居跡出土土器



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	22住－2a層	深鉢 BⅡ2	口縁部～胴部	含む	結束羽状縄文(RL×LR)	ナデ	突起をもつ平縁	
2	22住－堆積土	〃 BⅡ3	口縁部	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(LR)	ミガキ	波状縁	
3	22住－堆積土	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	〃	突起をもつ平縁	
4	22住－2a層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	〃		
5	22住－2a層	〃 BⅡ1	口縁部～底部	〃	斜行縄文(RL)	ナデ		

第44図　第22号住居跡出土土器

面観察では第23A号住居がふるい。

〈平面形・規模〉　方形周溝墓と第23B号住居跡によって竪穴中央から南東側が破壊されているが、残存する壁面から一辺3.8m程の不整な方形になるものと思われる。

〈堆積土〉　4層からなり、木炭・焼土を多く含む。

〈壁〉　地山の火山灰層を削って壁面とする。南北壁の残存高は10～20cmである。

〈床面〉　残存する床面は東側がやや下がるがほぼ平坦である。

〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に深さ65cmのピット1があり主柱穴と考えられる。壁沿いに浅い小ピットが連続しており壁柱穴と思われる。住居の東西にはピット2～ピット5の不整形のピットがある。ピット2はピット3によって切られるが本来は円形で住居に伴うものと思われる。ピット3、ピット4、ピット5は住居より新しいものと思われる。

第23B号住居跡（第41図）　住居跡第1群中のDGの45区に位置する。

〈重複〉　西側にある第1号方形周溝墓に切られる。また第23A号住居とも重複しており断面図によれば23B住の方が新しい。

〈平面形・規模〉　竪穴の西辺は方形周溝墓の周溝に破壊されて不明である。また北東部は23A住の堆積土中に掘りこまれていて十分な確認ができていない。推定では一辺3.4mの方形に近くなるものと思われる。

〈堆積土〉　4層からなり木炭・焼土を多く含む。

〈壁〉　地山を削り出して壁面とする。残存する南側で壁高は10～20cmである。

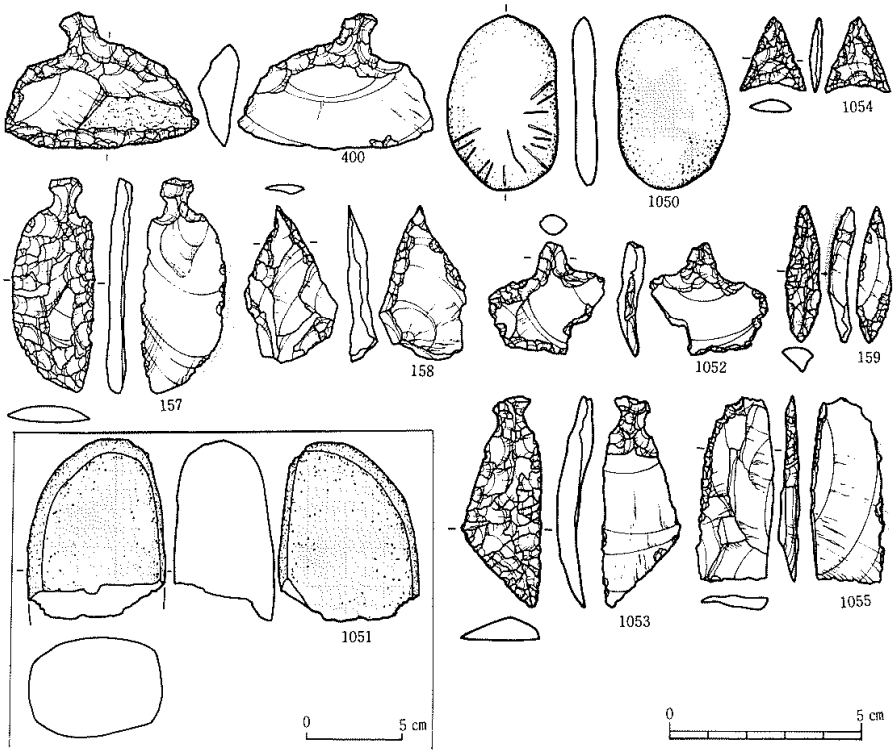
〈床面〉　ほぼ平坦である。

〈柱穴・ピット〉　破壊された西辺は不明だが、壁に沿って浅い小ピットが並ぶ。ただし、北・東側のピットは配列が不規則である。竪穴中央には他の住居にあるような主柱穴が確認されていない。ピット６の円形ピットはその位置から住居に伴う可能性があるが、ピット３～ピット５と住居との関係は不明である。

第24号住居跡（第46図）　住居跡第１群中のＤＩ、ＤＪの43、44区に位置する。

〈平面形・規模〉　東側に向かってやや開き西辺が外に張りだす不整台形である。大きさは南北が最大部で4m、東西は3.7mである。

〈堆積土〉堆積土の上部は焼土・炭化物・遺物を含む暗褐色土で、下部はロームを含む明褐



番号	住居跡	層	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	備考
400	20住	埋土	石匙	50	35	10	珪化凝灰岩	基部に自然面
1050	22住	埋土	線刻礫				凝灰質頁岩	赤色物質付着(スクリーン・トーンで示す部位)
1054	23住		石鏃	19	17	3	珪質頁岩	
157	23住(西)	埋土上部		56	21	5	珪化凝灰岩	縁辺に光沢と磨滅(スクリーン・トーン)
158	23住(西)	埋土上部	石錐?				碧玉	
1052	23住	2a層	石錐?	30	31	6	凝灰質頁岩	先端が自然面
159	23住(西)	埋土上部	磨石	35	10	6	珪化凝灰岩	先端と縁辺に弱い光沢と磨滅(スクリーン・トーン)
1051	23住(西)	埋土	磨石		72	53	石英安山岩	2磨面(スクリーン・トーン)
1053	23住	2a層	石匙	55	21	7	珪質頁岩	
1055	23住		不定形石器	48	19	5	珪質頁岩	縁辺に弱い光沢と磨滅

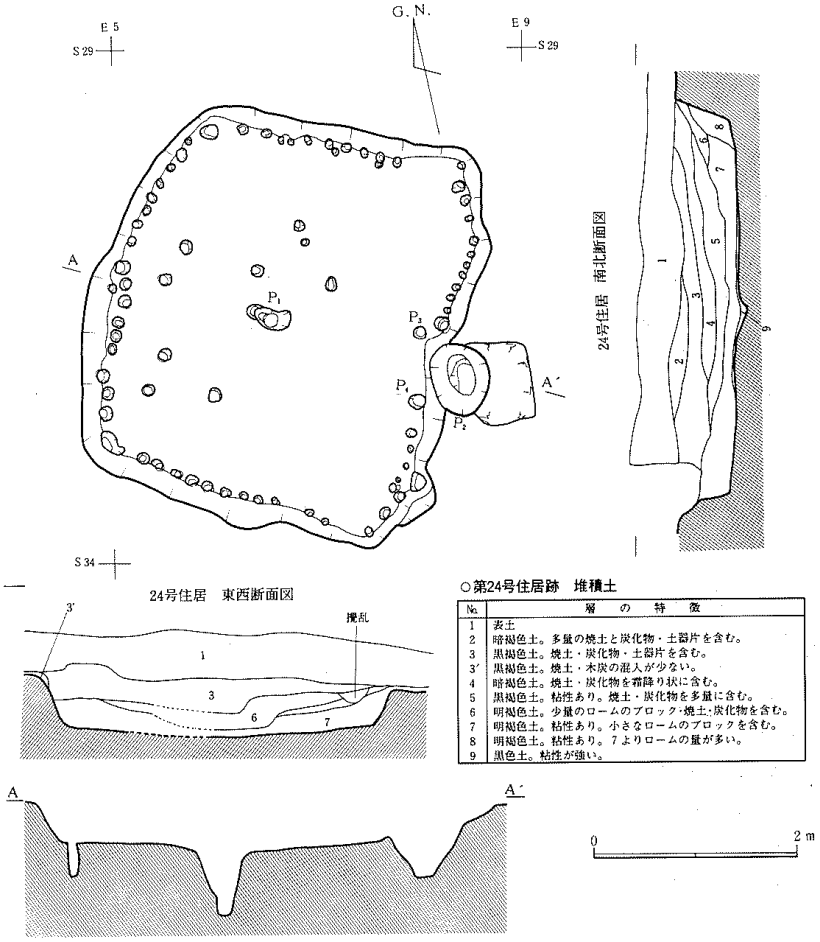
第45図　第20、22、23号住居跡出土石器

色土である。また床面上には粘性のある薄い黒色土層がある。

〈壁〉　検出された壁は地山で床面から急角度で立ちあがる。残存高は約40㎝である。

〈床面〉　微視的には平坦だが住居中央に比べて壁ぎわが数㎝高くなる。

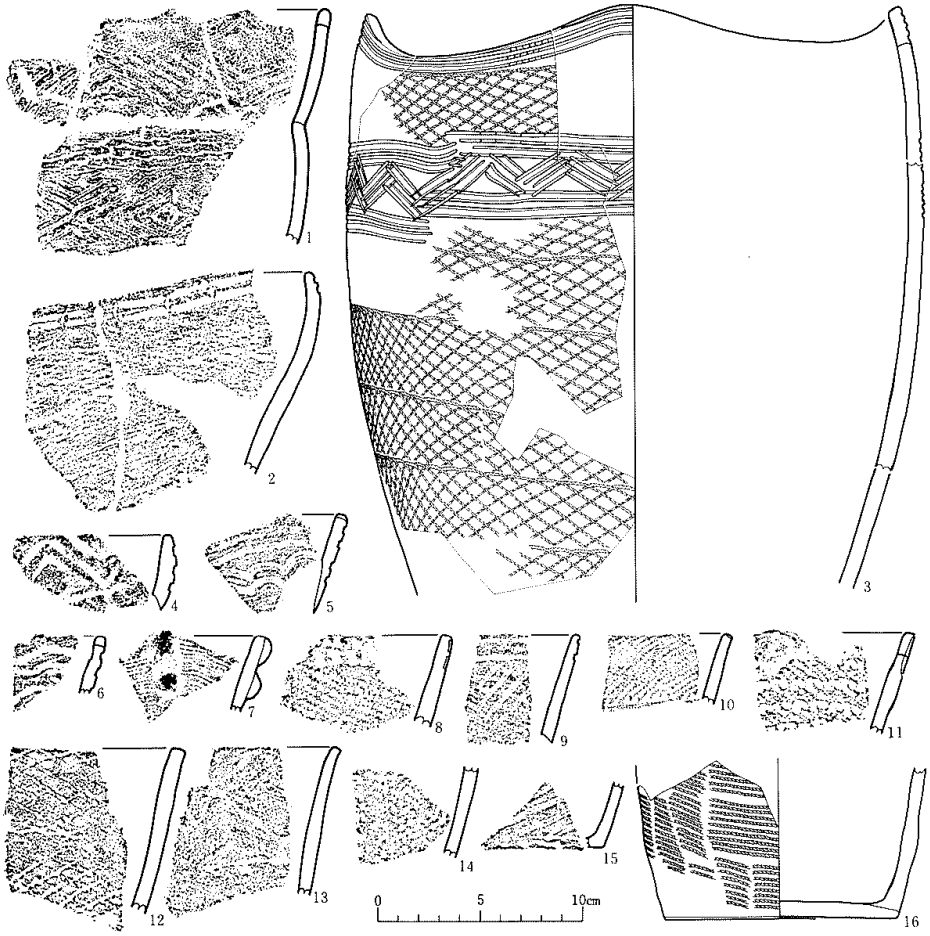
〈柱穴・ピット〉　住居中央には深さ61㎝のピット1がある。また壁に沿って深さ数㎝から十数㎝の小ピットがびっしりと巡る。これらは主柱穴と壁柱穴と考えられる。北・東・南の各辺の一部にはこの壁柱穴を欠く部分がある。またピット1には重複がみられることから同一プラ



○第24号住居跡　堆積土

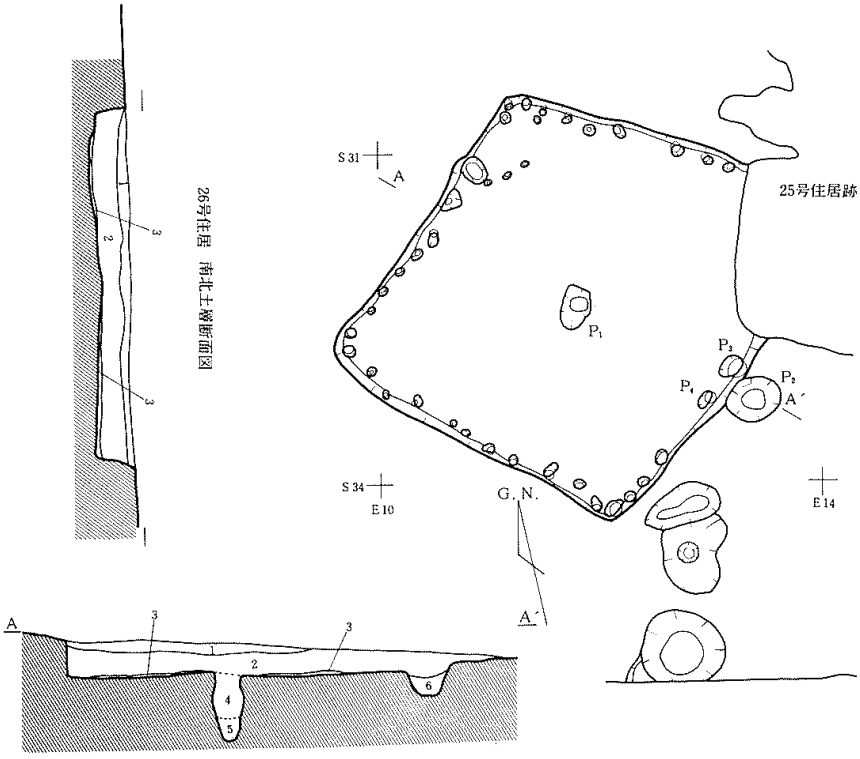
No.	層の特徴
1	表土
2	暗褐色土。多量の焼土と炭化物・土器片を含む。
3	黒褐色土。焼土・炭化物・土器片を含む。
3′	黒褐色土。焼土・木炭の混入が少ない。
4	暗褐色土。焼土・炭化物を霜降り状に含む。
5	黒褐色土。粘性あり。焼土・炭化物を多量に含む。
6	明褐色土。少量のロームのブロック・焼土・炭化物を含む。
7	明褐色土。粘性あり。小さなロームのブロックを含む。
8	明褐色土。粘性あり。7よりロームの量が多い。
9	黒色土。粘性が強い。

第46図　第24号住居跡



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内面	備　考	図　版
1	24住－２ａ層	深鉢 AⅡ6	口縁部～胴部	含む	木目状撚糸文(L)、瓦状撚糸文(L)	ナデ	２個一対の突起をもつ平縁 胎土に斜長石を含む	
2	24住－堆積土上部	〃 BⅠd	口 縁 部	〃	口縁に沿う平行沈線文、刺突文[沈線間]、瓦状撚糸文(L)	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	9－10
3	24住－２ａ層	〃 BⅠa	口縁部～胴部	〃	半截竹管による口縁に沿う沈線文・横位沈線文・山形沈線文、網目状撚糸文(L)	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	8－8
4	24住	〃 BⅠd	口 縁 部	〃	山形沈線文	〃		
5	24住－２ａ層	〃 BⅠa	〃	〃	２本一組の工具による口縁に沿う沈線文・波状沈線文	不明	双頭の波状縁	
6	24住－２ａ層	〃 BⅠd	〃	〃	波状沈線文	ナデ	２個一対の突起をもつ平縁 胎土に斜長石を含む	
7	24住－堆積土上部	〃 BⅠd	〃	〃	円形刺付文、櫛歯状工具による口縁に沿う沈線文・横位沈線文	不明	波状縁	
8	24住	〃 BⅠg	〃	〃	半截竹管による刺突文、縄文(RL)	ナデ		
9	24住	〃 BⅠd	〃	〃	口縁に沿う平行沈線文、撚糸文(L)	不明		
10	24住－２ａ層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(LR)	ナデ	口縁上端に刻目文	
11	24住－堆積土上部	〃 BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	〃		
12	24住－２ａ層	〃 BⅡ6	〃	〃	網目状撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
13	24住－２ａ層	〃 BⅡ6	〃	〃	木目状撚糸文(R、L)	〃		
14	24住－２ａ層	〃	胴　部	〃	組紐回転文(LLLL)	〃		
15	24住	〃	〃	〃	撚糸文(L)	不明	胎土に斜長石を含む	
16	24住－２ａ層	〃	胴部～底部	〃	撚糸文(L)	ナデ		

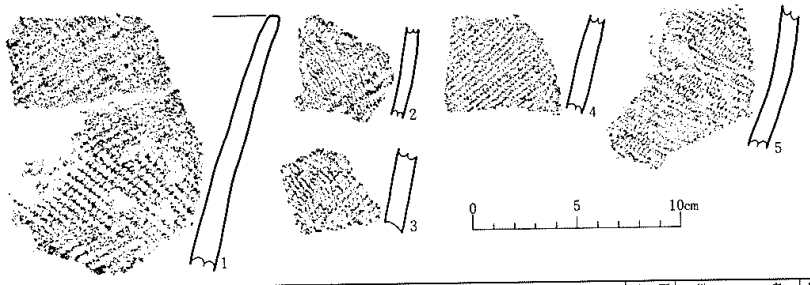
第47図　第24号住居跡出土土器



○第26号住居跡　堆積土

No.	層	特　　徴
1	堆積土1層	暗褐色土。ローム粒・凝灰岩を含む。
2	堆積土2層	褐色土。ローム粒を多量に含む。
3	堆積土3層	黄褐色土。床面直上に分布。炭を多く含む。
4	堆積土4層	暗褐色土。2より明るい。多量のロームと炭を含む。
5	堆積土5層	茶褐色土。4より明るい。少量の炭を含む。
6	堆積土6層	灰褐色土。2に類似。ローム粒を多く含む。
7		ローム(火山灰層)

第48図　第26号住居跡



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内　面	備　　考	図　版
1	26住一床面	深鉢 B II 2	口 縁 部	含む	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
2	16住一床面	〃	胴　部	〃	羽状縄文(RL・LR)			
3	26住一床面	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
4	26住一床面	〃	〃	〃	縄文(LR)	不明		
5	26住一床面	〃	〃	〃	縄文(RL)	ナデ		

第49図　第26号住居跡出土石器

ンでの建てかえの可能性が考えられる。東壁に接してピット2そしてピット3、ピット4がある。ピット2は床面からの深さ37㎝で底面は平坦である。ピット3、4は深さ35、58㎝と深く他の壁柱穴とは性格が異なる。住居内西にも数基のピットがあるが性格は不明である。

第26号住居跡（第48図）　住居跡第1群中のＤＩ、ＤＪの45、46区に位置する。

〈重複〉　古墳時代の第25号住居跡に切られる。

〈平面形・規模〉　東側の一部が25住に破壊されていて不明だが、3.2×3.5㎡程の歪んだ四角形を呈する。各辺はほぼ直線だが南東辺はやや外に張りだす傾向がある。

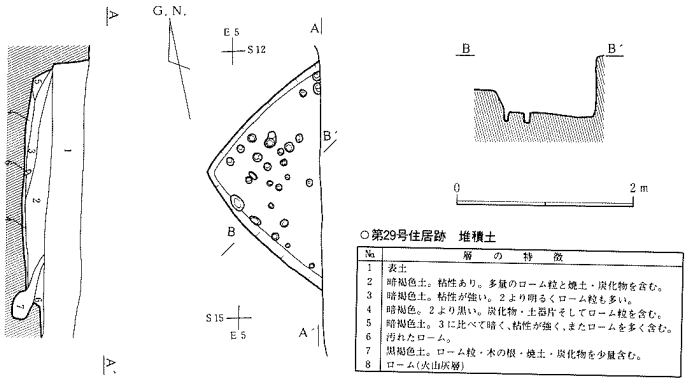
〈堆積土〉　堆積土はローム粒を多く含む。床面直上には炭を多く含む生活時の堆積層がある。

〈壁〉　壁面は地山である。壁高は北・西側で30～40㎝、南側で20～30㎝である。

〈床面〉　竪穴中央に比して、壁ぎわを除く周辺部は2～5㎝低い。また床面には細かい凹凸がある。

〈柱穴・ピット〉　中央に深さ64㎝のピット1があり、壁に沿ってやや内傾する深さ10～20㎝の小ピットが連続する。柱痕跡の識別されたものはないが、配列から主柱穴と壁柱穴になるものと考えられる。南東辺に接して径40㎝、深さ30㎝の楕円形ピットがある（ピット2）。ピット2の堆積土6層は住居の堆積土2層に類似するので住居の機能していた時期には開いていたものと思われる。ピット2に隣接するピット3、ピット4は他の壁柱穴より深く、径が大きい。ピット4の南側には壁柱穴の配置されない部分がある。また、北側の隅には壁から住居内に派生する小ピット列がある。

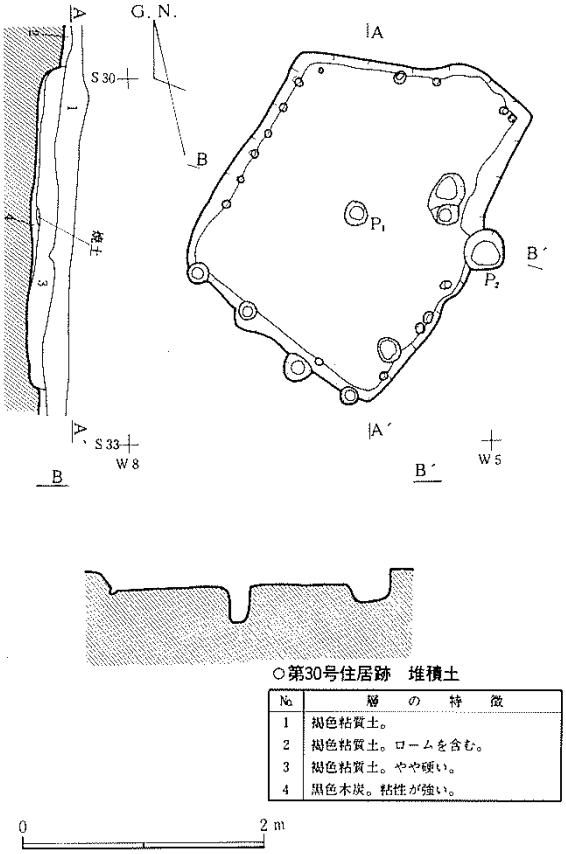
第29号住居跡（第50図）　住居跡第1群北よりのＤＣ43区にあるが、西隅が検出されているだけで大部分は発掘区外にある。他の遺構との重複はみとめられない。



○第29号住居跡　堆積土

No	層の特徴
1	表土
2	暗褐色土。粘性あり。多量のローム粒と焼土・炭化物を含む。
3	暗褐色土。粘性が強い。2より明るくローム粒も多い。
4	暗褐色。2より黒い。炭化物・土器片そしてローム粒を含む。
5	暗褐色土。3に比べて暗く、粘性が強く、またロームを多く含む。
6	汚れたローム。
7	黒褐色土。ローム粒・木の根・焼土・炭化物を少量含む。
8	ローム(火山灰層)

第50図　第29号住居跡



○第30号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	褐色粘質土。
2	褐色粘質土。ロームを含む。
3	褐色粘質土。やや硬い。
4	黒色木炭。粘性が強い。

第51図　第30号住居跡

〈平面形・規模〉四角形になると思われるが詳細は不明である。

〈堆積土〉6 層からなりローム・焼土・炭化物等を含む。

〈壁〉壁は床面から急角度で立ちあがる。残存高は 20～30㎝である。

〈床面〉壁ぎわがやや高くなる傾向がある。

〈柱穴・ピット〉住居内にはコーナーを中心に深さ 10㎝ 内外の小ピット群が不規則に分布する。

第30号住居跡（第51図）住居跡第１群中央よりのＤＩの 39、40 区にある。第7、17、13、31 号住居と隣接するが重複はみとめられない。

〈平面形・規模〉斜面の下手、南東方向にむかって開く不整台形状を呈し、大きさは最大の東辺でも 2.8m である。

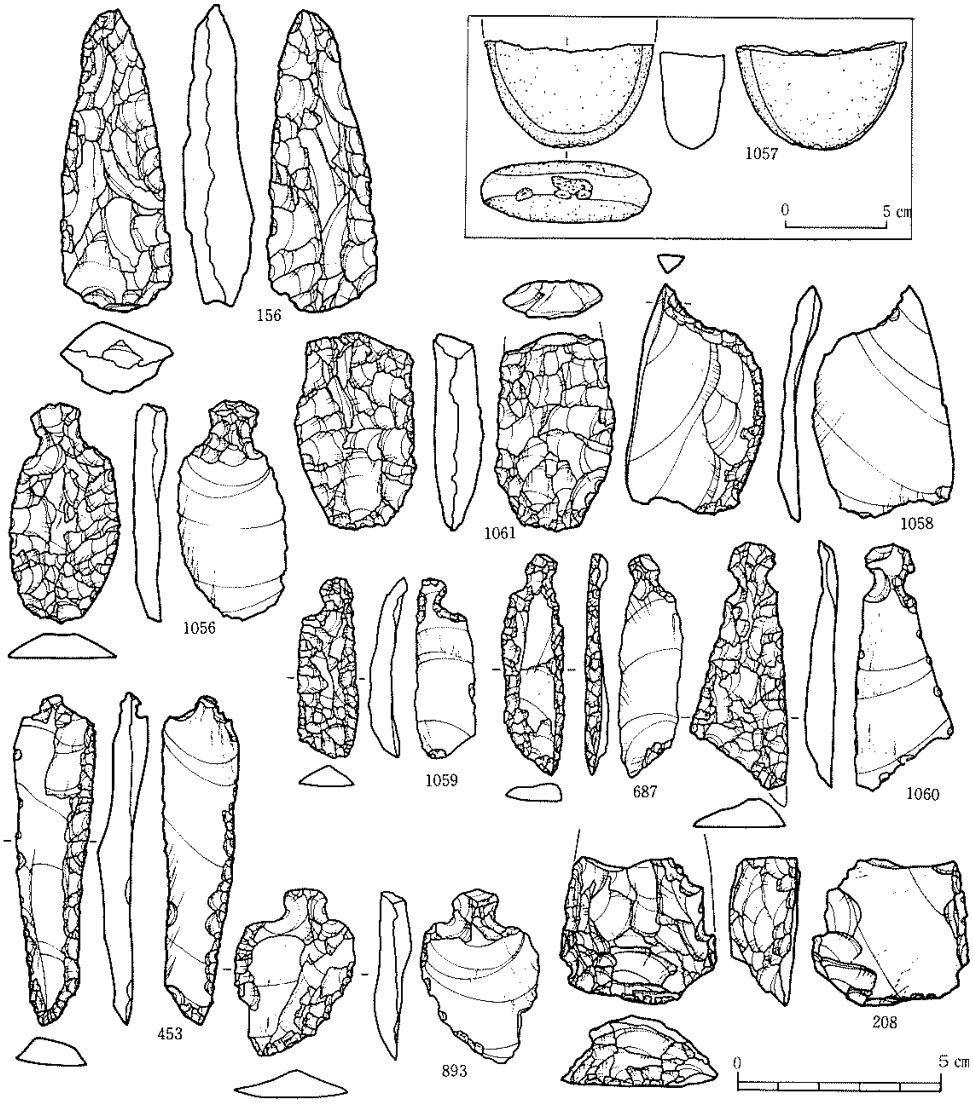
〈壁〉　検出された壁はロームで、残存高は斜面上の北西側で 10～20 ㎝、下の南東側では約 10㎝ である。

〈床面〉　中央は周辺部より数 ㎝ 低い。

〈柱穴・ピット〉竪穴中央に深さ約 30 ㎝のピット１があり主柱穴と考えられる。また壁沿いに深さが 10 ㎝に満たない小ピットが巡る。配列は不規則で北東側にはピットのない部分があり、南西側のピット４基は径が大きい。東壁に接してピット２がある。床面からの深さは 14 ㎝で底面は平らである。

第31Ａ号住居跡（第 53 図）住居跡第１群中のＤＩ、ＤＪの 38、39 区にある。

〈重複〉第１号方形周溝墓の周溝に切られる。また東側で第 31Ｂ号住居跡と重複するが新旧は不明である。



番号	住居跡	層	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石　材	備　考
156	24住	2 a 1～2層	篦状石器？	74	27	18	珪質凝灰岩	先端に古い折断面。
1057	24住	2 a～3層	磨石		61	30	石英安山岩	2磨面(スクリーン・トーン)、一端に敲打痕。
1056	24住	1　層		55	27	8	珪質頁岩	
1061	24住	埋土上部	両面加工尖頭器？		30	13	珪質頁岩	
1058	24住		不定形石器－錐？	58	33	6	珪化凝灰岩	
453	25住	埋土上部	石匙？	82	19	9	珪質頁岩	
1059	26住	埋　土	石匙	45	15	6	珪化凝灰岩	縁辺に弱い光沢と磨滅(スクリーン・トーン)
687	27住	2 a 層	石匙	55	16	5	珪質頁岩	
1060	29住		石匙	(61)	24	8	珪化凝灰岩	縁辺に磨滅(スクリーン・トーンで示す部位)
893	29住	埋　土	石匙	43	30	8	珪質凝灰岩	
208	30住	埋 1 層	篦状石器		39	18	珪質頁岩	赤色物質付着(S.T.)、刃部裏面に著しい磨滅。

第52図　第24、25、26、27、29、30号住居跡出土石器

〈平面形・規模〉　南側が破壊されて不明だが、幾分東に開く方形となるものと思われる。東西軸で約2.8m ある。

〈堆積土〉　堆積土の上部は焼土・木炭を含む暗茶褐色土で遺物を出土している。下部はロームを含むのを特徴とし、床面上には生活時の堆積層と思われる黒褐色土がある。

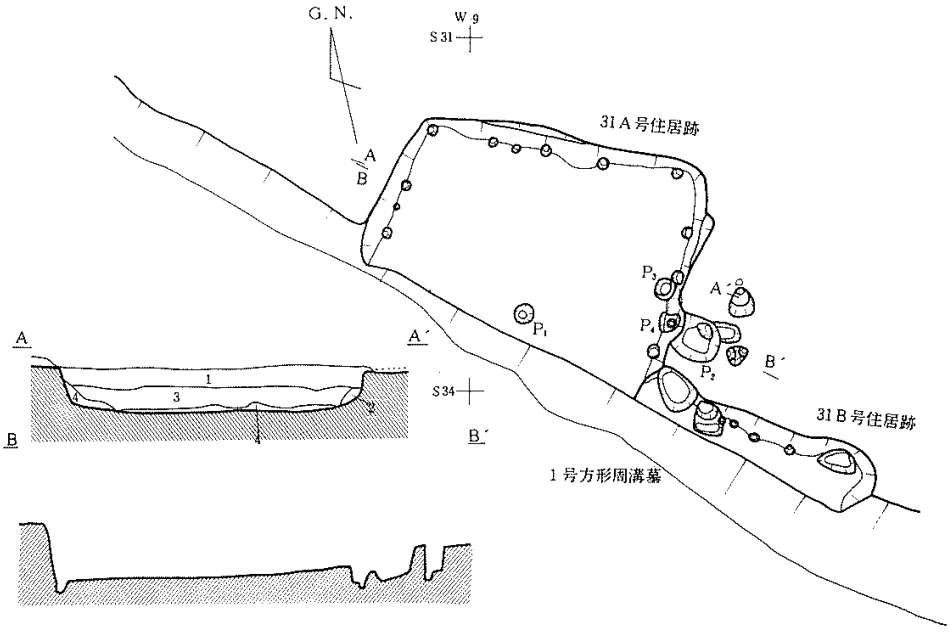
〈壁〉　検出された壁は地山で床面から急角度で立ちあがる。残存高は約30 cmである。

〈床面〉　ほぼ平坦だが、中央より壁ぎわが若干高くなっている。

〈柱穴・ピット〉　竪穴中央に深さ72 cmのピット1があり、配置から主柱穴と考えられる。壁沿いには深さ10 cm内外の小ピットが巡る。住居の東壁に接するかたちでピット2がある。深さ約30 cmで底面は平坦だが小ピットがある。ピット3、ピット4はトンネル状につながるようだが人為的なものかわからない。

第31B号住居跡（第53図）住居跡第1群中のＤＪ39区にあり、30、13号住居と隣接する。

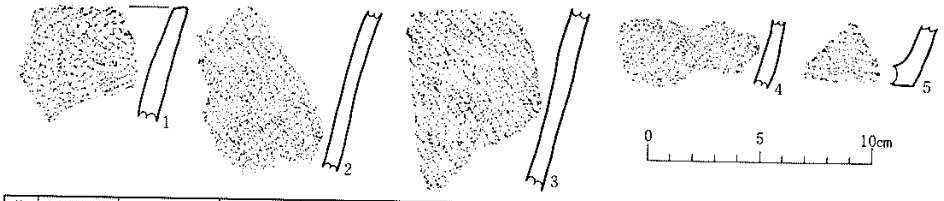
〈重複〉第1号方形周溝墓に切られる。また、第31A号住居跡と重複するが新旧は不明である。



○第31号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	暗茶褐色粘質土。焼土・木炭・遺物を含む。
2	茶褐色粘質土。ロームを含む。
3	黒茶褐色粘質土。軟らかい。ローム粒と少量の木炭を含む。
4	黒褐色粘質土。ローム・木炭を僅かに含む。
5	ローム（火山灰層）

第53図　第31Ａ、31Ｂ号住居跡



No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	31住	深鉢 BⅡ2	口縁部	含む	結束羽状縄文(RL×LR)・結節文(片結び一順)	ナデ		
2	31住－1層	〃	胴部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
3	31住－1層	〃	〃	〃	斜行縄文(RL)	〃	胎土に斜長石を含む	
4	31住－1層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
5	31住－1層	〃	胴部～底部	〃	縄文(RL)	〃		

第54図　第31号住居跡出土土器

〈平面形・規模〉　第1号方形周溝墓の周溝によってほとんど破壊されている。北辺部が2.2m程残っており31A住と同様の方形になるものと思われる。

〈壁〉　残存する壁高は約20cmである。

〈床面〉　ほぼ平坦だが、部分的に残るのみなので詳細は不明である。

〈柱穴・ピット〉壁沿いに深さ10cm内外のピットが6個みとめられる。

第32号住居跡　（第55図）住居跡第1群中でも西側のＤＤ、ＤＥの37区にある。

〈重複〉　第1号方形周溝墓の周溝に南側を若干破壊される。

〈平面形・規模〉　直径2.5～2.8mの不整円形を呈する。

〈堆積土〉　堆積土の上部には焼土層、あるいは焼土・炭を含む層があり、下部にはローム粒がまじる。床面上には薄い灰黒褐色粘質土層がある。

〈壁〉　検出された壁は地山で残存高は10～20cmである。

〈床面〉　床面は堅く直上に黒褐色の粘土層があるため検出は容易であった。住居の東西の壁ぎわには長さ1m、幅40cm位の段状の部分があり、床面より10cm程高くなっている。また、床面中央には炭の集中する部分がある。

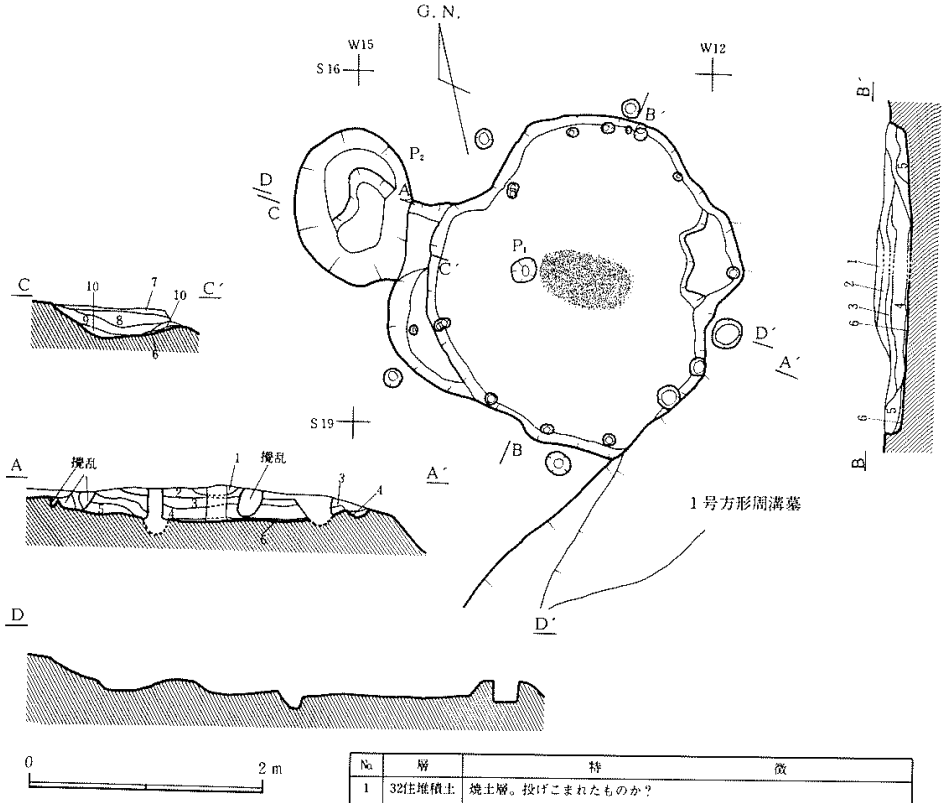
〈柱穴・ピット〉　住居内には壁沿いにまばらに並ぶ小ピットがある。これらは深さ数cmで堆積土はロームを含む暗褐色粘質土である。ピット1は堆積土上から掘りこまれており住居より新しい。住居外には深さ10cm内外の小ピットが5個規則的に並び、北西部には大形のピット2がある。ピット2の堆積土の組成は住居の堆積土と類似するが32号住居との関係は不明である。

第33号住居跡（第57図）　住居跡第1群内のＤＪ、ＤＫの41、42区に位置する。

〈重複〉　第1号方形周溝墓の周溝に切られる。

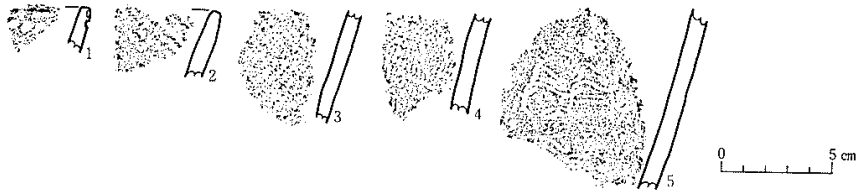
〈平面形・規模〉　中央が方形周溝墓に破壊されていて詳細は不明だが、南側に開く不整台形状で南北が3.7m、東西が3m程になるものと思われる。

〈堆積土〉　4層からなり崩落土と思われるロームを含む。



No.	層	特	徴
1	32住堆積土	焼土層。投げこまれたものか？	
2	32住堆積土	暗褐色土。しまりよし。焼土・炭・土器片を含む。	
3	32住堆積土	暗褐色土。2に比べて黄味を帯び、粘性あり。焼土は少ない。	
4	32住堆積土	暗黄褐色土。粘性強くしまりあり。焼土・炭を少量含む。	
5	32住堆積土	暗黄褐色土。4より黄味強く、粘性あり。ローム粒を多く含む。	
6	32住堆積土	灰黒褐色粘質土。極めて粘性が強い。住居中央部に濃密に炭を含む。	
7	P 2堆積土	暗褐色土。微量の焼土・炭を含む。	
8	P 2堆積土	暗黄褐色土。7より黄味強く粘性あり。	
9	P 2堆積土	黒褐色土。粘性あり。細礫を含む。	
10	P 2堆積土	暗黄色土。ロームを含み粘性が強い。	
11	地山	ローム(大山灰層)	

第55図　第32号住居跡

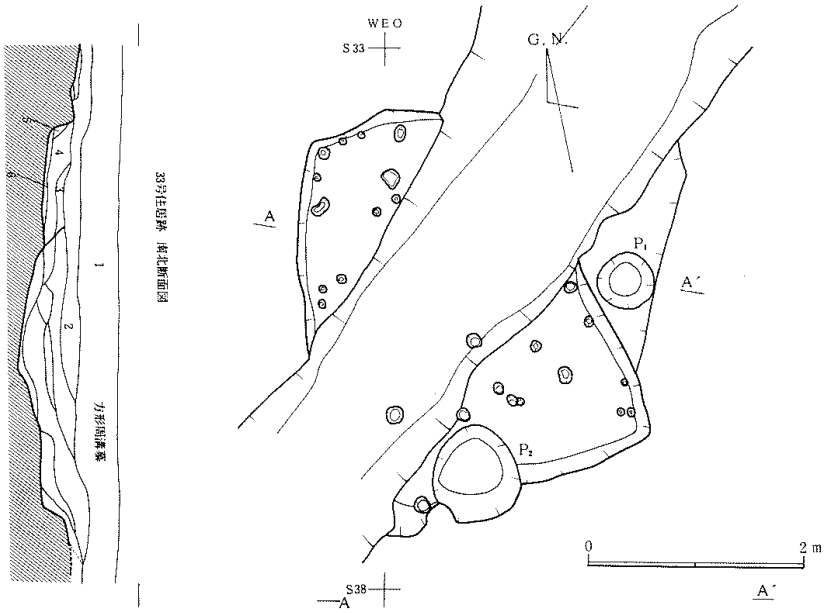


No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	32住	深鉢 B Ⅰg	口 縁 部	含む	口縁に沿う刺突文	不 明		
2	32住	〃　B Ⅱ1or2	〃	〃	縄文(RL)	ナ デ	突起をもつ平縁	
3	32住	〃	胴　部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
4	32住	〃	〃	〃	縄文(RL)	〃		
5	32住	〃	〃	〃	S字状沈文	〃	繊維の混入少ない	

第56図　第32号住居跡出土土器

〈壁〉　検出された壁は地山で残存高は10～20㎝である。
〈床面〉　北側が南側に比べて低いがやや掘りすぎの感がある。
〈柱穴・ピット〉　住居内に深さ10㎝内外の小ピットが不規則に分布していて、主柱穴・壁柱穴は判然としない。大型のピット1、2と住居との関係は不明である。

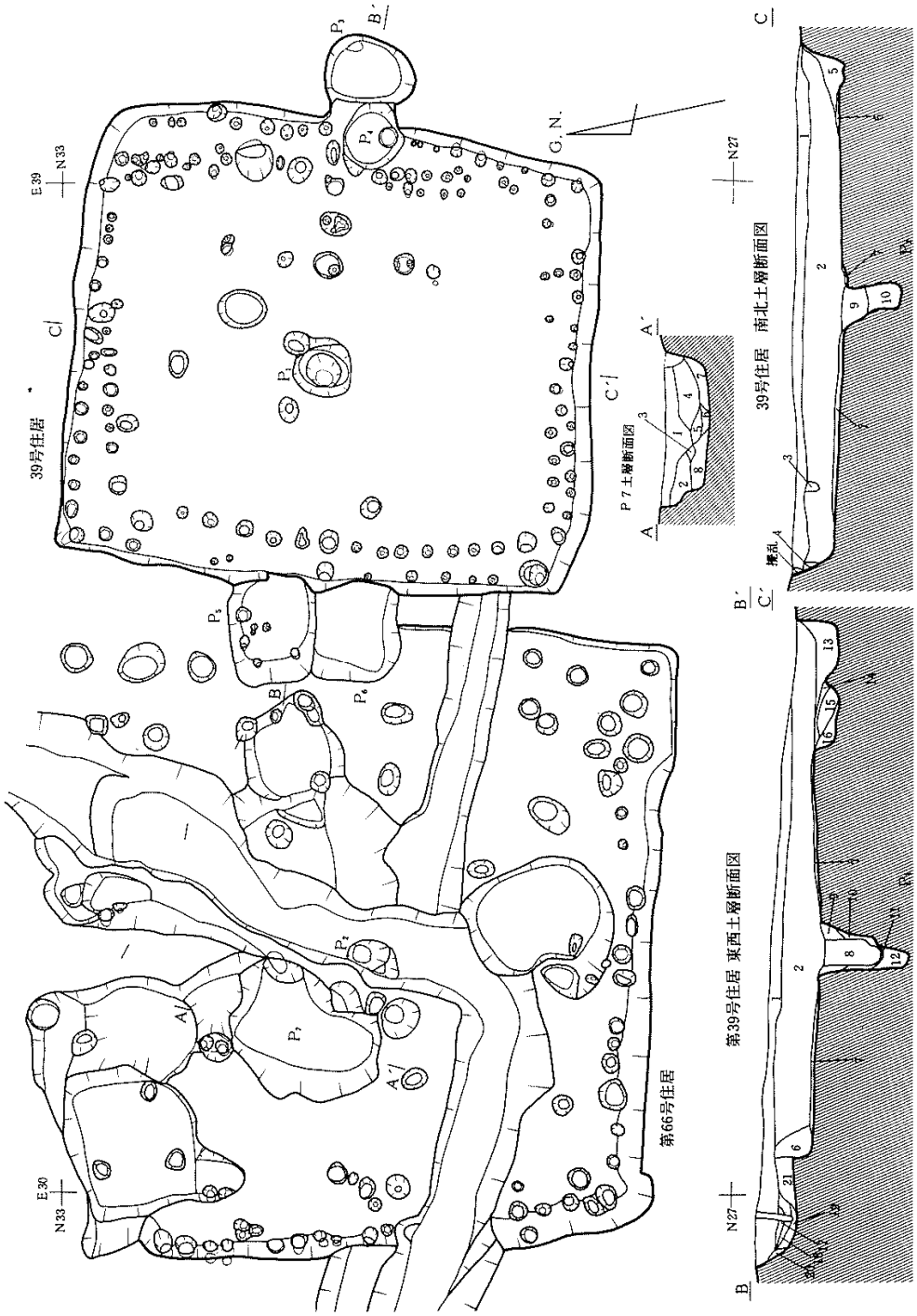
第39号住居跡（第58・59図）　住居跡第3群内のCH、CIの54区に位置する。
〈重複〉　住居西側でピット5、6と重複する。断面図によれば39号住居が新しい。
〈平面形・規模〉　主柱穴、壁柱穴の分布から住居の拡張があったことがわかる。内側の旧住居は壁柱穴間で4.0×3.3m、外側の新住居は壁上端で4.7×4.3mあり、やや東辺が外に張りだす長方形を呈する。
〈堆積土〉　褐色～暗褐色のシルトからなるが壁ぎわにはロームの堆積がみとめられる。
〈壁〉　壁の検出状態はよく、床面から急角度で立ちあがる。残存高は斜面の上側の西辺では



○第33号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	表土
2	黒褐色土。硬い。焼土を含む。
3	暗褐色砂質土。ロームを含む。
4	黄褐色土。ローム(崩土)を多量に含む。
5	汚れたローム(崩土)
6	暗褐色粘質土。ロームを含む。
7	ローム(火山灰層)

第57図　第33号住居跡



第58図　第39・66号住居跡　（1）

○第39号住居跡　堆積土

No.	層	特　　徴
1	39住堆積土	褐色シルト。やや粘性あり。遺物を多く含む。
2	39住堆積土	暗褐色シルト。粘性にとむ。ローム粒・遺物を含む。
3	39住堆積土	暗褐色シルト。2よりやや明るい。
4	39住堆積土	黄褐色シルト質粘土。粘性にとむ。
5	39住堆積土	暗黄褐色シルト質粘土。粘性にとむ。下部にロームを含む。
6	39住堆積土	黄褐色シルト質粘土。ロームブロックを多く含み粘性が強い。
7	39住堆積土	暗褐色シルト質粘土。
8	P 1 堆積土	暗茶褐色シルト質粘土。柔らかい。木炭・ロームを含む。
9	P 1 堆積土	暗黄褐色シルト質粘土。7より堅く多量のロームを含む。
10	P 1 堆積土	暗黄褐色シルト質粘土。8より明るく柔らかい。
11	P 1 堆積土	茶褐色シルト質粘土。黄褐色ロームを含みかたくしまる。
12	P 1 堆積土	黄褐色シルト質粘土。ロームを多量に含み、かたくしまる。
13	P 3 堆積土	茶褐色シルト。ローム粒・木炭・焼土を含む。13～16は粘性にとむ。
14	P 4 堆積土	暗褐色シルト。ロームをブロック状に含む。
15	P 4 堆積土	暗褐色シルト質粘土。木炭を多く含む。
16	P 4 堆積土	暗褐色シルト質粘土。ローム・木炭を多く含む。
17	P 5 堆積土	暗茶褐色シルト質粘土。木炭を含みやや堅い。
18	P 5 堆積土	暗茶褐色シルト質粘土。木炭・ロームを含み17より堅い。
19	P 5 堆積土	茶褐色シルト質粘土。木炭・ロームを含み17より柔らかい。
20	P 5 堆積土	茶褐色シルト質粘土。19より明るく、ロームを含みやや堅い。
21	P 5 堆積土	茶褐色シルト質粘土。20より柔らかい。ロームを含む。
22		

○第66号住居内ピット7　堆積土

No.	層　の　特　徴
1	暗赤褐色土。柔らかい。ロームを含む。
2	暗黄褐色土。柔らかい。ロームを含む。
3	暗黄茶褐色土。柔らかい。
4	暗褐色土。ロームブロックを含む。
5	ロームブロック。
6	暗褐色土。ロームを僅かに含む。
7	暗黄褐色土。ロームを含む。
8	暗黄褐色土(汚れたローム)

第59図　第39・66号住居跡 (2)

40 ㎝以上、東辺では 20～25㎝ である。

〈床面〉　遺構は約 10 度の傾斜面上に立地するが床面はほぼ水平である。東側のピット 4 付近に貼り床状のロームがみとめられた。

〈柱穴・ピット〉　住居内には 140 数基のピットがあるが、配置が規則的なので柱穴をおおむね識別できる。壁柱穴は二重に巡る。内側のピット列の一部が貼り床下にあるため、内側から外側へ住居の拡張が行われたことがわかる。やや内傾する壁柱穴は深さが 10 ㎝以下のものが多いが四隅と各辺中央の柱穴は深く 50 ㎝をこえるものがある。住居の拡張に伴い東辺に接するピットもピット 4 からピット 3 に改築されている。住居中央のピット 1 は深さ 76㎝ で径 23 ㎝の柱痕跡が確認された。新旧の住居の主柱穴が同一位置に重複している。住居西側にある 2 個の方形ピットは断面図の知見から住居より古いものと思われる。

第 66 号住居跡（第 59・59 図）　住居跡第 3 群内のＣH、ＣＩの 52、53 区に位置する。

〈重複〉　2 条の溝に切られ、また多くのピットと重複する。

〈平面形・規模〉　北側の輪郭が確認されていないが 5.7m×4.7m 程の四角形になるものと考えられる。

〈堆積土〉　観察記録が残されていない。

〈壁〉　壁は西辺で約 30㎝ と残りがよいが東側ほど削平されており北壁は検出できなかった。

〈床面〉　やや東側が低くなる傾向がある。

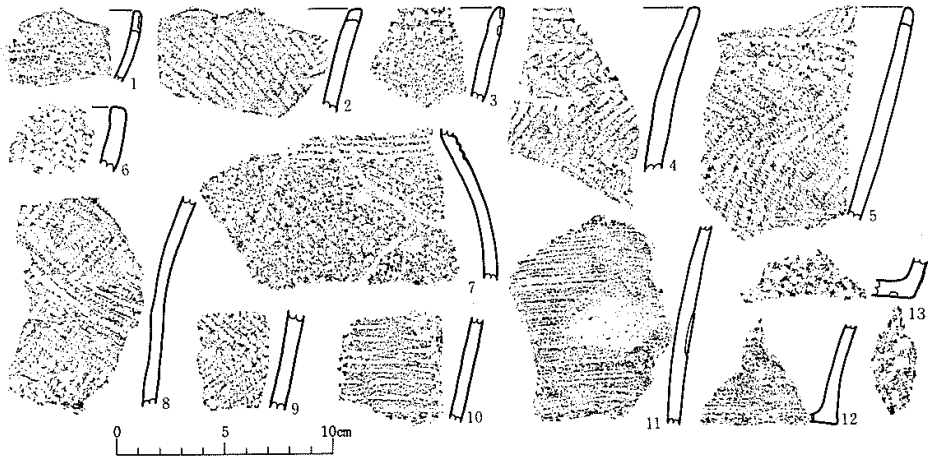
〈柱穴・ピット〉　壁沿いには深さ数㎝～十数㎝の小ピットがある。住居中央のピット 2 は深

さ60㎝で主柱穴の可能性がある。東辺上のピット5、6が66号住居に付随するものであれば66号住居は39号住居より古い。住居内には大きさが2m弱の不定形ピットがいくつかあるがこれらは住居より新しいものと思われる。

第40号住居跡（第62図）　住居跡第3群内中央のＣＤ、ＣＥの54、55区にあり、第60、42、69、68、67、41号住居と隣接する。

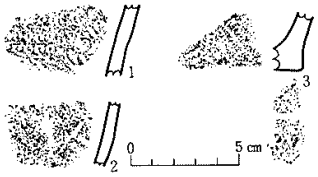
〈重複〉　住居南側のピット20に切られる。また多数の小ピットの存在から2軒の住居との重複が考えられる。

〈平面形・規模〉　東辺の一部が削平されて検出できなかったが、5.1×4.6m の長方形になる



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内　面	備　　考	図　版
1	39住－1層	深鉢 B 1g	口 縁 部	含む	半截竹管による口縁に沿う刺突文、撚糸文(L)	不　明	波状縁	
2	39住－2層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	縄文(RL)	〃	双頭の波状縁 胎土に斜長石を含む	
3	39住	〃 B 1g	〃	〃	半截竹管による刺突文、縄文(LR)	〃		
4	39住－2層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(RL・LR)、羽状縄文(RL・LR)	ミガキ		
5	39住－2層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、羽状縄文(RL・LR)	〃	突起をもつ平縁	
6	39住－2層	〃 B Ⅱ7	〃	〃	組紐回転文(LLLL)	ナ　デ		
7	39住－2層	〃	胴　部	〃	半截竹管による横位沈線文、重層末端ループ文(RL)	〃		
8	39住－2層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
9	39住－2層	〃	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(LR)	〃		
10	39住	〃	〃	〃	葺瓦状撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
11	39住－1層	〃	〃	〃	櫛歯状工具による横位沈線文	〃	胎土に斜長石を含む	
12	39住－堆積土	〃	胴部～底部	〃	櫛歯状工具による横位沈線文	〃		
13	39住	〃	〃	〃	縄文(RL)、刺突文(底面)	〃		

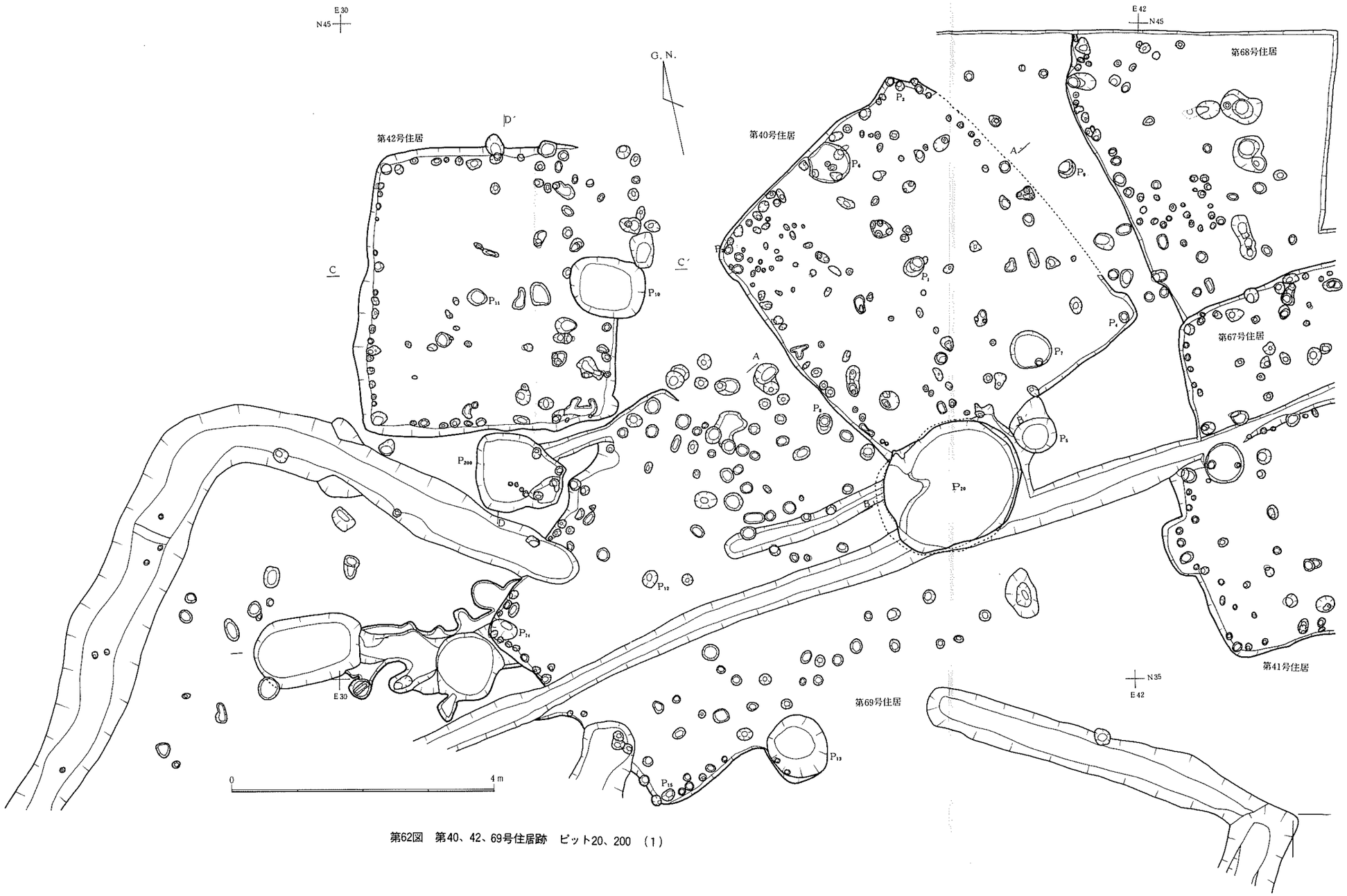
第60図　第39号住居跡出土土器



No.	出土層位	器形・分類	部位	繊維	外　　面	内面	備　　考	図版
1	1・2層	深鉢	胴部	含む	重層末端ループ文(RL)	不明		
2	1・2層	〃	〃	〃	縄文(RL)	〃		
3	1・2層	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃	底面・縄文(RL)	

第61図　第66号住居跡出土土器

ものと思われる。
〈堆積土〉　耕作による削平が進んでいて堆積土の下部のみが残っているようである。
〈壁〉　東壁は削平によって失われているが、北・西・南壁は保存がよく床面から急角度で立ちあがる。残存高は西壁で25～30㎝あり、東にいくほど低くなる。
〈床面〉　検地された床は暗黄色シルトで堅くしまっている。床面はほぼ水平だが北辺の壁際がやや高く南東部が低い。
〈柱穴・ピット〉　住居内には140をこえるピットがあり、住居の構造と関連するものを抽出するのがむづかしい。壁沿いに配置された深さ10㎝前後の小ピットは40号住居の壁柱穴と考えてよいであろう。壁柱穴は南辺の東側には分布せず、削平の著しい東辺には少ない。住居の四隅にあたるピット2、3、4は29、21、19㎝と他のピットより深い。住居中央のピット1は48㎝と深く柱痕跡が識別できるようであり、主柱穴と考えられる。南辺に接するピット5は床面からの深さ38㎝でその位置・形状から40号住居に伴うものと考えてよいであろう。住居内外には深さ数㎝～十数㎝の小ピットが多数ある。ピット群の分布は不規則だが注意深く観察するとその一部には線状に並ぶ傾向がみとめられる。これらを住居の壁柱穴として追跡すると輪郭に不明瞭な点はあるが、40号住居と69号住居の間そして40号住居と68号住居の間に2軒の住居跡の存在が推定できる。西側の住居は深さ69㎝のピット8を主柱穴とし軸線が北西をむく、また東側の住居は深さ37㎝のピット9を主柱穴とし軸線は北北東をむくようである。2軒の住居は40号住居調査中に平面・断面で確認されていないので40号住居より古い可能性がある。
第42号住居跡（第62図）　住居跡第3群内中央よりのＣＤ、ＣＥの52、53区にあり、第62、60、40、69号住居と隣接する。
〈重複〉　壁柱穴の配列から住居が建てかえられている可能性がある。
〈平面形・規模〉　北東の一部が検出できなかったが、4.3×3.9㎡程の長方形を呈する。
〈堆積土〉　上部が削平されている。
〈壁〉　壁面は崩落して立ちあがりは緩やかである。残存高は保存のよい西壁で30～40㎝で東にいくほど低くなる。
〈床面〉　検出された床は地山で床面にには黒褐色土の薄い堆積がある。
〈柱穴・ピット〉　壁沿いに小ピットが巡るが東辺はピット列が二重になる。小ピットは深さおおむね10㎝以下だが隅や各辺中央に位置するものは約20㎝とやや深い。西辺のピットは径が小さいが分布密度が濃い。また逆に東側のピットは径が20㎝以上のものがあり分布はややまばらである。こうした事実に住居の主柱穴としうるのが深さ29㎝のピット11のみであることを考えあわせると、住居西側のプランを再利用した建てかえのあったことが推測される。ピット10は内側の住居に付随するものであり、この部分に生活層がないことから考えれば、内側の住居



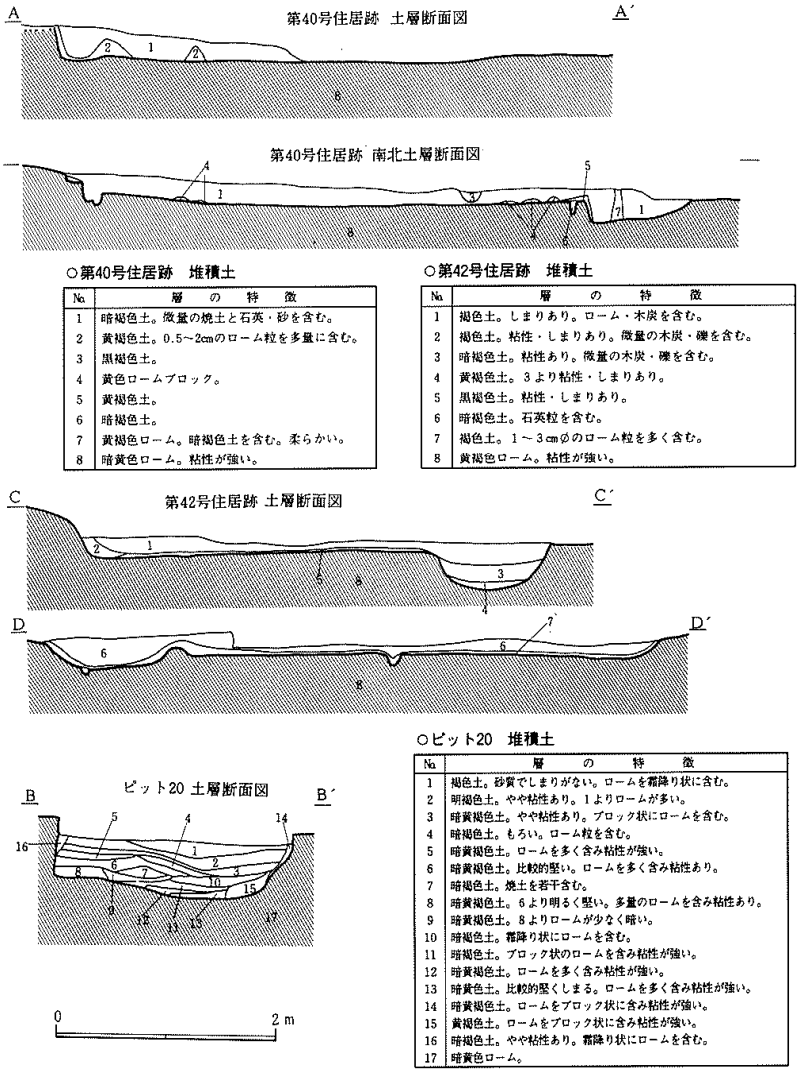
第62図　第40、42、69号住居跡　ピット20、200　（1）

が新しい可能性が指摘できる。不自然ではあるが。

第69号住居跡（第62図）　住居跡第3群内中央よりのＣＦ、ＣＧの53区に位置する。

〈重複〉　第4号方形周溝墓の周溝と東西にのびる溝2条に切られる。またプランは不明確だが北東側に他の遺構の重複している可能性がある。

〈平面形・規模〉　耕作による削平のため東側の輪郭が不明だが、4.7×4.9m 程の方形になる



○第40号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	暗褐色土。微量の焼土と石英・砂を含む。
2	黄褐色土。0.5～2cmのローム粒を多量に含む。
3	黒褐色土。
4	黄色ロームブロック。
5	黄褐色土。
6	暗褐色土。
7	黄褐色ローム。暗褐色土を含む。柔らかい。
8	暗黄色ローム。粘性が強い。

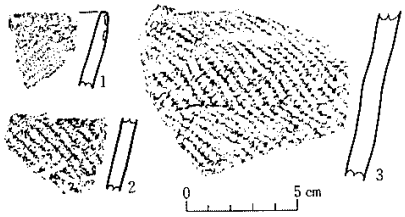
○第42号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	褐色土。しまりあり。ローム・木炭を含む。
2	褐色土。粘性・しまりあり。微量の木炭・礫を含む。
3	暗褐色土。粘性あり。微量の木炭・礫を含む。
4	黄褐色土。3より粘性・しまりあり。
5	黒褐色土。粘性・しまりあり。
6	暗褐色土。石英粒を含む。
7	褐色土。1～3cmφのローム粒を多く含む。
8	黄褐色ローム。粘性が強い。

○ピット20　堆積土

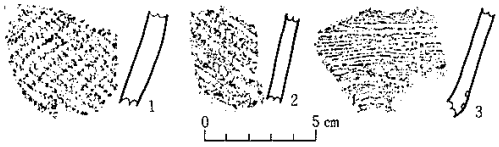
No.	層の特徴
1	褐色土。砂質でしまりがない。ロームを霜降り状に含む。
2	明褐色土。やや粘性あり。1よりロームが多い。
3	暗黄褐色土。やや粘性あり。ブロック状にロームを含む。
4	暗褐色土。もろい。ローム粒を含む。
5	暗黄褐色土。ロームを多く含み粘性が強い。
6	暗黄褐色土。比較的堅い。ロームを多く含み粘性あり。
7	暗褐色土。焼土を若干含む。
8	暗黄褐色土。6より明るく堅い。多量のロームを含み粘性あり。
9	暗黄褐色土。8よりロームが少なく暗い。
10	暗褐色土。霜降り状にロームを含む。
11	暗褐色土。ブロック状のロームを含み粘性が強い。
12	暗黄褐色土。ロームを多く含み粘性が強い。
13	暗黄色土。比較的堅くしまる。ロームを多く含み粘性が強い。
14	暗黄褐色土。ロームをブロック状に含み粘性が強い。
15	黄褐色土。ロームをブロック状に含み粘性が強い。
16	暗褐色土。やや粘性あり。霜降り状にロームを含む。
17	暗黄色ローム。

第63図　第40、42、69号住居跡　ピット20、200　（2）



No.	出土層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内面	備　　考
1	1　層	深鉢 B Ig	口縁部	含む	半截竹管による刺突文 縄文(L R)	不明	
2	1　層	〃	胴　部	〃	縄文(R L)	〃	
3	2　層	〃	〃	〃	斜行縄文(R L)	ナデ	

第64図　第40号住居跡出土土器



No.	出土層位	器形・分類	部位	繊維	外　　面	内面	備　考
1	Pit10	深鉢	胴部	含む	羽状縄文(RL・LR)	不明	
2	堆積土	〃	〃	〃	撚糸文(L)	ナデ	
3	堆積土	〃	〃	〃	櫛歯状工具による横位波線文・押引き文	〃	胎土に斜長石を含む

第65図　第42号住居跡出土土器

ものと思われる。

〈堆積土〉　断面図・堆積土に関する記録は残されていない。

〈壁〉　削平が著しく比較的保存のよい西側でも残存高は十数cmである。

〈床面〉　地形の傾斜と同様に南東方向にやや下がる。

〈柱穴・ピット〉　壁沿いに小ピットが巡る。壁の検出されない東側でもこれらの壁柱穴はある程度確認できる。壁柱穴の深さは 10 cm内外が多いが住居の隅のピット 14、15 は 30 cm近い。住居中央やや北のピット 12 は深さ 57 cmで主柱穴の可能性がある。南辺に接するピット 13 は床面からの深さ 14 cmで底面はほぼ平らである。住居内には他にも小ピットがあるが住居との関係は不明である。ただし東辺付近の小ピット群は隣の 40 号住居とも重複するもう 1 軒の住居の柱穴の一部とも考えられる。

第 41 号住居跡（第 66・67 図）住居跡第 3 群内でも東側のＣＦの 56、57 区に位置する。

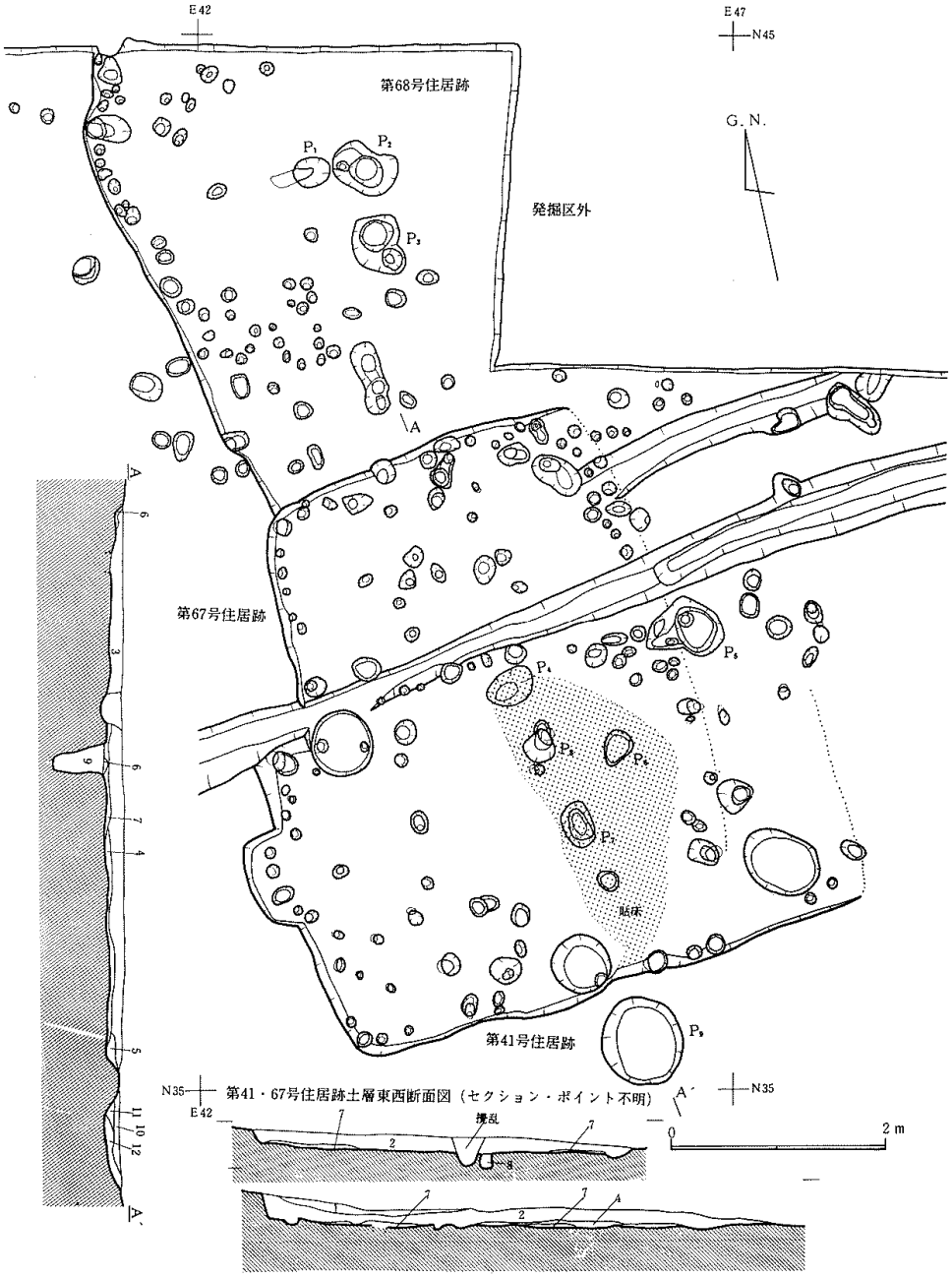
〈重複〉　67 号住居、東西にのびる溝と重複する。41 号住居は溝より古いが 67 号住居との新旧は不明である。

〈平面形・規模〉　北・東壁がのこらないため詳細は不明だが東西に長い長方形で西辺に張りだし部をもつ。

〈壁〉　北壁は 67 号住居との重複により、また東壁は耕作により失われている。残存高は状態のよい西側で 20 数cmあり、床面からの立ちあがりは 60～80 度と急である。

〈床面〉　床面は暗黄色ロームで堅いためその検出は容易である。住居南東部にはやや凹凸がみられた。床面上には部分的に貼床がみとめられ、ピット 4、6、7 ば貼床下で検出された。

〈柱穴・ピット〉　遺構の重複があるため 41 号住居に関連するピットを抽出するのがむづかしい。壁沿いには深さ 10 cmに満たない小ピットがあり壁柱穴と考えられる。北・東辺は未検出だ



第66図　第41、67、68号住居跡　（1）

○第41号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	表土
2	黄褐色土。粘性にとむ。ローム粒を含む。
3	黒褐色土。柔らかくパサパサする。
4	黄褐色土。ロームを多く含む。貼り床の可能性がある。
5	青褐色土。ロームを多く含む。
6	ロームブロック。
7	黒褐色土。粘性あり。少量の炭を含む。
8	黄褐色土。ロームを多く含む。
9	黒褐色土。ローム粒を多く含む。
10	青黄褐色土。粘性あり。
11	黒褐色土。粘性あり。
12	黄褐色土。粘性あり。2より明るい。

第67図　第41、67、68号住居跡　（2）

が、溝に平行するピット列は住居の北辺を示すものかもしれない。ピット4、6、7は貼床との関係から41号住居より以前のものであり、深さ75㎝のピット8が主柱穴の可能性がある。ピット7は66㎝と深い。また住居内には41、57号住居の構成からは説明できないピットがあり、さらに住居の重複が考えられる。

第67号住居跡（第66図）　住居跡第3群内でも東側のＣＥ、ＣＦの56区にある。

〈重複〉　41号住居と重複するが、新旧は不明である。

〈平面形・規模〉　住居の北西部以外はプランが不明確だが、おおむね四角形を呈する。

〈堆積土〉　3層からなる。1層はローム粒を含む黄褐色土、2層はロームを多く含む黄褐色土である。3層は炭を含む黒褐色粘質土で生活時の堆積層である。

〈壁〉　北壁と西壁の一部のみが検出されている。残存高は10～20㎝で床面から60～70度で立ちあがる。

〈床面〉　床面は暗黄色ロームで硬い。東側がやや低くなる傾向があるがほぼ平坦である。

〈柱穴・ピット〉　住居内外に多数の大小のピットがある。北・西壁沿いには深さ数㎝から20㎝の小ピットがならぶ。東辺は壁が失われているがピット列は確認できる。住居中央のピット4は深さ51㎝と深く主柱穴の可能性がある。ピット4は41号住居の貼り床下にあるので、これが67号住居に伴うものであれば67号住居は41号住居より古い。東側のピット5は床面からの深さ18㎝で底面は平らである。住居内小ピットの一部は線上にならぶ傾向があり、41号住居以外にも住居の重複が考えられる。

第68号住居跡（第66図）　住居跡第3群内でも東側のＣＤ、ＣＥの56区にある。

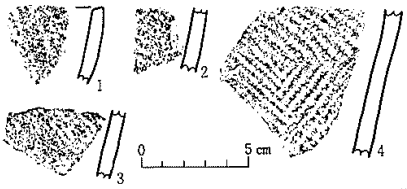
〈重複〉　住居の輪郭が不明確だが、西側の段を住居の壁と考えるならば67号住居と重複する。

〈平面形・規模〉住居東側は発掘区外にある。西側の段は精査がなされておらず、これをそのまま住居の壁と考えるわけにはいかない。従って住居のプランの詳細は不明である。

〈堆積土〉　調査時に住居としての認定が遅れたため、断面図はなく堆積状況に関する情報も残されていない。

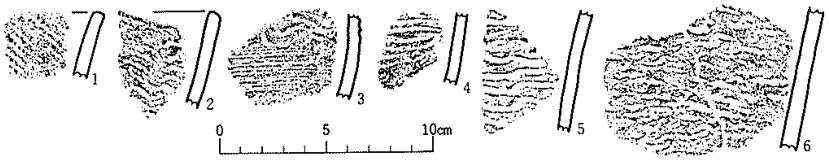
〈壁〉両側の段の一部については住居の壁と考えてよいと思われる。検出された壁は暗黄色ロームで立ちあがりは60～90度である。

〈床面〉床面はかなり堅くしまる。



No.	出土層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内面	備　考
1	床　面	深鉢 BⅡ1or2	口縁部	含む	縄文(RL)	ナデ	
2	床　面	〃	胴　部	〃	縄文(RL)	〃	
3	床　面	〃	〃	〃	縄文(RL)	不明	
4	床　面	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ	

第68図　第41号住居跡出土土器



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内面	備　　考	図　版
1	67住－Pit	深鉢 BⅡ1or2	口縁部	含む	縄文(LR)	ナデ		
2	67住－堆積土	〃　BⅡ6	〃	〃	葉脈状撚糸文(L)	〃	波状縁・胎土に斜長石を含む	
3	67住－堆積土	〃	胴　部	〃	櫛歯状工具による波状沈線文・横位沈線文	〃	胎土に斜長石を多く含む	
4	67住－堆積土	〃	〃	〃	撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
5	67住－堆積土	〃	〃	〃	葉脈状撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
6	67住－堆積土	〃	〃	〃	葉脈状撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	

第69図　第67号住居跡出土土器

No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内面	備　　考	図　版
1	68住－2層	深鉢	胴　部	含む	押型文(重層菱形文)、横位沈線文	ナデ		
2	68住－2層	〃	〃	〃	縄文(RL)・結節文(片結び一順)	不明		
3	68住－2層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
4	68住－2層	〃	〃	〃	縄文(LR)	〃		
5	68住－2層	〃	〃	〃	縄文(LR)	〃		
6	68住－2層	〃	〃	〃	組紐回転文(LLRR)	ナデ		

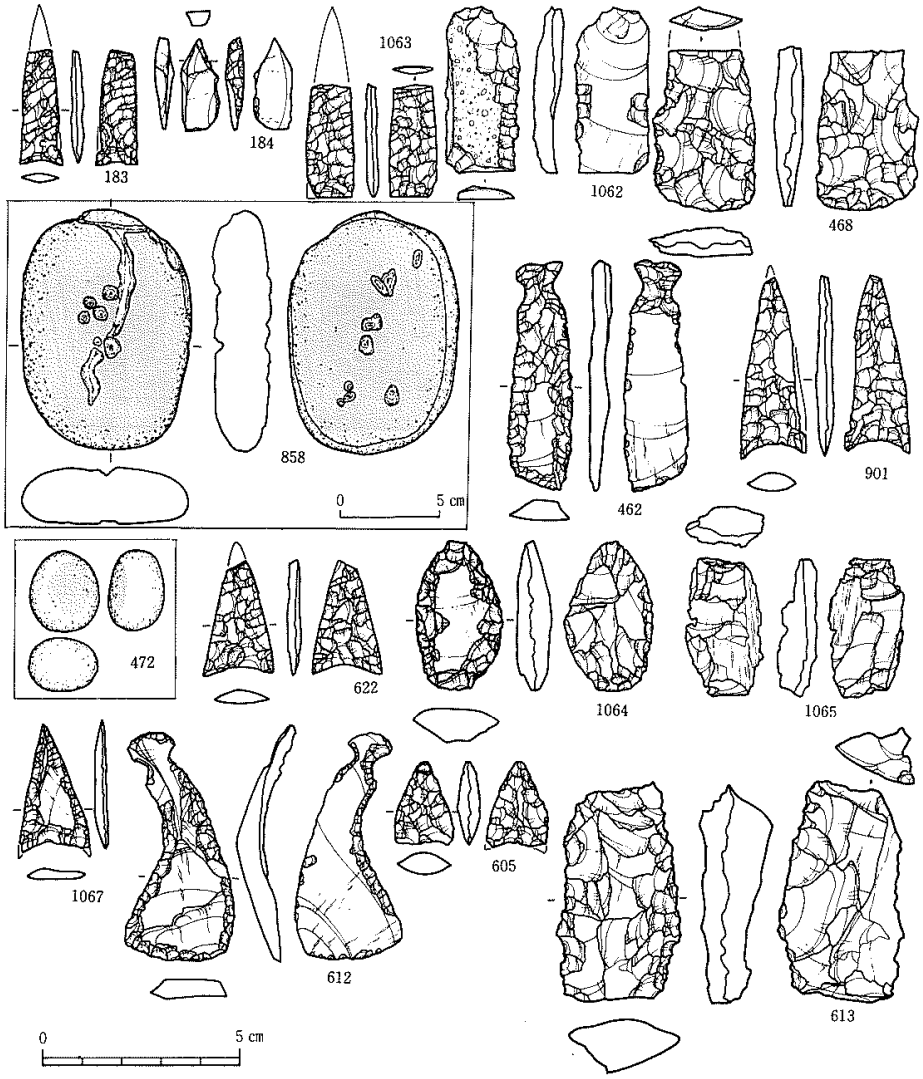
第70図　第68号住居跡出土土器

〈柱穴・ピット〉西壁に沿って並ぶ小ピットがある。深さはおおむね10㎝程だが深いものは30㎝をこえる。同様の小ピットは東西に列をなして並ぶような傾向があり、壁は確認されていないもののそれぞれ住居の北辺、南辺を示している可能性がある。住居内のピット1、2、3は深さが45、60、71㎝と深く、掘り方と柱痕跡が識別できるものもある。西壁のプランと柱配列は一致しないので複数住居の重複も考えられる。

第46号住居跡（第72図）　住居跡第2群内のＣＧ、ＣＦの41区にあり、第51、50、59号住居と隣接する。

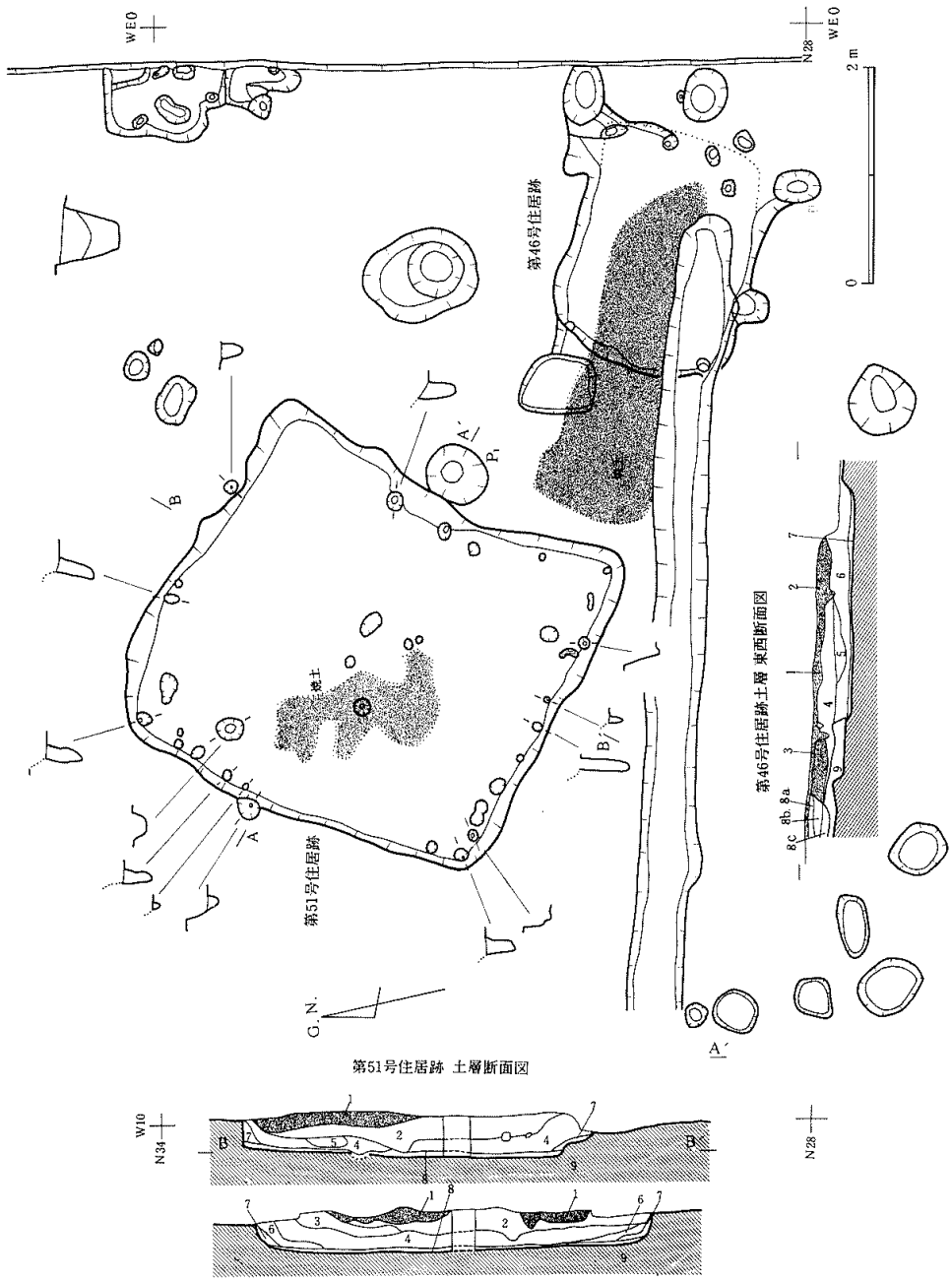
〈重複〉　西からのびる溝に切られる。

〈平面形・規模〉　南東部が不明瞭だが、3.1m×2.4mの長方形を呈するものと思われる。



番号	住居跡	層	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	備考
183	31住	1 層	石鏃		11	3	珪化凝灰岩	剥離に連続性がある。
184	32住	1 層	不定形石器	23	10	4	珪質頁岩	
1063	39住	東ピット	石鏃		12	3	珪化凝灰岩	剥離に連続性がある。
1062	39住	床 面	不定形石器	42	19	6	珪化凝灰岩	
468	39住	1 層	篦状石器		26	9	珪質頁岩	
858	39住	1 層	磨凹石	121	87	27	石英安山岩	2磨面(S.T.)、表面の左右が特に著しい。
462	40住	1 層	石匙	58	16	5	珪質頁岩	
901	41住	溝 中	石鏃	(45)	17	5	珪質頁岩	白ぬきは新しい破損。
472	42住	2 層	磨石	41	34	28	安山岩	1磨面(スクリーン・トーンで示す部位)
622	43住	1 層	石鏃	(29)	18	4	珪質頁岩	
1064	43住	A－1層	不定形石器	38	23	10	珪質頁岩	パティナの新しい剥離面あり(スクリーン・トーン)。
1065	43住		両極剥離痕ある石器	36	19	10	珪化凝灰岩	
1067	44住	埋 土	石鏃	32	(18)	4	珪質頁岩	
612	46住	焼土層		59	30	8	珪質頁岩	
605	46住	1 層		22	(15)	6	珪化凝灰岩	パティナの新しい剥離面あり(S.T.)。
613	46住	焼土層	不定形石器	55	32	19	珪質頁岩	両面に折面。

第71図　第31、32、29、40、41、42、43、44、46号住居跡出土石器



第72図　第46、51号住居跡　（1）

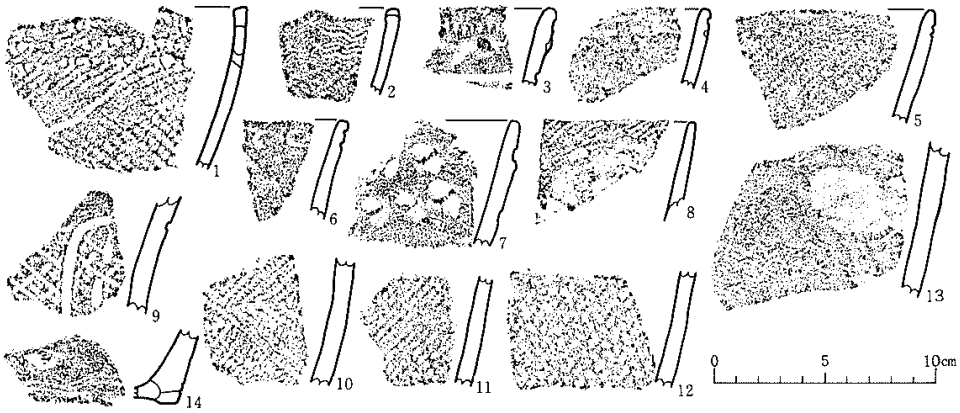
○第46号住居跡周辺の堆積土

No.	層の特徴
1	ブロック状の焼土からなる層。
2	黒色土。焼土と炭を多量に含む。
3	赤褐色土。焼土を多量に含む。
4	褐色土。焼土を含む。
5	暗褐色土。焼土を含む。
6	暗褐色土。焼土含む。4、5、6層は明るさの違い。
7	黒褐色土。粘性にとむ。炭を多く含む。
8	茶褐色土。下部ほど含まれる焼土量が少ない。
9	黒色土。柔らかい。
10	ローム(火山灰層)

○第51号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	明褐色砂質土。赤褐色焼土を多量に含む。
2	黒褐色シルト。粘性あり。ロームを含む。
3	砂質粘土。暗褐色ローム粒を含む。
4	暗黄褐色シルト。粘性にとむ。少量の木炭・ロームを含む。
5	暗黄褐色土。ロームをブロック状に含む。
6	暗黄褐色土。明るく、粘性にとむ。
7	暗黄褐色シルト質ローム。極めて粘性が強い。
8	黒褐色粘質土。極めて粘性が強い。
9	ローム(火山灰層)

第73図　第46、51号住居跡　(2)



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	46住	深鉢 BⅡ3	口縁部	含む	重層末端ループ文(LR)、縄文(RL)	ナデ	波状縁、補修孔あり。内面に炭化物付着	
2	46住一焼土層	〃 BⅠd	〃	〃	櫛歯状工具による波状沈線文、羽状縄文(RL・LR)	不明	突起をもつ波縁	
3	46住一2層	〃 BⅠc	〃	〃	刺突文、横位平行沈線文、円形貼付文	ナデ	胎土に斜長石を含む	
4	46住一2層	〃 BⅠc	〃	〃	口縁に沿う沈線文、刺突文	〃		
5	46住	〃 BⅠc	〃	〃	半截竹管による刺突文、縄文(LR)	〃	胎土に斜長石を含む	
6	46住	〃 BⅠg	〃	〃	半截竹管による刺突文	ミガキ	胎土に斜長石を含む	
7	46住一焼土層	〃 BⅠg	〃	〃	ヘラ状工具による刺突文	ナデ		9－16
8	46住一焼土層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(LR)	〃		
9	46住一2層	〃	胴部	〃	沈線文、付加条縄文	〃		
10	46住一焼土層	〃	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	〃		
11	46住	〃	〃	〃	縄文(LR)	不明		
12	46住	〃	〃	〃	組紐回転文	〃		
13	46住一焼土層	〃	〃	〃	S字状沈文	ナデ		
14	46住一焼土層	〃	胴部～底部	〃	半截竹管による平行沈線文	〃	底部周縁が高台状にはり出す。	

第74図　第46号住居跡出土土器

〈堆積土〉　住居からその西側にかけて堆積土の上部に焼土の分布がみとめられた。住居埋没後にこの場で火が焚かれている可能性がある。

〈壁〉　残存壁高は10～20cmで、床面からの立ちあがりは思ったより明瞭である。

〈床面〉　ほぼ平坦で堅くしまる。床面上には薄い黒色土の分布がみとめられる。

〈柱穴・ピット〉　住居内外には大小13個のピットがある。南東部にはやや大形の楕円形ピット3個がならぶがその性格は不明である。46号住居は壁が立ち床面もしっかりしているが、非

常に小形であり柱穴の配列も不明確である。

第51号住居跡（第72図）　住居跡第2群内のＣＥ、ＣＦの40区にある。

〈平面形・規模〉　3.8m×3.3mの不整長方形で南東辺がやや内彎する。

〈堆積土〉　9層に細分される。1層にのみ多量の焼土の混入がみられる。

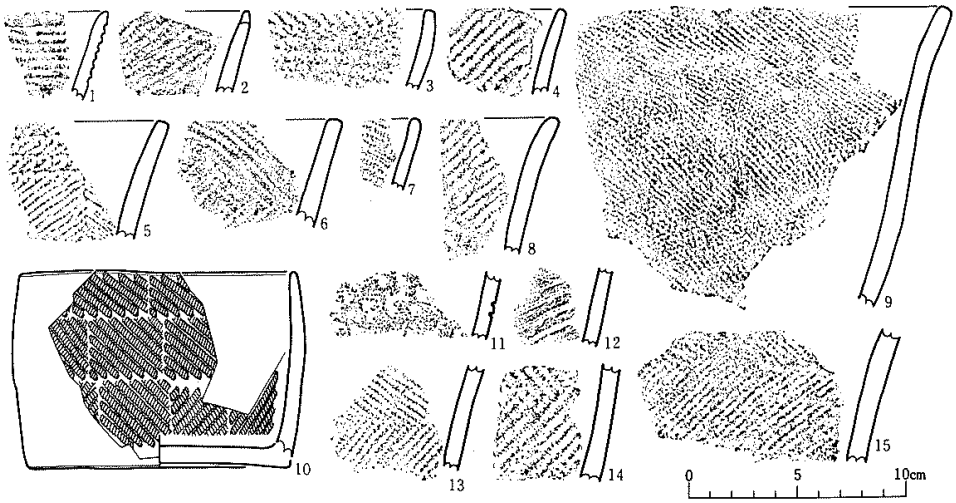
〈壁〉　残存高は10～20cmで床面から急角度で立ちあがる。

〈床面〉　微地形の傾斜と同様に南東方向にやや低くなる。

〈柱穴・ピット〉　住居中央に小ピットが5個ある。壁沿いには内傾する小ピットが並ぶが、配置は不規則である。南東辺に接して深さ57cmの円形のピット1がある。住居外のピットは堆積土が住居と異なる。

第47号住居跡（第76図）　住居跡第2群内南側のＣＨ、ＣＩの38、39区にある。

〈重複〉東側を溝に切られる。



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	51住－2層	深鉢	口縁部	含む	押型文(平行線状文)	不明		
2	51住－1層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(LR)	ミガキ	波状縁	
3	51住－1層	〃 BⅡ3	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(RL)	ナデ		
4	51住－1層	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
5	51住－1層	〃 BⅡ3	〃	〃	重層末端ループ文(LR)、羽状縄文(RL・LR)	〃		
6	51住－2層	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
7	51住－1層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	ナデ		
8	51住－1層	〃 BⅡ1	〃	〃	斜行縄文(LR)	〃		
9	51住－1層	〃 BⅡ8	口縁部～胴部	〃	縄文(RL)、組紐回転文	不明	組紐を施文後縄文施文	
10	51住	鉢 B	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		6－4
11	51住－2層	深鉢	胴部	〃	半截竹管による刺突文	不明		
12	51住－1層	〃	〃	〃	撚糸文(L)	〃		
13	51住－1層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
14	51住－堆積土	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
15	51住－堆積土	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		

第75図　第51号住居跡出土土器

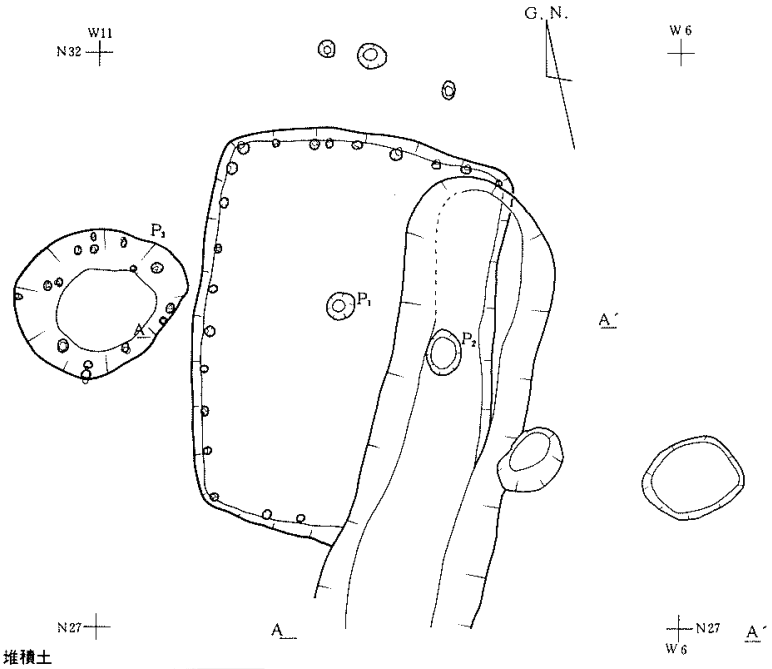
〈平面形・規模〉東辺が一部不明だが、3.5×2.5mで、やや胴張りの隅丸長方形になる。

〈堆積土〉　堆積状態はほぼ水平で、層位は3層に大別できる。1、2はしまりのない暗褐色土であり、3〜6はロームを含み粘性にとむ黄褐色土である。床面上には薄い黒褐色土層がある。

〈壁〉　溝に破壊された東壁を除いて極めて保存がよい。壁の残存高は30数cmで床面からほとんど垂直にたちあがる。

〈床面〉　検出された床はロームで中央部はかなり堅くしまる。住居内全般に生活時の堆積層（7層）がみとめられる。

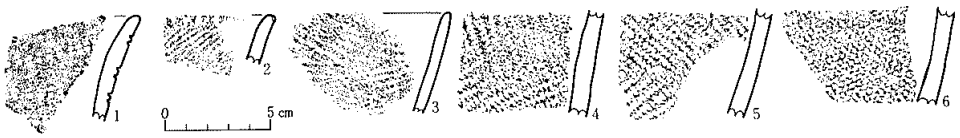
〈柱穴・ピット〉住居内に23個のピットがある。そのうち19個は壁沿いに30〜40cm間隔に配置される小ピットである。深さは10cm前後でやや内傾する傾向がある。住居中央のピット1は



○第47号住居跡　堆積土

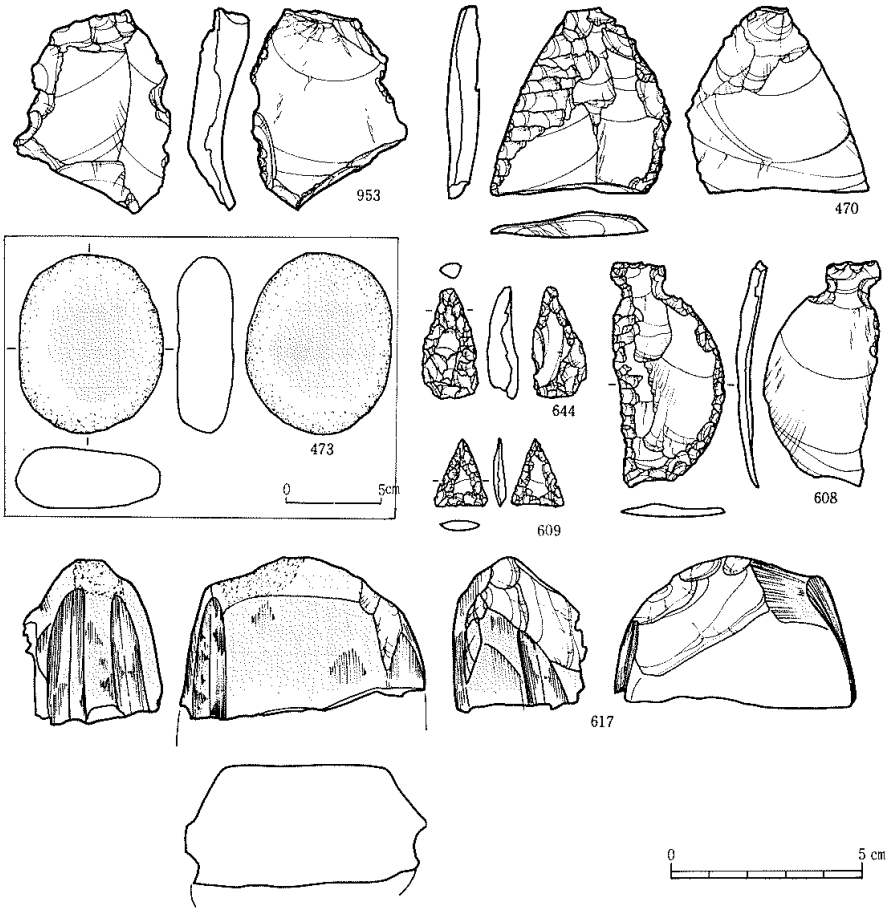
No.	層の特徴
1	暗褐色土。粘性・しまりなし。
2	褐色土。ロームを霜降り状に含む。
3	暗黄褐色土。ローム粒を含む。粘性・しまりあり。
4	黄褐色土。ブロック状のロームを含む。粘性にとむ。
5	明黄褐色土。しまりあり。
6	黄褐色土。粘性・しまりあり。ローム粒を含む。
7	黒褐色土。粘性強い。僅かに炭を含む。
8	暗褐色土。しまりあり。
9	黄色粘土。上部は暗褐色を呈する。地山。

第76図　第47号住居跡



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	47住－2層	深鉢 B Ⅰg	口縁部	含む	半截竹管による口縁に沿う刺突文	ナ　デ	波状縁	
2	47住－2層	〃　B Ⅰg	〃	〃	刺突文(口縁上端)、縄文(L)	〃		
3	47住	〃　B Ⅱ6	〃	〃	木目状撚糸文	不　明		
4	47住－2層	〃	胴　部	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナ　デ		
5	47住－2層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ミガキ		
6	47住－3層	〃	〃	〃	組紐回転文	ナ　デ		

第77図　第47号住居跡出土土器



番号	住居跡	層	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石　材	備　考
953	47住	2　層	不定形石器	52	41	12	珪化凝灰岩	折面の縁辺に弱い磨滅(スクリーン・トーン)
470	50住	2　層	不定形石器	48	46	10	珪質頁岩	縁辺に弱い磨滅(スクリーン・トーン)
473	50住	2　層	磨石	93	76	32	石英閃緑岩	2磨面(スクリーン・トーンで示す部位)
644	50住	3　層	石錐				珪化凝灰岩(碧玉化)	
608	51住	1　層	石匙	59	28	4	珪化凝灰岩	
609	51住	1　層	石鏃	18	14	3	珪質頁岩	
617	51住	1　層	砥石？				細粒凝灰岩	両側面に3条の溝状磨面があり、線状痕が残る。

第78図　第47、50、51号住居跡　出土石器

深さ 56 ㎝で主柱穴と考えられる。

住居外西のピット 3 は 1.5×1.3㎡、深き 19 ㎝と大形である。壁の立ちあがりは緩やかだが底面は平坦である。堆積土は暗褐色土で粘性、しまりがない。内部に 18 個の小ピットが検出されている。ピット 2、3 および住居外のその他のピットと 47 号住居との関連は不明である。

第 48 号住居跡（第 79 図）　住居跡第 2 群内南側のＣＩの 41 区にあり、50 号住居と隣接する。

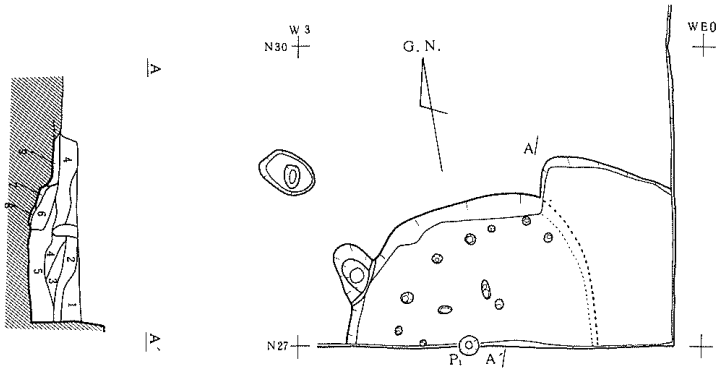
〈平面形・規模〉　南半が発掘区外にあり、また東側がやや掘りすぎているため、プランは不明確だが、胴張りのする方形もしくは円形になるものと推定される。

〈堆積土〉3 層に大別できる。1、3 は暗褐色シルトで多量の焼土・炭を含む。4、6 は黄褐色～明褐色のシルトでロームを多く含む。7、8 は壁ぎわに分布する層で崩落土を含む。

〈壁〉　北側で検出されているのみだが、残存高は 20 数㎝で立ちあがりは明瞭である。

〈床面〉　断面図には示されていないがピット 1 の付近に黒褐色の生活層がみとめられた。床面は東側にやや傾斜する。

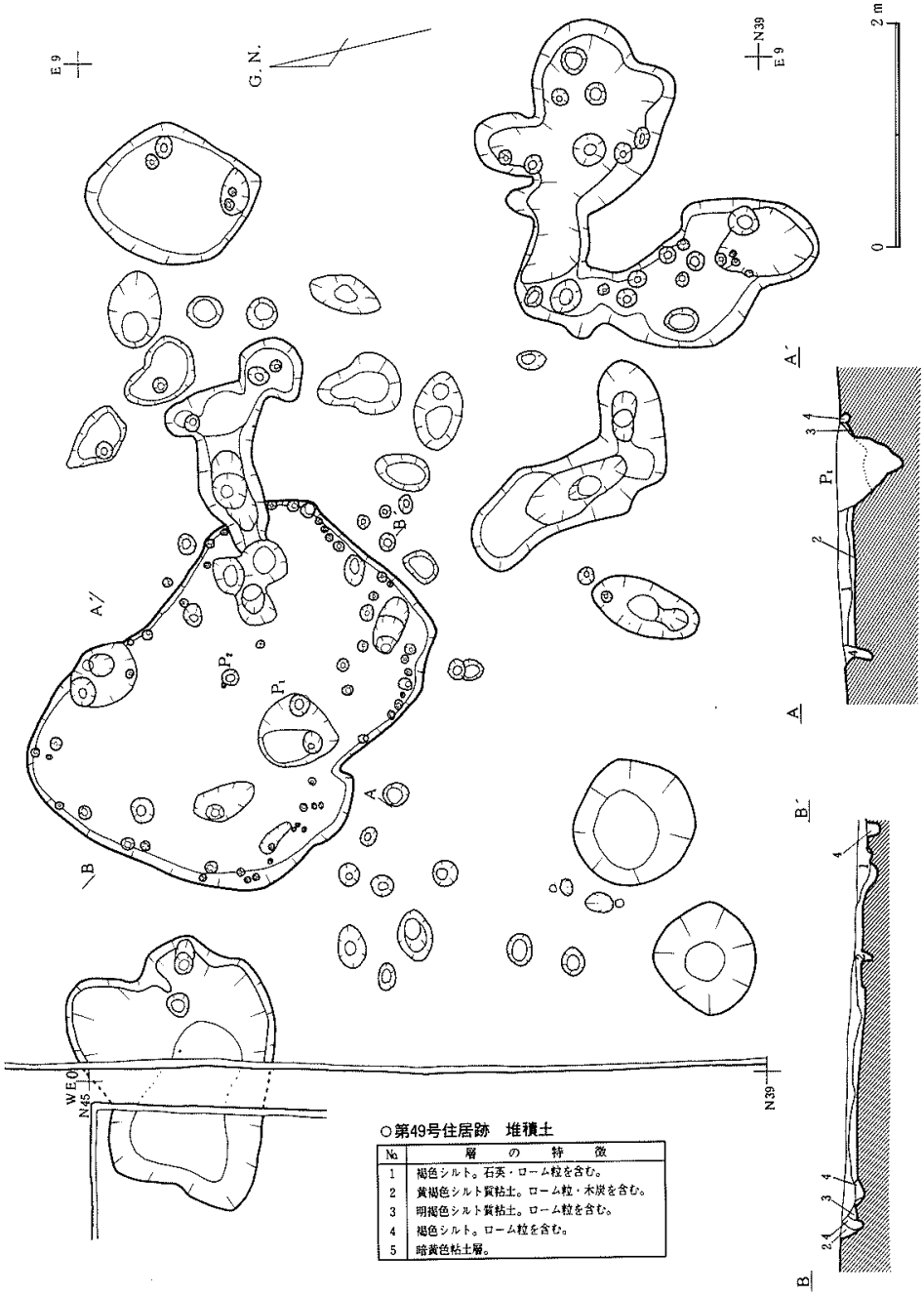
〈柱穴・ピット〉　住居内には 12 個のピットが検出されたが、東側の分布がはっきりしない。ピット 1 は深さ 58 ㎝で堆積土中から握り拳大の石 3 個が出土している。他の小ピットは深さ数 ㎝～十数㎝である。壁直下に巡るピットはないが、周辺部のピットは壁に平行して並ぶような分布を示す。住居北西部に接するピット 2 と住居との関係は不明である。



○第48号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	暗褐色シルト。硬く粘性にとむ。焼土・木炭・ローム・遺物を含む。
2	暗褐色シルト。1より黒く硬い。焼土・木炭を多量に含む。
3	暗褐色シルト。2より硬い。多量の焼土・木炭とロームを含む。
4	明褐色シルト。粘性にとみ非常に硬い。微量の焼土・木炭・ロームを含む。
5	明褐色シルト。粘性があり硬い。多量のロームと焼土・木炭を含む。
6	黄褐色シルト。粘性があり硬い。大量のロームを含む。
7	明褐色シルト。少量のローム・焼土と暗褐色土のブロックを含む。
8	暗褐色シルト。4より黒く粘性にとむ。
9	黄褐色砂質粘土。粘性にとみ硬い。多量のロームを含む。

第79図　第48号住居跡



○第49号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	褐色シルト。石英・ローム粒を含む。
2	黄褐色シルト質粘土。ローム粒・木炭を含む。
3	明褐色シルト質粘土。ローム粒を含む。
4	褐色シルト。ローム粒を含む。
5	暗黄色粘土層。

第80図　第49号住居跡と周辺のピット

第49号住居跡（第80図）　住居跡第2群内東側のＣＤの42、43区に位置する。

〈重複〉　住居内外は大小のピットがありその幾つかと重複する。断面図にかかるピット1は住居より新しい。

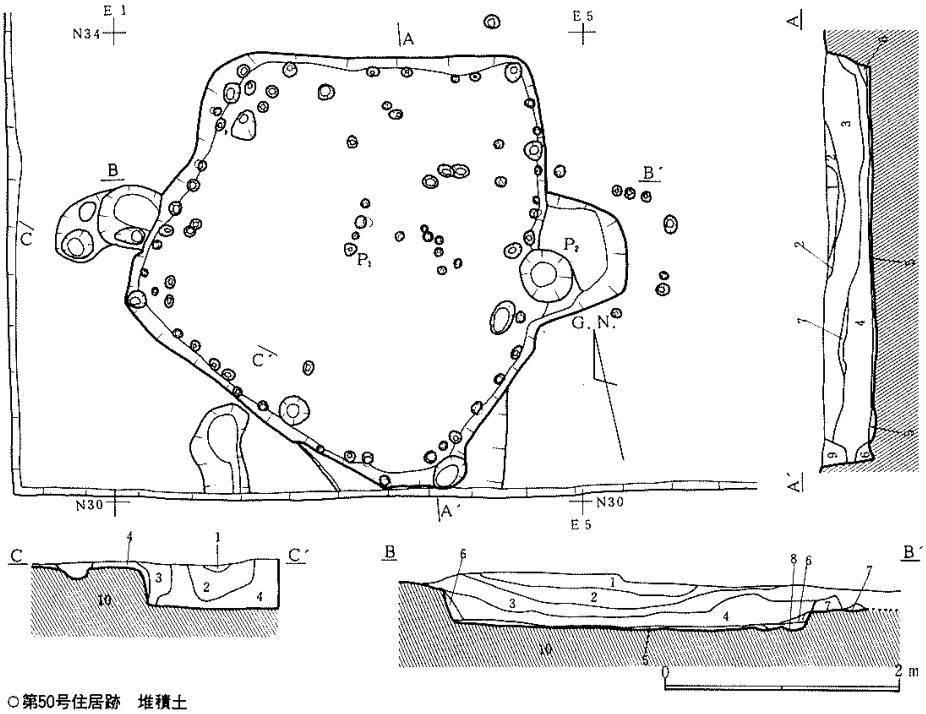
〈平面形・規模〉　3.4m×2.3m程の不整な隅丸長方形である。

〈壁〉　検出された壁は暗黄色粘土で堆積土との境は明瞭ではない。壁の残存高は数cm～十数cmで特に北東部の遺存状態がよくない。

〈床面〉　床面中央部がやや高くなる。

〈柱穴・ピット〉　壁沿いに深さ数cmから20cmの小ピットが並び、とりわけ住居南東部に多い。ピット内には暗黄褐色粘土が堆積する。ピット2は11cmと浅く主柱穴にあたるものは不明確である。住居内外のピット群は分布が不規則であり、また住居の堆積土上より掘りこまれているものがあることから、住居とは関連しないものと考えられる，

第50号住居跡（第81図）住居跡第2群内東側のＣＧ、ＣＨの42、43区に位置する。



○第50号住居跡　堆積土

No.	層の特徴	No.	層の特徴
1	暗褐色シルト。堅い。多量の木炭と焼土・ロームを含む。	6	黄褐色土。ロームを多く含み、粘性があり柔らかい。
2	暗褐色シルト。1よりやや明るく粘性があり堅い。焼土・木炭を多く含む。	7	明褐色土。粘性があり堅くしまる。ロームを多く含む。
3	明褐色粘質土。少量の焼土・木炭・ロームを含む。	8	赤褐色土。柔らかい。焼土・木炭を多量に含む。
4	明褐色粘質土。3より明るく、ローム粒を多く含む。	9	明褐色土。粘性があり堅い。焼土・木炭・ロームを含む。
5	黒褐色粘質土。堅く粘性あり。木炭粒を少量含む。	10	ローム中に明褐色土を含む。粘性があり柔らかい。

第81図　第50号住居跡

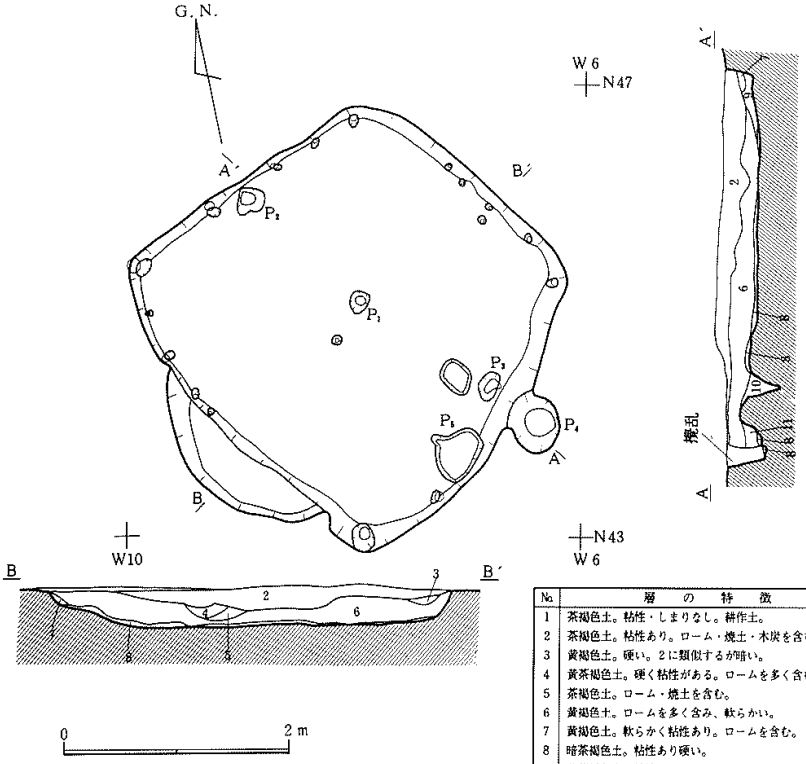
No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	50住－Pit	深鉢 BⅡ2	口縁部～胴部	含む	羽状縄文(RL・LR)	不明		
2	50住－1層	〃	口縁部	〃	短沈線文、押圧縄文(L)	ナデ		
3	50住－3層	〃 BⅡ7	〃	〃	組紐回転文(LLRR)	〃		
4	50住－1層	〃 BⅠd	〃	〃	斜位沈線文	〃		
5	50住－堆積土	〃 BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	〃		
6	50住－1層	〃 BⅡ7	〃	〃	組紐回転文(LLRR)	不明		
7	50住－Pit 2	〃 BⅡ6	口縁部～胴部	〃	葺瓦状撚糸文(L)	ミガキ	波状縁、口縁部内面に軽い段をもつ 胎土に斜長石を含む	7－4
8	50住－1層	〃	胴部	〃	短沈線文、押圧縄文(L)	ナデ		
9	50住－堆積土	〃	〃	〃	半截竹管による横位沈線文、縄文(RL)	不明		
10	50住－2層	〃	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(LR)	ナデ		
11	50住－1層	〃	〃	〃	重層末端ループ文(LR)、縄文(RL)	不明		
12	50住－堆積土	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
13	50住－1層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
14	50住－堆積土	〃	〃	〃	縄文(RL)	〃	土器接合面に縄文施文	
15	50住－2層	〃	〃	〃	木目状撚糸文(L)	ミガキ		

第82図　第50号住居跡出土土器

〈平面形・規模〉　南東方向に開く不整台形を呈する。なかでも東辺は彎曲し1.8×0.8m の張りだし部をもつ。住居の大きさは最大部で3.8×3.3m 程になる。

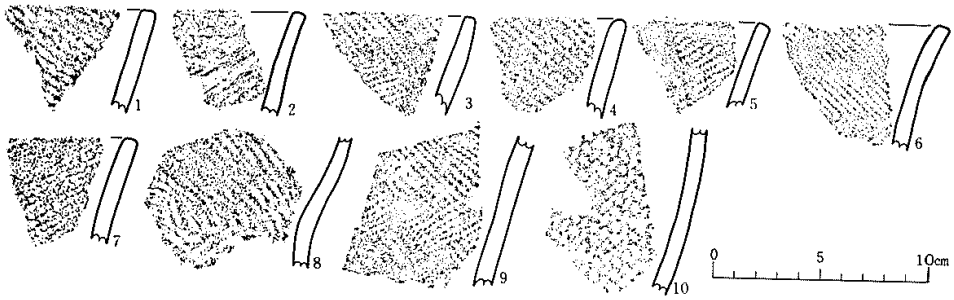
〈堆積土〉　10層に細分される。上部は焼土・木炭を多く含む暗褐色土で、堆積土の下部や壁ぎわの崩落土にはロームの混入がめだつ。床面には黒褐色粘質土が分布する。

〈壁〉　保存がよく、床面からの立ちあがりは垂直に近い。壁の残存高は斜面の上側の北西辺で30cm をこえるが南東辺では十数cmである。



No.	層の特徴
1	茶褐色土。粘性・しまりなし。耕作土。
2	茶褐色土。粘性あり。ローム・焼土・木炭を含む。
3	黄褐色土。硬い。2に類似するが暗い。
4	黄茶褐色土。硬く粘性がある。ロームを多く含む。
5	茶褐色土。ローム・焼土を含む。
6	黄褐色土。ロームを多く含み、軟らかい。
7	黄褐色土。軟らかく粘性あり。ロームを含む。
8	暗茶褐色土。粘性あり硬い。
9	黄茶褐色土。粘性・しまりなし。
10	暗褐色土。粘性あり硬い。木炭を含む。
11	暗褐色土。軟らかい。木炭・ローム粒を含む。

第83図　第52号住居跡

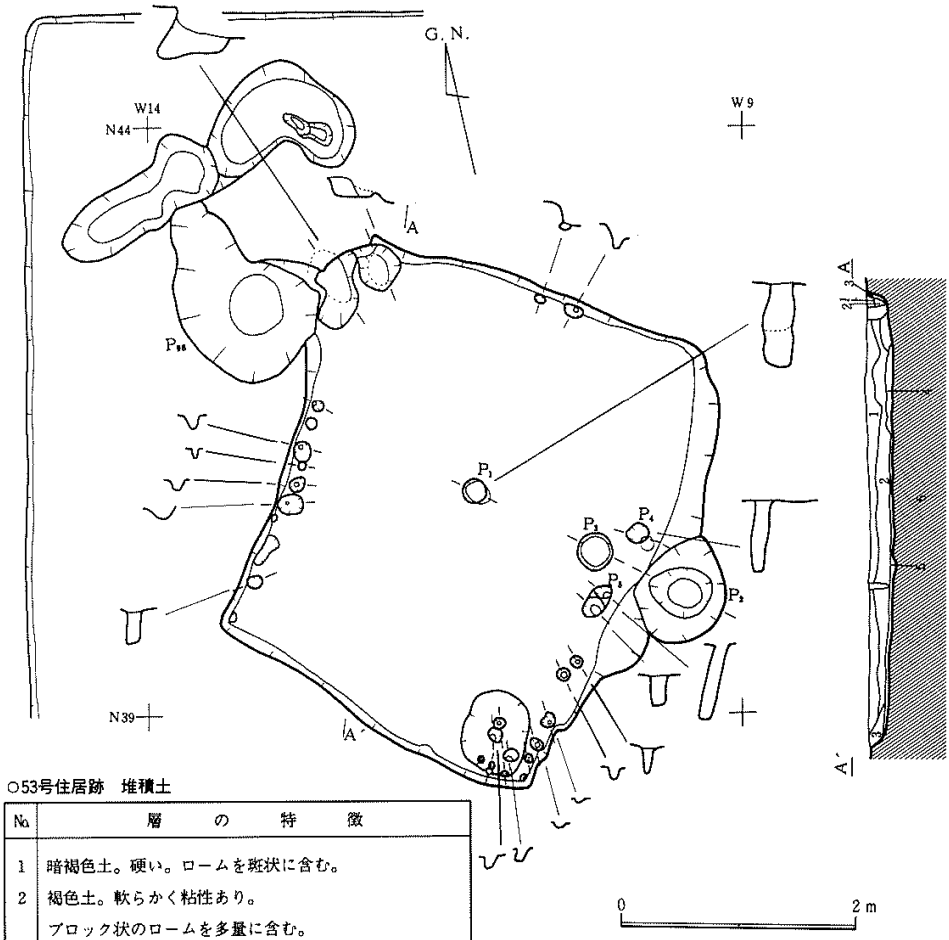


No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	52住－1層	深鉢 BⅡ3	口縁部	含む	重層末端ループ文(RL)、縄文(RL)	不明		
2	52住－1層	〃 BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(LR)	ナデ		
3	52住－1層	〃 BⅡ2	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	不明		
4	52住－1層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	〃		
5	52住－1層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(LR)	ナデ		
6	52住－1層	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
7	52住－堆積土	〃 BⅡ7	〃	〃	組紐回転文	不明		
8	52住－1層	〃	胴部	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
9	52住－1層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
10	52住－1層	〃	〃	〃	組紐回転文(LLLL)	〃		

第84図　第52号住居跡出土土器

〈床面〉　壁ぎわから中央に緩やかな傾斜がある。また床面全体が地形と同様に南東方向にやや下がる傾向がある。東辺の張りだし部は床面より6㎝高い段になる。

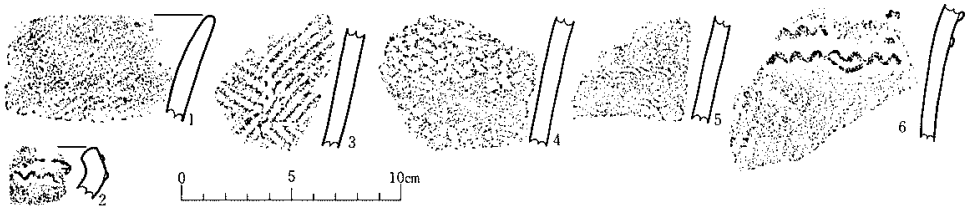
〈柱穴・ピット〉　住居の壁沿いには深さ10㎝前後の小ピットが巡る。住居中央のピット1は深さ52㎝で主柱穴と考えられる。東辺に接するピット2は床面からの深さ24㎝で、堆積土は下部に多量のロームを含む暗褐色土である。東辺張りだし部の外にも8個の小ピットがある。住居外西・南部にもピットがあるが住居との関係は不明である。



○53号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	暗褐色土。硬い。ロームを斑状に含む。
2	褐色土。軟らかく粘性あり。 ブロック状のロームを多量に含む。
3	明褐色土。多量のロームを含み粘性にとむ。
4	黒褐色土。硬く粘性にとむ。微量のロームを含む。
5	黒褐色土。4に類似するが幾分明るい。
6	黄色ローム。地山。

第85図　第53号住居跡



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内　面	備　　考	図　版
1	53住一堆積土	深鉢 B Ⅱ1or2	口縁部	含む	縄文(LR)	ナデ		
2	53住一堆積土	〃	〃		口縁に沿う粘土紐貼付文、波状粘土紐貼付文	不明	波状縁	
3	53住一堆積土	〃	胴　部	含む	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
4	53住一堆積土	〃	〃	〃	組紐回転文(LLLL)	不明		
5	53住一堆積土	〃	〃	〃	S字状沈文	ナデ		
6	53住一堆積土	〃	〃		横位波状粘土紐貼付文、縄文	〃		

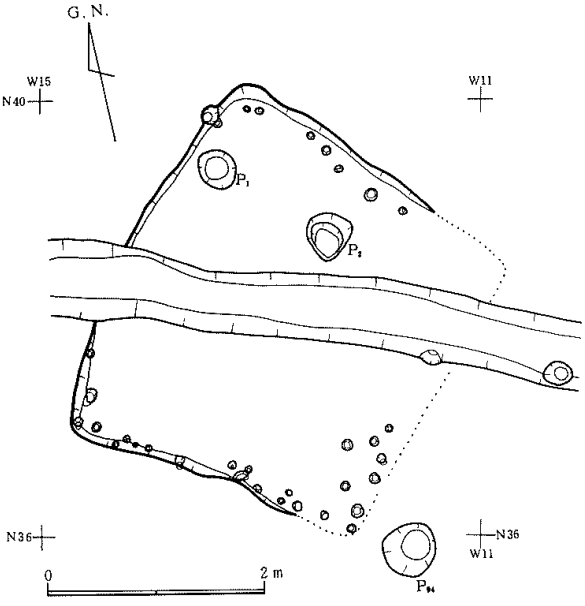
第86図　第53号住居跡出土土器

第52号住居跡（第83図）　住居跡第2群内北側のCC、CDの38、39区に位置する。

〈平面形・規模〉東西方向に開く不整台形状で南西辺に張りだし部がある。規模は3.4×3.1m程である。

〈堆積土〉　11層に細分される。黄褐色～茶褐色土でロームや焼土・木炭を含む。

〈壁〉　壁は床面から70度位で立ちあがる。残存高は20～30cmである。



第87図　第54号住居跡

〈床面〉　検出された床は暗黄褐色土を含む茶褐色シルト質粘土で、堅くしまる。床面は微視的には平坦だが壁から緩やかに傾斜する。またピット1の周囲は人為的に土が盛りあげられていた。南西辺には床面から6、7cm高い段状の張りだし部がある。

〈柱穴・ピット〉　壁沿いに小ピットが点在する。深さはおおむね数cmだが、ピット2、3は43、30cmと深く四隅のピットも10cmをこえる。住居中央のピットも10cmをこえる。住居中央の

ピット1は59㎝と深い。堆積土は焼土・木炭を含む暗黄褐色粘質土で住居の主柱穴と考えられる。南東辺に接して円形のピット4がある。床面からの深さは23㎝で堆積土を住居堆積土と共有することからも住居に付随する施設と考えられる。ピット5は5㎝と浅く堆積土は下部にロームを多く含む暗茶褐色土である。

第53号住居跡（第85図）住居跡第2群内のＣE38区にあり、54、52,51号住居と隣接する。

〈重複〉　北側でピット98と接するが、住居との関連は不明である。

〈平面形・規模〉　3.4m×3.9m程の規模でやや南東に開く不整四角形を呈する。

〈堆積土〉　5層からなり、壁ぎわを中心にロームを多く含む。床面上には薄く黒褐色土が分布する。

〈壁〉　床面からの立ちあがりは明瞭であり、壁の残存高は20～10数㎝である。

〈床面〉　検出された床は地山（ローム）である。床面は垂直下から中央に緩やかに傾斜する。また、南側は北側に比べて5㎝程高い。

〈柱穴・ピット〉東・西辺の南半と北辺に2個と、限られた壁沿いにのみ小ピットが配置される。深さは10㎝かそれ以下で他の住居にみとめられる壁柱穴と同様である。ピット1は深さ約80㎝で主柱穴と考えられる。東辺中央のピット2、3はほぼ円形であり、ピット2は床面からの深さ33㎝、底面はほぼ平坦である。ピット4、5は深さ約60㎝の柱穴でやや内傾する。住居外のピット98は深さ56㎝で堆積土は焼土・炭を含む黒褐色土である。

第54号住居跡（第87図）住居跡第2群内中央のＣＣ、ＣＤの38、39区に位置する。

〈重複〉　東西方向の溝に切られる。

〈平面形・規模〉東壁は検出されていない。破線は床面と思われるロームと小ピットの分布からの推定であり住居は3.1m×3.6mの西側に開く不整四角形になるものと思われる。

〈堆積上〉　断面図、堆積土に関する記録は残されていない。

〈壁〉　遺存状態が悪く残存高は10㎝以下である。

〈床面〉　壁と同様東側の遺存状態がよくない。

〈柱穴・ピット〉　住居内には30数個のピットがある。壁沿いには深さ2～16㎝の小ピットが巡る。北側には2個の円形ピットがあるが住居との関係は不明である。住居中央を溝が貫通するため主柱穴の有無は確認できない。

第55号住居跡（第88図）住居跡第2群内では、最も西よりのＣＧ、ＣＦの35、36区にある。

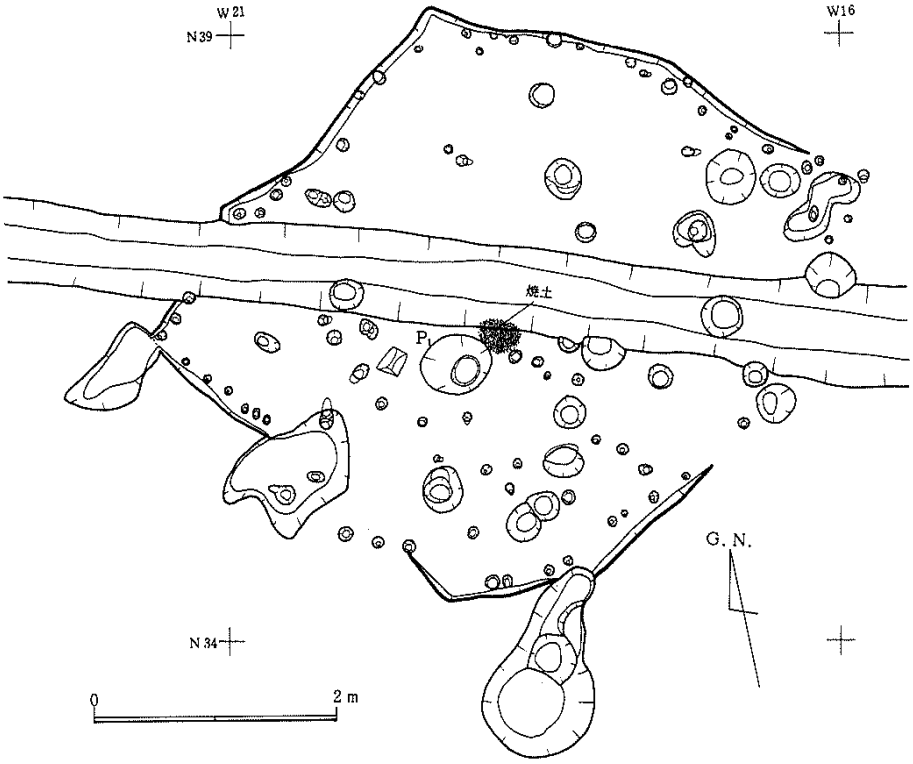
〈重複〉住居中央を東西に切る溝がある。

〈平面形・規模〉一辺が3.3～4.8mの歪んだ四角形を呈する。

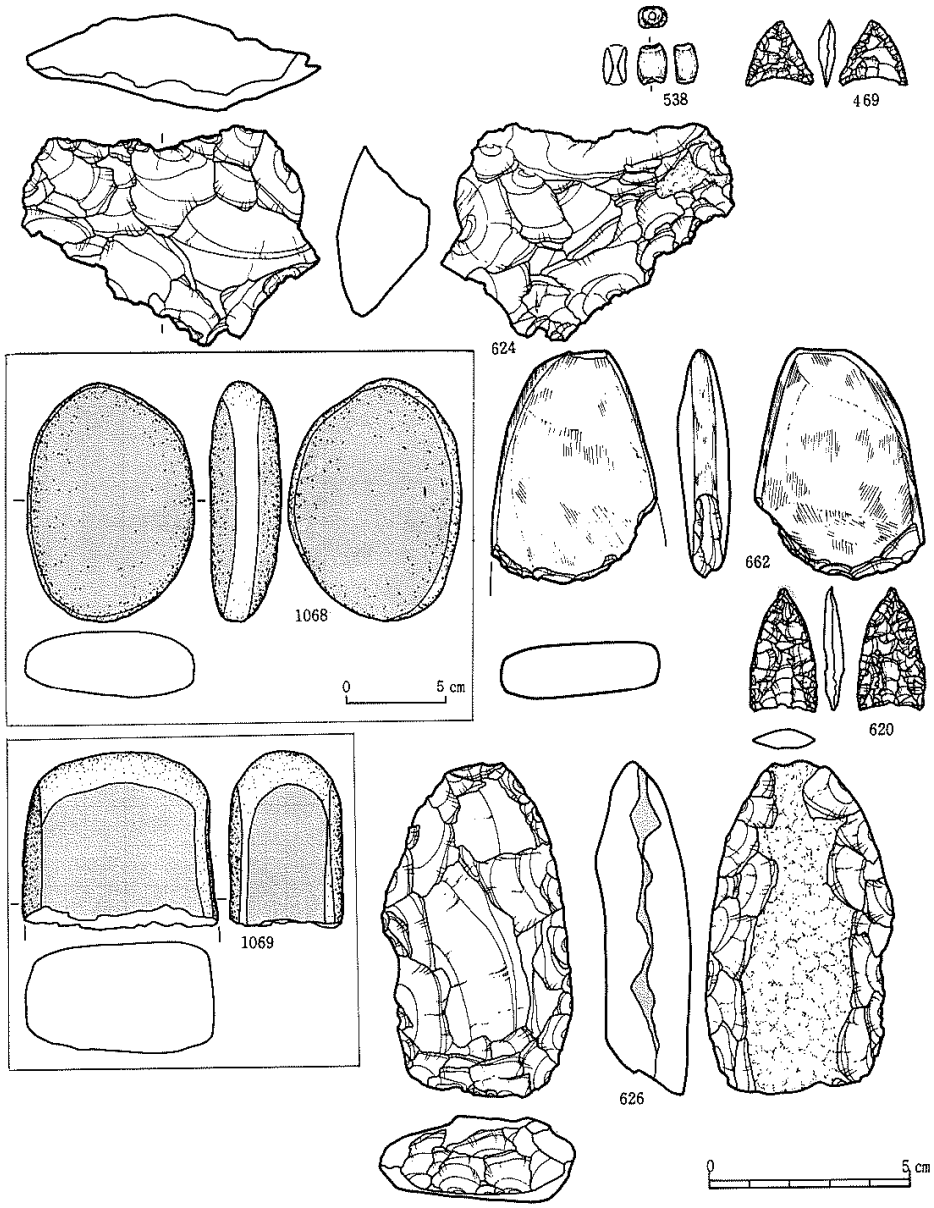
〈堆積土〉耕作による攪乱が著しく、堆積土の十分な観察はできなかった。

〈壁〉耕作による削平のため壁の検出はむづかしかった。残存高は10㎝以下で崩落によって

立ちあがりは緩やかになっている。
〈床面〉　ほぼ水平だが細かい凹凸がみとめられる。
〈柱穴・ピット〉　住居内には100基以上の大小のピットがある。確実に住居の構造に関係すると考えられるのは壁沿いを巡る小ピットである。主柱穴にあたるものがはっきりしないが中央やや南のピット1は深さ80㎝と最も深い。住居南側には径数㎝深さ10㎝弱の小ピットが並ぶように分布しており、住居の拡張の可能性が考えられる。住居内のピットの一つから626の石斧？が出土している（第89図）。
第57号住居跡（第90図）住居跡第3群内西側のＣG49区にあり、64号住居と隣接する。
〈重複〉　64号住居と直接の切り合い関係はないが断面観察から57号住居が古いものと思われる。東側でピット1と重複するが住居との新旧関係は不明である。また輪郭ははっきりしないが住居の拡張あるいは重複が考えられる（第89図）。
〈平面形・規模〉　4.5×3.4m程の東西に長い長方形で南辺に張りだし部をもつ。
〈堆積土〉堆積状態は自然流入を示す。堆積土上部は焼土を多く含み壁際には崩落したロームが多く含まれる。

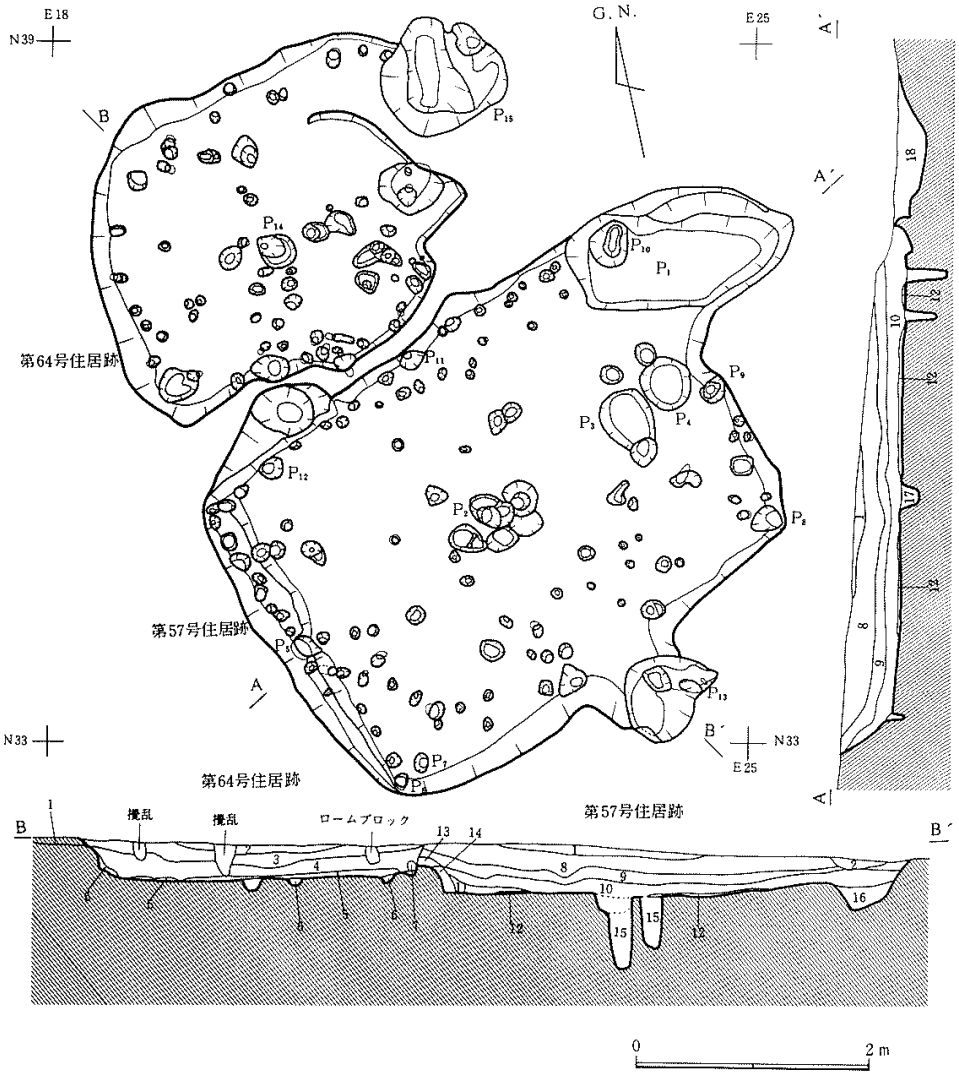


第88図　第55号住居跡



No.	住居跡	層	器材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	備考
624	52住	1 層	石斧もしくは不定形石器				珪化凝灰岩？	
469	52住	1 層	石鏃？	16	16	4	珪質頁岩	
1068	52住	1 層	磨石	118	84	35	石英安山岩	2磨面(S.T.)、特に裏面下半が著しい。
1069	52住	2 層	磨石		95	56	石英安山岩	4磨面(スクリーン・トーンで示す部位)
626	55住	ピット1	石斧？	84	46	23	石英安山岩質凝灰岩	裏面自然面。側縁磨滅(スクリーン・トーン)
662	61住	2 層	磨石斧(小形)	30			凝灰質頁岩	刃部欠損後、剥離再研磨される。
620	55住	1 層	石鏃	30	17	5	珪化凝灰岩	先端磨滅(スクリーン・トーン)
538	52住	床面？	玉	10	7	6	方解石または燐灰石？	

第89図　第52、55、61号住居跡出土石器

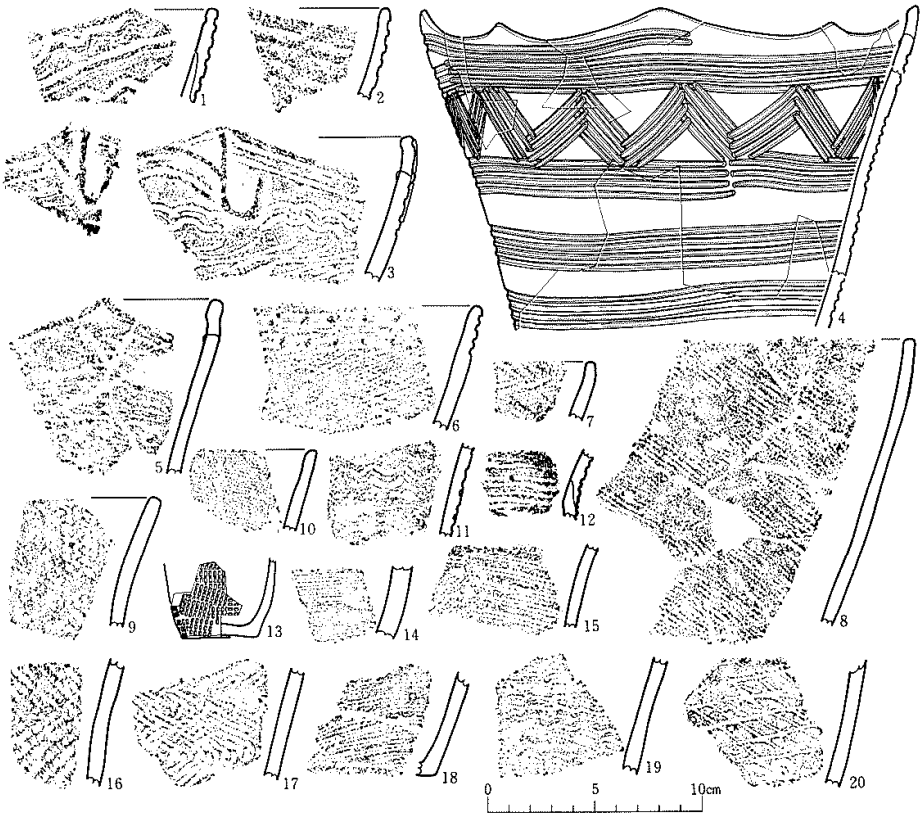


○第57・64号住居跡　堆積土

No.	層	特　徴	No.	層	特　徴
1	表　土	茶褐色土。粘性強い。	10	57住堆積土	暗褐色土。9より明るい。
2	表　土		11	57住堆積土	黒褐色土。
3	64住堆積土	暗褐色土。焼土が点在する。	12	57住堆積土	灰黒色土。粘性強い。炭を多く含む。
4	64住堆積土	黒茶色土。	13	57住堆積土	汚れたローム。
5	64住堆積土	灰黒色土。粘性強い。炭が多い。	14	57住堆積土	黄土。ロームを多く含む。
6	64住堆積土	暗褐色土。ロームを含む。	15	57住堆積土	暗褐色土。下半にロームを多く含む。
7	64住堆積土	黒色土。炭・焼土が多い。	16	57住堆積土	茶褐色土。ロームを多く含む。
8	57住堆積土	黒色土。炭・焼土を多く含む。	17	57住堆積土	黒褐色土。ロームを含む。
9	57住堆積土	暗褐色土。焼土を含む。	18	P1堆積土	茶黄色土。ロームブロックを多く含む。

第90図　第57、64号住居跡

〈壁〉　上部は崩落がめだつが床面からの立ちあがりは明瞭である。残存高は斜面の上位にあたる西側で30数cm、東側では10数cmである。

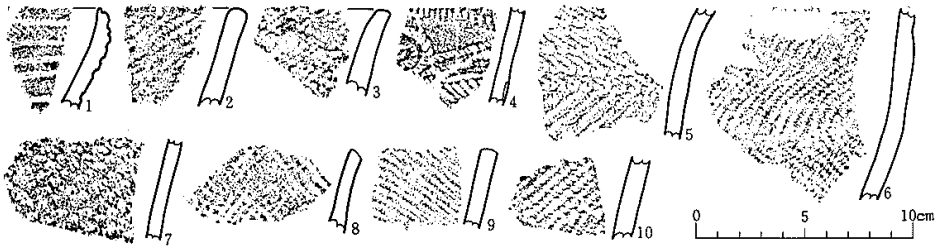


No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図版
1	57住－1層	深鉢 B Ⅰa	口 縁 部	含む	2本一組の工具による波状沈線文・口縁に沿う沈線文	不　明	波状縁 口縁部内面に軽い段をもつ	
2	57住－2層	〃 B Ⅰd	〃	〃	口縁に沿う沈線文	ナ　デ		
3	57住－1層	〃 B Ⅰa	〃	〃	結束組貼付文、半截竹管による口縁に沿う沈線文 コンパス文、撚糸文(L)	〃	波状縁 口縁部内面に軽い段をもつ	
4	57住－1層	〃 B Ⅰa	口縁部～胴部	〃	4本一組の櫛歯状工具による横位沈線文・山形沈線文	〃	波状縁、口縁部内面に軽い段をもつ 胎土に斜長石を含む	6－8
5	57住－2層	〃 B Ⅱ6	口 縁 部	〃	葺瓦状撚糸文(L)	ミガキ	波状縁 口縁部内面に軽い段をもつ	
6	57住－2層	〃 B Ⅰe	〃	〃	半截竹管による押引き文、網目状撚糸文(L)	〃	胎土に斜長石を含む	
7	57住－1層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(RL)・結節文(片結び一順)	ナ　デ	胎土に斜長石を含む	
8	57住－2層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(RL)	不　明		
9	57住－1層	〃 B Ⅱ7	〃	〃	組紐回転文(RRRL)	ナ　デ		
10	57住－2層	〃 B Ⅰf	〃	〃	櫛歯状工具による刺突文	〃	胎土に斜長石を含む	
11	57住－1層	〃	胴　部	〃	櫛歯状工具によるコンパス文・横位沈線文・刺突文	〃		
12	57住－1層	〃	〃	〃	櫛歯状工具による横位沈線文	〃		
13	57住－2層	〃	胴部～底部	〃	櫛歯状工具による連続刺突文	〃	補修土器 胎土に斜長石を含む	
14	57住－1層	〃	胴　部	〃	櫛歯状工具による横位沈線文・波状沈線文	〃	胎土に斜長石を含む	
15	57住－1層	〃	〃	〃	撚糸文(L)	〃		
16	57住－2層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
17	57住－2層	〃	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	不　明		
18	57住－2層	〃	〃	〃	撚糸文(L)	ナ　デ	胎土に斜長石を含む	
19	57住－1層	〃	〃	〃	葺瓦状撚糸文(L)	〃		
20	57住－1層	〃	〃	〃	網目状撚糸文(L)	〃		

第91図　第57号住居跡出土土器

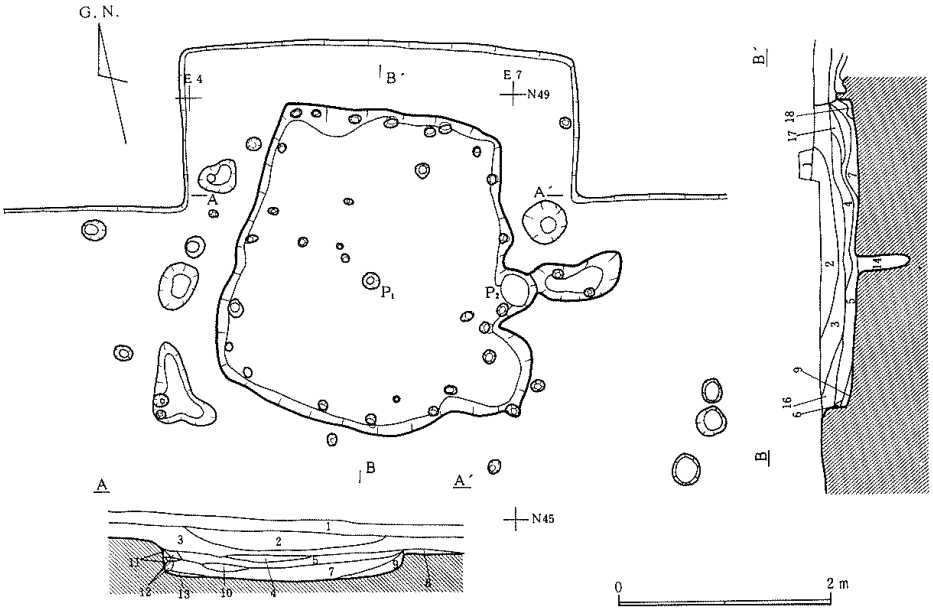
〈床面〉　西辺に沿って幅20数cm、高さ約10cmの段がある。
〈柱穴・ピット〉　壁沿いに小ピットが巡るが南辺と東辺のピット1に接する部分では分布がとぎれる。小ピットの深さは10cm以下が多いが住居の隅や各辺中央には20～30cmのものがある（ピット5、6、7、8、9、10、11、12）。住居中央には深さが40cmをこえるピットが3個あり、殊にピット2は63cmと深く掘り方と柱痕跡が識別できるようである。主柱穴が複数あり、壁柱穴が東辺で二重になる。また、西辺に段があること等から考えて57号住居内に1回以上の拡張があったと思われる。東側のピット3、4と両脇のピットはこの旧住居に伴う可能性がある。57号住居の南辺張りだし部のピット13は床面からの深さ16cmでその配置・堆積土から57住に伴うものと考えられる。

第64号住居跡（第90図）　住居跡第3群内西端のＣＦの48、49区にあり、57号住居と隣接する。
〈重複〉　南側に57号住居があり、直接の切り合い関係はないが、64号住居が57号住居の堆積土を切りこんでつくられていることから64号住居が新しいと考えられる。
〈平面形・規模〉　東側の検討が不充分だが、3.1×2.6m程の大きさで南側に開く四角形を指向するものと思われる。
〈堆積土〉　堆積土はおおむね4層からなり床面上には生活時の堆積層がある。
〈壁〉上部は崩落がめだつが床面からの立ちあがりは明瞭である。残存高は斜面の上位にあたる西側で20数cm、東側では数cmにすぎない。
〈床面〉　壁ぎわがやや高くなるがほぼ平坦である。
〈柱穴・ピット〉　壁沿いに小ピットが巡るようだが分布は不規則である。住居中央やや南のピット14は47cmで最も深い。住居内の小ピットは堆積土5層の下にあり64号住居より古い遺構の存在も考えられる。北辺の延長上にあるピット15と住居との関係は不明である。



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	64住－2層	深鉢	口縁部		横位平行押引き文、矢羽根状短沈線文	不明		
2	64住－堆積土	〃 BⅡ1or2	〃	含む	縄文(LR)	〃		
3	64住－2層	〃 BⅡ7	〃	〃	組紐回転文(LLLL)	ナデ		
4	64住－堆積土	〃	胴部	〃	刻目文、短沈線文、押圧縄文(L)	不明		
5	64住－焼土層	〃	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(LR)	ナデ		
6	64住－焼土層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
7	64住－焼土層	〃	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	〃		
8	64住－2層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
9	64住－焼土層	〃	〃	〃	縄文(RL)	ミガキ		
10	64住－2層	〃	〃	〃	縄文(LR)	不明		

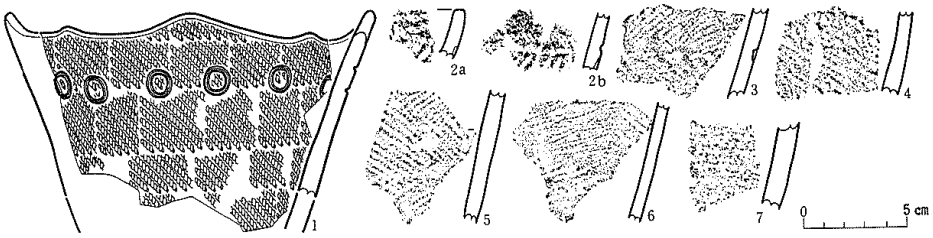
第92図　第64号住居跡出土土器



○第58号住居跡　堆積土

No.	層の特徴	No.	層の特徴
1	表土。茶褐色シルト。軟らかい。	12	黒茶褐色シルト。粘性・しまりあり。ロームを少し含む。
2	明茶褐色シルト。やや粘性・しまりあり。ブロック状のロームを多く含む。	13	明黒茶褐色シルト。粘性・しまりあり。ロームと微量の焼土・木炭を含む。
3	暗茶褐色シルト。しまりあり。ローム・焼土・木炭を含む。	14	暗茶褐色土。ロームをやや多く含む。
4	暗茶褐色シルト。しまりあり。焼土・木炭をやや多量に含む。	15	明黒茶褐色土。粘性あり。ロームを斑点状に含む。
5	明茶褐色シルト。しまりあり。ローム・焼土・木炭を含む	16	明黒茶褐色土。ローム・焼土・木炭を含む。
6	茶褐色シルト。ロームを少し含む。	17	暗茶褐色シルト。3より幾分明るいが明確な違いはない。
7	明茶褐色シルト。粘性・しまりあり。ローム・焼土・木炭を含む。	18	茶褐色土。ロームと微量の焼土・木炭を含む。
8	暗黄褐色シルト。粘性・しまりあり。ロームを多く含む。	19	茶褐色土。ロームと微量の焼土・木炭を含む。
9	黒茶褐色シルト。粘性・しまりあり。ロームを斑点状に含む。	20	明黒茶褐色土。ローム・焼土・木炭を含む。
10	明黒褐色シルト。粘性・しまりあり。ロームと微量の焼土・木炭を含む。	21	ローム(火山灰層)
11	茶黄褐色シルト。粘性・しまりあり。ロームをやや多く含む。		

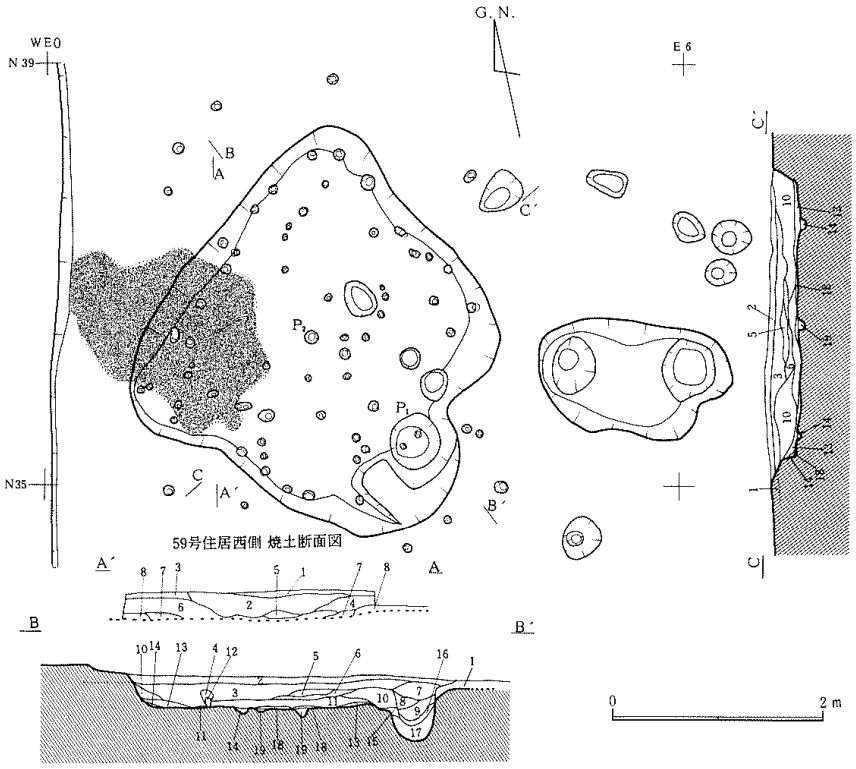
第93図　第58号住居跡



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	58住－堆積土	深鉢 B Ⅰg	口縁部～胴部	含む	竹管による円形刺突文、斜行縄文(RL)	不明	波状縁	
2a・b	58住－堆積土	〃	口縁部及び胴部	〃	短沈線文、押圧縄文(L)	ナデ		
3	58住－2層	〃	胴部	〃	刺突文、縄文(LR)	〃		
4	58住－2層	〃	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、縄文(RL)	不明	胎土に斜長石を含む	
5	58住－1層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
6	58住	〃	〃	〃	撚糸文(R)	〃		
7	58住－3層	〃	〃	〃	組紐回転文(RRRR)	〃		

第94図　第58号住居跡出土土器

第58号住居跡（第93図）　住居跡第2群内東端のＣＢ、ＣＣの43、44区にある。
〈重複〉　住居北側で別の住居？と重複があるようだが調査区外のため詳しい調査がなされ



○第59号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	褐色シルト。硬いがあまり粘性がない。
2	暗褐色シルト。硬いが粘性はない。微量の焼土・ロームと遺物を含む。
3	暗褐色シルト。2より軟らかく粘性にとむ。焼土・木炭・ローム・遺物を含む。
4	明褐色シルト。多量のロームを含む。
5	明褐色シルト。多量の焼土とローム・遺物を含む。
6	暗褐色シルト。2、3より黒い。軟らかく粘性にとむ。焼土・木炭・遺物を含む。
7	褐色土。軟らかく粘性弱い。ロームと少量の木炭を含む。
8	褐色土。6より軟らかく粘性ない。
9	褐色シルト。6、7より黒く硬い。ロームと少量の木炭を含む。
10	褐色土。細かな斑状ロームと遺物を含む。
11	暗褐色シルト。2、3より黒く粘性にとむ。微量の木炭・焼土を含む。
12	褐色シルト。11よりしまりがない。
13	暗褐色土。11より黒く硬い。少量の焼土・ロームを含む。
14	黄褐色シルト。多量のロームを含み粘性にとむ。
15	黄褐色シルト。ローム塊と微量の木炭を含む。硬く粘性にとむ。
16	暗褐色シルト。多量の木炭と少量のロームを含む。
17	褐色シルト。ロームブロックと少量の木炭を含む。軟らかく粘性がない。
18	黒褐色シルト。粘性にとみ硬い。多量の木炭と焼土・ロームを含む。
19	褐色シント。硬く粘性があり、微量のロームを含む。
20	

○第59号住居西側焼土

No.	層の特徴
1	暗褐色シルト。軟らかい。焼土・木炭・石・遺物を含む。
2	赤褐色シルト。軟らかい。多量の焼土と木炭を含む。
3	暗褐色シルト。硬い。少量の焼土・木炭と遺物を含む。
4	明褐色シルト。硬い。骨片と微量の焼土を含む。
5	明褐色シルト。4、6より暗い。焼土をブロック状に含む。
6	明褐色シルト。軟らかく粘性にとむ。微量の焼土・木炭を含む。
7	明褐色シルト質粘土。4,5,6より明るい。硬く粘性にとむ。
8	黄褐色シルト質粘土。ロームを多量に含み、硬く粘性にとむ。

第95図　第59号住居跡

ていない。断面図をみたかぎりでは58号住居が古い。

〈平面形・規模〉　北側は他の遺構に切られるが壁の一部が残存するため住居のプランを把握することができる。58号住居は南隅に張りだし部をもつ不整四角形で大きさは3m×2.6m程である。

〈堆積土〉　十数層に細分されているが、上部に焼土や木炭を含む土があり、壁ぎわや床面の近くにはロームを多く含む土が分布する傾向がある。堆積の状態から自然流入によることが考えられる。

〈壁〉　壁は3層から掘りこまれているようであり、床面から急角度で立ちあがる。残存高は西側で約30〜40cm、東側で20cm前後である。

〈床面〉　微視的には平坦だが、床面中央部は低く壁ぎわがやや高い。床面上には厚さ2、3mmの暗茶褐色粘質土層があり、中央やや北よりには木炭が50cm四方にわたってみとめられる。

〈柱穴・ピット〉　住居中央には深さ50cmのピット1がある。また壁沿いには深さ10cm前後の小ピットが一辺に6、7個づつ不規則に並ぶ。南東壁に接して深さ24cmのピット2がある。その他住居内外にも不定形のピットが不規則に分布するがその性格は不明である。

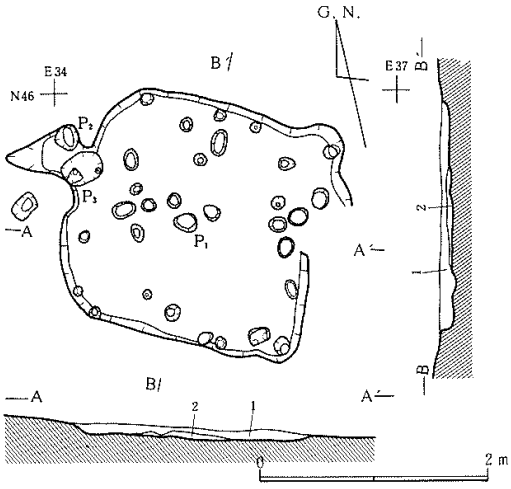
第59号住居跡（第95図）　住居跡第2群内東側のＣＦ、ＣＧの42、43区にある。

〈平面形・規模〉　3.4m×3.2m程の不整な四角形を呈する。

〈堆積土〉　堆積土より上になるが住居西側に焼土層がある。炉であるかどうかは不明である。遺構検出面は1層だが掘りこみ面はさらに上の可能性がある。堆積土は十数層に細分される。2、3は暗褐色シルトで住居内全体に分布する。5、6は住居中央に分布し焼土・炭化物を多く含む。7〜9、16、17はピット1堆積土である。10以下の層にはロームがめだつ。18の黒褐色シルトは床面上に薄くレンズ状に堆積する。

〈壁〉　壁は床面から急角度で立ちあがる。残存高は斜面の上の西側では30cmをこえるが東側では十数cmである。

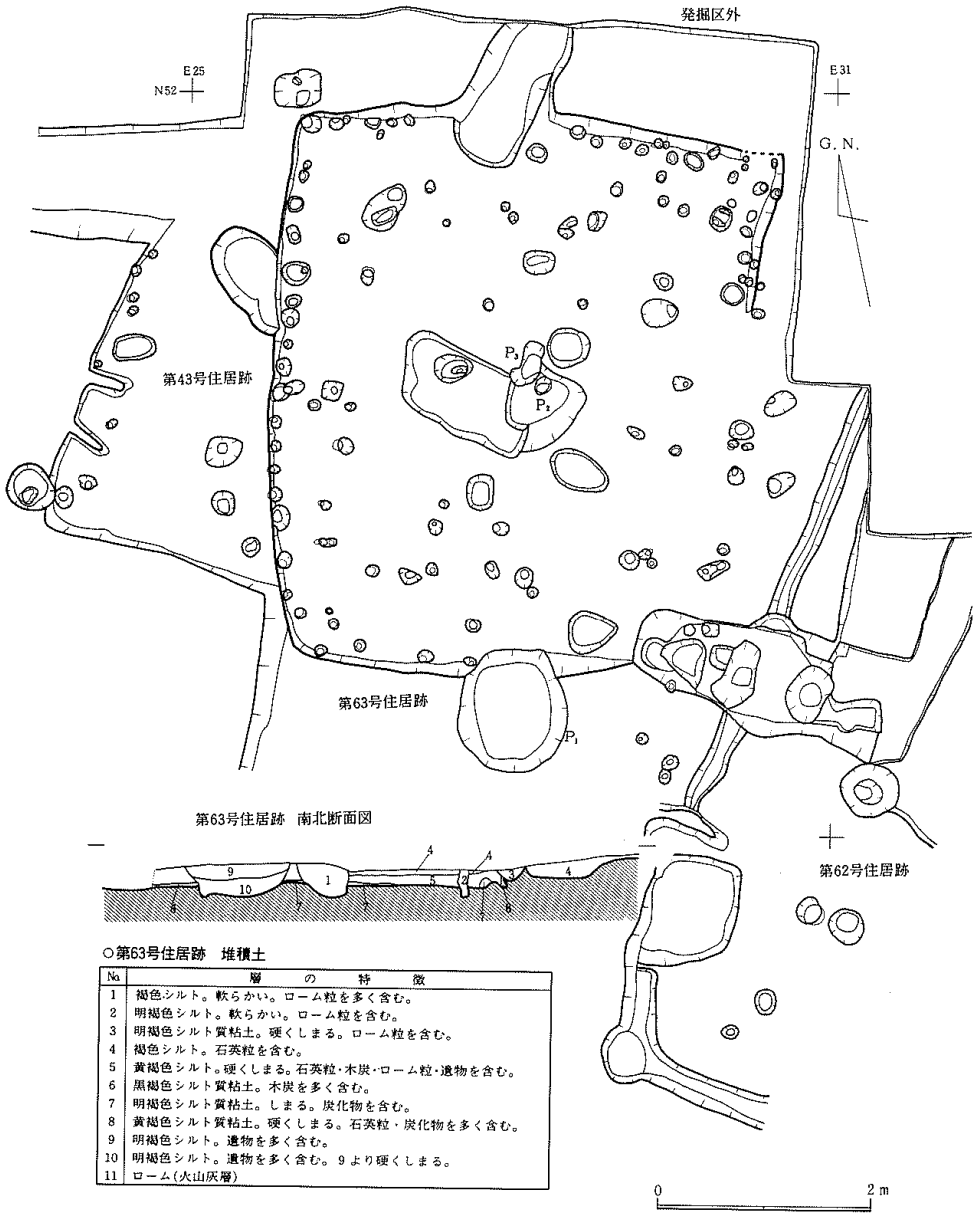
〈床面〉　検出された床は地山(ローム)でその直上に18の生活層が堆積する。



○第60号住居跡　堆積土

No.	層の特徴
1	暗褐色土。粘性はないがしまりあり。霜降り状にロームを含む。
2	黄褐色土。粘性・しまりあり。斑点状にロームを含む。
3	暗褐色土。粘性・しまりあり。1よりロームを多く含む。

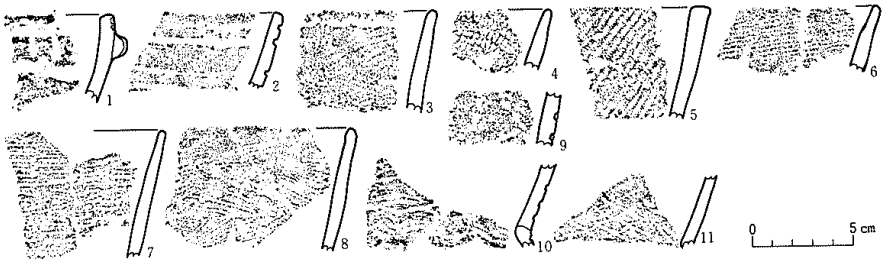
第96図　第60号住居跡



○第63号住居跡　堆積土

No	層の特徴
1	褐色シルト。軟らかい。ローム粒を多く含む。
2	明褐色シルト。軟らかい。ローム粒を含む。
3	明褐色シルト質粘土。硬くしまる。ローム粒を含む。
4	褐色シルト。石英粒を含む。
5	黄褐色シルト。硬くしまる。石英粒・木炭・ローム粒・遺物を含む。
6	黒褐色シルト質粘土。木炭を多く含む。
7	明褐色シルト質粘土。しまる。炭化物を含む。
8	黄褐色シルト質粘土。硬くしまる。石英粒・炭化物を多く含む。
9	明褐色シルト。遺物を多く含む。
10	明褐色シルト。遺物を多く含む。9より硬くしまる。
11	ローム(火山灰層)

第97図 第63号住居跡



No.	出土遺構・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内　面	備　　考	図　版
1	63住－1層	深鉢 B Ⅰi	口縁部	含む	口縁に沿う隆線文、刺突文(隆線上)、刺突文	ナ　デ		
2	63住－1層	〃 B Ⅰe	〃	〃	半截竹管による押引き文	不　明		
3	63住－3層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(LR)・結節文(両結び一逆)	ナ　デ		
4	63住－1層	〃 B Ⅱ1or2	〃	〃	縄文(RL)	〃	胎土に斜長石を含む	
5	63住－2層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(LR)	〃		
6	63住－堆積土	〃 B Ⅱ6	〃	〃	撚糸文(L)	不　明		
7	63住－2層	〃 B Ⅱ6	〃	〃	葺瓦状撚糸文(L)	ナ　デ	胎土に斜長石を含む	
8	63住－1層	〃 B Ⅱ6	〃	〃	木目状撚糸文(L)	〃	口縁部内面がややはり出す 胎土に斜長石を含む。	
9	63住－堆積土	〃	胴　部	〃	刺突文	不　明		
10	63住－2層	〃	〃	〃	波状沈線文	〃		
11	63住－1層	〃	〃	〃	網目状撚糸文(L)	ナ　デ		

第98図　第63号住居跡出土土器

〈柱穴・ピット〉　壁沿いには20数個の小ピットが巡る。深さは10㎝以下で堆積土は褐色土である。ピット2は70㎝と深く主柱穴と考えられる。住居内の小ピットの多くは堆積土が明褐色土で18層下で検出されていることから64号住居前のものであろう。南東壁には床面からの深さ37㎝のピット1があり堆積状況から住居に伴うことがわかる。住居外の大小のピットと住居との関連は不明である。

第60号住居跡（第96図）　住居跡第3群内のＣＣ、ＣＤの53区に位置する。

〈平面形・規模〉　北東壁が一部不明だが一辺2.1㎡の隅丸方形を呈すると思われる。

〈堆積土〉　堆積土は3層からなるが3層は断面図にあらわれていない。2、3層にはロームが含まれる。

〈壁〉　壁面は崩落しており立ちあがりは緩やかで、残存高は10㎝以下である。

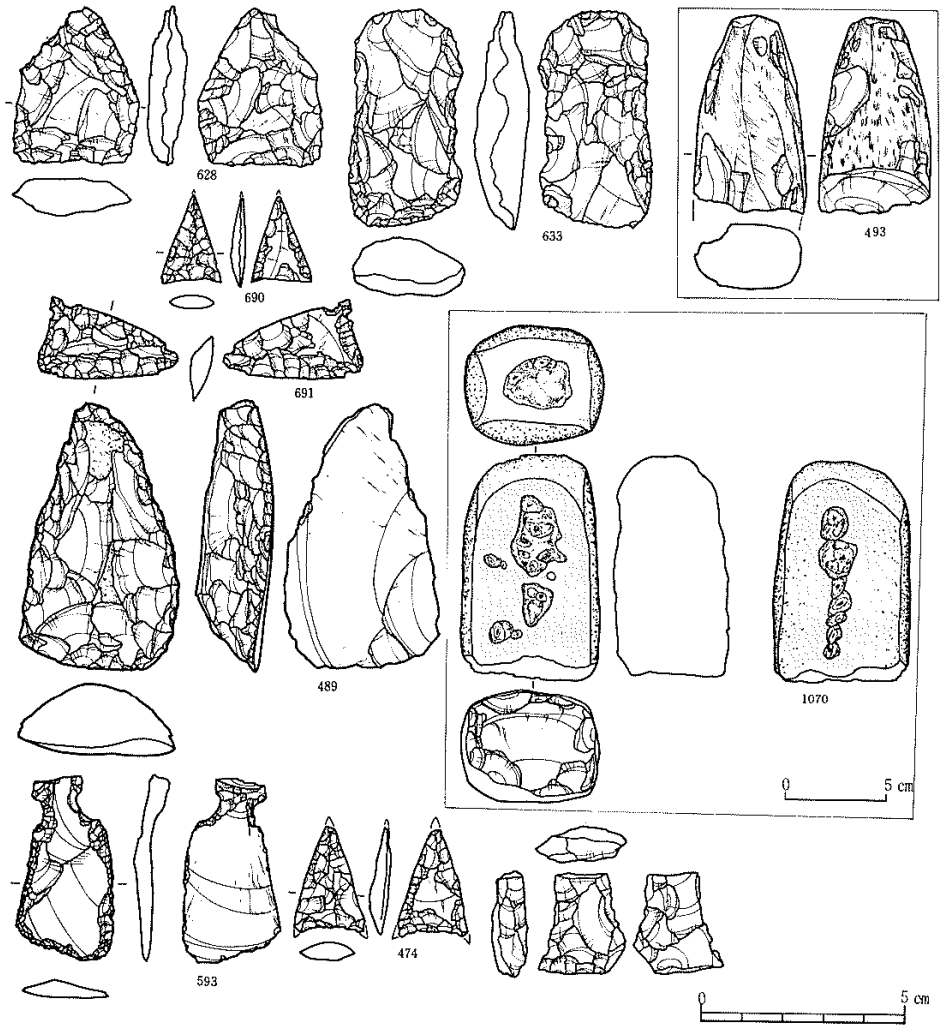
〈床面〉　床面は暗褐色シルトからなり堅くしまっている。微地形の傾斜と同様に東側がやや低くなる。

〈柱穴・ピット〉　住居内外に三十数個のピットがある。住居の四隅と壁沿いには深さ10㎝程の小ピットがあるが、その分布は不規則である。主柱穴も不明確でピット1は住居中央にあるが15㎝と浅い。住居内の小ピットはピット2、3が20㎝をこえるのを除いて15㎝以下である。

第63号住居跡（第97図）住居跡第3群内北側のＣＢ、ＣＣの50、51区に位置する。

〈重複〉西側、南東部において43、62号住居と重複し、これらに切られる。

〈平面形・規模〉東辺の南半が不明だが、南北5.4㎡、東西4.5㎡の長方形になると考えられ



番号	住居跡	層	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	備考
628	56住	2層	不定形石器	39	31	10	珪化凝灰岩	側縁に弱い磨滅(スクリーン・トーン)
633	56住	1層	篦状石器	54	28	14	珪質頁岩	ステップ・フラクチュアがめだつ。
493	57住	1層	磨石斧？		54	33	細粒凝灰岩	剥離整形後、研磨。未製品か？
690	57住	1層	石鏃	(22)	15	4	珪質頁岩	
691	57住	1層	石匙？	35	20	6	珪質頁岩	石鏃→石匙への再加工か？
1070	57住		磨凹石	111	67	55	珪質頁岩	4磨面(S.T.)一端が剥離整形される。焼けている。
489	57住	1層	篦状石器	66	37	18	珪質頁岩	
593	57住	埋土1層	石匙	45	24	6	珪質頁岩	
474	63住	1層	石鏃	26	17	4	珪化凝灰岩	
1071	63住		両極剥離痕ある石器	26	22	9	黒躍岩	

第99図　第56、57、63号住居跡　出土石器

る。

〈壁〉　遺存状態が悪く残存する壁高は10～20cmである。

	石鏃	石匙	石錐	石錐	尖頭器等	両極石器	石核	磨製石斧	打製石斧	磨石	磨凹石	石皿	装飾品等	不定形石器	剥片等	計	備考
1住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	9	
2住	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	13	17	
4住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	
5住	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	
6住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	19	21	
7住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	24	26	
9住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	11	
9住東	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	
10住	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	9	11	
11住	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	21	
13住	1	1	0	1	1	0	0	1	0	4	0	0	0	4	42	55	
14住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	3	5	玦状耳飾
15住	3	3	0	1	0	0	0	0	0	11	1	1	0	6	90	116	
16住	0	0	1	2	0	0	0	0	0	7	0	2	0	2	19	33	
17住	3	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	72	83	
20住	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
22住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	8	11	線刻礫
23住	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	16	21	
23住西	0	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4	
24住	0	4	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	4	25	36	住居No.混乱
25住	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	13	17	
26住	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	
27住	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
29住	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	
30住	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
31住	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	
32住	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	
34住	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
39住	1	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	0	8	39	53	
40住	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	6	
41住	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	8	
42住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	11	13	
43住	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	19	25	
44住	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	46	49	
45住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	
46住	4	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	52	61	
47住	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	63	69	
48住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	3	
49住	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	12	14	
50住	0	2	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	17	26	
51住	2	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	20	32	
52住	2	2	1	0	0	0	1	0	0	4	0	1	1	3	33	48	
53住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9	10	
54住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	
55住	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	7	
56住	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	13	17	
57住	5	6	0	1	0	2	0	1	0	4	3	0	0	7	60	87	
60住	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
61住	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	7	
62住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	17	19	
63住	1	1	1	0	0	2	1	0	0	1	0	0	0	6	39	52	
64住	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	5	8	
66住	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	
67住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
ピット18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
ピット20	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	40住東
ピット24	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
ピット46	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
ピット47	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	
ピット51	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
ピット68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	
ピット71	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
ピット 201	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	
ピット 202	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	
ピット 205	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
ピット 206	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	
ピット 208	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
ピット 209	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	4	
	38	46	15	10	4	4	4	5	0	53	5	6	3	79	910	1,182	

第１表　今熊野遺跡　遺構出土の石器

〈床面〉　西側に比べて東側がやや下がる傾向がある。
〈柱穴・ピット〉　住居内には大小のピットが数多くみとめられるがその中には堆積土上より掘りこまれているものが含まれる。確実に住居に伴うと考えられるのは壁沿いの小ピット列と南辺に接するピット１である。壁柱穴と思われる小ピットは深さが10㎝前後と浅い。ピット１は床面からの深さ25㎝で底面は平らである。主柱穴は判然としないがピット2、3が24、41㎝とやや深い。住居内小ピットの一部は方形に並ぶようにもみえることから建て替えの可能性を指摘しておきたい。

2　ピット

住居跡より規模の小さい竪穴状の遺構をピットとした。土壙とピットの区別はせず原則としてこれらをすべてピットとよぶ。今熊野遺跡では約80基のピットが出土している（第100、101図、第2表）。

調査の時点で、第2住居跡群の西側すなわち北台台地頂部平坦面と、第2住居跡群内、それから第2住居跡群の東側に多数の落ち込みがみとめられた。そのなかでも台地頂部平坦面には整形で壁が立ち、深さがある点で人為的なピットと考えられるものが多い（第101図）。また、住居跡周辺に単独で分布するものにも明かに人為的なピットがある。

堆積土中に含まれる遺物から所属時期が推定できるピットは以下のとおりである。

P90……大木１式期　P18、207……大木２ａ式期　P51、201、202、204……縄文前期
P24、25、26、45、47……縄文時代晩期（大洞A’？）

縄文時代前期のピットは円形を基調とする。P18は径2㎡近い大形のピットだが、これを除けば、径30～80㎝、深さ数十㎝のものが多い。壁は垂直に近いものとやや緩やかに傾斜するものがある。縄文晩期のピットは円形で径1㎡前後、深さ25～65㎝で、壁が垂直に近いものあるいはP24のように全体形がフラスコ状になるものがある。

縄文前期と晩期のピットには規模に違いがみられるので、遺物を出土しないピットについてもある程度その所属時期が推定できる。

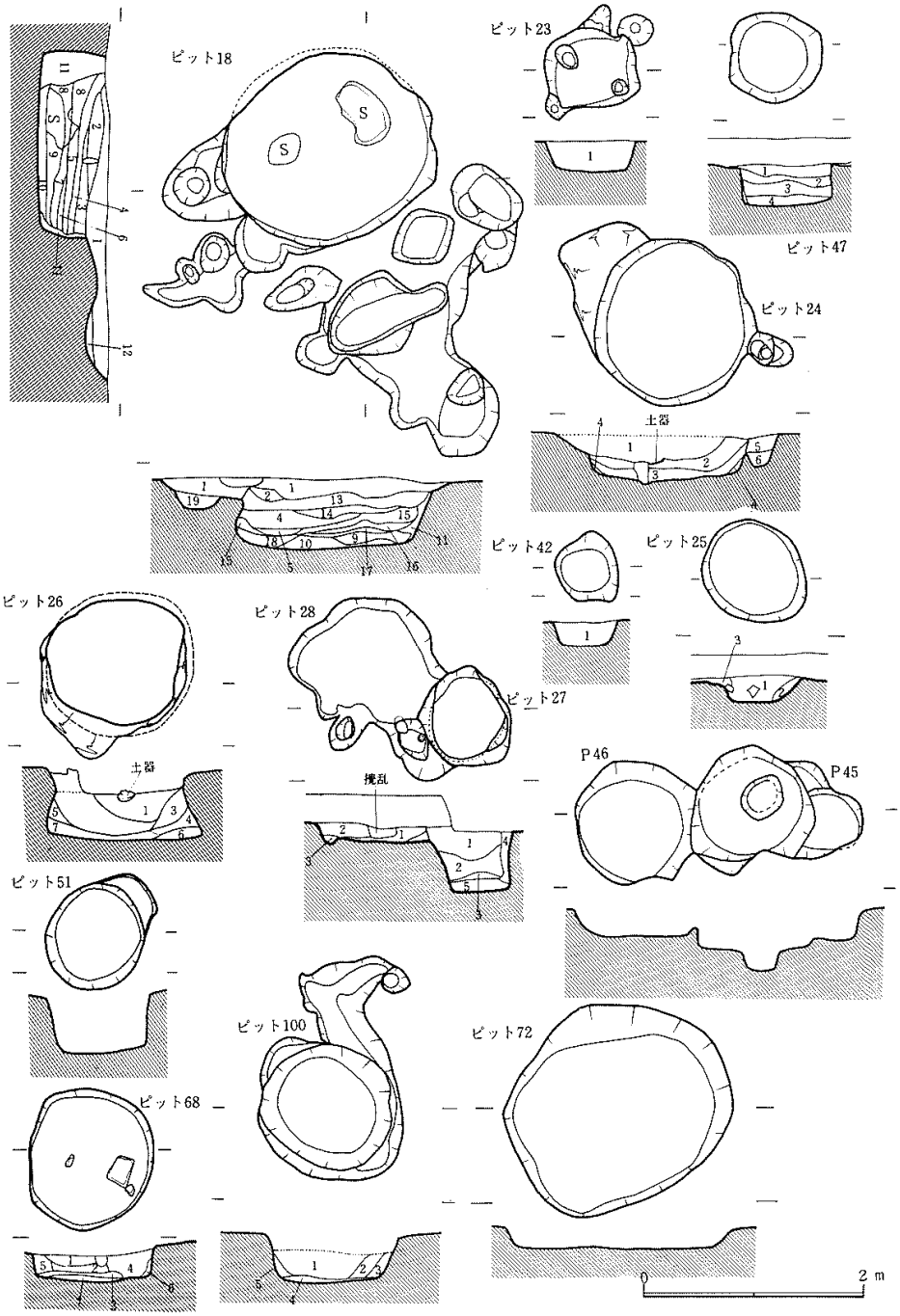
○縄文前期に属すると思われるピット……P20、22、23、32、36、37、41、42、44、49、50、54、57、58、59、61、65、66、71、72、76、82、85
○縄文晩期に属すると思われるピット……P27、28、31、46、68、100、101

前期に多い小形のピットには、ピットの周囲や底面に小ピットを有するものがある。

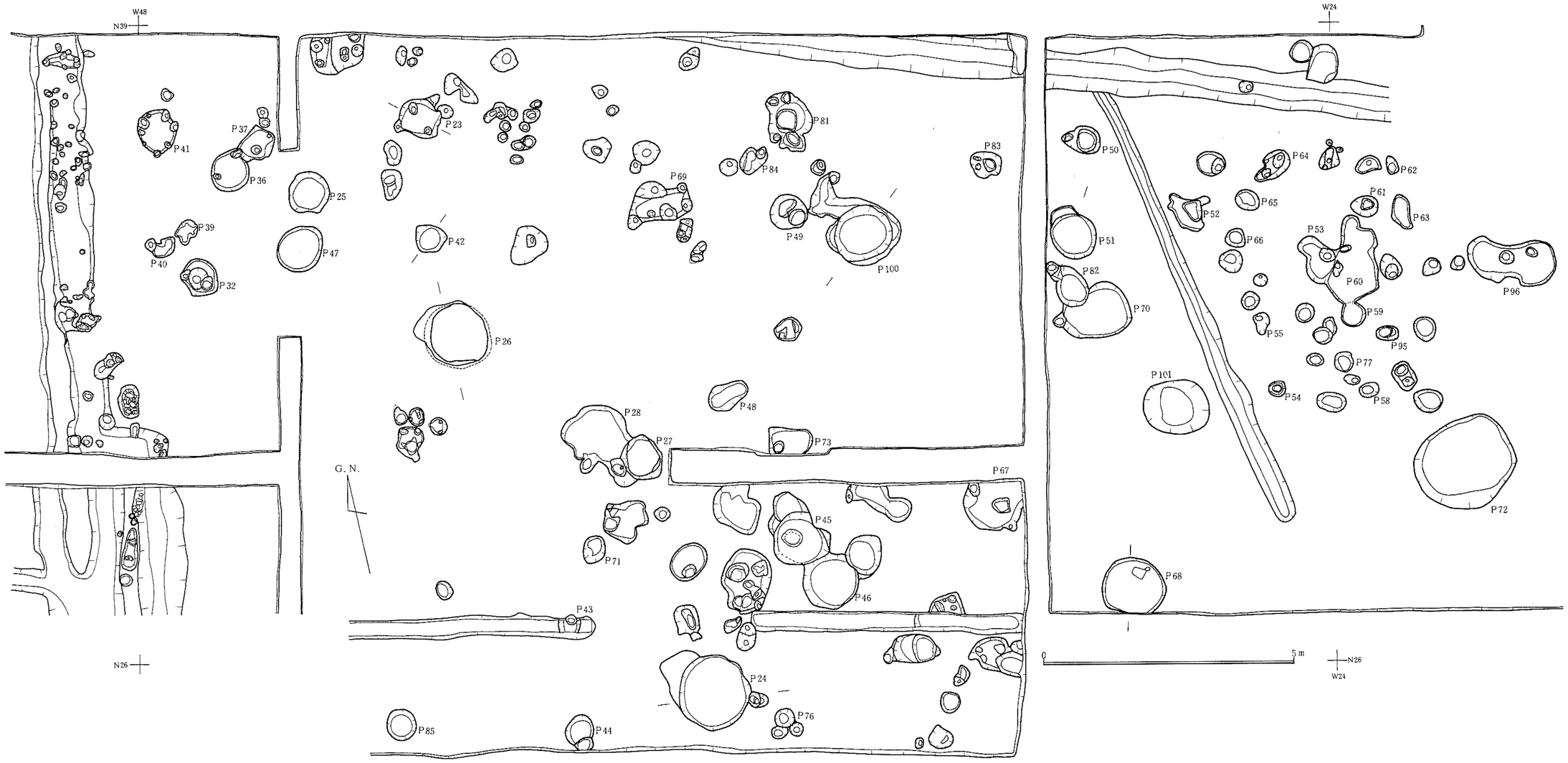
P23、42は堆積土中より、くるみ・栗・どんぐり等を出土している。また、P18、67の底面

No.	位置	平面形	平面規模(m)	深さ(cm)	壁	底面	備考
18	CH36	楕円形	1.9×1.7	60	直	平坦,底面やや上に大石2個	壁の崩落土、上部に焼土・炭を含む。堆積土中より土器片、不定形石器。
19	CD42	不整形		31	急	平坦、ピットあり	
20	CF56	楕円形	2.0×1.7	81	急	やや北東に下る	40住を切り、溝に切られる。堆積土中より土器片、石鏃。
22	CJ19	卵形	0.7×0.6	11	急	やや北東に下る	黄褐色シルト、石英粒を含む。土器片・石器出土。
23	CF27	隅丸方形	0.8×0.7	30	急	小ピット3基あり	黒色土（パミスを含む）。くるみ、くりを多く出土。
24	CJ29	楕円形	1.5×1.4	44	直	平坦	石鏃出土。
25	CG27	円形	0.8×0.8	25	急	平坦	土器片出土。
26	CH28	不整円形	1.1×1.2	65	急	平坦	土器片出土。
27	CH29	不整円形	0.9×0.8	56	急	平坦	ピット28を切る。
28	CH29	不整円形	1.2×1.2	17	急	平坦	ピット27に切られる。
29	CJ19	細長い円形	0.9×0.4	13	緩	やや平坦	堆積土はピット20と同じ。
30	CJ19	楕円形	0.3×0.3	16	緩	やや平坦	明褐色シルト、木炭粒、石英を含む。
31	CK20	不整円形	1.4×1.1	20	急	平坦。ピット大1、小2あり	
32	CG26	不整円形	0.8×0.7	17	急	ピット3基あり	
33	CK24	不整形	0.9×0.7	31	緩	小さい。ピット1基あり	
34	CK24	不整形	2.9×1.1	16	急	平坦、ピット2基あり	
36	CF26	円形	0.8×0.8	19	急	平坦、小ピットあり	
37	CF26	不整円形	0.8×0.6	20	急	平坦、小ピットあり	
39	CG26	不整形	0.5×0.4	18	急	平坦	
40	CG26	不整形	0.5×0.3	18	急	平坦	西側のピットと重複。
41	CF26	円形	0.9×0.8	14	急	底面周辺部に小ピット7基あり	
42	CG27	不整円形	0.6×0.6	25	急？	平坦	黒色土（パミスを含む）。くるみ・栗・どんぐりを出土。
43	CJ28			24			溝中にある。
44	CJ28	楕円形	0.6×0.5				
45	CI30	不整円形	1.1×0.9	38	急	ピットあり	
46	CI30	円形	1.1×1.1	26	急	平坦	剥片出土。
47	CG27	卵形	1.0×0.9	34	急	平坦	磨石出土。
48	CH29	不整形	0.8×0.6	20	緩	平坦	
49	CG30	円形	0.7×0.7	33	緩	小ピットあり	
50	CF32	不整円形	0.6×0.4	34	急	小ピット2基あり	
51	CG32	不整円形	0.8×0.6	55	急	平坦	剥片出土。
52	CG33	不整形	0.9×0.7	30	急	小ピットあり	
53	CG33	不整形	1.0×0.7	16	急	小ピットあり	
54	CH33	卵形	0.3×0.4	36	急	小ピットあり	
55	CH33	不整形	0.4×0.3	44	緩		
57	CH34	不整円形	0.4×0.4	13	緩	平坦	
58	CH34	楕円形	0.4×0.3	37	緩	平坦	
59	CG34	円形	0.5×0.5	32	急	南側が低い	
60	CG34	不整形	1.8×1.0	10		小ピット3基あり	
61	CG34	卵形	0.5×0.4	14		三角形のピットあり	
62	CF34	不整形	0.4×0.2	16	緩	平坦	
63	CG34	不整形	0.7×0.3	6		平坦	
64	CF33	不整形	0.8×0.5	14		小ピット4基あり	
65	CG33	楕円形	0.5×0.4	17	緩	平坦	
66	CG33	不整円形	0.4×0.3	38	緩	円形ピットあり	
67	CI31	不整形		21		平坦	底面より平石。
68	CI32	円形	1.2×1.2	36	直	平坦	不定形石器、剥片出土。
69	CG29	不整形	1.3×0.6	15		小ピットあり	周辺に小ピットあり。
70	CG32	不整形	1.2×0.8	25	急	小ピットあり	
71	CI29	不整円形	0.6×0.4	19	緩		石鏃出土。
72	CH34	不整円形	2.1×1.8	18	緩	ほぼ平坦	
73	CH30	隅丸長方形	0.9×0.5	11		小ピットあり	
76	CJ30	円形	0.4×0.4				3基のピットからなる。
81	CF30	不整形	1.5×0.9	25		複数基のピットあり	
82	CG32	卵形	0.6×0.5	23		平坦	
83	CF31	不整形	0.6×0.5	19	緩	小ピット3基あり	
84	CF30	不整形	0.6×0.4	19		小ピットあり	
85	CJ27	円形	0.6×0.6	26	急	平坦	
88	CD44	不整四角形	1.5×1.3	27		平坦、小ピットあり	不定形石器、剥片出土。
89	CE42	円形	1.1×1.1	46	緩	平坦	土器片出土。
90	CE42	円形	1.0×0.9	31	緩	平坦	土器片出土。
95	CH34	楕円形	0.5×0.3	24		西側が一段さがる	
96	CG35	不整形	1.8×0.9	18		小ピット2基あり	
100	CG30	楕円形	1.2×1.1	45	急	平坦	焼土・木炭等を含む。土器片出土。
101	CH32	楕円形	1.3×1.1	16	緩	平坦	
200	CF52	不整形	1.4×1.2	33	急	平坦、小ピット群あり	土器片出土。
201	CD44	不整形	0.7×0.5	23	緩	平坦	土器片、石鏃、剥片出土。
202	CD43	楕円形	0.5×0.3	15		平坦	土器片、磨石出土。
203	CE43	楕円形	1.0×0.5	51	緩		土器片出土。
204	CF44	楕円形	0.8×0.6	36	急	平坦,小ピット3基あり	土器片出土。
205	CH32	楕円形	0.9×0.8	16	緩	平坦	土器片、剥片出土。
206	DD47	円形					土器片、両面加工石器、剥片出土。
207	CF42	円形	0.1×0.1	12			土器片出土。
208	CD43	隅丸方形	0.6×0.6	58	緩	小ピットあり	石核出土。
209	CF46	不整形	1.3×0.8	63	急	平坦,小ピット3基あり	石器出土。
210							

第2表　今熊野遺跡のピット



第100図　今熊野遺跡のピット



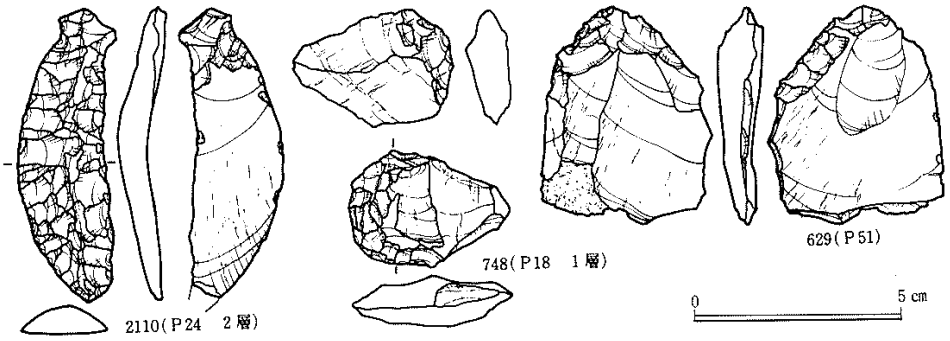
第101図　北台地区頂部平坦面のピット群

ピットと層位	土　色	特徴・含有物等
18―1		表土。
2	茶褐色土	全体に焼土を含んでいるので赤い色をしている。
3	暗褐色土	焼土・炭・ロームブロックを含む。
4	暗褐色土	粘性・しまりあり。中位に焼土塊を含む。
5	暗褐色土	粘性・しまりあり。ローム・焼土・炭を含む。
6	暗褐色土	粘性強い。微量の炭を含む。
7	暗褐色土	粘性あり、焼土・炭・ロームを含む。
8	暗褐色土	非常に硬い。ローム・焼土を霜降り状に含む。
9	暗褐色土	粘性強い。微量の炭を含む。
10	黄褐色土	汚れたローム。軟かく粘性あり。焼土を含む。
11	黄褐色土	粘性強く、硬い。ロームを多く含む。
12	暗褐色土	粘性あり。少量のロームを含む。
13	明褐色土	粘性しまりあり。
14	明褐色土	13より黄色、微量の焼土・ローム・炭を含む。
15	暗褐色土	硬く粘性あり。炭を含む。
16	暗茶褐色土	5層に類似、焼土を含む。
17	暗褐色土	5層に類似、粘性があり、炭を含む。
18	暗褐色土	軟かく、粘性が強い。ロームを多く含む。
19	暗黄褐色土	粘性強い。ロームを多く含む。
23―1		黒色土とパミス？が混在。軟かい。
47―1	暗褐色土	ロームを霜降り状に含む。
2	暗黄褐色土	ロームをブロック状に含む。
3	黒色土	木炭・焼土を含む。
4	暗褐色土	しまりよし。
5	ローム	崩落土か。
24―1	茶褐色土	パミスのブロック(?)を多量に含む。
2	黒褐色土	パミス(?)・焼土・炭を含む、一括土器出土。
3	黄褐色土	粘性強い。
4	褐色土	ロームを多量に含む。
5	黒色土	少量のパミス(?)を含む。
6	褐色土	ロームとパミスを多く含む。

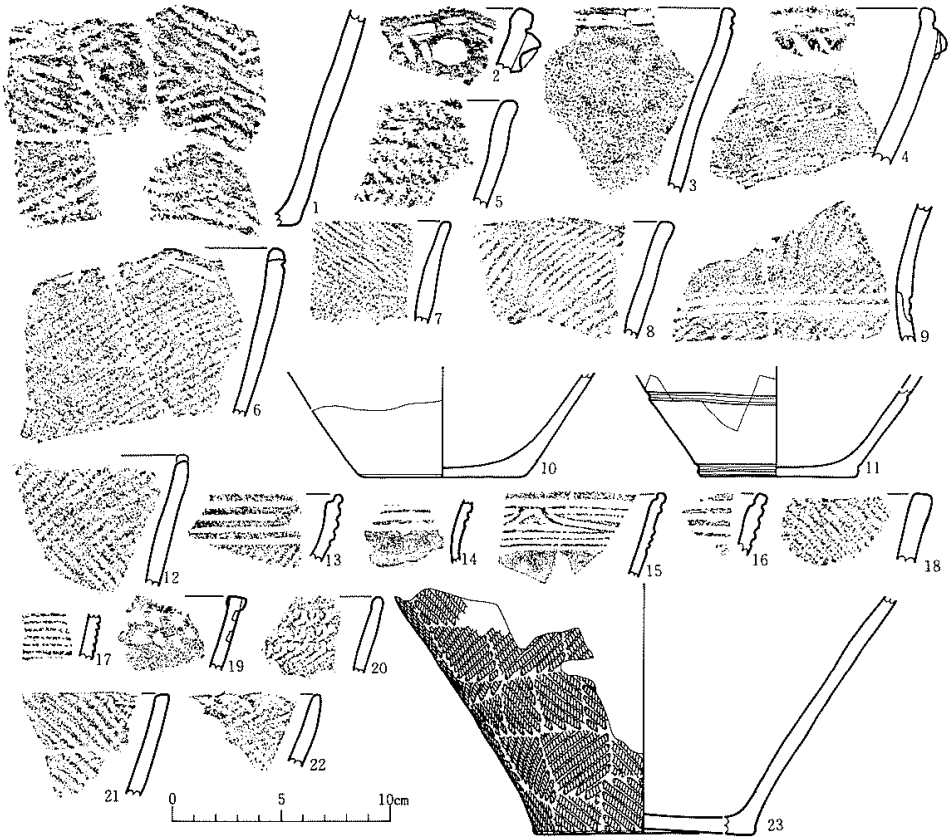
ピットと層位	土　色	特徴・含有物等
26―1	褐色土	砂粒・焼土・木炭を含む。
2	褐色土	1より黒い。
3	褐色土	1より明るい。焼土・ロームを含む。
4	黄褐色土	ブロック状のパミス(?)を含む。
5	暗褐色土	パミス(?)を含み、1より明るい。
6	黄褐色土	多量のパミス(?)を含む。
7	黄褐色土	ブロック状のパミスを含む。
27―1	暗褐色土	ローム・砂を含む。
2	暗黄褐色土	1より明るい。ブロック状にロームを含む。
3	暗黄褐色土	ロームを多く含む。
4		よごれたローム。崩落土か。
5	暗黄褐色土	霜降り状にロームを含む。
28―1	暗褐色土	27―1層より明るい。ロームを含む。
2	暗褐色土	しまりあり、砂粒を含む。
3	暗黄褐色土	軟かい。ロームを含む。
42―1		黒色土とパミスが混在。軟かい。
25―1	黒色土	微量のロームと木炭を含む。
2	暗褐色土	ブロック状のロームを含む。
3	黒色土	よごれたロームを含む。
68―1	褐色砂質土	やや硬い。1aは1よりややもろい。
2	明褐色シルト	硬い。ローム粒、遺物を含む。
3	黄褐色砂質土	軟かい。ローム粒、遺物を含む。
4	明褐色土	2より暗い。やや硬く、粘性あり。
5	暗黄色シルト	軟かい。
6	暗黄色シルト	5より暗く、軟かい。
7	暗黄色シルト	3より暗く、軟かい。
100―1	褐色土	パサパサ。焼土、木炭・土器片を含む。
2	褐色土	1より明るい。粘性あり。焼土、木炭含む。
3	黄褐色土	硬くしまる。
4	暗黄色土	ローム・パミスを含む。

第3表　ピット土層注記

近くからは大きな平石が発見された。P25 堆積土上部からは壺形土器が出土している。ピットの堆積土は自然流入の状態をしめすものが多く人為的な埋め戻しが確認できる確かな例はない。ピットの機能を推定するならば、一括土器を出土している晩期のピットは墓壙の可能性がある。P23、42 は堅果類等の食糧貯蔵穴の可能性があり、北台台地平坦部に分布する同様な形態・大きさのピットは縄文時代前期の食糧貯蔵穴であったと思われる。

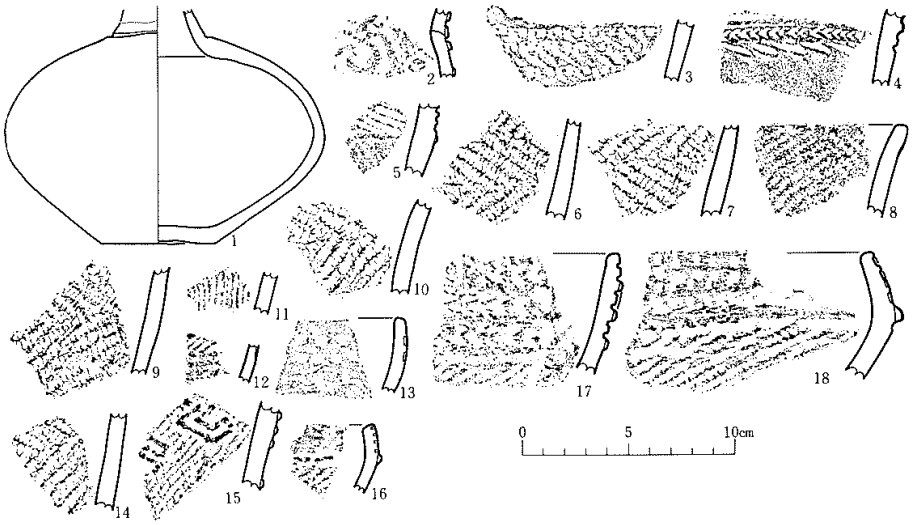


第102図　ピット出土の石器



No	出土遺構・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	ピット1	深鉢	胴部～底部	含む	撚糸文(R)	不明		
2	ピット18	〃 BⅠi	口縁部	〃	隆線文、刺突文(隆線上)、隆線に沿う短沈線文	〃	波状縁	
3	ピット18	〃 BⅠe	〃	〃	半截竹管による押引き文	〃		
4	ピット18	〃 BⅠi	〃	〃	口縁に沿う隆線文、刻目文(隆線上)、刺突文、葺瓦状撚糸文	ミガキ		
5	ピット18	〃 BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	ナデ		
6	ピット18	〃 BⅠd	〃	〃	半截竹管による口縁に沿う短沈線文、縄文(LR)	不明	波状縁	
7	ピット18	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
8	ピット18	〃 BⅡ1	〃	〃	斜行縄文(LR)	ナデ		
9	ピット18	〃	胴部	〃	半截竹管による横位沈線文、縄文(LR)	不明		
10	ピット24	鉢	胴部～底部		無文	ナデ		
11	ピット24	〃	〃		横位沈線文	ミガキ	沈線内に刺が施められる	
12	ピット25	深鉢 BⅡ2	口縁部	含む	羽状縄文(RL・LR)	ナデ	突起をもつ平縁	
13	ピット25	浅鉢or高杯	〃		変形工字文、縄文(LR)	口縁に沿う沈線文 調整不明		
14	ピット45	浅鉢	胴部		横位平行沈線文(変形工字文?)	ミガキ		
15	ピット47	〃	口縁部		変形工字文	口縁に沿う沈線文 ミガキ		
16	ピット47－3層	〃	〃		横位平行沈線文(変形工字文?)	〃		
17	ピット65－1層	深鉢	胴部		半截竹管による平行沈線文	不明		
18	ピット51	〃 BⅡ1or2	口縁部	含む	縄文(RL)	〃		
19	ピット51	〃 BⅡg	〃	〃	刺突文	〃		
20	ピット75	〃 BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(LR)	〃		
21	ピット90	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	ナデ		
22	ピット90	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
23	ピット90	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		

第103図　ピット出土土器　(1)



No.	出土遺構・層図	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	ピット26－1層	壺	頸部～底部		横位沈線文、ミガキ	頸部－ナデツケ 胴部－？		
2	ピット26	深鉢	胴　部		粘土紐貼付文、縄文(LR)	不　明		
3	ピット98	〃	〃	含む	重層末端ループ文(RL)	〃	磨消部あり	
4	ピット201	〃	〃		横位沈線文、短沈線文、刺突文	ナ　デ		
5	ピット201	〃	〃	含む	隆線文、短沈線文	条痕文		
6	ピット201	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナ　デ		
7	ピット201	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
8	ピット202	〃　BII2	口縁部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
9	ピット202	〃	胴　部	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
10	ピット203	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
11	ピット203	〃	〃	〃	押型文(平行線状文)	不　明		
12	ピット204	〃	〃	〃	押圧縄文(L)、短沈線文	ナ　デ		
13	ピット204	〃	口縁部	〃	刺突文、S字状沈文	不　明		
14	ピット204	〃	胴　部	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナ　デ		
15	ピット205	〃	〃		粘土紐貼付文、縄文(RRℓ)	不　明		
16	ピット207	〃　Blc	口縁部	含む	口縁に沿う隆線文、刺突文	ナ　デ		
17	ピット206	〃　Blc	〃	〃	横位平行隆線文、縦位貼付文、半截竹管による刺突文、縄文(L)	〃		9－9
18	ピット206	〃　Blc	〃	〃	口縁に沿う隆線文、刺突文、縄文(LR)	ミガキ		

第104図　ピット出土土器　(2)

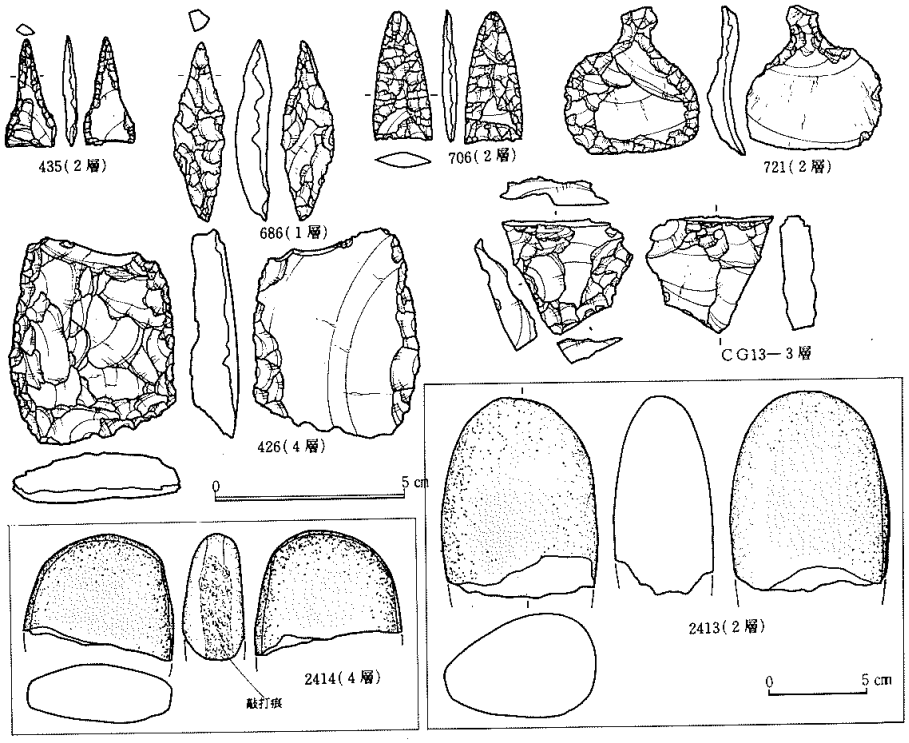
Ⅲ　遺構外出土の遺物

1　遺物包含層

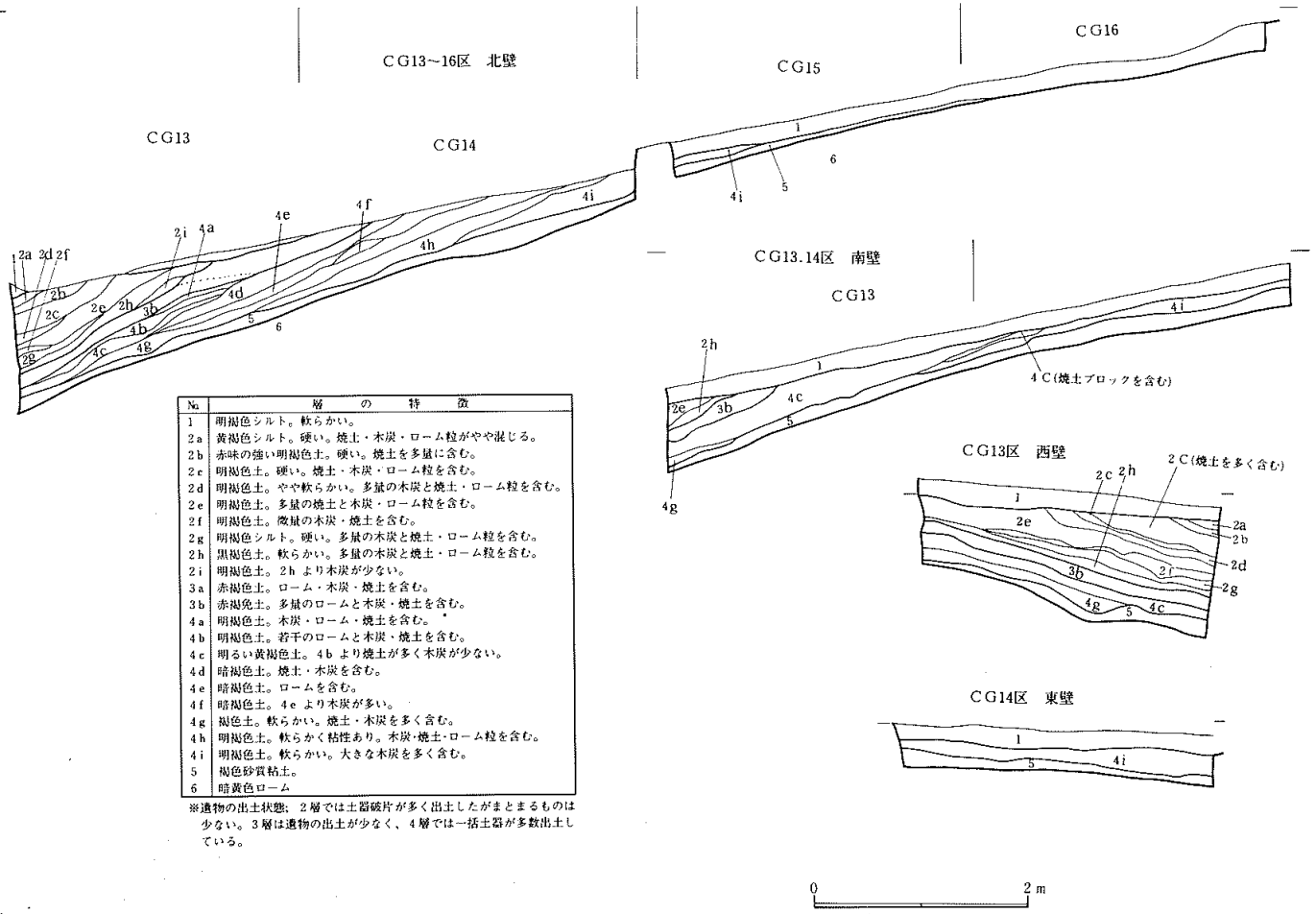
廃棄行為によって形成されたと考えられる遺物集中地点である。北台台地西側の急斜面と南東部の緩斜面の２ヶ所で確認されている（第２図）。南東斜面の包含層は厚さ10～20㎝で大木２ａ式の土器を多く出土している。

西側斜面の包含層は3×12ｍの範囲が調査されている。包含層の厚さは斜面下で1ｍ近くあり、表土下、３層にわかれる（第106図）。第２層は焼土・木炭・ローム粒を含む明褐色土で土器片・骨片・オニグルミ等を出土している。第３層はローム・焼土・木炭を含む赤褐色土で少量の土器片を出土している。第４層は焼土・木炭を含む明褐色土で復元可能な一括土器を比較的多く出土している。土器はいずれも大木１式のものである。また。発掘調査後、この遺物包含層の西側で貝層が発見されている（小井川1978）。貝層の規模は不明だが、シジミ主体で隣接する遺物包含層と同じ大木１式期のものらしい。

出土遺物を第105、107～110図に示した。また、各種出土の石器組成を第４表にまとめた。



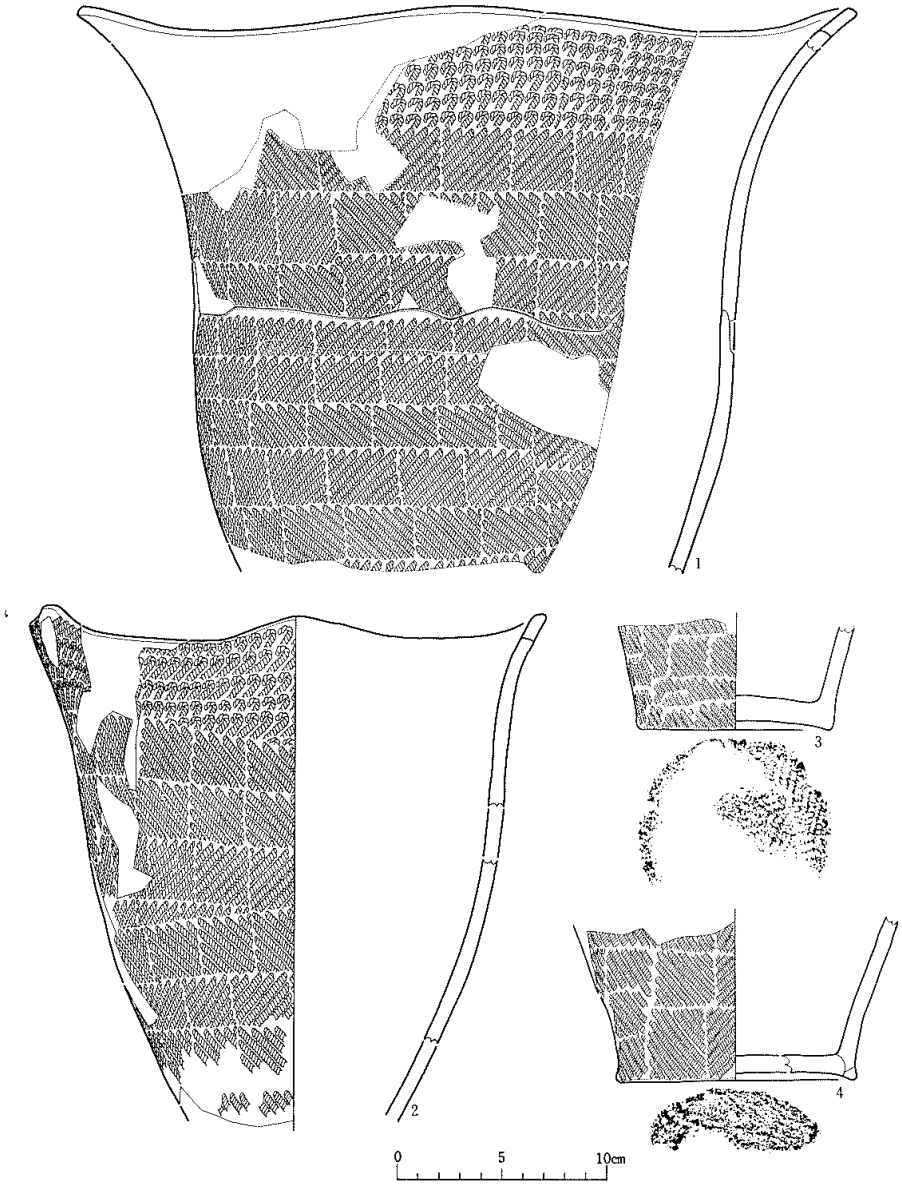
第105図　遺物包含層出土石器



No.	層の特徴
1	明褐色シルト。軟らかい。
2a	黄褐色シルト。硬い。焼土・木炭・ローム粒がやや混じる。
2b	赤味の強い明褐色土。硬い。焼土を多量に含む。
2c	明褐色土。硬い。焼土・木炭・ローム粒を含む。
2d	明褐色土。やや軟らかい。多量の木炭と焼土・ローム粒を含む。
2e	明褐色土。多量の焼土と木炭・ローム粒を含む。
2f	明褐色土。微量の木炭・焼土を含む。
2g	明褐色シルト。硬い。多量の木炭と焼土・ローム粒を含む。
2h	黒褐色土。軟らかい。多量の木炭と焼土・ローム粒を含む。
2i	明褐色土。2h より木炭が少ない。
3a	赤褐色土。ローム・木炭・焼土を含む。
3b	赤褐色土。多量のロームと木炭・焼土を含む。
4a	明褐色土。木炭・ローム・焼土を含む。
4b	明褐色土。若干のロームと木炭・焼土を含む。
4c	明るい黄褐色土。4b より焼土が多く木炭が少ない。
4d	暗褐色土。焼土・木炭を含む。
4e	暗褐色土。ロームを含む。
4f	暗褐色土。4e より木炭が多い。
4g	褐色土。軟らかい。焼土・木炭を多く含む。
4h	明褐色土。軟らかく粘性あり。木炭・焼土・ローム粒を含む。
4i	明褐色土。軟らかい。大きな木炭を多く含む。
5	褐色砂質粘土。
6	暗黄色ローム

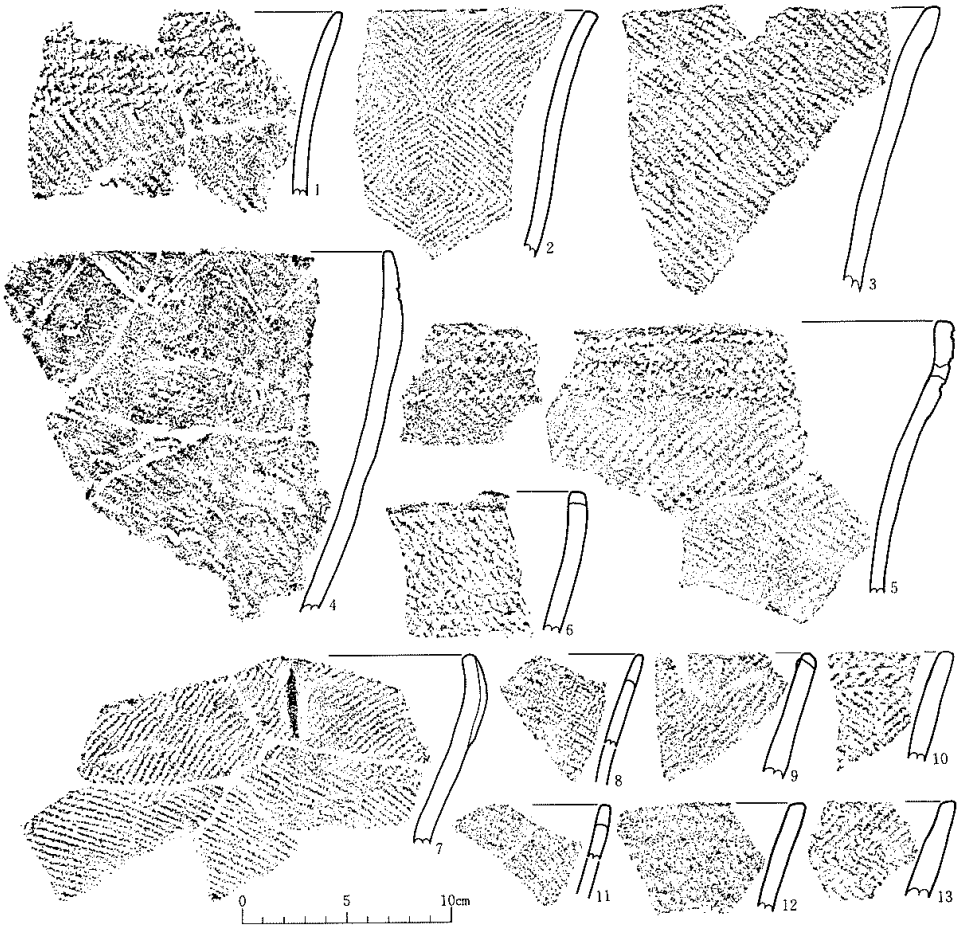
※遺物の出土状態；2層では土器破片が多く出土したがまとまるものは少ない。3層は遺物の出土が少なく、4層では一括土器が多数出土している。

第106図　CG13～16区　遺物包含層　断面図



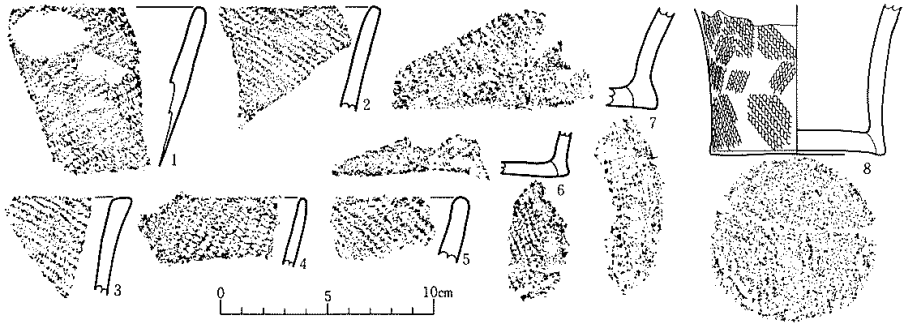
No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	CG13－4層	深鉢B Ⅱ3	口縁部～胴部	含む	重層末端ループ文(LR)、羽状縄文(RL・LR)	ミガキ	波状縁 上段接合面に縄文施文	
2	CG13－4層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(LR)、羽状縄文(RL・LR)	ナ　デ	隆状縁	5－4
3	CG13・14－4層	〃	胴部～底部	〃	縄文(RL)〔胴部及び底面〕	〃		
4	CG13・14－4層	〃	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)〔胴部及び底面〕	不　明	波状縁	

第107図　遺物包含層出土土器　(1)－第4層

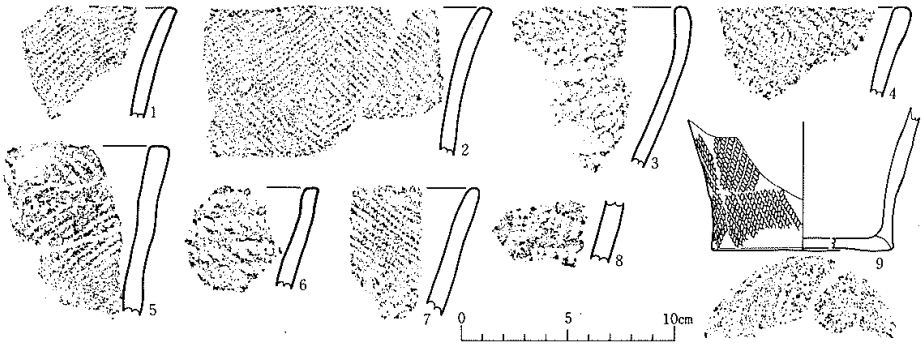


No	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	CG13－4層	深鉢 BⅡ3	口 縁 部	含む	重層末端ループ文(LR)、縄文(RL)	不　明		
2	CG13－4層	〃　BⅡ2	口縁部～胴部	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナ　デ		
3	CG13－4層	〃　BⅡ1	〃	〃	縄文(RL)	〃		
4	CG13－4層	〃　BⅠd	〃	〃	平截竹管による山形波線文 斜行縄文(RL)と結節文(片結び－逆)	不　明		8－3
5	CG13－4層	〃　Aⅰj	〃	〃	横位平行押圧縄文(RL)、羽状縄文(RL・LR)	〃	補修孔あり	8－2
6	CG13－4層	〃　BⅡ3or4	口 縁 部	〃	重層末端ループ文(RL)	〃	突起をもつ平縁	
7	CG13－4層	〃　Aⅰb	〃	〃	縦位貼付文、羽状縄文(RL・LR)	ナ　デ	波状縁	8－1
8	CG13・14－4層	〃　BⅡ1	〃	〃	斜行縄文(RL)	〃	突起をもつ平縁	
9	CG13－4層	〃　BⅡ1	〃	〃	斜行縄文(LR)	不　明	凹部をもつ平縁	
10	CG13－4層	〃　BⅡ3	〃	〃	重層末端ループ文(LR)、羽状縄文(RL・LR)	〃		
11	CG13－4層	〃　BⅡ1	〃	〃	斜行縄文(RL)	〃	波状縁	
12	CG14－4層	〃　BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	〃		
13	CG13－4層	〃　BⅡ2	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	ミガキ		

第108図　遺物包含層出土土器　(2)－第4層



No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	CG13－4層	深鉢 BⅡ1	口縁部	含む	斜行縄文(LR)	不明		
2	CG13－4層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	〃		
3	CG13－4層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	〃		
4	CG14－4層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(LR)	〃		
5	CG13－4層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	ナデ		
6	CG14－4層	〃	胴部～底部	〃	縄文(LR)〔胴部及び底面〕	不明		
7	CG13－4層	〃	〃	〃	縄文(RL)〔胴部及び底面〕	〃		
8	CG14－4層	〃	〃	〃	縄文(RL・LR)〔胴部及び底面〕	〃		



No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	CG13－3層	深鉢 BⅡ1or2	口縁部	含む	縄文(LR)	ナデ		
2	CG13－3層	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
3	CG13－3層	〃 BⅡ3	〃	〃	重層末端ループ文(LR)、縄文(RL)	〃		
4	CG14－3・4層	〃 BⅡ1or2	〃	〃	縄文(RL)	不明		
5	CG13－3層	〃 BⅡ2	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	ナデ		
6	CG13－3層	〃 BⅡ3or4	〃	〃	重層末端ループ文(RL)	不明		
7	CG13－3層	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
8	CG13－3層	〃	胴　部	〃	刺突文	〃		
9	CG13－3層	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)、縄文(LR)〔底面〕	〃		

第109図　遺物包含層出土土器　(3)－第3層、第4層

	石鏃	石匙	石錐	石槍	矢頭器等	両極石器	石核	磨製石斧	打製石斧	磨石	磨凹石	石皿	装飾品等	不定形石器	剥片等	計	備考
CG13、14.1層	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
CG13、2層	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	48	56	
CG14、2層	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	12	
CG15、2層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
CG13、3層	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	34	39	
CG16、3層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	
CG13、14.4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	2	9	14	
CG13、4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	4	
CG14、4層	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	25	33	
CG14、3.4層	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
計	4	9	2	1	0	0	0	0	0	7	0	0	0	19	125	167	
包含層以外	120	179	42	57	32	5	18	42	7	86	21	11	1	484	2,998	4,103	

第4表　遺構外出土の石器

No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	CG13－2層	深鉢 A Ⅱ3	口縁部～胴部	含む	重層末端ループ文(RL・LR)、羽状縄文(RL・LR)	不明	波状縁	
2	CG13－2層	〃 B Ⅱ3	〃	〃	重層末端ループ文(RL)、結束羽状縄文(RL×LR)	ナデ		
3	CG13－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	結束羽縄文(RL×LR)	〃	突起をもつ平縁	
4	CG13－2層	〃 B Ⅱ3or4	口 縁 部	〃	重層末端ループ文(RL)	不明	波状縁	
5	CG13－2層	〃 B Ⅱj	〃	〃	横位平行押圧縄文(LR)、羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
6	CG13－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	結束羽状縄文(RL×LR)	〃		
7	CG13－2層	〃 B Ⅱ1	〃	〃	斜行縄文(RL)	不明		
8	CG13－2層	〃 B Ⅱ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	ナデ		
9	CG14－2層	〃 B Ⅱ7	〃	〃	組紐回転文	不明		
10	CG14－2層	〃	胴部～底部	〃	縄文(LR)(胴部及び底面)	〃		
11	CG14－2層	〃	〃	〃	縄文(LR)	〃		
12	CG13－層位不明	〃 B Ⅱ3	口 縁 部	〃	重層末端ループ文(RL)、結束羽状縄文(RL×LR)	〃		

第110図　遺物包含層出土土器　(4)－2層、層位不明

2　遺構・遺物包含層以外から出土した遺物

遺構堆積土、遺物包含層以外の発掘区内の表土および表土下から出土している土器・石器類である。土器については考察でまとめて説明する。

石器には、石鏃、尖頭器、石錐、石匙、箆状石器、磨製石斧、打製石斧、磨石・凹石・敲石類、石皿、小形石製品、不定形石器、石核、剥片等がある（第111～114図）。

石器の器種分類および各器種の内容は次のとおりである。

石鏃　尖端部をつくりだす石器のうち、偏平で左右対象、原則として基部に“返り”を有するものを石鏃とした。120 点ある。基部形態と側縁の線がそれぞれ外彎するか、直線的か、内彎するかによって7類型に分類し、これらに属さない特殊形態のものをⅣ類とした。遺構・遺物包含層外出土の石鏃の半数以上はＩＢ類であり、ＩＡ、ⅡＢ類を加えて約8割となる（第5表）。

尖頭器　尖端部をつくりだす石器で原則として偏平、左右対象のものを尖頭器とした。32 点あるが完形資料は1点のみである。長さ4、5㎝の小形のものと10㎝前後になる大形のものがある。大形の尖頭器には全体が細長いものとやや幅広になるもの、そして基部も丸みをもつものと直線的になるもの等があり形態にまとまりがない。

石器は剥片素材で、両面加工のもの、半両面加工のもの、片面加工で1面に平坦な素材面を残すもの等がある。

石錐　尖端部をつくりだす石器で、石鏃、尖頭器に含まれないものを石錐とした。石錐は37 点あり次の4類型からなる（第5―2表）。

Ⅰ類：棒状のもの

Ⅱ類：つまみ部と棒状の錐部からなり、錐部が比較的長いもの

Ⅲ類：つまみ部と短い錐部からなるもの

Ⅳ類：剥片の一端に尖端部をつくりだしたもので、尖端部と錐部の識別が難しいもの

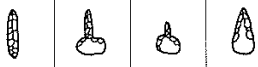
Ⅳ類には多様な形態の石器が含まれるが、原則として鋭角的で厚みのある尖端部を有するものを石錐Ⅳ類とした。遺構・遺物包含層外出土の石錐はⅣ類とⅠ類（棒状のもの）がほとんどであり、縄文時代に特徴的な形態であるⅡ類は1点しかない。

石匙　つまみ部と連続する剥離のある身部からなる石器で179 点ある。

つまみ部を上にした場合、身部が縦長になる石器（Ⅰ類）、横長になる石器（Ⅱ類）、Ⅰ・Ⅱ類の中間形態のもの（Ⅲ類）があり、さらに、身部が2縁辺からなるもの（A類）、3 縁辺からなるもの（B類）、これ以外の特殊な形態のもの（C類）に細分される。形態のわかる石器は139 点あり、104 点（75%）が縦長、35 点（25%）が横長と中間形態である。Ⅱ類は形態上、3 辺構成のC類が多い。また、縦長のⅠ類は2辺からなるＩＡ類が多く、石匙全体の半数をしめる。3 辺からなるＩＢ類は縦長形態の末端に斜位の底辺をつくりだす石匙である（第5―3表）。

分類	Ⅰ A	Ⅰ B	Ⅰ C	Ⅱ A	Ⅱ B	Ⅲ A	Ⅲ B	Ⅵ	不明	計
住居跡・ピット	6	13	5	2	3			5		34
遺物包含層	1	1		1	1					4
それ以外	16	63	1	8	16	2	1	5	8	120
不明		6			3			2	1	12
計	23	83	6	11	23	2	1	12	9	170

5－1　石鏃の分類と組成



分類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計
住居跡・ピット	1		1	13	15
遺物包含層	1	1			2
それ以外	10	1		26	37
不明				5	5
計	12	2	1	44	59

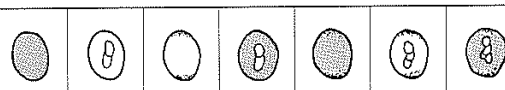
5－2　石錐の分類と組成

分類	Ⅰ A	Ⅰ B	Ⅰ C	Ⅱ B	Ⅱ C	Ⅲ A	Ⅲ B	Ⅲ C	不明	計
住居跡・ピット	18	7	3	4		2	2	2	11	49
遺物包含層	3	1			1		1		3	9
それ以外	70	27	7	11	3	1	9	11	40	179
不明	4							2		6
計	95	35	10	15	4	3	12	15	54	243

5－3　石匙の分類と組成

分類	Ⅰ A	Ⅰ B	Ⅱ A	Ⅱ B	Ⅲ A	Ⅲ B	不明	計
遺物包含層	1	1	2	1	1	3	2	11
その他	7	1	6	5	9	9	20	57
不明				1	1		3	5
計	8	2	8	7	11	12	25	73

5－4　篦状石器の分類と組成



分類	磨痕	凹み	敲打痕	磨痕・凹	磨痕・敲打痕	凹敲打痕	磨痕凹敲打痕	不明	計
住居跡・ピット	32			5	5		3	10	55
遺物包含層	4				1			1	6
それ以外	71	1	3	5	11	1	4	8	104
不明	11	1	3	1	1		1	2	20
計	118	2	6	11	18	1	8	21	185

5－5　磨石・凹石・敲石類の分類と組成

第5表　遺構・遺物包含層外出土の石器の分類と組成

篦状石器　平面形が撥形あるいは短冊形で、一端に刃部をつくりだす石器で 57 点ある。断面は ⌒ 形ないしはレンズ状で、尖頭器や石鏃より厚みがある。

基部、側縁、刃部の形態の違いから6類型に分類した（第5―4表）。基部は尖端をなすものと丸みをもつもの、それから直線的になるものがある。また、ほとんどの石器の刃部は片刃だが刃線が彎曲するものと直線的になるものがあり、細部形態に変異がある。

石斧類　磨製石斧と打製石斧がある。

磨製石斧は42点ある。完形資料は3点であり破損率が高い。

大きさのわかる資料は少ないのだが、長さが5㎝前後の小形のものが2点ある。その他は長さ10～20㎝の範囲に含まれるものとおもわれる。小形の2点は偏平片刃で、石材・形態・加工技術が大形のものと異なる。367 は背面に擦り切り痕を残しているが、小形石斧の側面は擦り切り整形されているようにみえる。

大形の石斧には、やや偏平で、側面と主面の間に稜線の通るタイプとやや厚手で断面楕円形のものがある。これらはともに両刃だが、偏平で断面四角形の石斧が直刃で側縁も直線的であるのに対し、厚手で断面楕円形の石斧は円刃で側縁は外わんし、重量感がある。刃線が石器の長軸に対して非対象な偏刃は両方の石斧にみとめられる。

打製石斧は7点ある。1点は箆状石器ⅡA類に類似する形態で、流紋岩製の両面加工の石器である。6 点は刃部がややひろがる短冊形の打製石斧である。凝灰質頁岩の節理面でわれる薄い礫あるいはその剥片を素材とし周辺を剥離整形している。西野田遺跡に類例があり弥生時代の石器の可能性がある。

磨石・凹石・敲石類　円礫・楕円礫を素材とし、磨痕、凹み、敲打痕といった使用あるいは整形の痕跡がみとめられるものを一括した。遺構・遺物包含層以外出土の磨石・凹石・敲石類は107点ある。3種類の使用・加工痕とその組合せから次の7類型に分類した（第5―5表）。

Ⅰ類：磨痕のみとめられるもの
Ⅱ類：凹みのあるもの
Ⅲ類：敲打痕のみとめられるもの
Ⅳ類：磨痕と凹みのあるもの
Ⅴ類：磨痕と敲打痕のあるもの
Ⅵ類：凹みと敲打痕のあるもの
Ⅶ類：磨痕と凹みと敲打痕のあるもの

磨痕のみがみとめられるものが多い。また、複数種の使用痕が重複してある例もめだつ。

石皿類 11 点あるがすべて破損している。形態のわかるものは少ないが大きく 2 種類に分けられる。1 つは平面円形ないし楕円形のもので、作業面は浅く窪み、底面は丸く皿状に整形される。もう 1 つは、節理面でわれる安山岩を用いるもので、偏平な上下の 2 節理面を作業面、底面とし、周辺を剥離整形して円形、楕円形としている。厚さは5㎝前後である。

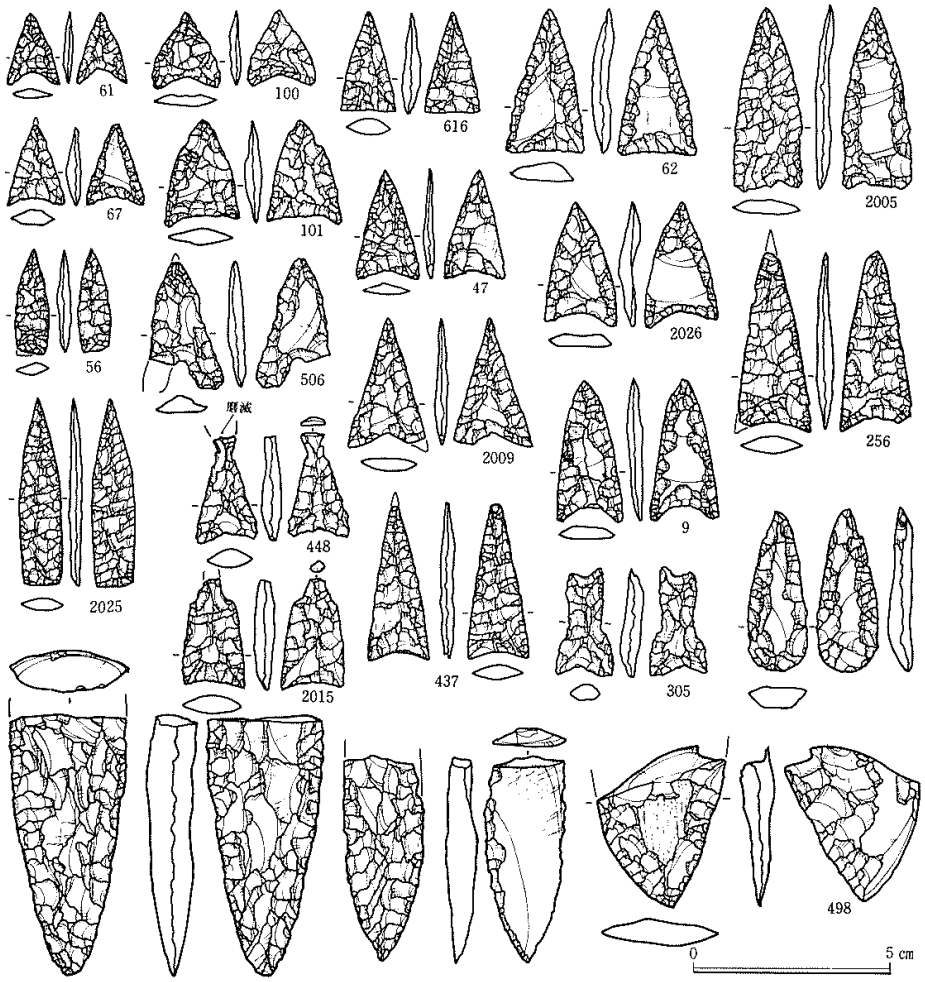
不定形石器　不定形石器の分類は稿を改めて行いたい。不定形石器の中には両極剥離痕のある石器が含まれるが、きわめて少数であった。

石核　18点ある。石核には素材の扁平な2面を作業面として剥離作業が進められるものと、

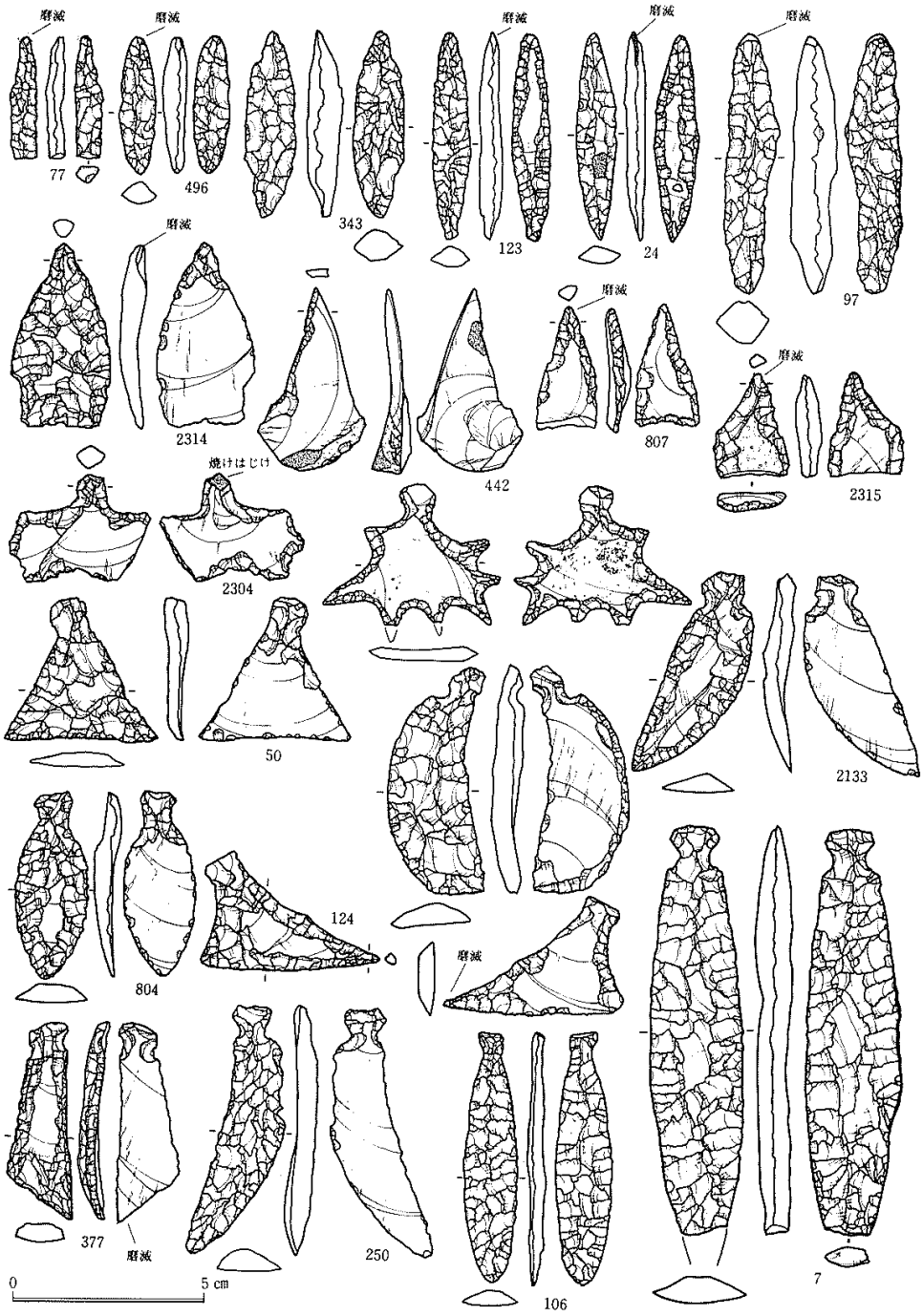
3 面以上の剥離面からなり頻繁に打面転移が繰りかえされるものがある。打面と作業面を固定して定形的な剥片をとっているような石核はみとめられない。石核の素材に関しては明らかに剥片とわかるものはない。自然面を多く残していて礫素材と考えられるものが何点かある。

弥生時代の石器（第 114 図下）　北台地区・鴻ノ巣地区から、石庖丁 5 点、小形方柱状片刃石斧 1 点、扁平片刃石斧 2 点、太形蛤刃石斧 2 点、石鏃？が出土している。

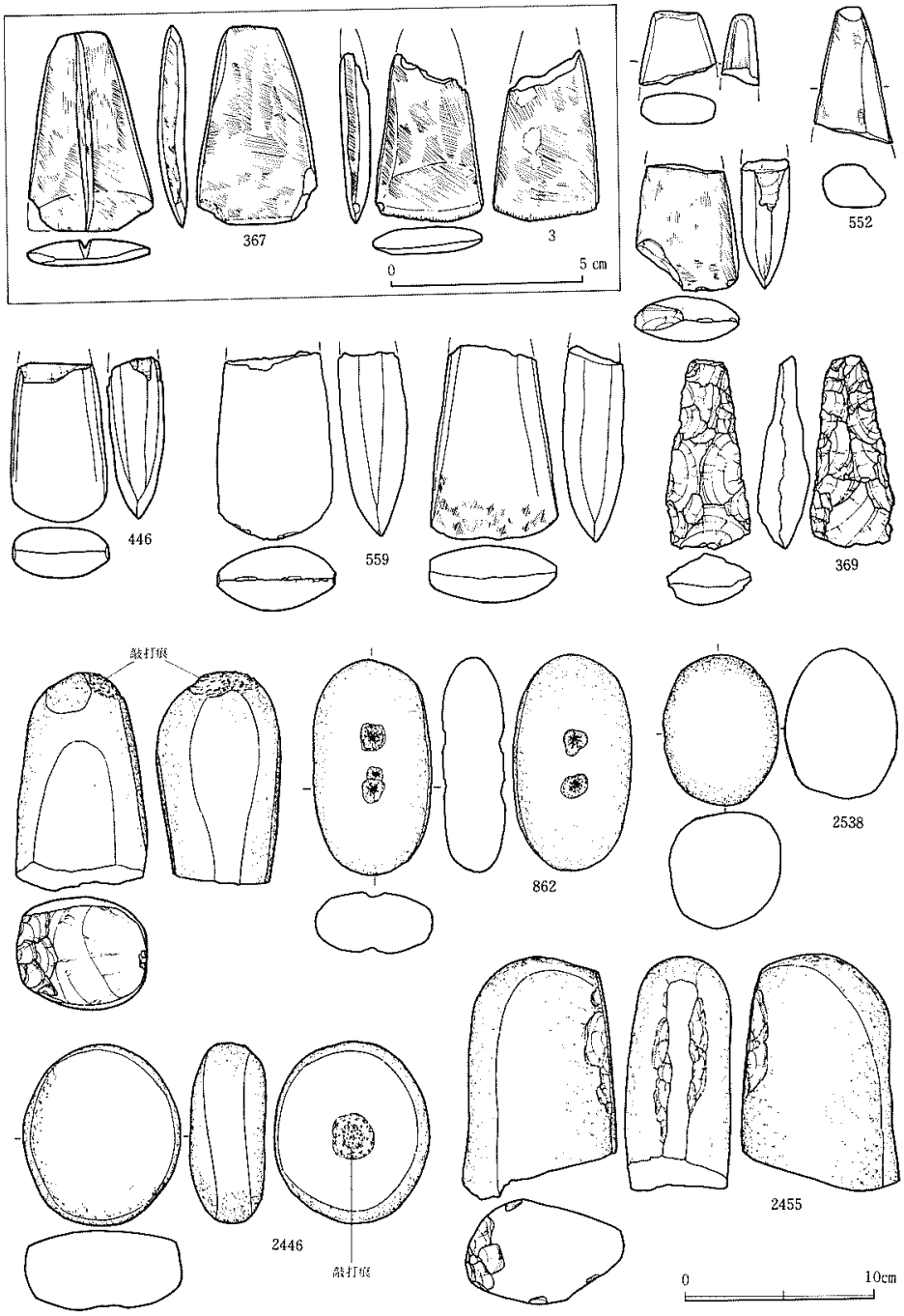
石庖丁はいずれも破損している。形態は外彎する両刃の刃部と直線的な背部からなり、中央背部よりに穿孔がなされる。砂質頁岩・頁岩・砂質凝灰岩の節理面で割れるものを素材とし、剥離整形後、研磨される。穿孔は両面から敲打によって凹みをつくった後、錐状のもので貫通、整形処理している。穿孔部以外に明瞭な敲打痕はみとめられない。



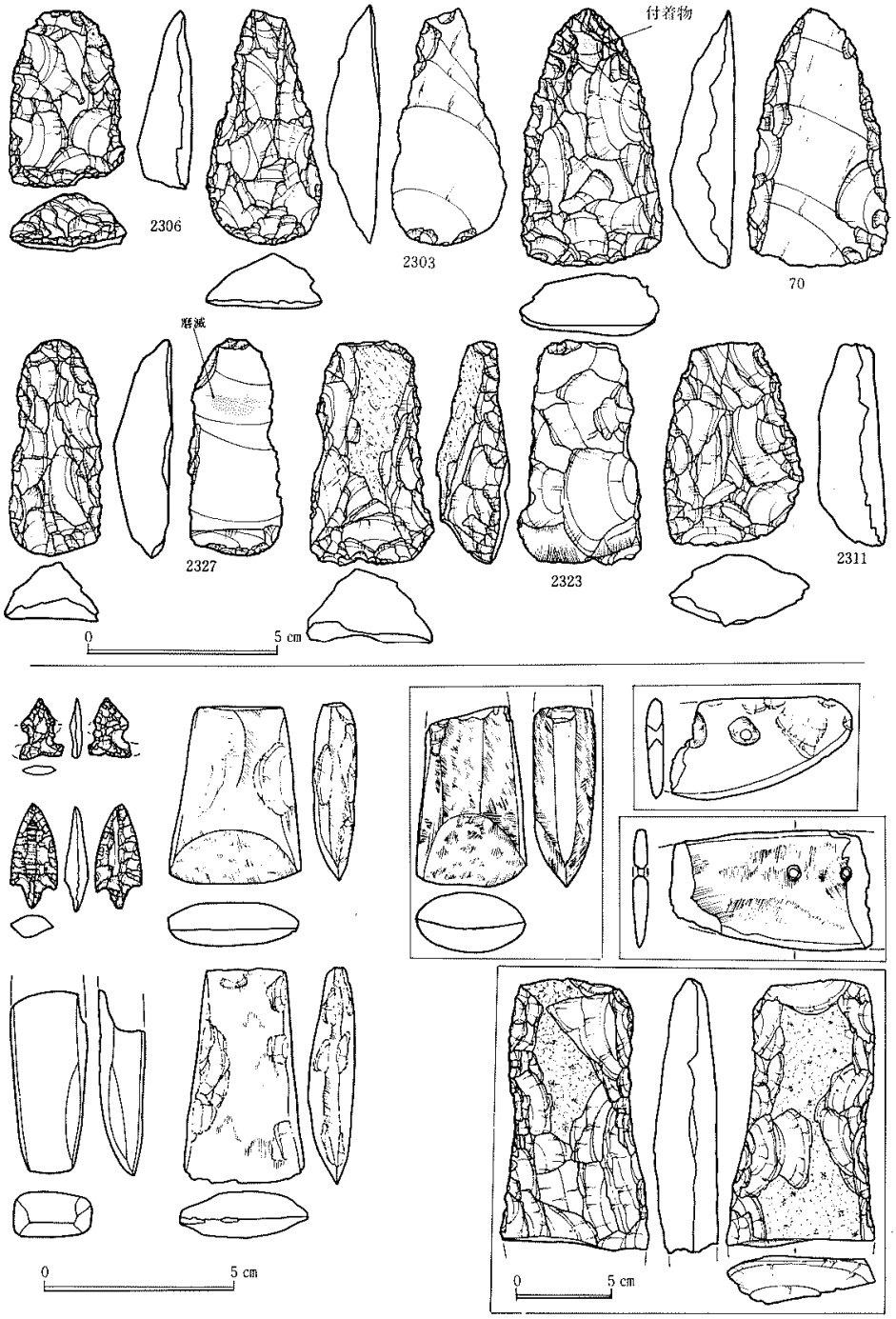
第111図　遺構外出土の石器 1　（石鏃、尖頭器）



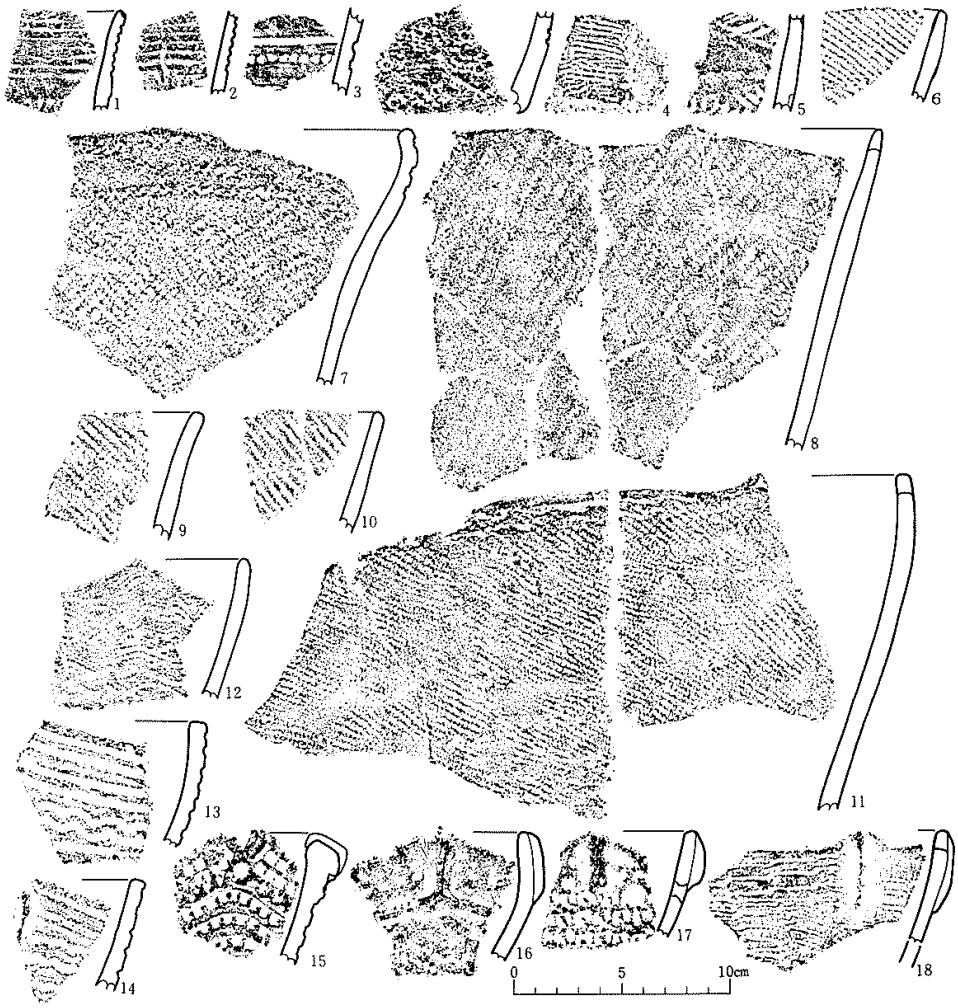
第112図　遺構外出土の石器 2　(石錐、石匙)



第113図　遺構外出土の石器 3　(石斧、磨石・凹石・敲石類)

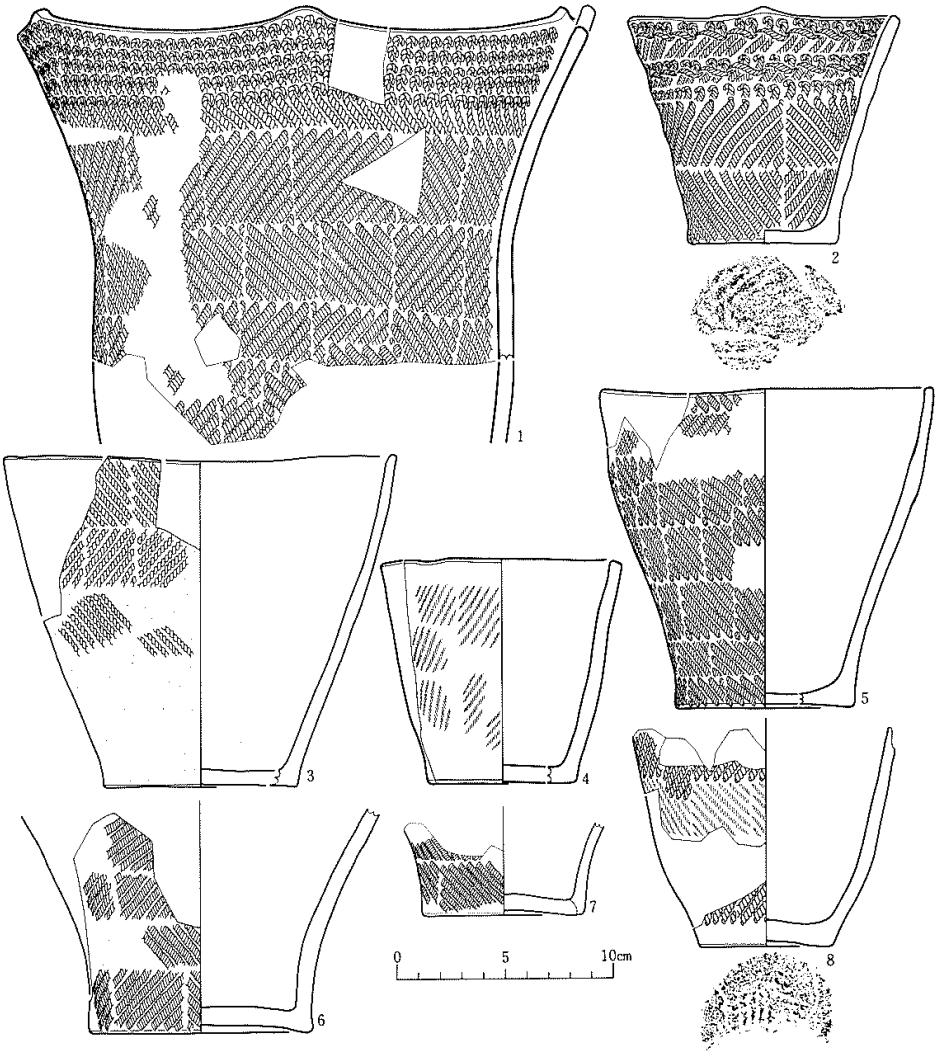


第114図　遺構外出土の石器 4　（篦状石器、弥生時代の石器）



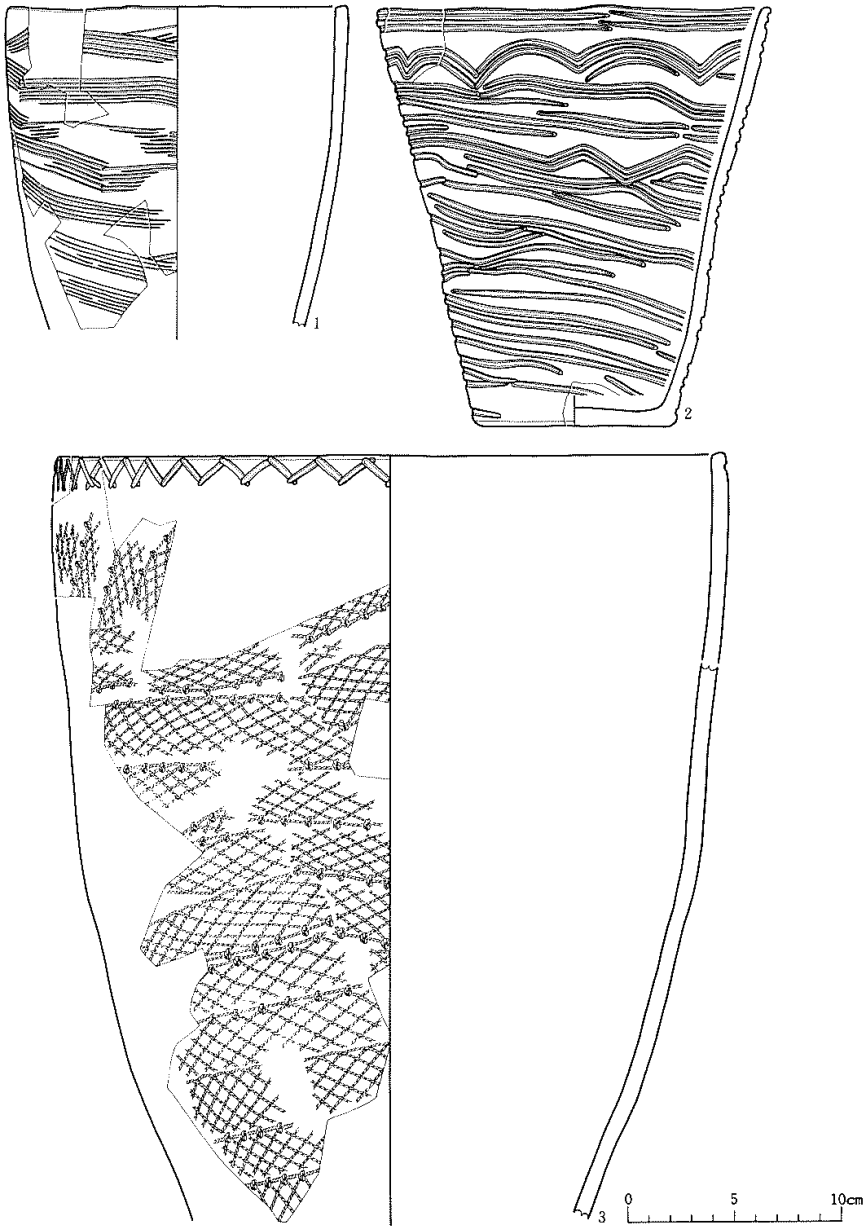
No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　　面	内　面	備　　考	図　版
1	ＣＥ40－２層	深鉢	口縁部	含む	押型文(平行線状文内蔵重層菱形文？)	不　明	口縁上端に指頭状押圧	
2	ＣＥ40－２層	〃	胴　部	〃	押型文(平行線状文)	〃		
3	ＣＤ44－１層	〃	〃		横位沈線文、横位連続刺突文	ナ　デ		
4	ＤＧ37－１層	〃	〃	含む	竹管による円形刺突文、連続刺突文	条痕文		
5	表土	〃	〃	〃	短沈線文、押圧縄文(Ｌ)	不　明		
6	ＣＦ42－１層	〃　ＢⅡ1	口縁部	〃	斜行縄文(ＲＬ)	ナ　デ		
7	表土	〃　ＢＩj	〃	〃	横位平行押圧縄文(ＲＬ)、羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)	不　明		
8	ＣＰ43－２層	〃　ＢⅡ1	〃	〃	斜行縄文(ＬＲ)	ナ　デ	双頭の波状縁	
9	ＣＦ42－１層	〃　ＢⅡ1	〃	〃	斜行縄文(ＲＬ)	不　明		
10	ＣＦ42－１層	〃　ＢⅡ1	〃	〃	斜行縄文(ＲＬ)	ナ　デ		
11	ＣＤ44－２層	〃　ＢⅡ1	〃	〃	斜行縄文(ＲＬ)・結節文(片結び一逆)	〃	突起をもつ平縁	
12	表土	〃　ＢＩd	〃	〃	櫛歯状工具による波状沈線文	不　明	波状縁 胎土に斜長石を含む	9－3
13	ＤＪ42－１層	〃　ＢＩa	〃	〃	２本一組の工具による口縁に沿う沈線文・波状沈線文	ナ　デ	波状縁 胎土に斜長石を含む	
14	ＤＫ40－溝	〃　ＢＩa	〃	〃	粘土紐貼付文、２本一組の工具による口縁に沿う押引き文・コンパス文	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	
15	ＣＤ55－２層	〃　ＢＩi	〃	〃	口縁に沿う隆線文、刺突文(隆線上)、口縁に沿う押引き文	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	9－15
16	ＣＧ53・54－２層	〃　ＢＩc	〃	〃	縦位隆線文、口縁に沿う隆線文、刺突文、縄文(ＲＬ)	不　明	波状縁 胎土に斜長石を含む	9－8
17	ＤＪ42－２b層	〃　ＢＩh	〃	〃	縦位粘土紐貼付文、重層末端ループ文(ＲＬ)	ナ　デ	波状縁 胎土に斜長石を含む	
18	ＣＥ46－２層	〃　ＢＩh	〃	〃	縦位粘土紐貼付文、蕨瓦状燃糸文(Ｌ)	〃	突起をもつ平縁 胎土に斜長石を含む	9－13

第115図　遺構外出土土器　(1)



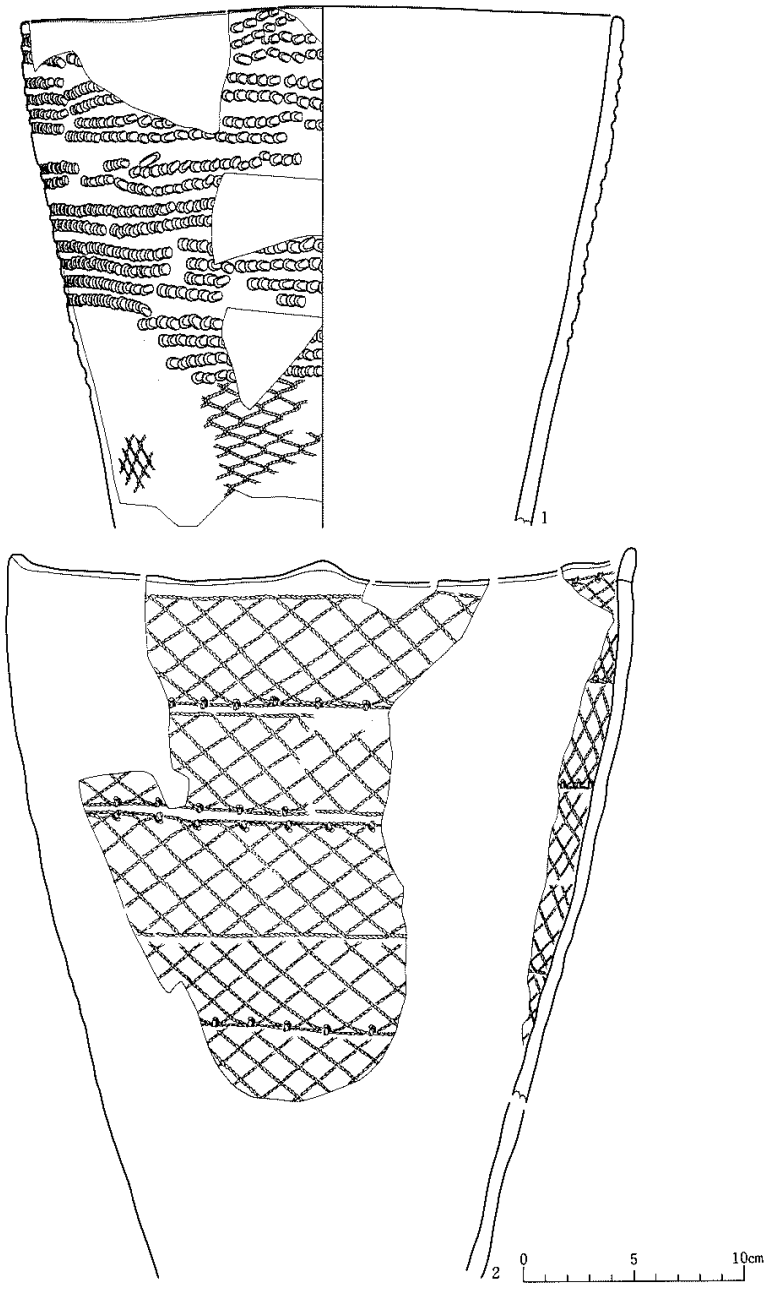
No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	DK38－1・2層	深鉢 BⅡ3	口縁部～胴部	含む	重層末端ループ文(RL)、羽状縄文(RL・LR)	ミガキ	波状縁(6単位?)	
2	DI40－2a層	〃 BⅡ3	口縁部～底部	〃	重層末端ループ文(LR)・結節文(片結び～順)、羽状縄文(RL・LR)〔胴部及び底面〕	ナデ	突起をもつ平縁	
3	EC40－2a層	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)	〃		
4	表土	〃 BⅡ1	〃	〃	斜行縄文(L)	〃		
5	CD42－2層	〃 BⅡ2	〃	〃	羽状縄文(RL・LR)、縄文(RL)〔底面〕	〃		
6	表土	〃	胴部～底部	〃	羽状縄文(RL・LR)	不明		
7	EC40－2a層	〃	〃	〃	縄文(RL)〔胴部及び底面〕	〃		
8	表土	〃	〃	〃	羽状縄文(R・LR)〔胴部及び底面〕	ナデ		

第116図　遺構外出土土器　(2)



No	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	DH41－2a層	深鉢 BⅠd	口縁部～胴部	含む	櫛歯状工具による横位沈線文・斜位沈線文	ナ　デ		6－9
2	表土	〃 BⅠa	口縁部～底部	〃	横位平行沈線文、波状沈線文	〃		6－7
3	DS42－2a層	〃 BⅠd	口縁部～胴部	〃	山形沈線文、網目状撚糸文(R)	ミガキ		9－19

第117図　遺構外出土土器　(3)

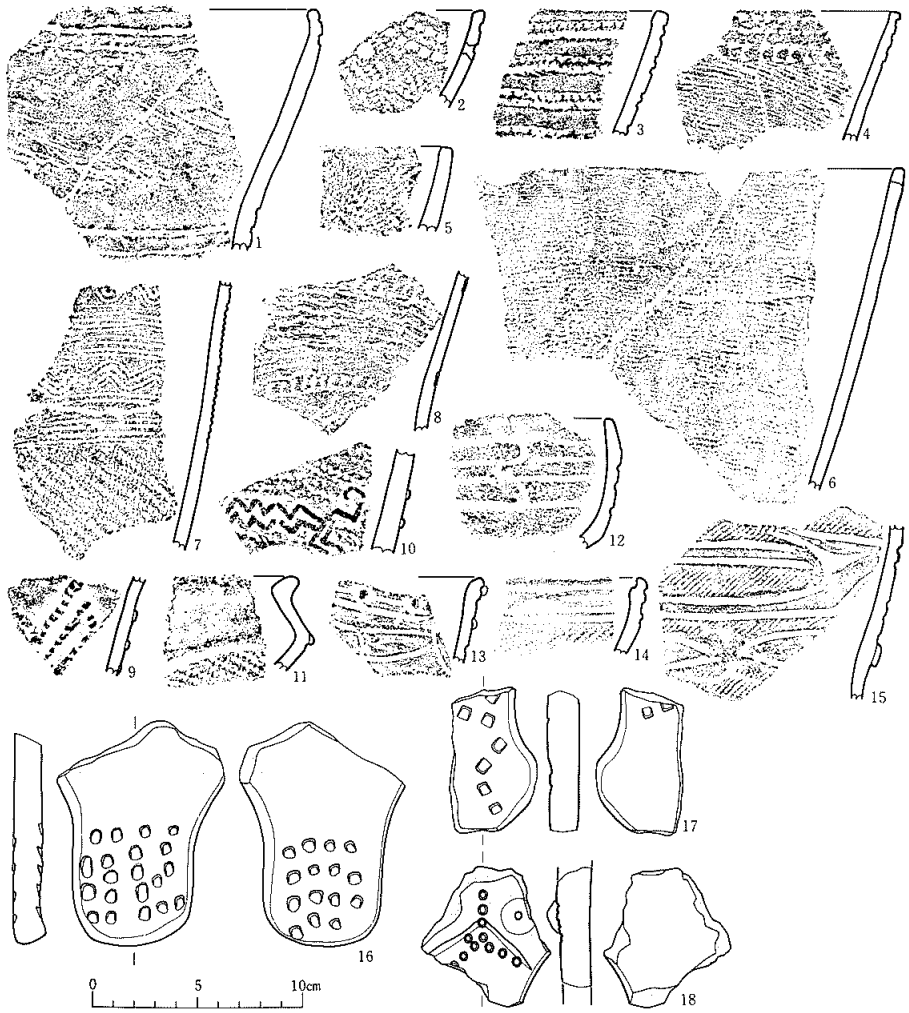


No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	機能	外　面	内　面	備　考	図　版
1	ＥＢ41－2a・2b層	深鉢 Ｂⅰe	口縁部～胴部	含む	横位押引き文、網目状撚糸文(R)	不　明	胎土に斜長石を含む	9－18
2	ＥＣ41－2a 層	〃 ＢⅡ6	〃	〃	網目状撚糸文(L)	ナ　デ	突起をもつ平縁	8－7

第118図　遺構外出土土器　(4)

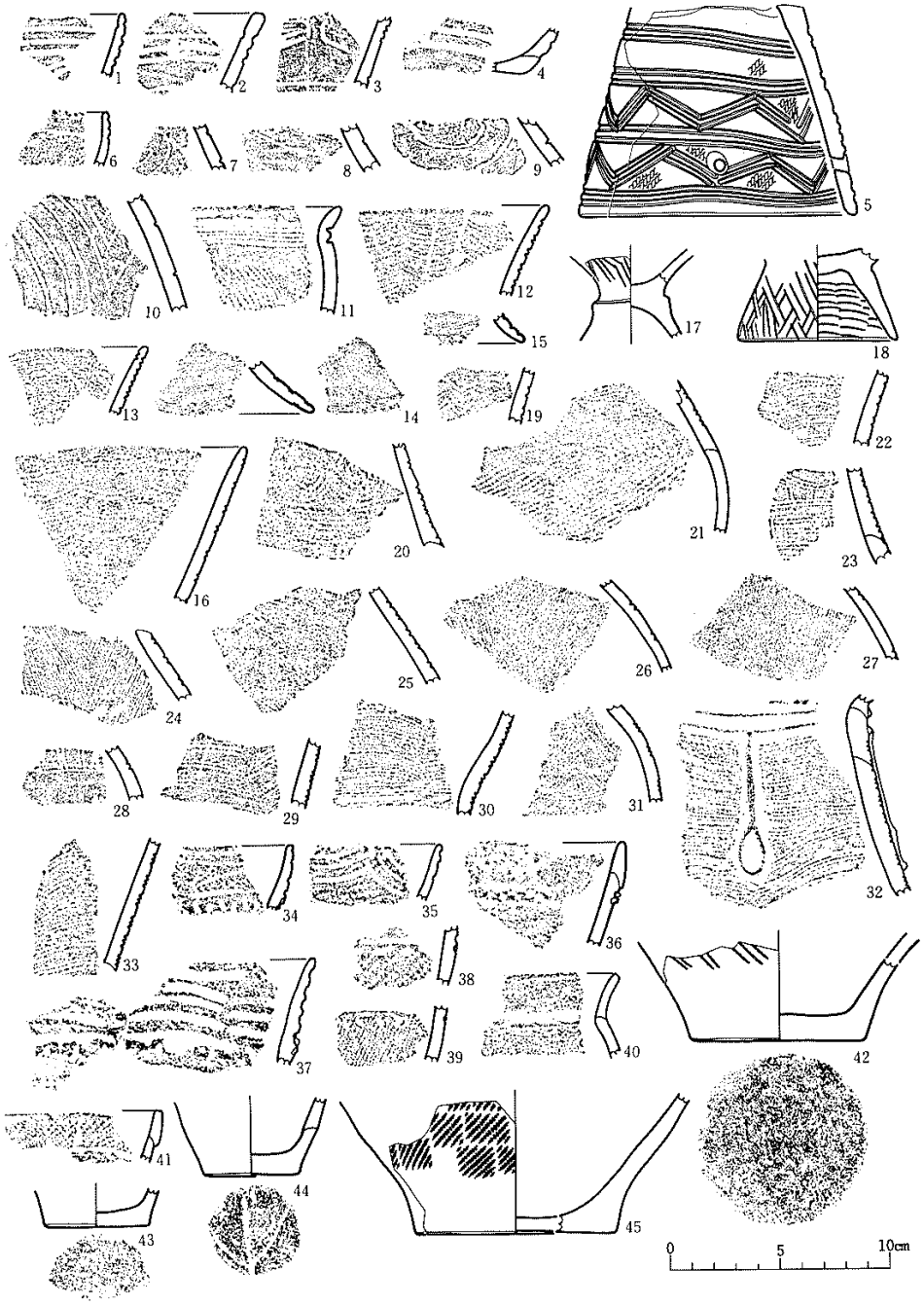
No.	出土地区・層位	器形・分類	部　位	繊維	外　面	内　面	備　考	図　版
1	ＥＢ41－２a 層	深鉢 Ｂ１d	口縁部～胴部	含む	櫛歯状工具によるコンパス文、組紐回転文	縦沈線文（波頂部） ナデ	双頭の波状縁 胎土に斜長石を含む	
2	ＤＩ43－溝	〃 Ａ１a	口 縁 部	〃	3本一組の櫛歯状工具による口縁に沿う沈線文 波状沈線文、撚糸孔	ナ　デ	双頭の波状縁 胎土に斜長石を含む	9－1
3	表土	〃 Ｂ１e	〃	〃	縦位押引き文、口縁に沿う押引き文、櫛文（Ｌ）	〃	波状縁 胎土に斜長石を含む	9－4
4	ＤＬ39－１層	〃 Ａ１c	〃	〃	口縁に沿う隆線文、３本一組の櫛歯状工具による 連続刺突文、撚文（ＲＬ）	不　明	波状縁	
5	ＤＩ43－溝	〃 Ｂ Ⅱ6	〃	〃	甚瓦状撚糸文（Ｌ）	〃	双頭の波状縁	
6	ＣＤ43－２層	〃 Ｂ Ⅱ6	〃	〃	網目状撚糸文（Ｌ）	ミガキ	双頭の波状縁 胎土に斜長石を含む	
7	ＤＲ42－２層	〃 Ｂ１d	口縁部～胴部	〃	半截竹管による横位沈線文、 網目状撚糸文（Ｌ）、甚瓦状撚糸文（Ｌ）	ナ　デ	突起をもつ平縁	8－7
8	ＣＨ53－２層	〃 Ｂ Ⅱ6	口 縁 部	〃	撚糸文（Ｌ）	〃	突起をもつ平縁	
9	ＣＤ43－２層	〃 Ｂ Ⅱ6	〃	〃	撚糸文（Ｌ）	〃	小波状縁	
10	ＤＨ43－溝	〃 Ｂ Ⅱ6	〃	〃	網目状撚糸文（Ｌ）	不　明		

第119図　遺構外出土土器　（5）



No.	出土地区・層位	器形・分類	部位	繊維	外面	内面	備考	図版
1	CD43－2層	深鉢 BⅠe	口縁部	含む	横位押引き文、撚糸文(R)	不明	波状縁、補修孔あり	
2	DK40－溝	〃 BⅠe	〃	〃	口縁に沿う押引き文、縄文(RL)	ナデ	口縁部内面に軽い段をもつ	
3	CE46－2層	〃 BⅠd	〃	〃	半截竹管によるコンパス文	ミガキ	胎土に斜長石を含む	9－17
4	DT42－2a層	〃 BⅠg	〃	〃	半截竹管による刺突文、撚糸文(L)	ナデ		
5	DD41－溝	〃 BⅡ6	〃	〃	撚糸文(L)	不明	凹部をもつ平縁	
6	CD43－2層	〃 BⅡ6	〃	〃	葺瓦状撚糸文(L)	ミガキ		
7	表土	〃	胴部	〃	4本一組の櫛歯状工具による横位沈線文 波状沈線文、縄文(RL)	不明		
8	表土	〃	〃	〃	半截竹管による刺突文、葺瓦状撚糸文(L)	〃		
9	表土	〃	〃		粘土紐貼付文、刻目文[貼付上]、縄文(LR)	ミガキ		
10	表土	〃	〃		粘土紐貼付文、縄文(RL)	ナデ		
11	表土	〃	口縁部		隆沈線文、縄文(RLR)	ミガキ		
12	DT42－2a層	〃	〃		横位平行沈線文、S字文	ナデ		
13	CH52－2層	〃	〃		口縁に沿う沈線文、弧状沈線文、瘤状小突起	〃	波状縁	
14	CF27－1層	浅鉢or高坏	〃		変形工字文、縄文(LR)、口縁に沿う沈線文(内面)	ミガキ		
15	CH42－2層	深鉢	胴部		入組文、三叉状彫去、縄文(LR)	ナデ		
16	DC39－4・5層	土偶	〃		ヘラ状工具による刺突文[両面]		磨滅著しい	
17	表土	〃	〃		ヘラ状工具による刺突文[両面]		磨滅著しい	
18	表土	〃	胸部	含む	竹管による円形刺突文		胎土に斜長石を含む	

第120図　遺構外出土土器(6)・土偶



第121図　弥生土器

第6表　弥生土器観察表

No	出土地区・層位	器種	部位	文様の特徴	内面	類例	型式名
1	KS：AQ63	鉢or高坏	口縁部	沈線による変形工字文、口縁に沿う沈線文〔内面〕	ミガキ	名取市十三塚遺跡(太田：1979) 仙台市船渡前遺跡(宮教委：1977)	大泉式
2	KS：CI34-1層	〃	〃	沈線による変形工字文、口縁に沿う沈線文〔内面〕	ナデ		
3	KS：CC38-1層	〃	体部	沈線による変形工字文	〃		
4	KS：DE35-1層	鉢	体部～底部	沈線による変形工字文	不明		
5	表土	高坏	脚部	横位平行沈線文、山形沈線文、穿孔、縄文(LR)	ナデ		
6	KS：CG34-1層	鉢	口縁部	横位平行沈線文、縄文(L)	ミガキ	村田町北沢遺跡(斎藤他：1978) 蔵王町大橋遺跡(太田：1980)	円田式
7	KS：35住－1層	壺	体部	細い沈線による渦巻文	不明		
8	KS：表土	〃	〃	細い沈線による渦巻文、植物葉圧転文	〃		
9	KS：表土	〃	〃	細い沈線による渦巻文、縄文(LR)	ナデ		
10	KS：CP52	〃	〃	細い沈線による渦巻文	不明		
11	KS：CC38-1層	甕	口縁部	細い沈線による横位平行線文、縄文(R)	ミガキ		
12	KS：15住－1層	鉢or高坏	〃	2本同時施文具による連弧状沈線文	不明	仙台市山口遺跡(佐藤(甲)他：1984) 色麻町色麻古墳群(佐々木他：1985)	十三塚式
13	KS：DB74-1層	〃	〃	2本同時施文具による横位沈線文・波状沈線文	〃		
14	KS：AQ63	壺	〃	2本同時施文具による波状沈線文〔両面〕	〃		
15	KS：15住－1層	〃	〃	2本同時施文具による横位沈線文	ナデ		
16	KS：15住－1層	鉢or高坏	〃	2本同時施文具による横位沈線文・連弧状沈線文	不明		
17	KS：DB77-1層	高坏	坏部～脚部	2本同時施文具による斜位沈線文	ナデ		
18	KS：表土	〃	脚部	2本同時施文具による斜位沈線文・短沈線文〔内面〕	〃		
19	KS：BF69-1層	鉢or高坏	体部	2本同時施文具による鋸歯状沈線文	〃		
20	KS：表土	壺	〃	2本同時施文具による横位沈線文・渦巻文	不明		
21	KS：15住－1層	〃	〃	2本同時施文具による連弧状沈線文、縄文(LR)	〃		
22	KS：表土	甕	〃	2本同時施文具による連弧状沈線文	ナデ		
23	KS：11住－3層	壺	頸部	2本同時施文具による重四角文	〃		
24	KS：15住－1層	〃	体部	2本同時施文具による重三角文	不明		
25	KS：15住－1層	〃	〃	2本同時施文具による重三角文	〃		
26	KS：表土	〃	〃	2本同時施文具による重三角文	ナデ		
27	KS：15住－2層	〃	〃	2本同時施文具による重三角文	不明		
28	KS：15住－1層	〃	〃	2本同時施文具による横位沈線文・縦位沈線文	〃		
29	IK：9住	甕	〃	3本同時施文具による連弧状沈線文	〃		
30	KS：CK40-1層	〃	頸部	3本同時施文具による連弧状沈線文・横位沈線文	ナデ		
31	KS：15住－1層	壺	体部	3本同時施文具による重三角文	不明		
32	IK：CF35-1層	〃	頸部	3本同時施文具による連弧状沈線文、横位平行沈線文、縦位沈線文	ナデ		
33	KS：DA76	甕	体部	3本同時施文具による連弧状沈線文	不明		
34	KS：CS75	壺 or 甕	口縁部	連弧状沈線文、交互刺突文	〃	蔵王町大橋遺跡(太田：1980) 古川市宮沢遺跡(斎藤他：1980)	天王山式
35	KS：GP63	〃	〃	連弧状沈線文、縄文(LR)	ナデ		
36	KS：GP63	〃	〃	交互刺突文、縄文(LR)	〃		
37	IK：FT27	〃	〃	連弧状沈線文、交互刺突文、撚糸文(L)	不明		
38	KS：CS75-1層	甕	頸部	横位沈線文、列点刺突文、縄文(LR)	ナデ	名取市十三塚遺跡(太田：1979) 仙台市船渡前遺跡(宮教委：1977)	大泉式
39	KS：CE45-1層	〃	〃	列点刺突文、縄文(LR)	〃		
40	KS：15住-2層	〃	口縁部	縄文(LR)・結節文	不明	蔵王町大橋遺跡(太田：1980)	円田式
41	KS：表土	壺 or 甕	〃	縄文(LR)	ナデ	古川市宮沢遺跡(斎藤他：1980)	天王山式
42	KS：BD71-2層	〃	体部～底部	撚糸文(R)、布痕〔底面〕	〃		
43	KS：CK56		〃	無文、布痕〔底面〕	〃		
44	KS：BD71-2層		〃	無文、木葉痕〔底面〕	〃		
45	KS：BB54-1層	壺 or 甕	〃	縄文(LR)	ミガキ		

Ⅳ 考　　察

1. 縄文土器・土偶

縄文土器

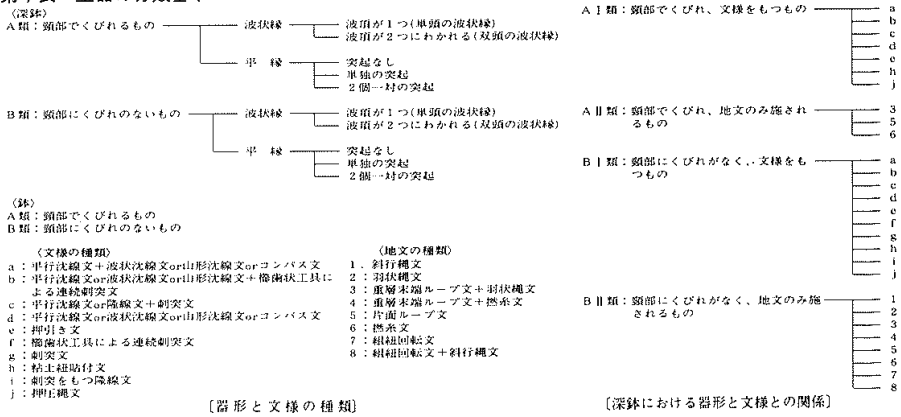
土器の出土状況にまとまりがみられるのは遺構や遺物包含層から多量に出土している前期前葉の土器だけで、他時期の土器はまとまりがなく、小破片のみで出土量も少ない。よって、はじめに前期前葉の土器について述べ、その後他時期の土器について従来の研究成果に基づいて土器を分け、既知の遺跡に類例を求めて編年的位置付けを行い、その結果を一覧表にして呈示する。

(1) 前期前葉の土器

住居跡・ピット・遺物包含層・表土及び表土下から出土し、何れも胎土に繊維を含んでいる。器種には深鉢と鉢があり、器形は頸部でくびれるもの（A類）と頸部にくびれのないもの（B類）とに大別され、文様の点でも地文以外の文様をもつもの（Ⅰ類）と地文のみ施されるもの（Ⅱ類）とに大別される。文様はａ～ｊ類、地文は1～8の8類に分けられ、第7表は、この器形と文様との関係をまとめたもので、その関係を出土量の多い住居跡や遺物包含層の口縁部資料についてみたのが第8表である。

これを深鉢についてみると、遺物包含層出土土器は数量的にＢⅡ$_1$・ＢⅡ$_2$・ＢⅡ$_3$類を主体とし、ＡⅠｈ・ＡⅠｊ・ＢⅠｄ・ＢⅠｊ・ＡⅡ$_3$・ＢⅡ$_7$類が若干伴なっている。この、数量的な主体がＢⅡ$_1$・ＢⅡ$_2$・ＢⅡ$_3$類にある組成は第7・10・15・51号住居跡出土土器にもみられる。これに対し第9・11・13・24・46・57号住居跡出土土器はＢⅡ$_1$・ＢⅡ$_2$・ＢⅡ$_3$類が少なくなり、ＢⅠｄ類が増え、新たにＡⅠｂ・ＡⅠｃ・ＢⅠａ～ｃ・ｅ～ｉ・ＢⅡ$_4$・ＢⅡ$_6$類が加わる（第9表）。

第７表　土器の分類基準



第８表　住居跡・遺物包含層における口縁部資料出土点数

	深鉢																									計	鉢	
	AⅠ類				BⅠ類										AⅡ類			BⅡ類									A類	B類
	b	c	h	j	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	3	5	6	1	2	1or2	3	4	3or4	6	7	8		
1 住												1												1	1		3		1
3 住																		2	1				1				4		
4 住											1																1		
6 住																			1				1				2		
7 住																		2	5	2	4		1		1		15		1
9 住					1								1									1		1			4		
10 住																			5	2			4		1		12		
11 住		2			1							1							1					2			7	1	
13 住	2					1		1				1						3			1			3			12		
14 住					1							2															3		
15 住						1				1					1	1		1	7							1	13		2
16 住								1										1	3		1			1			7		
17 住																			5	6	2		3				16		
19 住																								1			1		
22 住																		1	1	2	1						5		
23 住							1											1						5			7		
24 住					2			5			1						1		2	2			1	2			16		
26 住																			1								1		
27 住																							1				1		
31 住																			1								1		
32 住											1									1							2		
39 住											2							1			1	1			1		6		
40 住											1																1		
41 住																					1						1		
46 住							2	1		1			3							1	1						9		
47 住											2													1			3		
50 住								1											1				1	1	2		6		
51 住																		1	3	3	3					1	11		1
52 住																		1	2	2	1		1		1		8		
53 住																					1						1		
57 住					3			1	1	1								2						1	1		10		
58 住											1																1		
63 住									1				1					1		2				3			8		
64 住																				1				1	1		2		
67 住																				1				1			2		
包含層			1	1				1						2	1			13	8	10	7		5		1		50		
計	2	3	1	1	9	2	3	12	3	3	10	5	6	3	2	1	1	30	47	34	24	3	19	25	10	2	361	1	5
所属土器群	2群	2群	1群	1群	2群	2群	2群	1or2	2群	2群	2群	2群	2群	1群	1群	2群	2群	1or2	1or2	1or2	1or2	2群	1or2	2群	1or2	1群		2群	1or2

第９表　土器群別口縁部資料出土点数

		深鉢																											鉢	
		AⅠb	AⅠc	AⅠh	AⅠj	BⅠa	BⅠb	BⅠc	BⅠd	BⅠe	BⅠf	BⅠg	BⅠh	BⅠi	BⅠj	AⅡ3	AⅡ5	AⅡ6	BⅡ1	BⅡ2	BⅡ1or2	BⅡ3	BⅡ4	BⅡ3or4	BⅡ6	BⅡ7	BⅡ8	計	A	B
第1群土器	7 住																		2	5	2	4		1		1		15		1
	10 住																			5	2			4		1		12		
	15 住						1				1					1	1		1	7							1	13		2
	17 住																			5	6	2		3				16		
	51 住																		1	3	3	3					1	11		1
	包含層			1	1				1						2	1			13	8	10	7		5		1		50		
第2群土器	9 住					1								1									1		1			4		
	11 住		2			1							1							1					2			7	1	
	13 住	2					1		1				1						3			1			3			12		
	24 住					2			5			1						1		2	2			1	2			16		
	46 住							2	1		1			3							1	1						9		
	57 住					4			1	1	1								2							1		10		

ここでは、前者を第１群土器、後者を第２群土器と呼んで検討を行う。なお、土器は破片が多いため以下に出てくる各種の組成比は、特に断わりがない限り口縁部の残る土器をその対象としている。

住居跡出土土器は床面に伴なうものは稀で、ほとんどが堆積土からの出土である。このため

1つの住居跡から1群・2群双方の土器が出土することがあるが、層位をみると下層は1群・2群何れかの土器がまとまっており、上層で双方の土器が混在している。この場合、堆積土層出土土器で明らかに下層の土器と異なるものは検討の対象からはずしている（例、15住－BIb・ＢＩｆ・ＡII$_5$類）。

第1群土器

器種には深鉢と鉢があり、全資料118点の内深鉢114点、鉢4点と深鉢が主体となっている。深鉢、鉢ともに全て平底である。以下器種毎に内容をみていく。

〈深鉢〉

器形は口頸部・胴部の特徴から頸部でくびれるもの（A類）と、頸部にくびれのないもの（B類）とに分けられ、それぞれに波状縁と平縁がある。B類の平縁には突起のつくものと、ないものとがあるが後者が多い。各タイプの数量は、A－波状縁…3 点、A－平縁…1点、B－波状縁…9点、B－平縁…101点で、B類で平縁のものが際立って多い。口縁部の形態は多くが外反もしくは外傾しており、内彎や内傾するものは稀である。

地文以外の文様が施される土器は5点のみで、その施文部位は口縁部に限られている。地文のみ施された土器でも口縁部と胴部の地文の異なるものがあり、波状縁をもつものにそのような土器が多く、反面本土器群の主体であるB類－平縁の91%（92点）までが同一の地文のみ施されている。

地文は全ての資料に認められ、その種類と数量は斜行縄文－18点、非結束羽状縄文－32点、結束羽状総文－5点、重層末端ループ文＋非結束羽状縄文－12点、重層末端ループ文＋結束羽状文－3点、組紐回転文－3点、組紐回転文＋斜行縄文－2点、縄文（斜行縄文 or 羽状縄文）－23点、重層末端ループ文－13点、重層末端ループ文＋縄文（羽状縄文？）－3点で、撚糸文はなく斜行縄文、羽状縄文、末端ループ文で全体の96%（109点）を占めており、これら縄文の原体は大部分が0段多条のものである。

文様は、半截竹管による山形沈線文、波頂下の粘土紐貼付文、横位平行押圧縄文で、何れも地文が施された後に施文されている。

〈鉢〉

鉢は深鉢に比べて著しく少ない（4点）。器形は、①底部から外傾して口縁部に至り、口縁端部に突起をもつもの（第30図6）、②①の突起のないもの（第14図14）、③底部から直立気味に立ち上がりそのまま口縁部に至るもの（第75図10）、④③の口縁部が外反するもの（第32図4）で4点とも異なっている。全て地文のみ施され、その種類は①～③が非結束羽状縄文で④が口縁部－重層末端ループ文、胴部－複節縄文である。

深鉢、鉢双方を含めて底面施文、内面調整、胎土についてみる。土器底面に胴部と同じ地文が施されているものは底部資料21点中20点に認められ、底面施文の割合は非常に高い。

内面調整にはナデとミガキがあり、調整が観察できる資料64点中ナデ―51点、ミガキ―13点でナデが多い。

全ての土器の胎土には繊維が含まれている。

以上のような特徴をもつ土器は第3・6・16・26・27・31A・31B・41・52・64・66・68号住居跡堆積土からも出土しており、それらの中には深鉢の底面に刺突文が施されているものもある（第12図8）。

第2群土器

器種には深鉢と鉢があり、全資料59点の内深鉢58点、鉢1点と深鉢が主体になっている。深鉢、体ともに全て平底である。以下器種毎に内容をみていく。

〈深鉢〉

器形は口頸部、胴部の特徴から頸部でくびれるもの（A類）と、頸部にくびれのないもの（B類）とに分けられ、それぞれに波状縁と平縁とがある。波状縁は波頂が2つに分かれるものもあり、平縁では突起のつくものとないものとがあるが、突起は単独のものと2個一対のものとがある。各類の数量はA―波状縁：2点、A―平縁：3点、B―波状縁：12点、B―平縁：41点でB類―平縁が多い。口縁部の形態は外反もしくは外傾するものが多く、内彎や内傾するものは少ない。また、口縁部内面が肥厚し軽い段がつくものもある。

地文以外の文様をもつ土器は33点あり、施文部位は口縁部ばかりでなく胴部下半にまで及ぶものもある。器形と文様との関係をみるとA類やB類―波状縁といった器形に変化のあるものとの結びつきが強く、変化の乏しいB類―平縁は半数（22点）が地文のみ施されている。地文のみの土器でも部位によって地文の種類が異なるものもあるが数は少ない。

地文の種類をみると斜行縄文、羽状縄文、重層末端ループ文＋網目状撚糸文、撚糸文、木目状撚糸文、葺瓦状撚糸文、網目状撚糸文、組紐回転文、縄文（斜行縄文or羽状縄文）、重層末端ループ文、重層末端ループ文＋縄文があり、縄文（斜行縄文、羽状縄文、縄文、重層末端ループ文、重層末端ループ文＋縄文）と各種の撚糸文がそれぞれ20点、15点と多く、地文に対する撚糸文の占める割合が高い。撚糸文の中では葺瓦状撚糸文が他よりも少し多い。

文様の種類をみると平行沈線文、波状沈線文、山形沈線文、押引き文、櫛歯状工具による連続刺突文、刺突文、貼付文、刺突をもつ隆線文、平行沈線文＋各種の沈線文（波状沈線文、山形沈線文・コンパス文）、平行沈線文or波状沈線文or山形沈線文＋櫛歯状工具による連続刺突文、平行沈線文or隆線文＋刺突文があり、他の文様と組み合わされているものも含め沈線分が

文様をもつ土器33点中20点に認められ最も多い。沈線文や押引き文、刺突文は一本工具によるもの、半截竹管によるもの、櫛歯状工具によるものがあるが、後2者が多い。ところで山形沈線文は第1群土器にもみられるが、1群が半截竹管で描かれているのに対し本土器群のものは全て一本工具によって描かれている。貼付文は口縁部の波頂下や突起上、凹部といった変化のある部分にのみ施されている。

〈鉢〉

11住から1点出土している。平底で器形は胴部が膨らみ頸部でくびれ口縁部が外反する。無文で両面ともナデ調整が施され、胴部下半の器面が荒れている。

深鉢・鉢双方を含めて底面施文、内面調整、胎土についてみる。土器底面に胴部と同じ地文が施されているのは底部資料15点中8点に認められる。

内面調整にはナデとミガキがあり、調整が観察できる資料42点中ナデ―38点、ミガキ―4点でナデが多い。

全ての土器の胎土に繊維が含まれているが混入度は少なく、かわって石英や斜長石などの砂粒類を含み、斜長石は口縁部資料59点中27点に認められる。

このような特徴をもつ土器は第4・23・39・42・47・49・59・63・67号住居跡堆積土からも出土している。

第10･11表は以上にまとめられた第1群土器と第2群土器の特徴を本遺跡出土土器全てにあてはめ器形と文様との関係、土器群の構成を示したものである。

土器群の比較

第1群土器（以下1群とする）と第2群土器（以下2群とする）の比較をする。

共通点としては、1）平底の深鉢が主体でこれに若干の鉢が伴なう。2）深鉢の器形は頸部でくびれるものとくびれないものとがあり、後者が数量的に主体を占める。3）地文に斜行縄文、羽状縄文、ループ文、組紐回転文がある。4）文様に山形沈線文、貼付文、押圧縄文がある。5）内面の器面調整にはナデとミガキがあり、前者が数量的に主体を占める。6）底面に地文の施される土器が多い。7）胎土に繊維を含んでいる。などがあげられる。

相違点としては2群は1群に比べて、1）深鉢B類の平縁が減り波状縁が増える。2）口縁部の形態に変化をもつものが増える（波状縁の増加、双頭の波状縁の出現、突起をもつ平縁の増加、2個一対の突起の出現）。3）地文以外の文様をもつものが増え（1群―4%、2群―57%）、文様自体も複雑になる。4）地文は1群の主体を占めた斜行縄文、羽状縄文、ループ文が減り、かわりに各種の撚糸文が盛んに用いられる。5）1群の縄文の大部分を占めた0段多条の原体がほとんどみられなくなる。6）底部施文の土器が少なくなる（1群―95%、2群―57%）。7）胎土に含

第10表　器形と文様との関係

〈第１群土器〉

○深鉢

器形			文様地文
A類：頸部でくびれるもの	波状縁	波頂が１つ（単頭）	h
			3
	平　縁	突起なし	j
B類：頸部にくびれのないもの	波状縁	波頂が１つ（単頭）	1
			2
			3
			7
	平　縁	突起なし	d
			j
			1
			2
			3
			7
			8
		単独の突起	1
			2
			3

○鉢

器形			文様地文
B類：頸部にくびれのないもの	平　縁	突起なし	2
			3
		単独の突起	2

〈第２群土器〉

○深鉢

器形			文様地文
A類：頸部でくびれるもの	波状縁	波頂が１つ（単頭）	c
			d
		波頂が２つ（双頭）	a
			5
	平　縁	突起なし	a
			b
			c
			e
		２個一対の突起	6
B類：頸部にくびれのないもの	波状縁	波頂が１つ（単頭）	a
			b
			c
			d
			e
			g
			h
			i
			1
			6
		波頂が２つ（双頭）	a
			d
			1
			6
	平　縁	突起なし	a
			b
			c
			d
			e
			f
			g
			i
			1
			2
			3
			4
			6
			7
		単独の突起	d
			f
			h
			1
			2
			6
		２個一対の突起	d
			1

○鉢

器形			文様地文
A類：頸部でくびれるもの	平　縁	突起なし	無文
	波状縁	波頂が１つ	1

第11表　土器群の構成

- 第１群土器
  - 深鉢
    - Ⅰ・文様をもつもの ―― AⅠh、AⅠj、BⅠd、BⅠj
    - Ⅱ・地文のみのもの ―― AⅡ$_3$、BⅡ$_1$、BⅡ$_2$、BⅡ$_3$、BⅡ$_7$、BⅡ$_8$
  - 鉢 ―― B
- 第２群土器
  - 深鉢
    - Ⅰ・文様をもつもの ―― (AⅠa)、AⅠb、AⅠc、(AⅠd)、(AⅠe)
      BⅠa、BⅠb、BⅠc、BⅠd、BⅠe、BⅠf、BⅠg、BⅠh、BⅠi
    - Ⅱ・地文のみのもの ―― (AⅡ$_5$)、AⅡ$_6$
      BⅡ$_1$、BⅡ$_2$、BⅡ$_3$、BⅡ$_4$、BⅡ$_6$、BⅡ$_7$
  - 鉢 ―― A、B

（　）：カッコ内は遺構に伴わないもの

まれる繊維の量が減り、かわって石英や斜長石といった砂粒類が増える。などがあげられる。

土器群の年代

2つの土器群の新旧関係を明らかにし、その編年的位置を考える。

住居跡内堆積土からの土器の出土状況をみると、第1群土器がまとまって出土している第15・17号住居跡では第2群土器も出土しているが、これらは何れも層位的に上層のもので下層からの出土はない。このことから第1群土器が第2群土器に先行する可能性が考えられるが、遺物包含層から第2群土器の出土がないこともあり本遺跡では確実な新旧関係を掴むことはできない。そこで本遺跡の北5㎞にある仙台市三神峯遺跡（白鳥：1974、佐藤（則）他：1980）と比較すると第12表の様になり、第1群土器と同じ内容をもつものが第2群土器と同じ内容をもつものより層位的に下層から出土していることがわかる。したがって第1群土器は第2群土器に先行し、その編年的位置は三神峯遺跡との対比から第1群土器が「大木1式」、第2群土器が「大木2a式」に比定される。

第12表　三神峯遺跡との対比

今熊野遺跡	三神峯遺跡		今熊野遺跡	三神峯遺跡		今熊野遺跡	三神峯遺跡	
第1群土器	白鳥(1974)	佐藤(則)(1980)	第2群土器	白鳥(1974)	佐藤(則)(1980)	第2群土器	白鳥(1974)	佐藤(則)(1980)
深鉢AⅠh類			深鉢AⅠa類	第Ⅰ層第3類		深鉢BⅠh類		第2a層
〃 AⅠj類			〃 AⅠb類			〃 BⅠi類		
〃 BⅠd類	第Ⅱ層第3類		〃 AⅠc類			〃 AⅡ5類		
〃 BⅠj類		第2b層	〃 AⅠd類			〃 AⅡ6類		
〃 AⅡ3類	第Ⅱ層第1a類	第2b層	〃 AⅠe類			〃 BⅡ1類	第Ⅰ層第1b類	第2a層
〃 BⅡ1類	第Ⅱ層第1c類	第2b層	〃 BⅠa類	第Ⅰ層第3類	第2a層	〃 BⅡ2類	第Ⅰ層第1a類	第2a層
〃 BⅡ2類	第Ⅱ層第1b類	第2b層	〃 BⅠb類			〃 BⅡ3類		第2a層
〃 BⅡ3類	第Ⅱ層第1a類	第2b層	〃 BⅠc類			〃 BⅡ4類		第2a層
〃 BⅡ7類	第Ⅱ層第2類	第2b層	〃 BⅠd類	第Ⅰ層第3類	第2a層	〃 BⅡ6類	第Ⅰ層第2類	第2a層
〃 BⅡ8類			〃 BⅠe類			〃 BⅡ7類		第2a層
鉢 B類	第Ⅱ層第1b類		〃 BⅠf類			鉢 A類		
			〃 BⅠg類	第Ⅰ層第3類		〃 B類	第Ⅰ層第1a類	

※三神峯遺跡の場合、口縁部資料のほかに胴部資料をも含めている。

本遺跡からは大木1式、大木2a式の前後型式である「上川名Ⅱ式」土器、「大木2b式」土器も出土しており、これらと2つの土器群との比較を行なう。

上川名Ⅱ式と第1群土器（大木1式）との共通点としては1）器種の主体が深鉢である。2）深鉢の器形は大きく頸部でくびれるものとくびれのないものとに分かれる。3）地文以外の文様をもつものと地文のみ施されるものとがある。4）文様で山形のモチーフ、粘土紐貼付文、押圧縄文がある。5）地文は斜行縄文、羽状縄文が主体でその原体は0段多条のものが多い。などがあげられ、相違点は大木1式の場合、1）器種に鉢が加わる。2）器形では完全な平底になり、平縁で突起をもつものが増える。3）地文以外の文様をもつ土器が減り、文様帯は口縁部に集約され文様自体も単純になる。4）地文に末端ループ文が多く用いられ、撚糸文は非常に少なくなる。などの点があげられる。

第2群土器（大木2a式）と大木2b式とを比較すると器種や器形にほとんど変化はなく、違いは文様や地文の点になる。大木2b式は文様帯が口縁部に集約され、文様は沈線文が少なくな

り、かわって刺突をもつ隆線分や短沈線文、刺突文が多く用いられる。地文の点では大木 2a式の主体であった縄文や各種の撚糸文は少なくなり、S字状況文が大部分を占めている。

(2) その他の縄文土器

第13表　その他の縄文土器

	土器の特徴	類例	時期・型式名	図番号
(1)	器種：深鉢、胎土：繊維含む 文様：重層菱形押型文、平行線状押型文、重層菱形押型文→沈線文	白石市松田遺跡 (土岐山：1982)	早期前葉・日計式	70―1、75―1 104―11、115―1・2
(2)	器種：深鉢 文様：竹管による沈線文、短沈線文、押引き文、刺突文	蔵王町明神裏遺跡 (林：1962)	早期中葉・明神裏Ⅲ式	92―1、104―4 115―3
(3)	器種：深鉢、内面：条痕文、胎土：繊維含む 文様：竹管による円形刺突文、連続刺突文、短沈線文	岩出山町天神前遺跡 (小徳：1982)	早期後葉	104―5、115―4
(4)	器種：深鉢、胎土：繊維含む 文様：押圧縄文、短沈線文、刻目文、縄文	柴田町上川名貝塚 (加藤：1951)	前期初頭・上川名Ⅱ式	82―2・8、92―4 115―5
(5)	器種：深鉢、胎土：繊維の混入少ない 文様：刺突をもつ隆線文、短沈線文、刺突文、S字状沈文	迫町薬塚貝塚 (興野：1968、1981)	前期中葉・大木2b式	6―1～3、86―5 74―13、86―5
(6)	器種：深鉢 文様：刻目をもつ粘土紐貼付文、縄文	名取市宇賀崎貝塚 (岡部：1980)	前期中葉・大木3式	120―9
(7)	器種：深鉢 文様：粘土紐貼付文、縄文	名取市宇賀崎貝塚 (岡部：1980)	前期中葉・大木4式	86―6、104―15 120―10
(8)	器種：深鉢 文様：隆沈線文、磨消縄文	白石市菅生田遺跡 (丹羽他：1982)	中期末葉・大木10式	120―11
(9)	器種：深鉢 文様：平行沈線文、「S」字状文、縄文	村田町東足立遺跡 (黒川：1981)	後期中葉・宝ケ峯式	120―12
(10)	器種：深鉢 文様：入組文、三叉状彫去、瘤状小突起、縄文	名取市金剛寺貝塚 (小井川：1980)	後期後葉・金剛寺式	120―13、15
(11)	器種：浅鉢、高坏 文様：沈線による横位平行線文、変形工字文、口縁部内面に沈線文、縄文	柴田町興野遺跡 (芳賀：1976)	晩期末葉・大洞A'式	103―13～16 120―14

土偶（第120図16・17・18）

3点とも表土及び表土下から出土している。全て板状の土偶で、完形品はなく16・17が胴部、18が胸部の破片である。16・17は胴部両面にヘラ状工具による刺突文が施され、胎土に砂粒を多く含んでいる。時期は縄文時代早期に類例がなく、中期以降の土偶とは形態が異なるため縄文時代前期のものと思われる。

18は円錐形の乳房がつけられ、2つの乳房の中央付近から左右両下方へ向けて軽い段があり、腹部が胸部に比べてやや低くなっている。胸部の中央と段に沿って竹管による円形刺突文が施され、胎土に繊維や斜長石等の砂粒を含んでいる。時期は竹管による円形刺突文が施され、胎土に繊維や斜長石を含んでいることが本遺跡第2群土器の特徴と共通することから大木2a式期に属すると考えられる。類例は仙台市三神峯遺跡（伊東：1991）にあるが、三神峯の場合両乳房の下部中央から左右両下方に沈線が施され、円形刺突文はなく、時期は大木1式期と考えられている。

2. 石器について

石器組成　今熊野遺跡出土の石器には、石鏃、尖頭器、石錐、石匙、箆状石器、磨製石斧、打製石斧、磨石・凹石・敲石類、石皿、環状耳飾等の石製品、不定形石器、石核、剥片等がある。石器組成は不定形石器や剥片類を除くと石鏃、石匙、磨石・凹石・敲石類が多い（第122図）。ただし微細遺物の水洗選別は行っていないので石鏃等の小形石器は過小評価されているものと思われる。また、調査後、今風の整理に到るまでに行方がわからなくなった資料がある。

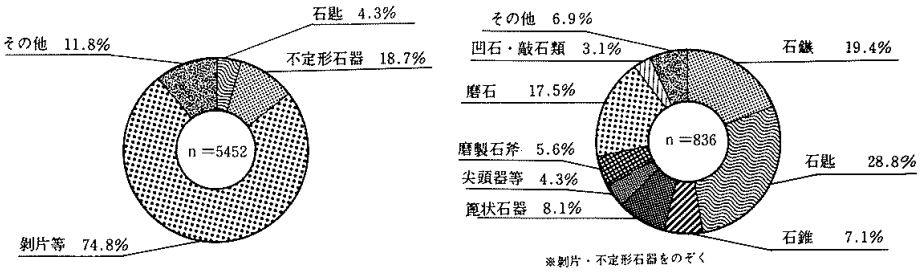
遺構堆積土・遺物包含層出土の石器とそれ以外の表土あるいは表土下出土の石器組成には大きな違いはない（第5表）。北台地区出土の土器は大木1・2a式が大多数であるので石器の多くも同期に属するものと考えられる。

石材の点から出土石器をみると、石鏃、尖頭器、石錐、石匙、箆状石器、不定形石器、石核は珪質頁岩、珪化凝灰岩が主体であり、一部碧玉、あるいは碧玉化した珪化凝灰岩が含まれる。磨石・凹石・敲石類、石皿には石英安山岩、安山岩等の粗粒あるいは多孔質の石材が用いられる。また、磨製石斧、打製石斧には凝灰質頁岩や細粒凝灰岩等が用いられており、器種によって石材に使いわけがみられる。

石鏃　遺構堆積土・遺物包含層出土の石鏃とそれ以外の表土あるいは表土下出土の石鏃は細部の形態が異なるが、基部が浅く窪み側縁が直線的で全体形が二等辺三角形状になるもの（ＩＢ類）とその変異形が主体となる点で共通している。

石鏃の長幅分布を第123図に示した。長さ・幅・厚さ・重さの平均値はそれぞれ2.7㎝、1.6㎝、4.1㎜、1.6gで、長さは1.5〜3.5㎝、幅は1.3〜2㎝の範囲に含まれるものが多い。石器の平面形態の遠いによる各類型と大きさの間には強い相関はないようである。石鏃の大きさ・重さの違いは石器の使われ方、対象物の違いと関係するものと思われるので、今熊野遺跡の石鏃にみられる形態差は機能以外の面から規定されていたと考えられる。

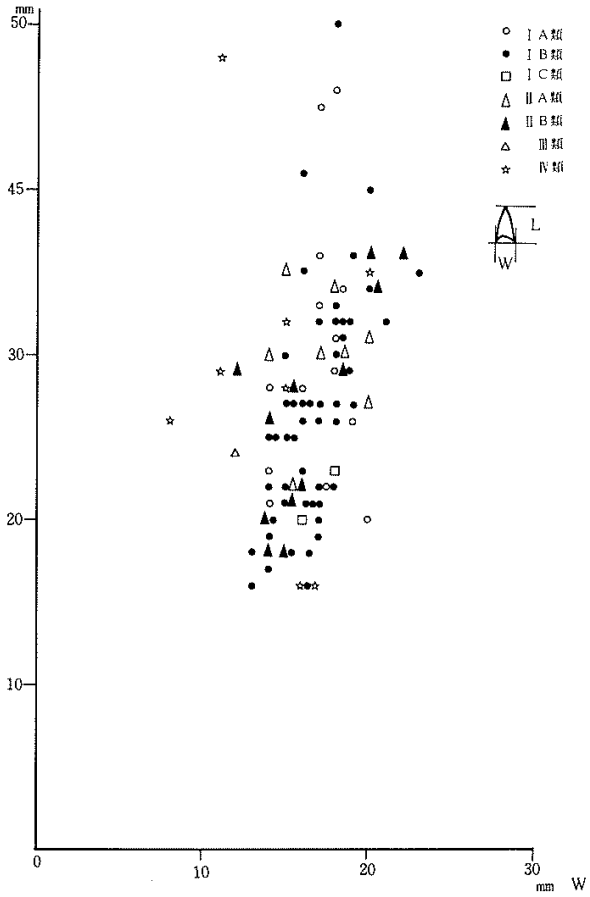
石鏃は111図61、67のように小さいものでも幅はほとんど13㎜以上ある。これは石器が着柄さ



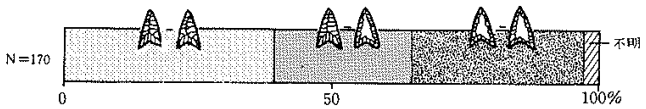
第122図　今熊野遺跡の石器組成

れた状態で“返り”が機能するために必要な大きさを示している。第123図で幅が12㎜以下の5点は、今熊野遺跡縄文前期の石鏃の上記の規格からはずれる。これらは形態上も、非対称、有茎のものを含む特殊資料であり、未製品、再加工および所属時期の異なる資料と考えられる。

石鏃の加工状態をみると166点中67点（40%）は完全な両面加工である（第124図）。一面に素材面を残すものは44点（27%）あり、また表裏面とも周辺加工で整形された石器は55点（33%）ある。これらの中には未製品・失敗品も含まれるものと思われるが、石鏃の中には71図1067のように石材の剥片が非常に薄いか小さいために加工が省略されている例があり、石器の製作過程にはある程度の柔軟性がある。石鏃の多くは剥片素材であり、ある程度素材の用い方のわかる例が45点ある。石鏃の形態に対する素材剥片の加撃方向をみると一定はしないが、長さが3㎝をこえる石器については、バルブの薄い剥片の打面を先端部側に置く形で用いている例が多い（111図62、2005、2026）。



第123図　石鏃の長幅分布



第124図　石鏃の加工状態

石鏃の破損は尖端部や基部のごく部分的な破損が多い。剥離面との切りあい関係から破損後の再加工が確認できるもの、尖端部が著しく摩滅していて錐に転用されていることが明らかなものが9点ある（89図620、21図1035）。

石錐　石錐は59点ある。12点（20%）は断面が円形ないし四角形の棒状の錐（Ⅰ類）である。44点（75%）は錐部とつまみ部の域が不明瞭なⅣ類であり、棒状の錐部とつまみ部からなる、ある程度定形的な錐（Ⅰ、Ⅲ類）は3点にすぎない（第5表）。

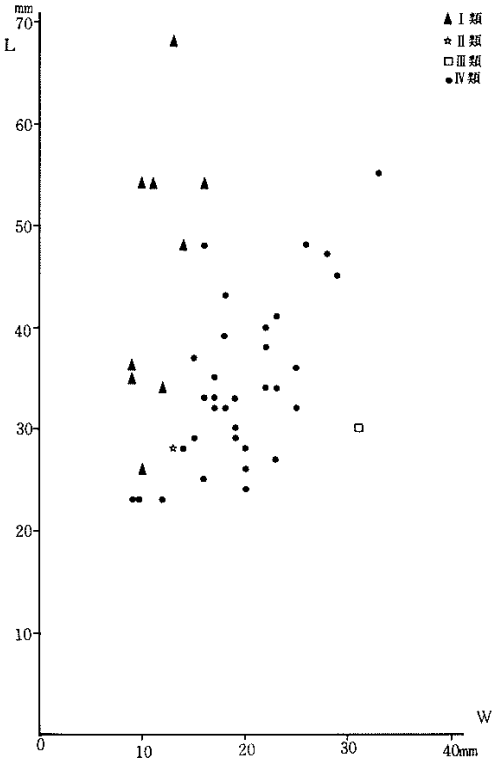
Ⅰ類（棒状）は幅1㎝前後で長さは4㎝以下の小形のものと5㎝をこえる大形のものがある（第125図）。Ⅳ類の多くは長さ2〜5㎝、幅1〜3㎝の範囲に含まれる。

加工状態をみるとⅠ類（棒状）は両面加工がほとんどだが、Ⅳ類は折断面をもつもの、急角度の剥離で整形されるもの、細かい剥離が連続するもの等、加工のあり方が様々である。

石錐のうち20点（34%）の尖頭部に使用によると考えられる摩滅がみとめられる。使用痕はとりわけⅠ類に多い（7点）。Ⅰ類中には両端が摩滅しているもの（112図496）、摩滅の範囲が尖端から11㎜におよぶもの（112図24）がある。肉眼で摩滅が確認できる石錐は、先端が丸くなるまで使用されていて回転運動を示す線状痕がみとめられる資料が少なくない。石錐のこのような使用痕は、石錐が単純な突き錐でなく、連続的な回転運動による穴部の整形を含めた穿孔に用いられていたことを示している。対象物は骨角等の硬質な素材が予想される。またⅠ類はその形態から着柄して用いられたと考えられる。

Ⅳ類は鋭角的で厚みのある尖端部を有する点で共通するが、形態・加工状態とも多様である。不定形石器の中にはかなりの数の“二縁辺の収斂する石器”（いわゆるコンバージェントスクレイパー）があり、一方で今熊野遺跡では定形的なⅡ、Ⅲ類の石錐がほとんどないことを考えあわせると、Ⅰ類以外の石錐は必要な状況に応じて、その場にある剥片を加工してつくられるという便宜的な使われ方をした石器であったと思われる。

石鏃、石匙のなかに先端部に著しい摩滅のみとめられる石器があることは、石鏃から石錐への転用、石匙を穿孔に用いることが柔軟に行われていたことを示しており、先の石錐Ⅳ類の性格と共通する点がある。



第125図　石錐の長幅分布

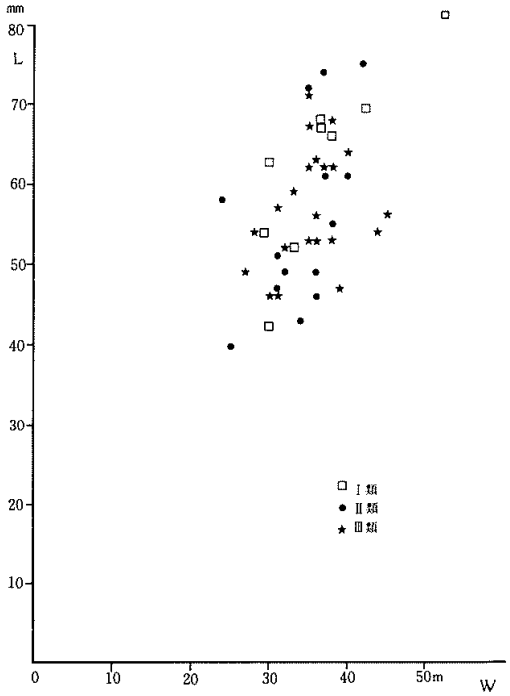
篦状石器　篦状石器は73点ある。大きさは長さ、幅、厚さ、重さの平均値が5.8㎝、3.5㎝、1.6㎝、35gで長さは4〜8㎝、幅は2.5〜4.5㎝の範囲に含まれるものが多い。

基部形態をみると、基部が尖るもの（Ⅰ類、10点）、丸くなるもの（Ⅱ類、15点）、直線的で全体形が短冊形に近くなるもの（Ⅲ類、23点）がある。各類の長幅をみると第126図のようにおおむね重複するが、Ⅰ類は長さが大きく、Ⅲ類は幅がやや大きく、Ⅱ類は長さ・幅とも小さく小形という微妙な遠いがある。

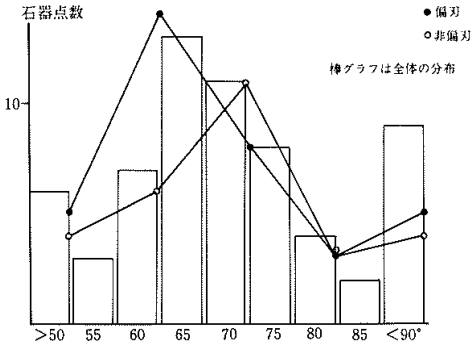
刃部は片刃が多いが、52図156のように両面加工で両刃の石器が10点（16%）ある。刃部の平面観は直線的なものが27点に対し、彎曲するものが21点ある。また、40図22のように石器の長軸に対して刃線が傾く“偏刃”が半数以上の25点ある。

篦状石器の素材はバルブの平坦な厚手の剥片が用いられる。小形の石器の場合には縦長の剥片の打面を基部側におく形で、また大形の石器には横長の剥片をその形態に促して用いる傾向がある。一部の両面加工を除くと、多くの石器は片面ないし半両面加工であり、腹面側に素材面を残す。また側縁の加工はステップ・フラクチュアがめだつ。

篦状石器は基部がすぼまる形態という点で共通することから着柄して使用されたものと考えられる。刃部は片刃が多く刃角は平均70度と大きい。石器に肉眼で使用痕がみとめられる資料が11点あり、とりわけ刃部の裏側に摩滅や光沢がめだつ（52図208・114図2323）。偏刃の石器は石器背面を正面に刃部を下にして置いた場合、刃線が右上がりになる資料が多い（114図2311）。偏刃とそれ



第126図　篦状石器の長幅分布



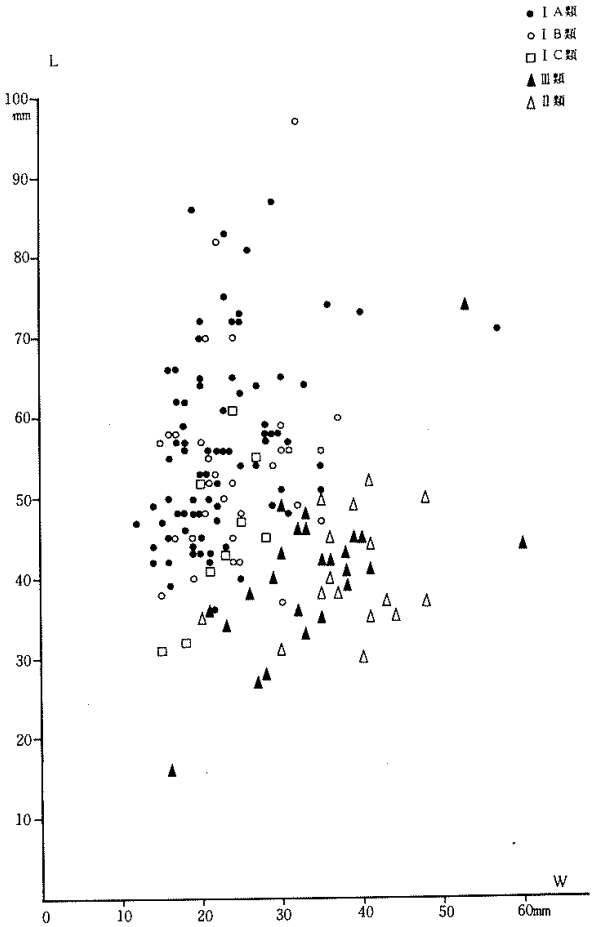
第127図　篦状石器の刃角

以外の刃線か石器長軸と直交する石器の刃角を比較すると偏刃のほうが小さい傾向があり、偏刃を使用による再加工の結果とする積極的な根拠に欠ける(第127図)。ただし箆状石器全体の刃角分布をみると刃角が90度をこえるグループがあり、こうした石器にステップ・フラクチュアの顕著なことから、刃部の再加工の可能性は否定できない。

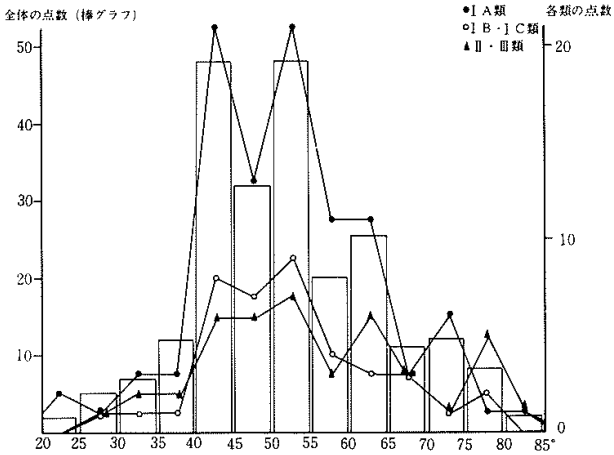
石匙 243点ある。そのうち148点が完形資料で破損率が低い(39%)。遺構堆積土・遺物包含層出土の石匙とそれ以外のものにはほとんど違いがない(第5表)。

石匙は縦長のもの(Ⅰ類)が140点(74%)と多く、他に横長のもの(19点、10%)、中間形のもの(30点、16%)がある。Ⅰ類中には身部が2辺または3辺から機成されるものが多い。

石匙の長幅分布を第128図に示した。縦、横の形態差があるのでまとまりがないが、Ⅰ類は長さ4〜7㎝、幅1〜3㎝の範囲に含まれるものが多い。石器は剥片素材で剥片の打



第128図　石匙の長幅分布



第129図　石匙の刃角

面部をつまみにするものが多い。加工状態は半両面加工のものが182点（84%）あり、とりわけつまみの溢れ部のみ両面加工で身部は背面に連続する剥離がなされる例が多い（112図2133他多数）。

石匙の刃角の分布を第129図に示した。40度と50度に2つのピークがある。これはⅠ類の傾向性を反映しており、Ⅱ、Ⅲ類はⅠ類より刃角が大きい。

石匙の機能については、動物の解体・処理具、農具、木・竹・骨等の加工具といった諸説があるが、梶原（1982）は仙台市三神峯遺跡出土の石匙を対象とした顕微鏡による使用痕観察によって、石匙が「皮・肉・角・骨などの動物質のものの加工の他に、稲や木などの植物をも対象として様々な作業に使われ」ている可能性を指摘した。三神峯遺跡は今熊野遺跡と近接する同時期の遺跡であり、石匙の形態と組成、加工技術はよく類似する。従って今熊野遺跡の石匙についても同様の機能が想定できる。今熊野遺跡の石匙は肉眼観察によって224点中4点の縁辺に光沢と軽い摩滅が、また21点の先端部に摩滅がみとめられており、縦形の石匙の先端部が錐として使用されていることがわかる（52図1060、112図124、377）。

梶原は使用痕観察と石器の加工状態から三神峯遺跡の石匙に再加工による形態の変化があったことを指摘している。今熊野遺跡の石匙を観察する過程でも、石器の裏面に残る素材剥片の腹面のリング等の状態から、石器の一側縁のみが二次加工によって著しく“片減り”している石器がみとめられている（112図250）。これは単なる整形加工としては不自然であり、石器の使用刃部のみが再加工によって変形したものと思われる。石匙のなかにみとめられる、一側縁が直線的になる石器や全体が弓状に彎曲する石器は再加工による著しい変形の結果そうなったものが含まれるものと考えられる。

磨石・凹石・敲石類　これらの石器は従来、使用痕の違いによって磨石、凹石、敲石というように分類されてきた。しかしながら、磨石・凹石・敲石類は敲石の一部を除いて石英安山岩、安山岩といった粗粒の円礫、楕円礫を素材とする点で共通しており、また、一つの石器に複数の使用・加工痕がみとめられる例も少なくないことから単純に分類できない面がある。そこで、以下ではこうした礫石器を一括し、使用・加工痕と素材となった礫の関係をみてみたい。

観察の対象とした石器は185点ある。使用・加工痕のあり方は第5―5表に示した。完形資料は39点であり、破損率が高い（79%）。破損資料は半分もしくはそれ以下になっているものが少なくないので、長さを省略して幅と厚さの分布を第130図に示した。幅厚分布には次の3つのまとまりがみとめられる。

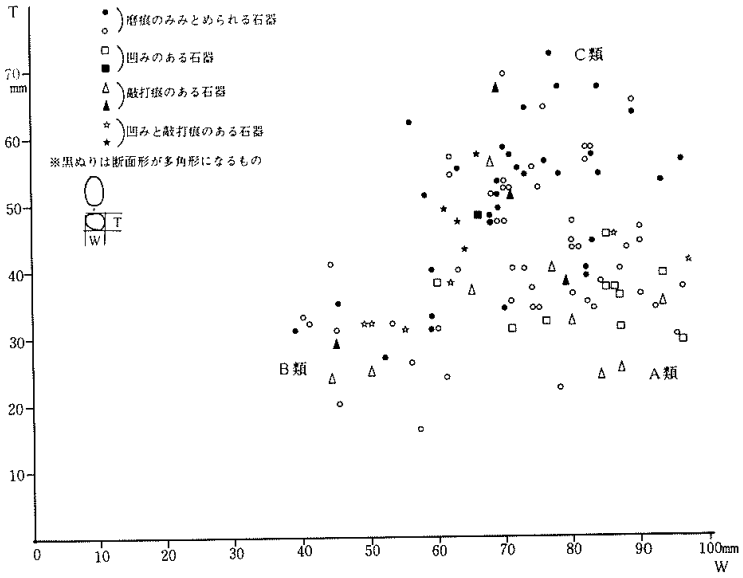
A類：幅7～10㎝、厚さ2～5㎝、幅厚比2前後に分布するもの

B類：幅4～6.5㎝、厚さ1.5～4.5㎝、幅厚比1.65前後に分布するもの

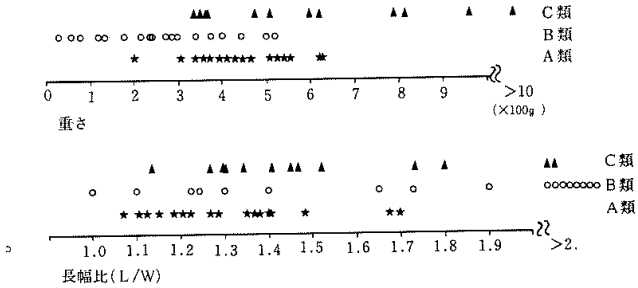
C類：幅5.5～9㎝、厚さ4.5～7㎝、幅厚比1.3前後に分布するもの

ＢＣ類間やＣ類右上に分布がやや離れる石器があるが、少数で傾向がつかみにくいため、それぞれB、C類に含める。

長さのわかる資料について長幅比をみると第 131 図のように、B類は長幅比 1〜1.4 の円みのあるものと長幅比 2.0 あるいはそれ以上の細長い形態のものに分けられる。A類は長幅比 1〜1.5 の円ないし楕円形であり、C類は長幅比 1.3 以上のやや細長い形態になる。C類のうちの大形のものはとりわけ破損率が高いので、実際にはC類は第 131 図に示された以上に細長い形態のものがめだつ。



第130図　磨石・凹石・敲石類の幅厚分布と断面形態



第131図　磨石・凹石・敲石類の重さ、長幅化

重さの分布をみると、B類は 100〜500g、A類は 300〜600g、C類は 300g 以上の広い範囲に分布するが 700g 以上の重さをもつ石器はC類に限られる（第 131 図）。

各類の断面形態を比較すると、第 130 図に示したようにA類は楕円形がほとんどであり、C・B類には三角形、四角形あるいはそれら以外の特殊な形態が多く含まれる。

A、B、C類の細部形態を比較してみると第 130 図に示された以上にその違いは明瞭である。

次に使用・加工痕とA〜C類の関係をみてみると、磨痕・凹み・敲打痕が排他的に特定の形態と結びつくことはないようである（第 130 図）。凹みが扁平楕円形のA類にやや多いようだが明

瞭ではない。

仙台市山口遺跡出土の縄文時代後期の磨石・凹石・敲石類を分析した山田は、これらの石器の形態のまとまりと使用痕の間に比較的明瞭な対応関係がみとめられたことから、形態のまとまりは大雑把なレベルにおける機能をみたすものと考えている（山田 1984）。ただし、山口遺跡においても形態と使用痕の関係は１対１の排他的なものではない。

磨痕・凹み・敲打痕がそれぞれどのような機能を反映しているのかは判然としない。しかしながら、今熊野遺跡では、これらの石器に共通の石材、形態の礫が用いられており、また、同一の石器に複数種の使用・加工痕がみとめられる例が多いことから、これらの石器が、磨ったり砕いたり敲いたりする一連の機能をみたす道具として認識され、石匙と同様に多機能に使いわけられていたように思われる。

それでは素材礫の形態差は何を意味しているのであろうか？

A～C類の石器の磨面をみると、磨痕はA～C類のすべてに観察されるが、A、B、C類ではそのあり方が異なる。磨痕は石器の扁平な二面に残される場合が多いが、それ以外に一面のみが平坦になるまで摩滅して　⌓　断面形になるもの、あるいは断面三角形の素材礫の二辺にあたる二面を磨面とするもの（使用によって石器が片減りした結果、断面三三角形になったと思われるものもあるが）、四磨面構成で断面四角形になるもの（99 図 1070）、不整形礫の複数辺を磨面とするもの等がある。第 130 図でわかるように、A類に断面楕円形の石器が多く、B類、C類の一部に断面三角形、断面四角形等のものが多いことは、実はA類とB、C類の磨面の構成にこのような違いがあることを反映している。

石器の形態・大きさの違いは素材礫を獲得する時点で特定の形態が選択された結果であり、それは石器の具体的な使われ方の違いと結びつくものと思われる。磨石は石皿とセットになって出土する例があることから石皿上で植物性食糧の加工等に用いられたことが考えられている。しかしながら今熊野遺跡のB類あるいはA類の一部の石器は石皿上での使用を考えるには不自然な大きさ・形態である。福井県鳥浜貝塚では、出土した木製品の多くが加工の最終段階で研磨されており、そうした研磨に磨石が用いられた可能性が指摘されている（山田 1979）。

磨石の用途は従来考えられている以上に広いものと思われる。今熊野遺跡のC、A、B類もたとえば床面におかれた石皿での加工作業の他に、手持ちでの使用、あるいは木製品・Ｉ 骨角器等被加工物の種類・大きさに応じて、使い分けられていたことが予想される。凹み・敲打痕についても同様であり、敲打痕のある石器のA～C類の中には、たとえば石器の製作過程で使い分けられた複数種類のハンマーが含まれている可能性がある。

3　遺構と集落

住居の構造

今熊野遺跡で検出された住居跡は71軒ある。住居跡の一部しか調査されていない例や59、62号住居跡のように住居の輪郭・柱配列が不規則なもの、あるいは2号住居跡のように明らかに住居の構造が異なる例を除くと、多くの住居跡に次のような共通する点がみとめられる。

1）住居跡の大きさには変異があるが、平面形は方形あるいは長方形を呈する。

2）住居跡の中央には径10～20㎝、深さ50～70㎝のピットがある。39、68号住居跡では柱跡がみとめられている。

3）住居跡の壁にそって径10㎝前後、深さ数㎝～十数㎝の小ピットが10㎝～数十㎝間隔で連続して配される。これらの小ピットは住居内に若干傾く場合が多い。また9A、13、39 号住居跡等では住居の四隅あるいは各辺中央のピットが他の小ピットより深いことが指摘されている。

4）6号住居跡（第11図）が典型的な例だが、住居跡の立地する斜面の下側の辺（東辺あるいは南東辺）に複数のピットからなる特別の施設がある。すなわち東（南東）辺の住居外に接して径数十㎝の円形ピット（11図のP2）があり、これに隣接してやや深い一対の壁ピット（P4 P5）がみとめられる。さらに円形ピット（P2）に対応して住居内にやや小形の円形ピット（P3）が設けられる住居もあるが、このピットは省略される場合が多い。

5）周溝・炉は存在しない。また2、3、4以外に規則的な配置を示すピットはない。

6）遺存状態がよい場合、住居跡堆積土は底面近くから壁際にかけてロームやパミス粒を含む暗褐色～黒褐色の粘性のある土が分布し、堆積土上部には焼土・木炭等を含む黒褐色土がみとめられるというパターンが多い。また床面上には炭を含む薄い粘質の黒色土が分布する。遺物が床面上より出土する例は少なく、土器・石器類はほとんど堆積土上部の黒色土中に含まれる。遺物の出土量は住居跡によって異なる（第1表）。

このような共通する構成を示す住居は同一の上屋構造をもつものと思われる。上屋を支える柱としては2にあげた住居跡中央のピットがある。3にあげた壁沿いに並ぶ小ピットは浅く、大きな重量を支える柱があったとは考えにくい。壁沿いのピットが内傾することを考えれば、これらのピットと主柱先端を結ぶ形で放射状に屋根材を垂下させた、極端に単純な構造の住居を想像することができる。しかしながら、一方で、5㎡を越える規模の住居があり、壁沿いピットも四隅や各辺中央のものが深くなるという傾向性があることを考え合わせれば、壁際には壁を支持し、また上屋の一部を支えるような壁柱列があって、その上に主柱から屋根材が被さ

るような構造の住居を考えることもできる。

4にあげた東（南東）辺中央の円形ピットは埋めもどされた形跡も柱痕跡もない。堆積土は住居跡堆積土と共通することから住居の機能していた期間は開いていたと考えられる。このピットに伴う住居内の一対の壁ピットは深さがあり、この部分に一対の柱を有する特殊な上屋構造があった可能性がある。6、10号住居跡にみられるように壁柱穴は原則として住居の全周に及ぶ。従って、唯一壁柱のとぎれる東（南東）辺中央付近は住居の出入口になっていた可能性がある。13、17 号住居跡のように壁柱穴は部分的にとぎれる例があるので一概には考えにくいが、東（南東）辺中央ピット群は形態の整った住居のほとんどにみとめられる施設であり、しかも斜面下方に位置することから、ピットに蓋をするなどしてこの空間が出入り口となっていたものと思われる。ただし、住居の上屋構造については住居の機能を考えると説明のむずかしい点もあり、再考の余地があろう。

縄文時代前期の住居　次に周辺地域における前期前葉の住居の様相をみてみる。

仙台市三神峯遺跡3号住居は、長方形で壁柱穴、主柱穴をもち今熊野遺跡とほとんど同じ構造を有する。ただし、三神峯遺跡の場合は住居の周囲にもピットがあり、これが住居の上屋構造に関係すると考えられている（岩渕・佐藤 1980）。宮城県内ではこの時期の住居例が少ないが七ヶ宿町小梁川遺跡では前期前葉の住居8軒を検出している。壁柱穴がめぐる長方形のものが多く、2軒は床面上に焼面がみとめられる（新庄屋 1982）。今年調査された利府町六田遺跡は今熊野遺跡に後続する大木2b、3式期の集落跡である。住居は長方形の今熊野遺跡類似のものの他に住居内に1本柱でない複数柱穴を配するものが出現する（利府町教委 1985）。

南の福島県では会津高田町胄宮西、飯館村松ヶ平A、石川町達中久保遺跡等で前期前葉の住居が報告されている。

胄宮西遺跡3号住居は、不整方形で壁柱穴、主柱、住居外に張りだすピットを有する点で今熊野遺跡と類似する。しかしその他の住居は住居外に付属する円形ピットはなく、地床炉があり、柱配列も異なる（浜名 1984）。松ヶ平A遺跡は早期末から前期前葉の集落跡であるが、急斜面上に立地するため全体形のわかる住居例は少ない。大木2a式期とそれ以前の住居は不整円形、楕円形を基調とし壁柱穴を有するようだが、柱配列は不明瞭であり地床炉をもつ住居がある（鈴鹿 1983）。達中久保遺跡27号住居は長方形で柱穴がみとめられない（目黒 1979）。

山形県では米沢市法将寺、大石田町庚申町、東根市小林遺跡等で該期の住居例がある。

法将寺遺跡は前期初頭の集落跡である。住居は長方形で壁柱穴が連続するが、1本柱の主柱穴はなく、地床炉を有する（手塚 1985）。庚申町遺跡は今熊野遺跡と同じ大木1～2a式期の集落跡である。住居は楕円形と方形を基調とするものがあり、壁柱穴を有するが、1本柱の主柱

穴はない。掘りこみ炉がみとめられる例がある。(加藤 1984)。小林遺跡では大木 2 式期の大形住居が報告されている。形態は不整長方形で壁柱穴がまわるが、複数の柱を配し、のべ 4 基の地床炉をもつ（佐藤他 1976）。

岩手県では二戸市中曽根II、松尾村長者屋敷遺跡等の住居列がある。

中曽根II遺跡は早期末から前期初頭の集落跡で大形の住居と小形の住居からなる。住居の形態は方形ないし長方形を基調とし、大形の住居は複数の柱穴が規則的に配置される。すべての住居に壁柱穴、炉がみとめられない（関 1981）。長者屋敷遺跡では前期前葉の住居を多数検出している。形態は円形ないし楕円形を基調とし、住居中央に位置する主柱穴・壁柱穴はみとめられないようである（高橋他 1980）。

縄文時代前期前葉の住居は方形、長方形を基調とするものが多いが、その構造は地域によって差がある。今熊野遺跡にみられるような壁柱穴を有する住居は宮城、山形、福島県にみとめられるが必ずしも壁沿いにびっしりと並ぶものではない。また、柱配列は 1 本柱よりも住居内に複数の柱を配置するものが多いし、住居内に地床炉を伴う例がかなりみられる。今熊野遺跡と全く同じ構造をもつ住居は三神峯遺跡以外にはみとめられず、こうした住居の分布・消長はかなり狭い地域・時間幅に限られるようである。

遺構の同時存在の条件

今熊野遺跡の住居は共通する構造がみとめられることから近い時期のものと考えられる。しかしながら遺跡の集落としての構成を考えるうえでは、ある時期に同時併存した集落構成要素とそれらの変遷を明らかにする必要がある。ピットはその所属時期を明らかにしうる情報に欠けるものが多いので、以下では最も重要な集落構成要素である住居を対象として分析を試みる。

今熊野遺跡では、焼失家屋群のような特殊な状況下で廃棄された遺構はなく、また遺構に伴う遺物の間の接合関係もみとめられない。従って厳密な意味で同時存在した住居群を明らかにすることはむずかしい。

重複関係にある住居群は、同時性を否定形でしか説明しえないが、住居の変遷を考えるうえで最も直接的な証拠を提供しうる。今熊野遺跡では重複のみとめられる住居群が 13 組ある。また、同一地点で“建て替え”あるいは“拡張”のみとめられる住居は 7 軒ある。

○新旧関係を推定しうる重複住居；8→34、9B→9A、35・□→11、27→16、23A→23B、66→39、17・□→40、67→41、57→64、58→□、63→62

○新旧が不明な重複住居；11 と 12、15 と□、67 と 68

（□は住居番号はないが住居の存在が推定されるもの）

○建て替え等があったと思われる住居；2、24、39、42、55、57、63

同一地点に3軒以上が重複する例はないので限られた範囲の新旧しか明らかにできないが、住居群は少なくとも2期以上にわたって変遷していることがわかる。

住居の廃絶と遺物の廃棄

次に住居跡内の出土遺物について検討してみる。

住居跡の床面から出土する遺物はほとんどなく、土器・石器類の多くは住居跡の堆積土上部に含まれる。堆積土上部の黒色土は生活残滓の廃棄と流れ込みによって形成されたものと思われるが、堆積土下部の遺物をほとんど含まない層については判断がむずかしい。10、13、15、17号住居跡の断面図にみられるような壁際からの斜め堆積は自然流入に因るもののようにみえる。堆積土中にロームブック等が含まれる点は埋めもどされた土にみとめられる特徴の1つといえる。しかしながら、今熊野遺跡の住居は火山灰層を掘こんでつくられているので、自然流入の場合でもローム粒等が混入することはありうる。このように判断のための確かな根拠に欠けるが、仮に住居跡の堆積土が自然堆積であったと仮定するならば、住居の機能していた期間と遺物の廃棄された時期の間には時間差がみとめられる。

この点で今熊野遺跡の遺物出土状況はいわゆる「吹上パターン」と共通している。末木健（1975、1985）は吹上パターンの第1次堆積層（無遺物層）が形成される背景には、その期間に人々が他の地点に移動していて、集落が放棄されていたことが考えられるとし、同時期の集落が隣接して存在する理由も移動を相互に繰り返していたことによって理解できるとしている。吹上パターンが集落の頻繁な移動の繰り返しによって形成されたとする“移動論”は住居跡堆積土中の無遺物層の存在を説明する最も妥当な仮説であり、今熊野遺跡における住居の廃絶と遺物の廃棄状況に関しても、これが居住集団の短い周期での移動が繰り返された結果である可能性は十分考えてよいと思われる。

住居の変遷

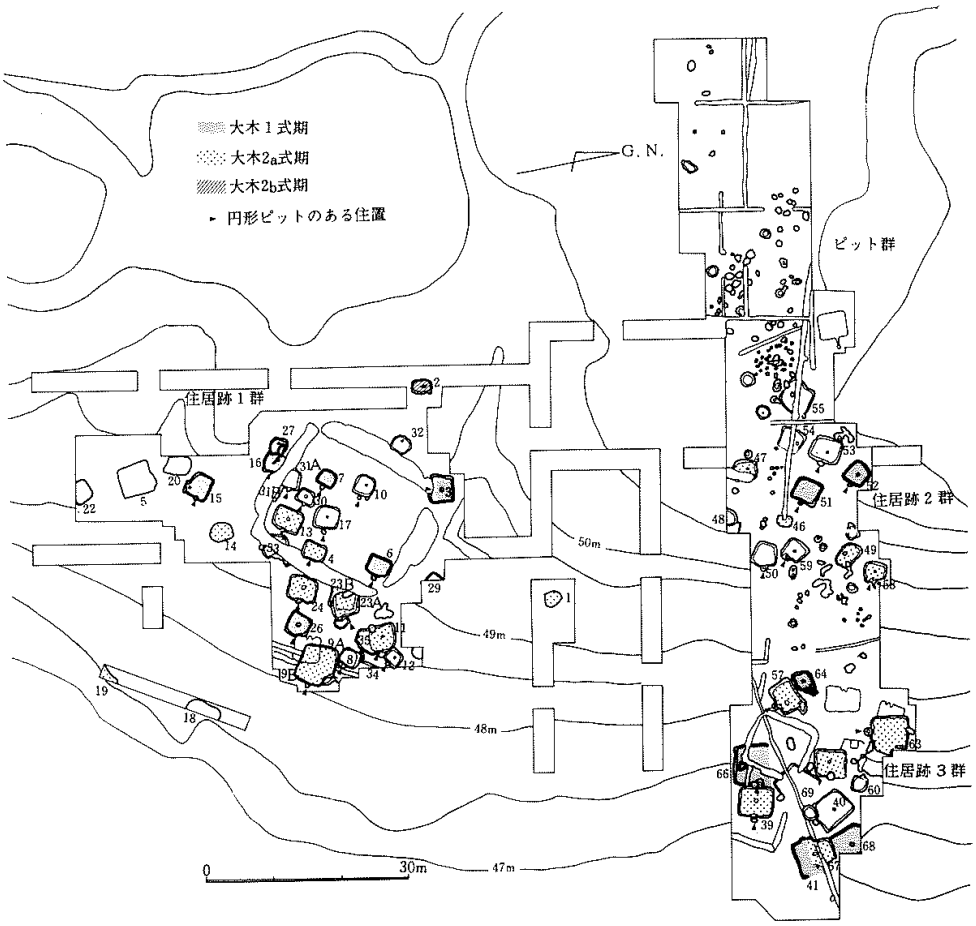
各住居の出土遺物に話を戻そう。2、3、26、41号住居については床面上から時期の判断できる土器片が出土している。その他の住居については床面出土遺物に乏しいので堆積土中の土器で主体を占めるものをもって住居の時期としておく。土器型式レベルでの住居跡の時期区分は2号住居（大木2b式）をのぞくと大木1、2a式の2期に限られる。先に問題とした住居廃絶から遺物の廃棄開始までの空白期間は、一土器型式の存続期間よりも遥かに短い時間幅であり（末木1985）、土器型式単位の大別的な時期区分の場合にはこうした時間差はある程度無視しうるものと考えられる。ただし、これは住居の廃絶から半埋没そして新たな住居に伴って遺物が廃棄される、というパターンが短い周期である程度規則的に繰り返されていることを前提とする。

各住居の所属時期は次の通りである。

○大木１式期；3、6、7、10、15、16、17、22、26、27、31A、31B、41、51、52、64、66、68
○大木２a式期；1、4、9A、9B、11、13、14、19、23A、23B、24、39、42、46、47、49、57、58、63、67
○大木２b式期；2

重複する住居が同一期に属する例については新旧の住居跡の堆積土を識別しえないまま掘りあげている場合もあるので、2軒が同一期であることを示しているとは限らない。

住居の構造は大木1、2a式期を通じて共通するが、規模は大木2a式期にやや大きくなるようにみえる（第134図）。大木2b式期の2号住居はその形態・柱配列が異なり地床炉を有する。



第132図　住居跡の分布

遺跡内における住居の分布

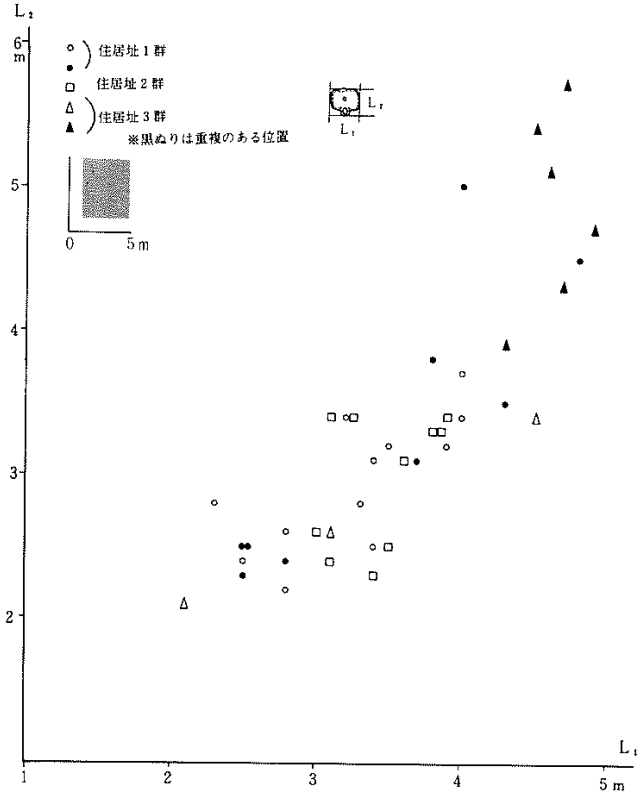
住居跡の分布とその所属時期を第 192 図に示した。発掘区内の住居の分布はP7 でふれたように 3 群にわかれる。第 1 群と 2・3 群の間、2・3 群の北側の調査は不十分だが、各群間には住居跡の分布しない空白域がみとめられるようである。

各時期の住居の分布をみると、大木2b式期の 2 号住居は住居跡第 1 群の西端にあり、他の住居と分布が離れる。大木 1、2a式期の住居は住居跡 1、2、3 群のすべてに存在している。住居の構造に変化がみられないことも含めて、住居の 1〜3 群は時間的な変遷とは考えにくい。同時存在を証明する確かな根拠に欠けるが、今熊野遺跡では大木 1〜2a式期にわたって 1、2、3 群の住居が併存する形で集落が変遷していたものと推測される。

既に検討したように、住居の重複例、堆積土の状況から大木 1、2a式期の住居はさらに複数期に細分される。同時併存する住居のセットは明らかでないが、1、2、3 群の中で同時存在した住居は多くでもそれぞれ数軒にすぎないものと思われる。

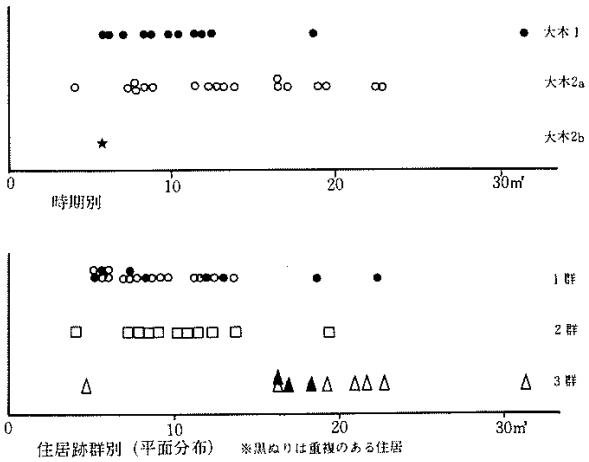
住居の規模と重複

今熊野遺跡の住居は概して小形のものが多いが、一辺が 2m から 5m をこえるものまで大きさに変異があり、住居面積も 4〜31 m²と幅がある。住居の 1、2、3 群について、その規模と重複の有無を示したのが第 133・134 図である。これをみると第 2 群と第 3 群は住居面積 15 m²を境に第 3 群に住居規模の大きいものが多く、また重複列も多いことがわかる。第 2 群と第 3 群は東に下る緩斜面上の上下に位置するが、第 1 群内の住居にも実は同様の傾向がみとめられる。第



第133図　住居跡の長幅分布

1 群内には面積 15 m²以下の住居が多いが、斜面東側には 9、11 号住居のような規模の大きい住居がある。また第 1 群の東側には重複する住居が集中する。第 1 群の南東で確認されている 18、19 号住居の存在を評価するならば、第1群の住居の分布はさらに東側に広がっていて、第 3 群と同様、標高 47m あたりまで分布がのびる可能性がある。



第134図　住居面積

復元された住居跡第 1 群は 2、3 群と対峙する大主居跡群であり、今熊野遺跡の住居は、住居規模に違いのある 2 小群とそれらの組み合わせからなる 2 大群で構成されていたものと考えられる。

集落の居住様式と居住集団の社会組織の間には密接な関係があるものと考えられるが、理論的枠組みなしに、居住のあり方から帰納的に社会構造を導くことはむづかしい。

今熊野遺跡の住居は小形で炉を欠くことから疑問は残るが、一応、住居＝世帯と仮定して論を進めるならば、今熊野遺跡の居住集団は第 1 群と第 2、第 3 群を形成した 2 つの等質なグループからなる。1 群内、2・3 群間の住居の規模と立地が異なることから、これらのグループは構成員数の異なる大小の世帯からなり、それらの世帯は社会的位置づけが異なるものであったことが推論される。

集落としての今熊野遺跡

今熊野遺跡は、短い周期での移動はみとめられるものの、大木 1、2a 式期にわたってほぼ継続的に同一集団によって営まれた集落であると考えられる。集落を構成する要素としては墓域が未検出である。また住居堆積土・遺物包含層内に含まれる多量の焼土・木炭から予想される屋外炉も発見されていない。遺構間を結ぶ道路や集落内で共有された作業場あるいは広場的な空間もその存在が考えられるが確認はむづかしい。発掘区内で検出されているのは住居跡、ピット、遺物包含層のみであるが、これらは住居が東斜面、ピット群が中央平坦面、遺物包含層が西斜面（後に南東部斜面に移る）というように分布を異にしており、集落内は北台台地の微地形と機成要素の機能の違いによって明瞭に空間分割されている。

宮城県内では縄文早期から住居の検出例があるが、規則的な集落構成をもち複数土器型式期

にわたって継続するような定着的集落が成立するのは今熊野遺跡が最も早い例である。同時期の関東地方等の集落をみると、数軒からなる複数の住居群が広場のような空間を囲んで弧状に分布する。長野県阿久遺跡では前期中葉にはこの内部空間に方形柱列がたち、広場を中心とした集落構成が考えられる（笹沢地 1982）。また、縄文前期の東北地方では、規模・構造の異なる大形住居を含む集落が特徴的にみとめられる。今熊野遺跡の場合は、住居の立地・分布・出入口の方向から、並立する 2 住居群の間に広場の存在を想定することはむづかしい。また特殊な構造の大形住居をもたない点でもこうした集落とは様相が異なる。

1971、1972 年度に今熊野遺跡が調査されて以来、各地の調査の進展によって私達の縄文前期観は大きく塗りかえられつつある。鳥浜貝塚から出土した漆・木製品は、当時の人々が多様な食料資源を開発し、複雑な技術体系の上に鮮やかな色彩と豊かな造形にみちた多くの道具類をつくりあげていたことを明らかにした。今年から調査が始まった山形県押出遺跡の成果は新鮮な驚きにみちたものであり、柱列の残る平地式住居の検出とともに、漆・木製品に示される前期の技術的拡大が東北地方においても確認された。阿久遺跡に現れた宗教的色彩をもつ拠点的集落の成立はこうした前期文化の拡大の結果であり、今熊野遺跡の形成も東日本的規模での前期集落の拡大の動きの一つととらえることができる。

縄文前期に集落が拡大、増加することは、当時の最温暖期の気候環境と無関係ではない。今熊野遺跡の南の阿武隈川下流域では縄文早期後葉から貝塚の形成が進む。阿武隈川は土砂供給量が大きいため、この地域では約 7900 年前から早くも海岸線の後退が始まるとされており（松本 1984）、貝塚の内容もハマグリ・カキからヤマトシジミ主体へと変化している。「位置と環境」でふれたように前期前葉には遺跡の東側にはまだ海岸線が接近しており、台地の西側斜面には貝層が形成されている。しかしながら今熊野遺跡の石器組成をみると石鏃・石匙・磨石類等が主体であり、むしろ後背の丘陵地を領域とする動物狩猟・植物採集を中心とした生活様式が採用されていたことが考えられる。今熊野遺跡の集落は大木 2b 式期以降、突然放棄されてしまうが、その背景は不明であり今後この時期の調査を進めるなかで明らかにしてゆかなければならない。

引用･参考文献

阿部恵（1980）：「字賀崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集
伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』第1巻
伊東信雄・伊藤玄三（1965）：「崎山囲洞窟調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第8集
伊東信雄編（1981）：「史料集Ⅴ考古資料」『宮城県史』34
恵美昌之（1979）：「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第6集
恵美昌之（1980）：「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第8集
恵美昌之（1982）：「清水遺跡　神明囲地区」『名取市文化財調査報告書』第11集
太田昭夫（1979）：「宮城県名取市十三塚遺跡出土の弥生土器」『籾』創刊号　弥生時代研究会
太田昭夫（1980）：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集
梶原洋（1982）：「石匙の使用痕研究　仙台市三神峯遺跡出土資料を使って」『考.雑.』68-2pp.43-81
加藤孝（1951）：「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』1
加藤・黒坂他（1994）：「庚申町遺跡」『大石田町埋蔵文化財調査報告書』第3集
加藤道男・阿部博志・小徳晶（1984）：「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第99集
興野義一（1967）：「大木式土器理解のために（Ⅰ）」『考古学ジャーナル』13号
興野義一（1968）：「大木式土器理解のために（Ⅱ）」『考古学ジャーナル』16号
興野義一（1968）：「大木式土器理解のために（Ⅲ）」『考古学ジャーナル』18号
興野義一（1968）：「大木式土器理解のために（Ⅳ）」『考古学ジャーナル』24号
興野義一（1981）：「糠塚貝塚について」『迫町史』
興野義一（1984）：「大木式土器について」『宮城の研究』1　考古学編
菊地淳一（1981）：「欠・持長寺遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第79集
黒川利司（1981）：「東足立遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
小井川和夫（1978）：「宮城県今熊野遺跡」『どるめん』16　pp.73-79
小井川和夫（1980）：「金剛寺貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集
後藤勝彦（1969）：「平田原貝塚　陸前地方縄文文化前期の編年学研究」『貝輪』第5号
後藤・土岐山・遊佐・佐藤・千葉（1972）：「中沢遺跡」『川崎町史』
小徳晶（1982）：「天神山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第89集
斎藤吉弘・真山悟（1978）：「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第56集
斎藤・高橋・真山（1980）：「宮沢遺跡」『宮城県文化財鯛査報告書』第69集
佐々木・大槻・古川（1985）：「色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第103集
後藤（甲）・田中・主浜（1984）：「山口遺跡Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書』第61集
佐藤（則）・岩淵・梶原（1980）：「三神峯遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第25集
佐藤鎮夫（1976）：「小林遺跡」山形県教委
志間泰治（1971）：「鱸沼遺跡」
白鳥良一（1974）：「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古学・歴史論集』
新庄屋元晴（1982）：「小梁川遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報　昭和56年度分』pp.1-16
末木健（1975）：「移動としての吹上パターン」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.220-224
末木健（1985）：「土器廃棄と集落研究」『論集日本原史』pp.351-372
鈴鹿良一（1983）：「松ヶ平Ａ遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』福島県教委

関　豊（1981）：「中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書」二戸市教委
高橋文夫（1980）：「松尾村長者屋敷遺跡Ⅰ　遺構編」岩手県埋文センター
坪井清足（1953）：「福島県天王山遺跡の弥生式土器　東日本弥生式文化の性格」『史林』36巻1号
手塚孝他（1985）：「法将寺遺跡」米沢市教委
土岐山武（1982）：「松田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第88集
長島雄一（1983）：「赤沼遺跡」『原町市文化財調査報告書』
丹羽茂（1973）：「松田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集
丹羽茂（1984）：「今熊野遺跡Ⅰ　古代編」『宮城県文化財調査報告書』第104集
丹羽茂（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集
丹羽・阿部・小野寺（1982）：「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第92集
西村正衛（1984）：「千葉県香取郡神崎町植房貝塚　縄文前期前半文化の研究」『利根川下流域の研究　貝塚を中心として』
林謙作（1968）：「縄文時代　東北」『日本の考古学』Ⅱ
林謙作（1962）：「東北地方早期縄文式文化の展望」『考古学研究』9巻2号
芳賀寿幸（1976）：「鹿野遺跡」『柴田町文化財調査報告書』第8集
浜名新一（1984）：「冑宮西遺跡」会津高田町教委
松本秀明（1984）：「沖積平野の形成過程からみた過去1万年間の海岸線変化」『宮城の概究1』pp.7-52
宮城県教委（1974）：「西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集
宮城県教委（1973）：「金剛寺・今熊野遺跡調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第33集
宮城県教委（1977）：「船渡前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第49集
宮城町教委（1984）：「蒲沢山遺跡」『宮城町文化財調査報告書』第4集
村田晃一（1983）：「岩ノ入遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第95集
村田晃一（1985）：「原頭遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第117集
目黒吉明（1979）：「達中久保遺跡」『母畑地区発掘調査報告書Ⅲ』福島県教委
八巻・小林・岩淵・梶原（1979）：「大木囲貝塚」『七ヶ浜町文化財調査報告書』第4集
山田晃弘（1984）：「6　磨石、凹石、敲石類」『山口遺跡Ⅱ』
山田昌久（1979）：「木製品」『鳥浜貝塚』
利府町教委（1985）：「六田遺跡現地説明会資料」

写　真　図　版

図版１

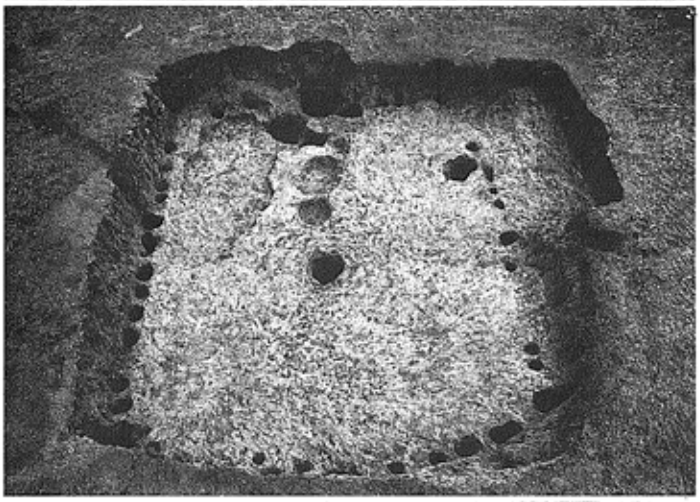
遺跡全景（北↑）

住居跡第１群の西側部分
（北↑）

住居跡第３群（北→）

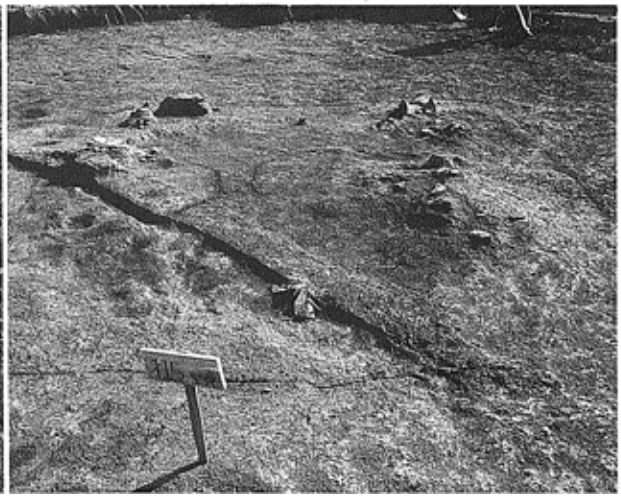
図版２

ピット群（北←）



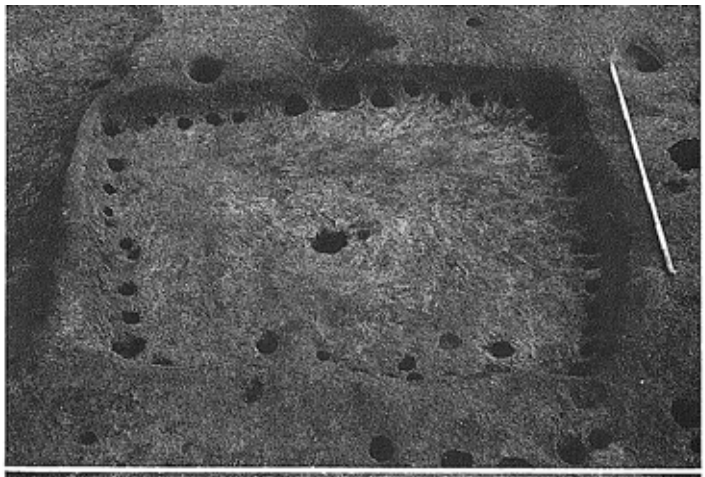
第15号住居跡（北↙）

下；15号住 遺物出土状況

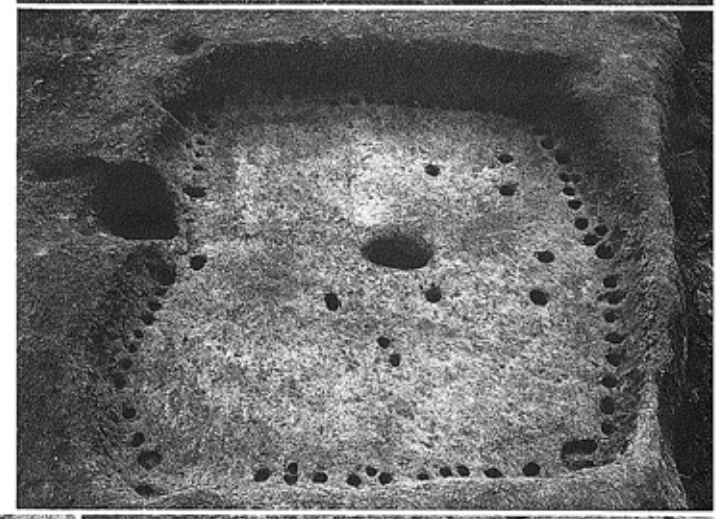


図版３

第６号住居跡（北↙）

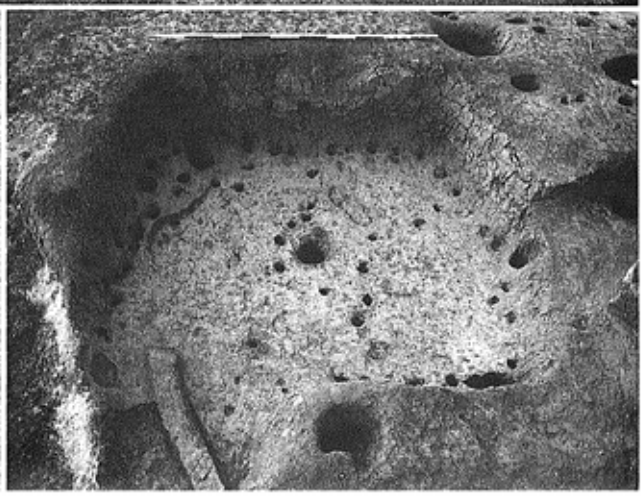


第24号住居跡（北↘）

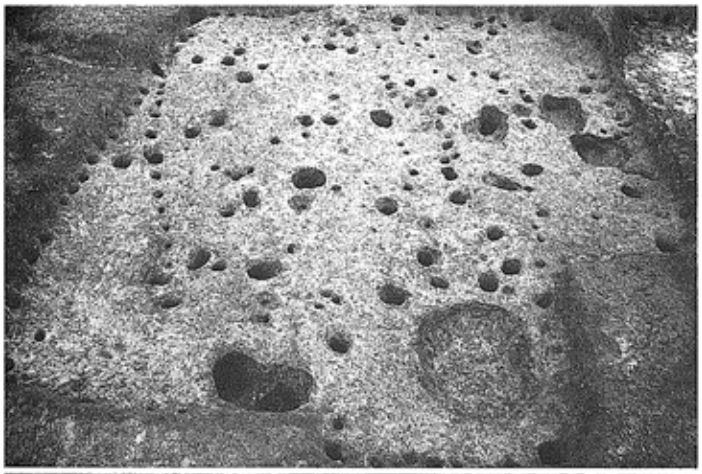


下左 ;24号住南東辺のピット

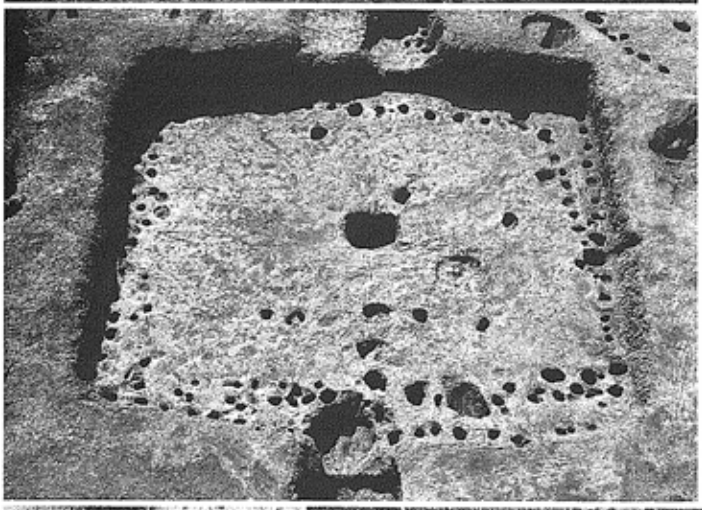
下右 ;第８号住居跡（北↗）



図版４

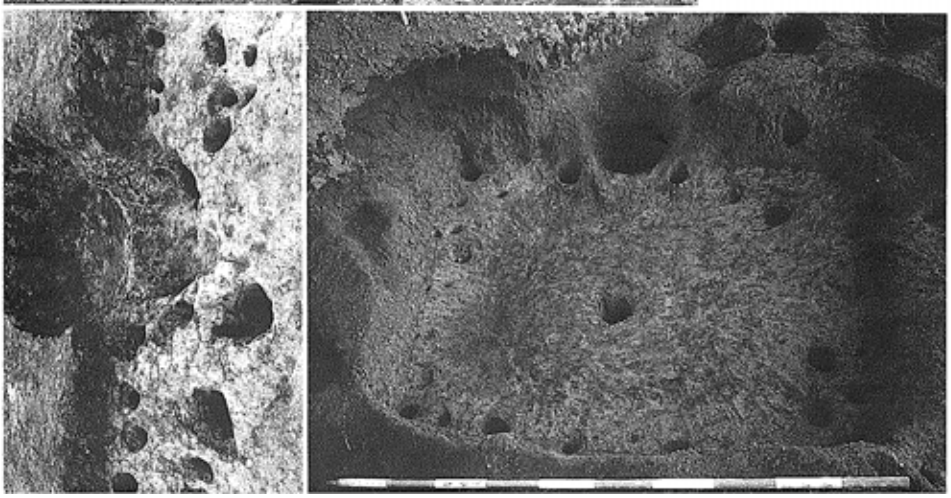


第９Ａ・９Ｂ号住居跡（北→）



第39号住居跡（北→）

下左 ;39号住 南辺ピット
下右 ;第12号住居跡（北↙）

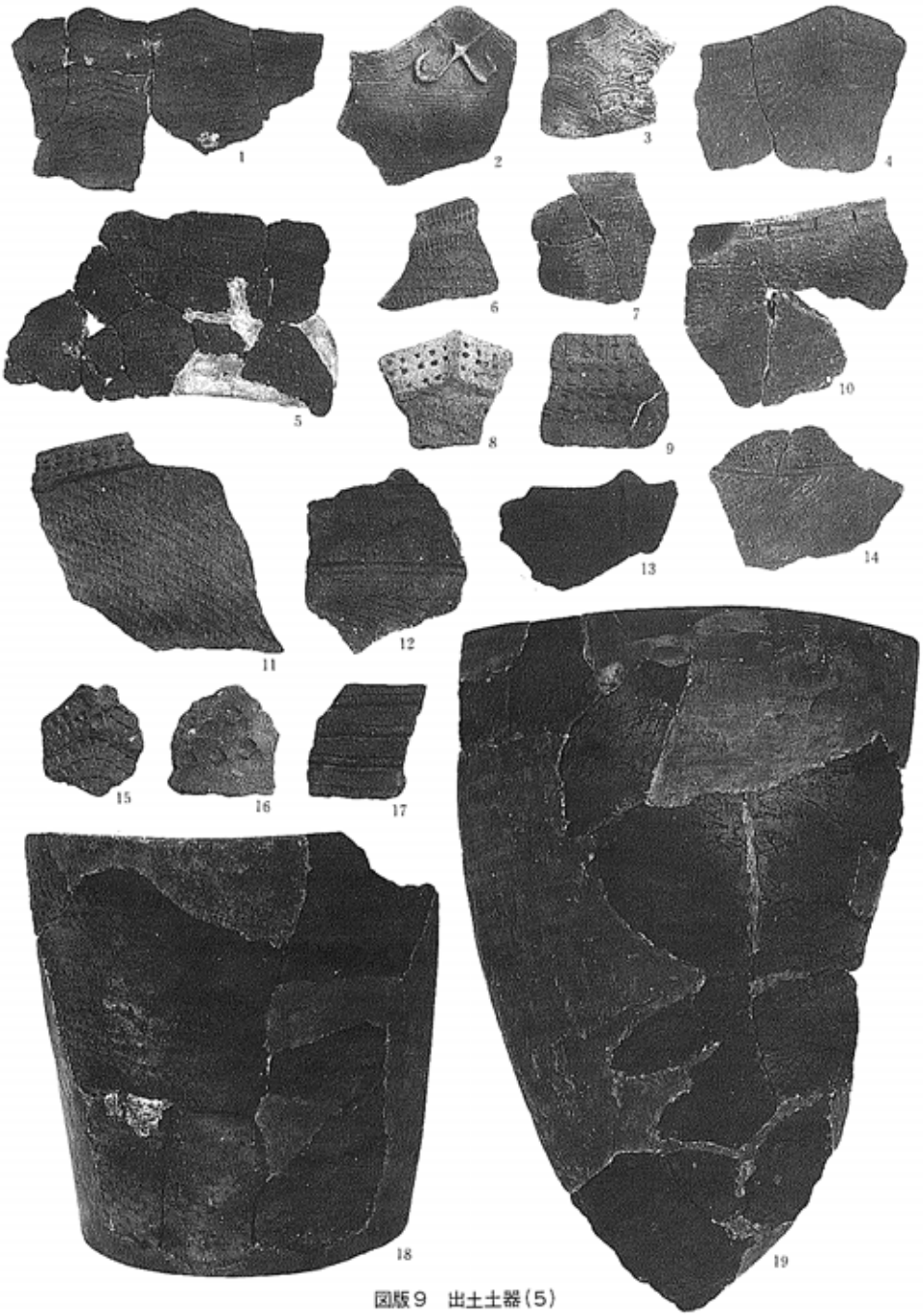


図版５　出土土器(1)

図版6　出土土器(2)

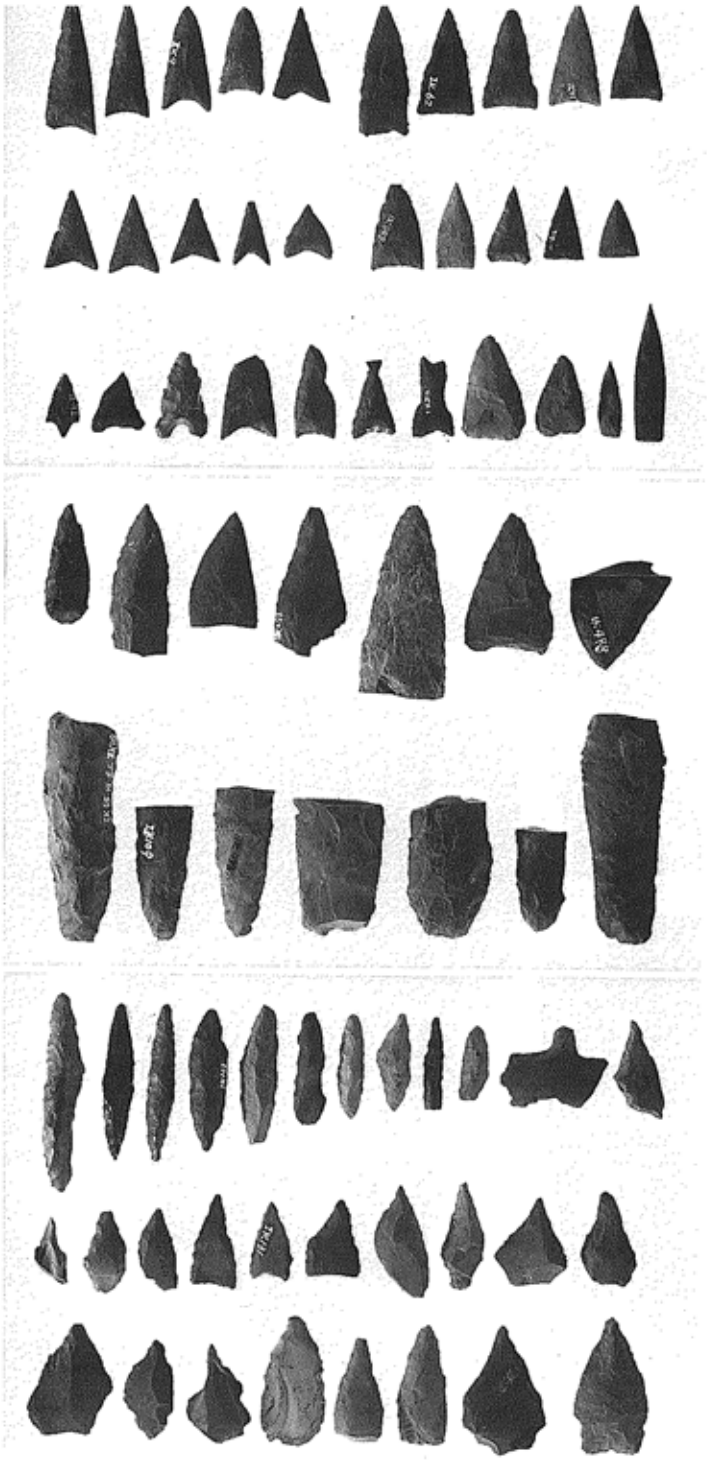
図版７　出土土器（３）

図版８　出土土器(４)



図版９　出土土器（５）

図版10



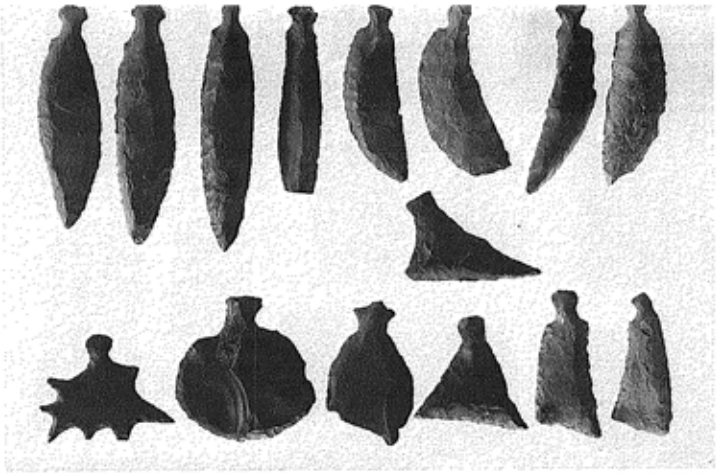
石鏃

尖頭器

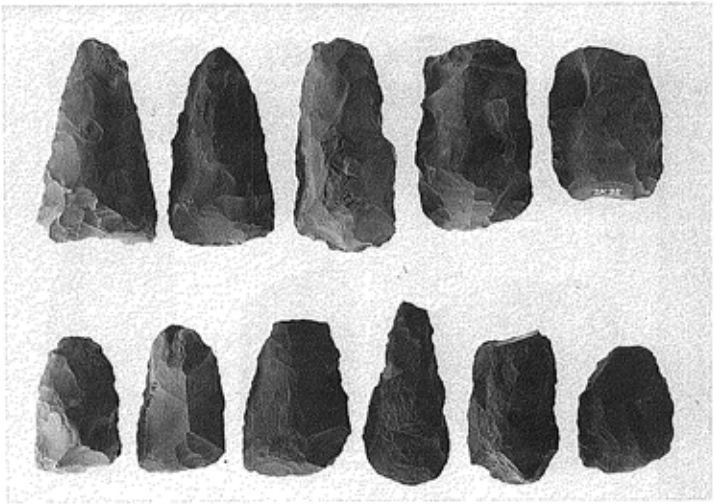
石錐

図版11

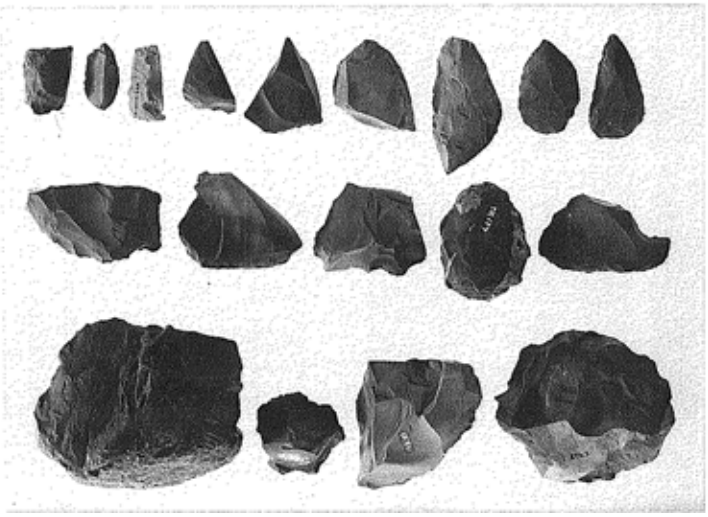
石 匙



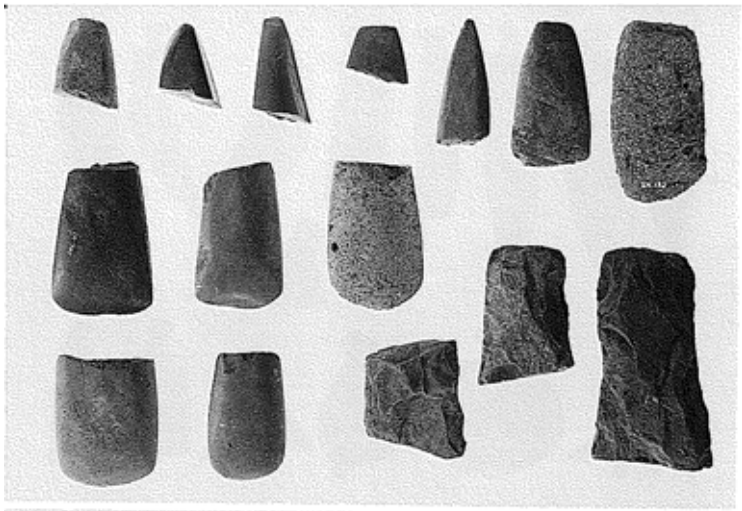
篦状石器



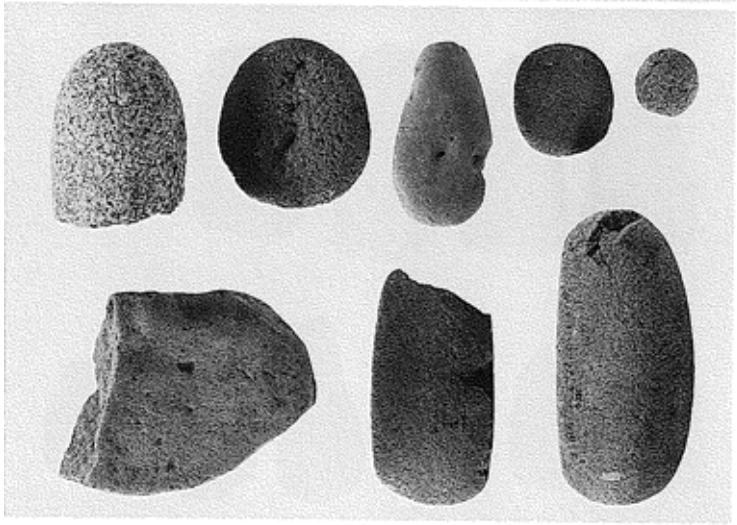
不定形石器、石核



図版12



石斧



磨石・凹石・敲石類、石皿